

金沢城史料叢書 8

金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書 I

2008

石川県金沢城調査研究所

金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書 I

二〇〇八年三月

石川県金沢城調査研究所

金沢城史料叢書 8

金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書 I

2008

石川県金沢城調査研究所

例 言

- 1 本書は、金沢城跡の埋蔵文化財確認調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は、石川県金沢市丸の内地内である。
- 3 調査原因は、遺跡の内容確認を目的とする学術調査で、文化庁の国庫補助事業として実施した。
- 4 事業は、平成14(2002)年より着手し、本書は平成14年度～16(2004)年度の3カ年の調査成果である。うち、遺構確認調査に係る現地作業の期間と担当は、以下のとおりである。
平成14(2002)年度
期 間 平成14(2002)年8月5日～平成15年2月12日
担当者 富田和気夫(専門員)、滝川重徳(係主査)、熊谷葉月(主任主事)、加藤克郎(主事)
平成15(2003)年度
期 間 平成15(2003)年5月12日～同年12月26日
担当者 富田和気夫(専門員)、滝川重徳(係主査)、熊谷葉月(主任主事)、加藤克郎(主事)
平成16(2004)年度
期 間 平成16(2004)年5月6日～平成17年2月16日
担当者 富田和気夫(専門員)、滝川重徳(係主査)、熊谷葉月(主任主事)、加藤克郎(主事)
- 5 出土品整理は、平成14年から平成18年の5カ年実施した。
担当部署 (財)石川県埋蔵文化財センター企画部整理課
- 6 報告書は、平成19年度に以下の職員が作成した。執筆分担は目次に記した。
木越隆三(副所長)、滝川重徳(調査研究専門員)、布尾幸恵(嘱託)、伊藤さやか(嘱託)
なお、第6章は株式会社パレオ・ラボ(藤根久・黒澤一男)による分析報告である。
- 7 調査・報告にあたり、以下の機関・個人の助言、協力を得た。
金沢市教育委員会、金沢市立玉川図書館、金沢大学資料館、行田市郷土博物館、
新宿区教育委員会、東京大学総合図書館、東京大学埋蔵文化財調査室、文化庁記念物課、
石渡 明、大串龍一、大八木謙司、河村健史、金森安孝、北島俊朗、北野博司、楠 正勝、
久保智康、齋藤慎一、坂井秀弥、佐々木達夫、庄田知充、千田嘉博、善端 直、田村昌宏、
中村浩二、成瀬晃司、橋本澄夫、平口哲夫、古池 博、古川知明、堀 大介、堀内秀樹、
松尾信裕、美濃部達也、宮田進一、森島康雄、山根洋子、横山隆昭、吉岡康暢(五十音順、敬称略)
- 8 調査に関する記録及び出土遺物は、石川県金沢城調査研究所が保管している。
- 9 本書の方位と水準高は、以下のとおりである。
(1) 方位は座標北で、座標は日本測地系である。
(2) 水準高は海拔高である。
(3) 遺物番号と、挿図・観察表・写真の番号は対応している。

目次

第1章 調査の経緯	(木越)	1
第2章 歴史的環境		3
第1節 金沢城周辺の歴史的環境	(滝川)	3
第2節 金沢城の沿革	(木越)	6
第3節 本丸とその周辺の沿革	(木越)	17
第3章 調査の経過	(滝川)	28
第1節 既往の調査成果		28
第2節 確認調査の経過		32
第4章 遺構確認調査	(滝川)	34
第1節 概要		34
第2節 遺構		34
1 丑寅櫓北		34
2 丑寅櫓北東・東ノ丸東		36
3 本丸南		41
4 東ノ丸附段		46
5 東ノ丸唐門前		48
6 本丸附段(東)		53
7 本丸附段(西)		68
第3節 遺物		175
第5章 石垣の基礎的調査	(滝川)	248
第6章 自然科学的調査		253
第1節 金沢城跡本丸附段2004-1(2003-8)地点の動物遺体同定	(黒澤)	253
第2節 金沢城跡土壌試料フローテーション	(藤根)	265
第7章 まとめ		268
第1節 遺構・遺物から見た初期金沢城の特徴	(滝川)	268
第2節 2004-1(2003-8)地点SK11出土の馬骨について	(伊藤)	270
引用参考文献		278
報告書抄録		282
写真図版		

第1章 調査の経緯

金沢城跡は、小立野台地が平野部へ舌状に張り出した先端部（標高約60m）に位置し、金沢平野が一望できる地点に設けられた平山城である。近世城郭となる以前は、天文15年(1546)に大坂本願寺によって、金沢御堂（金沢御坊）が設置され、周囲に寺内町が形成された。

天正8年(1580)、佐久間盛政が初めて金沢城主となり、城郭整備に着手した。天正11年の賤ヶ岳合戦のあと、羽柴秀吉方に味方した前田利家（能登国主）が入城し、天正14～15年の天守造営、文禄元年(1592)の高石垣築造など、本格的な城郭整備を進めた。寛永8年(1631)の大火後の造営で、ほぼ現在の城の縄張りが定まったとされる。以降、明治2年(1869)の版籍奉還まで、前田家歴代当主14代が約300年間にわたり城主となり、最大の大名の居城として機能し続けた。

明治4年、金谷出丸（現在、尾山神社）を除く城域が兵部省（後に陸軍省）管轄となり、明治5年からは旧陸軍の兵営として利用された。旧陸軍の時代に不要な建物や土塀・石垣の取り壊し、堀の埋め立てが順次進められ、明治14年の大火で、二ノ丸御殿が焼失した。現在、城内に残る近世の建造物として、金沢城石川門（重要文化財）、金沢城三十間長屋（同）、金沢城鶴丸倉庫（県指定有形文化財）などがある。

戦後は、昭和24年(1949)に、文部省所管の金沢大学が開学し、大学キャンパスとして利用されてきた。平成7年(1995)2月に金沢大学城内キャンパスの移転完了後、石川県は、金沢城跡を県民共有の財産と位置付け、都市公園「金沢城公園」として、平成8年3月に跡地を取得した。平成8年度から、金沢城公園の基盤整備を始め、平成13年の五十間長屋・菱櫓・橋爪門続櫓の復元建物の完成に合わせ、公園全域を一般に開放した。また、大手堀等の外堀の一部については、金沢市が都市公園「外濠公園」として公開・活用を図っている。

金沢城跡における埋蔵文化財調査は、昭和43年(1968)の金沢城学術調査委員会による本丸、二ノ丸等の学術調査が最初である。その後、金沢城跡を埋蔵文化財包蔵地とみる意識が明確となり、昭和50～61年までは、主に金沢大学が主体となり、大学施設設置工事などに伴う事前発掘調査が行われたが、その過程で、それまで伝存した多くの埋蔵文化財が失われた。

平成3～4年には、金沢大学移転後の整備・活用策を検討するための基礎的調査を実施するため、石川県教育委員会は、「金沢御堂・金沢城調査委員会」を組織し、中・近世の文献調査、主要遺構の詳細な表面観察、踏査による調査を実施し、それが現在の調査・研究の前提となっている。

平成4～6年には、石川県土木部が所管する都市計画道路整備に伴い、石川県立埋蔵文化財センターが石川門前土橋、車橋門の一部で発掘調査を実施した。いっぽう、石川県は、平成8年1月に金沢城跡を都市公園として活用するため、同年3月に国から用地を取得した。

平成9～13年には、金沢城公園整備事業に伴い、石川県立埋蔵文化財センターが五十間長屋、本丸附段、三ノ丸等の発掘調査を実施した。これと平行して、石川県は、県民に開放された金沢城公園の活用のあり方を検討するため、平成9年、「金沢城址公園整備懇話会」（平成13年11月までの間に7回開催）を設置し、明治14年まで二ノ丸に現存した菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓等について、史実に忠実であり、かつ本物志向の復元整備に着手した。これに伴い、平成11年には「金沢城址の櫓・石垣に関する修築・復元専門委員会」（平成12年7月までの間に8回開催）が設置され、専門的な立場からの指導助言をうけた。このような経過を経て、平成13年9月、金沢城公園二ノ丸に菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓などの復元建物が竣工した。

金沢城跡における、最初の歴史的建造物の復元整備事業が、最終段階にきた平成13年7月、これまでの経緯に鑑み、専門的な調査研究機関の必要性が認識され、県教育委員会の文化財課の中に、金

沢城研究調査室が設置され、平成14年度から、絵図・文献、埋蔵文化財、建造物、石垣等伝統技術の4つの分野から総合的に、金沢城跡の歴史的価値を解明する調査研究事業がスタートした。

その結果、平成14年度(2002)から、国庫補助を得て、城内で埋蔵文化財確認調査を実施することとなった。寛永大火(1631)以前の初期金沢城の様相を知らせる、絵図・文献が乏しく、また建造物などの遺構もないので、石垣の基礎的調査や城内埋蔵文化財調査によって、成立当初の金沢城の様相が解明できるものと期待されている。

城内埋蔵文化財調査は平成14年度から継続して実施し、平成19年度まで、6年間調査を行ったところであるが、この報告書は、平成14～16年度までに行った調査を対象とするものである。

調査の内容としては、遺構確認調査(埋蔵文化財を対象とした発掘調査)と、石垣の基礎的調査(石垣を対象とした詳細観察調査)とを並行して実施している。なお、平成19年(2007)4月には、金沢城研究調査室は、石川県金沢城調査研究所に改組された。

【これまでの調査状況】

昭和43～44年：金沢大学金沢城学術調査委員会が、本丸四脚門、二ノ丸能舞台等の一部について発掘調査を行う。

昭和44年：石川県教育委員会・金沢大学が、校舎増築工事に伴い本丸三階櫓台、二ノ丸殿舎等の一部について発掘調査を行う。

昭和50年：金沢大学が学生会館別館建設に伴い四十間長屋の一部について学術調査を行う。

昭和52年：金沢大学が二ノ丸御殿の一部について発掘調査を行う。

昭和54～61年：金沢大学文学部が、大学施設設置工事に伴い藤右衛門丸斜面等の発掘調査を行う。

平成4～6年：石川県立埋蔵文化財センター(平成10年4月に(財)石川県埋蔵文化財センターに改組)が石川門土橋等を道路整備工事に伴い発掘調査を行う。

平成9～13年：県埋蔵文化財センターが金沢城公園整備事業に伴い内堀、五十間長屋、本丸附段、三ノ丸等の発掘調査を行う。

平成13年7月：石川県教育委員会は文化財課の中に金沢城研究調査室を設置した。

平成14～19年：金沢城研究調査室が国庫補助を得て本丸、本丸附段、東ノ丸等の確認調査を計画的に行い、初期金沢城の構造等の解明にあたった。

平成19年4月：金沢城研究調査室を金沢城調査研究所に改組。

平成20年1月：石川県は、国に金沢城跡の史跡指定を申請。

第2章 歴史的環境

第1節 金沢城周辺の歴史的環境

金沢市街地のほぼ中心を占める金沢城跡は、南東の山地帯より舌状に伸びる小立野台地の先端部分に立地する。

小立野台地は犀川・浅野川によって開析された河成段丘であり、城外との比高差は、最高所である本丸で30m以上、低所に位置する新丸においても約10mを測り、城が天然の段丘面を巧みに利用して築かれたことが推察される。また城のある台地先端部と、その南東に続く台地本脈との間には断層があり、自然谷が形成されていたらしく[藤1999]、城地付近の地形は、人工の手が加わる以前から、独立丘的な状況を呈していたようである。

金沢城周辺は、近世から市街化が進んでおり、近世以前の遺跡については従来伝わるものが少なかったが、城跡自体や城地に隣接する前田氏（長種系）屋敷跡（大手町遺跡、安中2002）・広坂遺跡[楠・庄田2005]の調査により、縄文～中世の資料が確認されている。

金沢城跡では、平成9年度の調査において8～9世紀代の掘立柱建物跡が検出された他、断片的であるが、幾つかの調査区で古代に属する土坑・ピット・土器片が確認されている。城地北側の前田氏（長種系）屋敷跡では、縄文時代の落し穴、弥生時代後期後半～終末期の墳丘墓、

古代の粘土探掘坑等が検出されている。一方城地南側の広坂遺跡では、8世紀代の瓦が出土し古代寺院の存在が確実視され、また中世の居館に伴う堀や寺院と思われる礎石建物が検出されている。このように、市街地の下には城下町のみならず、それ以前の遺構も埋没していることが判明しつつある。

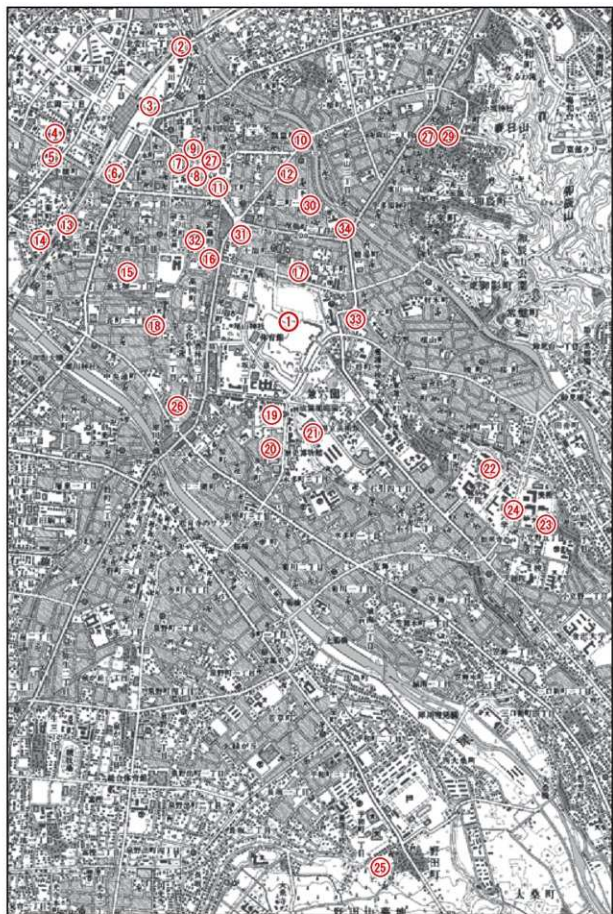
戦国時代になると、現在の城地には金沢御坊（金沢御堂・尾山御坊）が創建され、北陸における政治・宗教・経済の拠点に発展するが、この16世紀後半については、城の南側に位置する県庁跡地（堂形＝米蔵、馬場等藩の公的施設があった城の外縁部）では館ないし寺院の区画施設と推定される溝・土塁、広坂遺跡では礎石建物等が検出されており、共存する遺物に恵まれないものの数少ない遺構確認例である[伊藤2004]。やがて金沢御坊は織田政権の前に陥落し、佐久間氏・前田氏といった織豊政権の大名の支配が始まるが、この段階もいまだ、遺構・遺物は多くない。

徳川氏が幕府を創始し、豊臣氏を滅ぼして名実ともに統一政権を確立した慶長・元和期頃、金沢城周辺では領主前田氏の支配のもと、城下町の整備が進行する。現在、市街各所で調査された城下町の遺跡地点数は30箇所以上を数えるが（第2図・第1表）、まとまった量の遺構・遺物が見られるようになるのは、この頃以後のことである。なお慶長4年（1599）・慶長15年（1610）に築造された内・外惣構の一部についても発掘調査が行われており、当初の構造や、規模を縮小しつつ存続・再生が図られる変遷過程が判明している。城下町はその後度重なる火災等の災害（寛永8年（1631）・同12年（1635）の大火等）に見舞われ、また一方で計画的整備を繰り返しながら、寛文年間（1661～1672）までにほぼ骨格が整い、以後明治時代の初めまで、三都に次ぐ大都市として発展する。

城下でも特に中枢に位置する遺跡として、先に挙げた広坂遺跡・前田氏（長種系）屋敷跡がある。



第1図 遺跡の位置



第2図 周辺の遺跡 (S=1/25,000)

第1表 周辺遺跡地名表

No.	遺跡名	調査年度	遺跡の特徴		文献
			主要地種	特記事項	
1	金沢城跡	(別掲)	城郭	(別掲)	(別掲)
2	久昌寺遺跡	98(1996), 99(1997)	寺院(墓地)	近世墓292基	増山1997b, 新出2004
3	木ノ新保遺跡	95(1993)	寺院? (墓地) → 足輕組地 → 下級武家地、町人地、百姓地		滝川2002b
4	熊ヶ井遺跡	97(1995)～910(1996)	百姓地 → 下級武家地	前田氏(武之系)下屋敷	谷口2001, 谷口・増山2004
5	長田町遺跡	96(1994)	下級武家地		増山1998
6	昭和町遺跡	95(1993)～97(1995)	町人地・下級武家地		樋2001・2003・2004a
7	本町一丁目遺跡(第1次)	92(1990)	町人地		増山1995
8	本町一丁目遺跡(第2次)	96(1994)	町人地		前田1997
9	本町一丁目遺跡(第3次)	99(1997)	町人地		谷口2003
10	楓草町遺跡	96(1996)	上級武家地	前田氏(主膳系)上屋敷	増山1991
11	安江町遺跡	93(1991)～95(1993)	町人地・中級武家地	『朝山』郷向村出土	増山1997a
12	森三町遺跡	91(1999)	中級武家地		庄田2002
13	三社町遺跡	93(1991), 99(1997)	百姓地 → 町人地		増山2001 伊藤2007
14	元菊町遺跡	962(1987), 91(1989)	百姓地 → 町人地		伊藤1990
15	穴水町遺跡	98(1996)	下級武家地	長氏下屋敷	増山1998
16	高岡町遺跡	98(1996)～911(1999)	町人地・上級武家地・水堀		庄田2001, 滝川2002c, 出越2003
17	前田氏(長種系)原敷跡	98(1996)	町人地 → 上級武家地	寛永以前の前原遺構	安中2002
18	長町遺跡	98(1996)	中級武家地		増山1998
19	広坂遺跡	98(1996)～912(2000), 914(2002)	上～中級武家地	調査面積広く、基準資料多数	樋2004b 樋・庄田2005 樋・庄田・谷口2006 樋・庄田2007
20	下本多町遺跡	94(1992)	下級武家地 → 上級武家地	宝暦9年(1759)大火被災一紙資料出土	増山1999a
21	本多上屋敷遺跡	S55(1980)	上級武家地		伊藤1992
22	金沢大学宝町遺跡(医学部付属病院地区)	99(1997)～914(2002)	中～下級武家地等	地下室多数検出	金沢大学埋蔵文化財調査センター編2000～2003
23	金沢大学宝町遺跡(医学部保健科学科地区)	910(1996)～911(1999), 913(2001)	中～下級武家地等		金沢大学埋蔵文化財調査センター編2000～2003
24	経王寺遺跡	99(1997), 910(1998)	寺院(墓地)・中級武家地	近世初期の塚塚等	910内2002
25	野田山墓地	912(2000)～914(2002) 916(2004)～919(2007)	墓地	藩士家の墓所を中心とした大型墓地。道路整備による移転部分の墓石調査。改葬立会調査等 916年度より前田家集作詳細調査、測量、試掘等実施	樋・小西2003
26	月町二丁目遺跡	916(2003)	武家地		樋・小西2005
27	妙因寺門前遺跡	915(2003)	寺院、参道		出越2006
28	本町一丁目遺跡(第4次)	915(2003)	町屋	近世初期の竪溝等	前田・谷口2006
29	三宝寺前遺跡	916(2004)	寺院、参道		
30	森三町一丁目遺跡	916(2004)	武家地		前田・谷口2007
31	下邊・青草町遺跡	917(2005)	町人地		谷口・向井2007
32	西丹惣構跡	917(2005)	惣構	築造当初の礎、堀の改変状況	
33	殿六元町遺跡	917(2005)	武家地		前田・谷口2007
34	東丹惣構跡	918(2006)	惣構	堀の改変状況確認	

広坂遺跡は、17世紀前半における性格はなお検討の余地はあるものの、陶磁器の優品が多く出土し、また17世紀中頃以降は高級武家の屋敷地として、多様な遺構・遺物が検出されている。城下町遺跡として最大の面積が調査されており、火災面の比定等、今後基準となる所見が蓄積されている点も大きく評価できよう。前田氏(長種系)屋敷跡は、寛永16年(1639)以後、標記の重臣屋敷となったところであるが、これ以前の遺構・遺物が充実しており、初期城下町の町屋跡と考えられている。

これらの外側に位置する安江町・本町一丁目の各遺跡は、性格を異にするが、城下町の一般的な在り方を示す。安江町遺跡[増山 1997a]は中級武家・町人居住地を調査したもので、町人の物質的な優位性が読み取れる、興味深いデータが得られた。本町一丁目遺跡[増山 1995]は町人の居住地に該当し、富籤の突札等、生活臭の強い遺物が目を引く一方、建物・井戸・土坑(粘土採取坑・廃棄土坑)等の遺構配置から、屋敷地の空間構造が追求されている。

久昌寺・木ノ新保・三社町等の各遺跡は、城下縁辺に所在する。久昌寺遺跡[増山 1997b・新出 2004]は同名の曹洞宗寺院の墓地に該当する。約300基に達する墓が調査され、城下の墓制を考える上で重要な成果を挙げている。木ノ新保遺跡[滝川 2002b]は、墓地・農地から足軽・下級武士の屋敷地への変容を窺うことができ、三社町遺跡[柿田 2001]でも、農地から町人地への変化が遺構より捉えられており、いずれも城下縁辺における都市域の拡大を示す良好な事例である。

なお城下町から離れるが関連の深い遺跡として野田山墓地があり、墓地移転に伴う山麓部分の調査や、藩主前田家墓地の測量・試掘調査等が実施されている。

第2節 金沢城の沿革

金沢城の規模

大手堀・いもり堀・百間(蓮池)堀・白鳥堀という、四つの外堀で囲繞された金沢城の現状の規模は、東西500m(石川橋～薪丸)、南北760m(車橋～藤右衛門丸)を測り、面積は約30ha(約9万坪)である。上述のとおり、金沢城は、犀川と浅野川にはさまれた小立野台地先端丘陵を改造した平山城(標高60～35m)であるが、外堀の内側に、金谷丸・東ノ丸・二ノ丸・三ノ丸・新丸・玉泉院丸・北ノ丸・薪ノ丸などの郭が位置するほか、金谷丸(現在の尾山神社付近)、兼六園、堂形(県広坂庁舎付近)などが、外堀の外郭に配置されていた。それぞれの利用形態は、時代により変化がある。

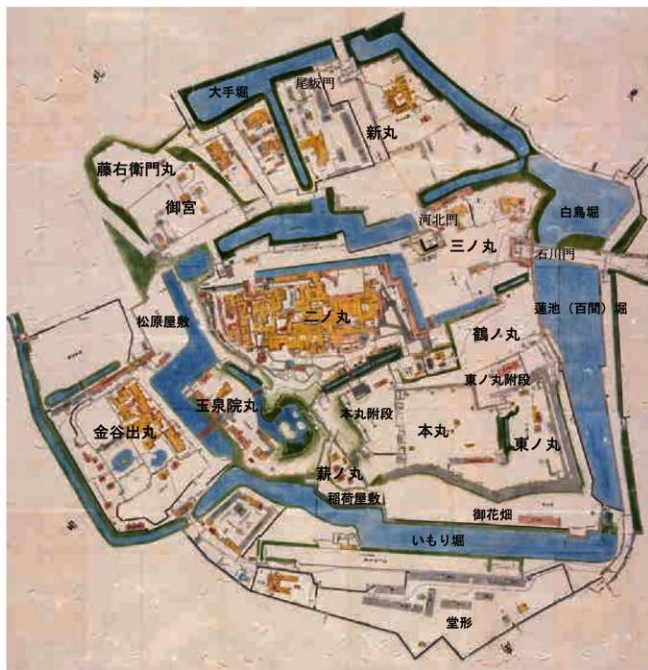
金谷丸は当初、馬場・御文庫などに利用され、幕府向けの絵図では「御花畑」と書かれることもあり、中期以後は、藩主の隠居御殿(金谷御殿)や子弟・側室などの御殿として利用された。

兼六園は、江戸前期までは重臣屋敷があり、蓮池堀脇の一角は延宝4年(1676)に蓮池庭が置かれ、これが兼六園の濠幅とされる。元禄9年(1696)に武家地を移転させ防火用の空地になった空間は、藩の文武学校として利用されたのち(1792～1822)、藩主の隠居御殿である竹沢御殿が設けられ(1822～24)、その後、大名庭園としての活用がすすみ、現在の兼六園の景観に近づいてくる。

堂形一帯は、当初は書院や庭、弓矢の稽古場があったと伝承するが、寛永以後は長大な馬場と蔵米を収納する米蔵として利用された。このような城関連施設も加えると、城域は約48万㎡(15～16万坪)におよぶ。

金沢御堂と寺内町

金沢城の前身は、天文15年(1546)に、本願寺末寺として設置された金沢御堂であり、現在の本丸付近に建立されたとされる。貞享2年(1685)の「(浄土真宗)金沢西末寺由来」は、金沢御堂の位置は「御城内にて御座候」と記す(『加越能寺社由来』上巻)。これと類似した記述が旧記類に多く見られるので、上述の通説の根拠とされるが、現在までの発掘調査の結果をみれば、確かな地点を特定できない。今後の城内調査で、これを裏付ける遺構・遺物の発見がまつれる。



第3図 金沢城全体図（『御城中老分碁絵図』（横山隆昭氏蔵）に加筆）

金沢御堂が設置された後、その周辺に、どのような町場が形成されたか、不明な点が多い。浅野川と北国往還の交点付近に位置した窪市、小立野台地にあったとされる山崎村の地には、14世紀より紺屋などの商工民が集住しており、山崎村、石浦村・笠舞村（甘露寺領大桑庄）、木新保村・今市村（近衛家領安江保の一部か）、朱免野村、法嶋村などは、石浦七カ村と呼ばれ、この地にあった観音堂（のちの石浦神社）を報養していたという。この石浦七カ村の農地や山林・原野が展開していた地域に、金沢御堂が建立され、永禄年間以後は、南町・後町など、寺内を構成する町がいくつか成立し、金沢御堂（金沢殿）に麹室座の営業特権を寄進するような商人が多数集住していたことも知られている。

このように、16世紀後半には、金沢御堂の直下には、寺内と呼ばれるような都市的空間が形成されていたことは間違いなく、紺屋・麹室屋・金屋・鋳物師などの商工民が集住し、「加賀染」や「菊酒」を全国に送り出していたと想定される。

天正元年（1573）以後、織田信長と北陸の一向一揆との対立は激しくなり、本願寺から「御上使」と呼ばれる坊官や青侍が、金沢御堂に派遣され、本山による統制がつよまった。天正3年、越前一国を手に入れた織田信長は、柴田勝家を越前国主とし、加賀への攻勢を強めた。その最前線で活躍した武将の一人が、佐久間盛政であった。天正6年、上杉謙信の死去により、能登から北加賀に勢力を広げていた上杉氏の影響力が低下し、柴田の北加賀進攻が進み、天正8年（1580）になると、一向一揆方の野々市や木越の要害が陥落し、4月には、金沢御堂も織田方の主将柴田勝家によって落ちた。その後、柴田の甥である佐久間盛政が、金沢城主となり、北加賀の一向一揆との戦いを、その後も展開した。一揆軍は、鳥越城などを拠点として抵抗したが、天正11年頃には平定された。

戦後、金沢御堂に入った佐久間盛政は、御堂のあった付近を、近世城郭へと改造を進め、城下町建設を進めたというが、その実態は、全く不明である。天正8年11月までは、一揆方の有力武将との激戦が各地であったとみられ、軍事的機能を高める土塁や郭を配置するなど、城としての整備が急ピッチでなされたはずである。寺内町の時代の金沢御堂の空間は、民衆が避難する機能もあったと推定されるが、佐久間によって、その継承と改変が進んだ。土塁や堀による防禦が中心であったと推定されるが、一部石垣などの利用も考えられる。

とくに天正11年（1583）から金沢城主となった前田利家の時代には、石垣による城作りが進展し、現在の城の縄張りの祖型が固まったと推定される。また、佐久間時代（1580～83）、城下に作られた主要な町を「尾山八町」と呼んでいるが、それは寺内町時代に遡るものとみてよく、前田氏入部後、町場はさらに拡大していった。

前田家の居城

金沢城は、天正11年に加賀藩前田家の居城となったあと、明治2年（1869）に藩主が二ノ丸御殿から、城外にあった広坂御住居（本多安房邸）に移住するまでの286年間、14代の藩主が城主として、変わることなく君臨しつづけた。信長取立大名が、そのまま継続して同じ城の城主であり続けた国持大名の事例は、他になく、稀有な事例といえよう。

熊本城主となった細川家は、前田家を上回る来歴の長い信長取り立て大名であるが、山城や丹波で城主となったのち、豊前小倉城主を経て熊本城主になっており、同じ城の城主を勤めた期間としては前田家のほうが長い。

前田利家は、長張荒子の在り領主の四男坊であったが、家督をつぎ、信長の赤母衣衆として活躍し、長浜で領地を得たのち、天正3年から越前府中において3万3千石の城持ちの領主となった。天正9年には、能登一国の主、七尾城主となり、能登17万石（のち21万石）の領主となった。天正10年6月の信長死後、一向一揆や上杉方との戦いを凌ぎ、天正11年の賤が岳合戦で、柴田方から羽柴秀吉方に寝返り、その功績により、金沢城主となり、北加賀2郡が加増され、佐久間盛政は山城槇嶋で処刑

された。

前田利家はその後、天正13年に越中3郡を加増され、文禄4年(1595)に越中新川郡も追加されたので、約80万石の有力大名となった。天正16年以後は、京都・伏見などに屋敷を持ち、在京することが多くなり、秀吉晩年には、豊臣五大老に列し、豊臣秀頼の守役となり、秀吉の側近として篤い信頼をうけた。

前田利家の80万石という石高に対し、約9万坪を下回ると推定される初期金沢城の規模は、小さいのかもしれない。利家時代の縄張りには、2代利長の時代に一部拡張され、3代利常時代にも改変されたが、城の規模は、大きく広げてはいない。寛永8年(1631)以後は、ほとんど変化がない。

廃藩後の金沢城

天正11年以来、金沢城は、戦火に遭ったことがなく、火災と地震による被害を受けただけであった。明治4年(1871)の廃藩後の金沢城は、兵部省統いて陸軍省の所轄となり、多くの建物が民間人に払い下げられ、また一部は取り壊された。明治6年に、名古屋鎮台分営が置かれると、二ノ丸御殿など残った城内施設は兵舎や倉庫などとして転用された。明治8年に、城地は兵営としての利用が確定し、その後徴兵事務が進み、明治9年頃から徴兵軍隊の兵舎として利用が進んだ。その際、三ノ丸の正門である河北門が、通行上の障害となり、二ノ門の渡櫓や櫓台石垣の撤去と石垣石の兵舎建物礎石への転用が進んでいる(『陸軍大日記』防衛省防衛研究所図書館蔵)。

明治14年(1881)1月、兵舎として利用されていた二ノ丸御殿から出火、二ノ丸御殿はじめ前面にあった菱櫓、橋爪門、五十間長屋なども焼失した。明治15年には、朽ち果てていた河北一の門(高麗門)の解体がなされ、代わりに矢来門が設置された(『参謀本部大日記』防衛省防衛研究所図書館蔵)。こうした陸軍による改変によって、多くの城内建物が撤去、解体され、石川門と三十間長屋のほか鶴丸倉庫、土塀などが残るだけとなった。

北ノ丸に寛永20年(1643)以来、金沢東照宮(御宮)が建立されていたが、明治7年、尾崎神社と改名されたのち、明治11年(1878)現在地に移った。現在の尾山神社東神門は二ノ丸の唐門、長田菅原神社は御宮護摩堂、中村神社拝殿は二ノ丸能舞台を移築したものであるが、いずれも、明治以後、城外に移築されたものである。

明治40年(1907)3月に、本丸南側のいもり堀の埋立工事中に、本丸辰巳櫓下の高石垣(約23メートル)が崩壊した。本丸南面石垣下にある「御花畑」と呼ばれる帯郭を、縮小したうえで切り下げて、被服倉庫を増築するため、堀の埋め立て等がなされていた最中の事故であった。この事後処理のため、本丸南面の高石垣は約200mにわたり、上部3分2が取り壊され、三段の土段になり、慶長期創建の石垣は現状のように3分1となってしまった。また、辰巳櫓下では明治の石垣が2段付け足され、3段の石積みに改造されてしまった。明治42年(1909)には、百間堀が埋め立てられ、明治44年に百間堀通りが開通した(前掲『陸軍大日記』・『石川県史』3・『稿本金沢市史(市街編4)』)。

戦後は金沢大学の敷地として利用されたが、平成8年に石川県が取得し、金沢城公園として活用している。

石川門と三十間長屋

石川門は、三ノ丸の搦手に置かれた桁形門である。高石垣の上に立つ二重二階の菱櫓の脇にある高麗門が一の門で、黒色鉄製の八双金具が城門らしい趣を示す。桁形内に入ると割石積みと切石積みの対照的な石垣が目につくが、寛永期の石垣を明和年間に修理した石垣である。右に折れると渡櫓の下への二の門に至り、ここを出ると三ノ丸の鉄砲所跡に出る。

現存の石川門は、宝暦大火で焼失したあと、天明7年(1787)8月「執斧始」を行い、翌年3月

に再建された建物である。寛政11年(1799)の地震で石垣・建物が痛み、文化2・3年(1805・6)の部分修理のあと、文化11年に菱櫓の解体修理が行われた。明治以後の破壊や火災を免れ、昭和10年(1935)に国宝指定をうけ保存処置がとられた。しかし、戦争中痛みが著しくなり昭和28年~34年(1953~59)に、文化庁による保存修理工事が行われた。平成18年から、左右の土塀の保存修理工事がなされている。

また、安政5年(1858)に、再建された本丸附段の三十間長屋は、二層二階建ての土蔵造りの多間櫓である。寛永以降は二ノ丸御殿の台所蔵として使用されたこともあるが、安政の再建後は主に鉄砲などの武器蔵として利用された。石川門と三十間長屋の屋根は鉛瓦で葺かれ、壁は漆喰塗り込めの白壁だが腰部分は海鼠壁である。金沢城の外周に並んでいた櫓・門・塀などの意匠は、石川門・三十間長屋のような鉛瓦と海鼠壁が基調となった建物であったとみられる。金沢城で鉛瓦の使用が確認される最初は寛文5年(1665)である。5代藩主による城の再整備期にあたるが、その頃の塀に「越前赤瓦」が使用されていたことが、近年判明した。また、初期は黒の下見板で意匠されていたとみる説もある。

鶴丸倉庫

東ノ丸附段の鶴丸倉庫は、以前より江戸期の建物である可能性が指摘されていたが、旧陸軍時代の改造が大きく、来歴に不明な点も多かったので、江戸期に遡る建物であると断定することは避けていた。ところが、最近進めた金沢城研究調査室による絵図・文献調査や建造物調査の結果、1847・8年に建て替えられた江戸期の建物であることが明らかとなった。

江戸前期の東ノ丸附段には、もともと二棟の土蔵があったが、宝暦以後は一棟の大型倉庫に変わった。しかし、江戸後期の絵図に描かれた土蔵(15間×4間半)は、現存の鶴丸倉庫(12間×8間)と平面サイズが異なり、絵図の建物と同一のものと確定できなかった。ところが、1845~50年頃の景観を描く「御城分間御絵図」(前田育徳会蔵)に、現存の鶴丸倉庫と同一規模の土蔵が記載されていることが、金沢城研究調査室の調査で確認されたことから、江戸後期の建物である公算が高まった。鶴丸倉庫の石壁等の調査によれば、江戸後期の外壁とみて問題がなく、成巽閣土蔵(文久3年創建)とも類似することから、江戸後期創建と判断されるに至った。つまり、文化火災後、東ノ丸附段にあった大型土蔵1棟は、1847年に着手し、翌年に完成した建て替え工事で、現存の鶴丸倉庫に更新されたことがわかったのである。なお、鶴丸倉庫の呼称は明治以後のもので、鶴丸倉庫のある位置は鶴ノ丸ではなく東ノ丸附段である。軍隊時代に生じた錯誤が原因であろう。

初期金沢城の縄張り

佐久間盛政・前田利家が、当初どのような縄張りで金沢城を構築したか具体的に記した同時代の古文書が乏しく、『三壺問書』(元禄初年成立)『越登賀三州志』(文化年間成立)などの旧記録に頼らざるをえない。近年の発掘調査の結果、いもり堀の内側に寛永以前の「古いもり堀」が確認されたほか、寛永8年火災後の造営で二ノ丸・三ノ丸の間にあった窪地が埋められ二ノ丸を拡張、現在目にする曲輪配置になったと考えられるようになった。したがって、寛永8年以前の曲輪配置は、現状とかなり異なる構造と見ざるを得ず、この時期を初期金沢城と呼び、寛永以後の縄張り(現存の曲輪配置)と区別したい。

初期金沢城の地形は、最高地点である本丸から北西に、本丸附段→芳春院丸院・数寄屋丸(のちの二ノ丸)→北ノ丸→藤右衛門丸と続く曲輪群と、東ノ丸から真北に東ノ丸附段→鶴ノ丸→三ノ丸→新丸と階段状に下っていく曲輪群の二つの曲輪群から構成されていたと推定される。石垣構築は、東ノ丸東面石垣および最近確認された鉄門西の本丸西堀から着手され、慶長期に本丸南面、三ノ丸正門の

河北門北面石垣、新丸の正門である尾坂門の鏡石の石垣が整備されたので、城の石垣化は、東ノ丸・本丸・河北門・尾坂門で早く進んだといえる。二ノ丸周辺の石垣はすべて寛永期に整備され、本丸北面や本丸附段周辺石垣も寛永期のものが多い。東ノ丸附段石垣、石川門左方太鼓塀下の石垣や蓮池堀の城側石垣は元和期と見られるが、土橋門の石垣は寛永期の創建と推定される。このように城内各所に寛永石垣があり、寛永8年大火後の城修築で金沢城の石垣化は到達点に達したとみてよい。その後、新設された石垣はあったが、大半は寛永までに創建された石垣の再建・修補であった。

初代利家による天守造営

金沢城の最初期の姿を『三壺開書』は「佐久間玄蕃しばらく居城して、かきあげて城の形になし、それより御取り立てありて、山城になされ、惣構、一・二の曲輪、本丸の廻り堤を掘りけれ」と記述する。当初は土居と堀で防御した山城で、いくつか曲輪が出来ていたのであろう。天正14年には、天守が建てられ、天正15年4月に金沢城を訪問した南部藩の家臣北信愛は、利家から式正の御膳で饗応され、城内の数寄屋で料理や茶のもてなしをうけたという。さらに桜の馬場（のちの堂形馬場付近）で馬の調教を「馬場の頭の高き所」から見物し、天守の「くりん」（最上階）に招かれ饗応されたと回想する〔瀬戸2000〕。天正15年の春には金沢城に天守が聳え、数寄屋敷、御座敷、御殿、馬場などがあったことは確実であろう。

天正12年、利家は石川郡・河北郡の村々から一円に金沢城普請人足を動員、天正13年は能登の村にも「尾山の平夫」を課しており、この時期、大規模な城普請があったことは明らかで、本丸・二ノ丸・三ノ丸の堀・土塁が整備されたのであろう。同じ頃、金沢城広間への落雷で、嫡男利長が響き当りしたと記す古文書があり、本丸の御殿・櫓などが天正13年頃までに建造されていた。

天正15年に前田利家は、近江穴太出身（丹波出身ともいう）の石垣職人穴太源助に知行1000俵を与え、召抱えているが、本丸天守台石垣など、石垣普請がその頃から本格化したことを窺わせる事件といえる。

文禄年間の高石垣普請

『三壺開書』は文禄元年（1592）2月の出来事として、「金沢の城を石垣になさるべき旨、御意を請けさせ給ひ、御指図等ありけるゆえ、小奉行ども役人、郡の夫人足など触れさせ給ひ、戸室より石を切出させ給ひけり」と述べている。これが根拠となり、戸室石による高石垣構築は文禄元年に始まるとされるが、それ以前に天守台（石垣）が構築されているので、石垣普請は文禄以前からあったとみなければならない。

この『三壺開書』の記述で、石切・石引に村方から普請人足を動員したことが注目される。この記録に対応する高石垣は、東丸東面の野面積み石垣であり、金沢城石垣では最古の段階に属する。この高石垣築造は、京都の利家から国元の利長に命じたものであり、工事を進めるなかで「東の方、両度まで崩れ」利長は工事に難儀したという。これを見かねて、父利家は、城作りの名手という評判のあった篠原一孝を金沢に送ったところ、篠原は、上部に小縁（犬走り）を付けて完成させたと伝える。しかし、この小段付きの高石垣を見た利長が立腹したという、周知の逸話が近世前期から流布している。こうした逸話だけで本丸石垣を評価するのではなく、確実な資料によって構築年代を確認するためにも、今回の確認調査は大きな意味があったといえよう。

本丸東面石垣は、現状でも高さは20m以上、犬走りの長さは59間（106m）という壮大な石垣であるが、石垣の基礎的調査などによって、元文期や文化年間の修築が部分的に加えられていることが指摘されている。

本丸東面石垣の構築は、小立野台地と城地を切断する蓮池堀築造が前提となるものであり、百間堀

の掘削と東面高石垣造営は密接な関係のもとに遂行された事業であろう。明治25年(1892)に行われた金沢開市300年祭では、城下町金沢の始まりを、文禄元年の高石垣と百間堀築造に求めたが、それが上述の逸話にもとづく通説を形成する素地となった。

金箔付き軒平瓦や金箔鯉瓦が、旧いもり堀稲荷屋敷下で出土しているのが、金箔瓦で裝飾された櫓・塀に高石垣、天守が、初期金沢城の景観をつくっていたのであり、所謂「織豊系城郭」の要件は、天正14年までには整っていたといえよう。

2代藩主利長による城作り

利家死後、豊臣政権内部の対立が激化し、加賀陣の危機に際会した2代藩主利長は、城下町を圍繞する内惣構を慶長4年から6年にかけて構築した。堀と土居で城下町防衛の体制を固めたものだが、この段階の内惣構の内部は、木の新保村・今市村・山崎村の田畠・集落が寺院・町屋とともに混在していた[木越 2005]。この惣構普請を指揮したのは天正16年(1588)以来、前田家の客将となった高山右近といわれる。当初、西町口にあった大手口を尾坂門に移し、石川門を掘り手にしたのは、城作りで秀でた高山右近であったとも伝える(『越登賀三州志』)。

関ヶ原合戦のあと、徳川家に屈服していくが前田家の領地は100万石をこえ、政権の掃蕩がなお流動的な状態にあった慶長7年(1602)10月、雷火で本丸天守が焼失し、大台所・新亭など本丸屋敷が類焼した。これらの焼失建物の中に金沢御堂時代のももあったと伝える。天守の代わりに三階櫓が建てられたが、徳川家と対立を回避するための自重した対応といえよう。

天守の位置は、最近の発掘調査結果から、三階櫓台と同位置にあった可能性が濃厚といえるが、詳細は今後の検討を待たねばならない。慶長10年利長が富山城に隠居すると、跡を継いだ3代藩主利常は、慶長15年(1610)名古屋城の公儀普請と併行し、留守を任せた篠原一孝に、城下町に外惣構を築造させた。

前田家は慶長期の江戸城・駿府城・名古屋城・高田城普請につづき、大坂陣以後も大坂城・江戸城などのお手伝普請に再三動員されているが、諸大名が技術と動員力を競った公儀普請を経験するなかで、石垣はじめ城築造の最新技術を学び、以後の金沢城造営において活用したことが推定される。

初期の金沢城内に住んだ家臣団

初期の金沢城内に、長・横山など有力家臣の屋敷があったとする古絵図があり、文献でも「二・三ノ丸、西ノ丸、北ノ丸まで人持衆並び居て、屋敷相渡り、屋形々々美々しくぞ立てられければ、大坂・駿河に相次ぎ名城とこそ申され」(『三壺閑書』)と記述された。有沢永貞(江戸前期の加賀藩軍学者)の考証によれば、二ノ丸に山崎長門、三ノ丸に横山山城・長九郎左衛門・三輪志摩、北ノ丸に村井豊後・小塚藤右衛門、新丸に岡嶋備中・神谷信濃・富田越後・奥村因幡などの屋敷があったとされるが、小塚藤右衛門は天正11年に戦死したので、慶長期に城内に居住したとするのは無理がある。

また、興津内記(利常の正室珠姫付きの家臣)など、上記以外に城内に居住した家臣名が知られ、津田玄蕃邸や前田美濃邸が寛永末期から万治元年まで新丸にあったことも、別の文献で明らかなので、各家臣の城内居住時期の特定が今後の課題であろう。

万治元年(1658)末、津田玄蕃・前田美濃が幕府上使に屋敷を明け渡し、城内を去った時点で、城内の家臣屋敷はなくなる。のち、新丸に置かれた富田越後邸跡に置かれた、年寄寄所を「越後屋敷」、横山家を新丸家、作事所の一部を「津田玄蕃上げ屋敷」などと称したのは、新丸に多くの家臣が居住していたことの名残りである。

元和6年(1620)11月、本丸で火災がおき本丸御屋敷が焼失したが、この火災を機に、幕府の許可をうけ翌年、手狭な本丸を西北に拡張するとともに御屋敷(本丸御殿)を再建した。この時、武家諸

法度に基づき絵図も添付した城郭修補願の手續が初めて行われた[白峰 1998]。同じ頃、東ノ丸附段の造成があったとみられる。

寛永大火と城の縄張り改変

寛永8年(1631)4月、金沢城下でおきた火事は本丸辰巳櫓に飛び火し、本丸はじめ城の中心が燃えた。この火災後、二ノ丸の拡張工事が行われ、二ノ丸・三ノ丸を画する堀や二ノ丸西堀が整備され二ノ丸御殿が創建された。また、本丸にあった三階櫓や御殿が再建された。城内各所に残存する寛永石垣や、当時蔵入地であった能登奥郡からのべ1万5千人もの人足を動員し秋田・津軽ほか砺波郡の山林から作事板を大量に運送させたことなどから、寛永度の城普請が大規模であったことが推測できる。これが原因の一つとなり、幕府から嫌疑をうけた。所謂「寛永の危機」であるが、普請に際し2回にわたり普請・作事願を幕府に提出し、許可の幕府年寄連署奉書を得ているので、手續上問題があったようにみえない[木越 2003]。

しかし、利常・光高父子は普請を中断し、寛永8年11月に江戸へ参勤、秀忠死後の、加藤忠広改易と將軍の弟忠長の領地没収に象徴される家光の「御代初めの御法度」を江戸で助けた。寛永8～10年は諸大名が、おしなべて緊張したのであり、危機は加賀だけではなかった。

利常は寛永11年8月まで將軍家光に近侍し、江戸および京都で將軍家との関係強化につとめた。寛永9年に、犀川上流辰巳村で取水する辰巳用水が建造され、サイホンの原理を応用して城内に引水、二ノ丸の堀や従来空堀であった百間堀が水堀となり防火が充実した。利常は寛永11年に帰国すると、京都から剣右衛門という数寄者を招き玉泉院丸に泉水・築山・御亭を造らせ、二ノ丸御殿を建て直した(『三壺閑書』)。

金沢城の荒廃

寛永16年(1639)、利常は病気を理由に小松城に隠居した。同時に次男・三男に領地を分け富山藩10万石・大聖寺藩7万石が公認されたので、跡を継いだ4代藩主光高の領地は80万石、隠居領は22万石であった。隠居が認められると利常は滝長兵衛を小松に派遣、小松城の設計を行わせ普請が急ピッチですすめられた。金沢城の尾坂門にあった立派な鏡石を強引に小松に運ばせ光高を苦笑させた逸話がある。領内各所の石材・材木が安宅湊に運ばれ、本丸の地形ならし、堀・新橋作り、屋形普請に人足・足軽・小者が動員されたが、石垣は穴生の弥七が担当した。

光高時代の最大の事業は、金沢東照宮(御宮)の建造である。寛永17年、光高から幕府に東照宮勧請が申請され、徳川家との縁戚を理由に許可された。金沢東照宮の別当寺である常照院は、同年加賀藩が寛永寺内に置いた子院であり、150石の寺領(新川郡)を寄進し創設された。寛永18年から幕府御大工木原左允が設計・監督を行い、加賀の御大工清水助九郎らが施工にあたり、寛永20年(1643)、金沢東照宮は完成した。同年9月の遷座式には導師常照院憲海のもと、天台宗僧侶数十人が列席した。その後、金沢に別当寺として神護寺が設置され、弟子の松寿院が留守居をしたが、松寿院死後は、金沢の天台宗願西養寺以下11カ寺が交替で、東照宮および神護寺の祈禱・寺務・儀式をつとめた[曾根原 2004]。

金沢城北ノ丸に造営された、豪華な色彩と飾り金具で飾られた東照宮の様子は、現在の尾崎神社(重要文化財)に今も残る。北ノ丸は三度の金沢城の火災に遭わず、明治に至ったためである。最近の詳細調査によって、とくに本殿木部の彩色や大型の花梨斗釘隠は、当初に遡る可能性が指摘されている。なお、城外の神護寺内に寛文2年(1662)、家光廟である「大猶院様御仏殿」が建立され、延宝8年(1680)には、4代將軍家綱の仮位牌所も置かれた。金沢東照宮と神護寺における祭礼や藩主の御宮参拝は、徳川家との絆を強くする意味をもった(史料叢書3『金沢東照宮(尾崎神社)の研究』)。

正保2年(1645)、光高が江戸で急死、本多・横山両年寄も相次いで亡くなり、3才の犬千代(のちの綱紀)が5代藩主となったが、祖父利常が幼君を後見し、綱紀領80万石も支配した。光高は何事も父利常の意向に従順で、和歌に秀でた学者肌の藩主であったし、幼君綱紀も寛文元年(1661)まで江戸にいたので、寛永17年(1640)から万治3年(1660)までの20年間、金沢城はほとんど藩主不在状態が続いた。そのため崩壊石垣が放置され、建物の修理も行き届かず、城全体がさびれた[木越2005]。慶安3年(1650)、石垣3箇所が大風雨で崩れ、承応2年(1653)には本丸西側で大松が2本倒れ、高さ10間の石垣が幅7~9間にわたって崩壊したが、十分な修復工事がなされないまま放置された。小松城の利常は、金沢城の修理よりも、当時すすめていた、改作法(初期藩政改革、加賀藩の農村支配の基礎を固めた重要な政策)の遂行を優先させたのである。

5代綱紀による城の再興

五代藩主綱紀は寛文元年(1661)はじめて入国し、舅保科正之(3代将軍家光弟)の後見を得て新田開発・城下町整備をすすめ文化振興に努めた。同時に損傷著しい城石垣を寛文2年から11年にかけて、つぎつぎと修築した。その結果、規格化された小型の築石を多用する寛文石垣が二ノ丸北面や本丸附段の西面、薪丸などに構築された。金沢城の石垣のうち切石積み石垣は寛永期に登場するが、寛文期に多様な展開をみせデザイン性が高まったという。玉泉院丸の庭園の借景をなす色紙短冊積み石垣と呼ばれる石垣が、二ノ丸西面に出来たのもこの頃であった。

また、寛文7年に大量の材木を津軽・南部から回漕させたのは、御殿の修築や城内建物、城下町建物の整備にかかわるものといえよう。文献に確かな記録はないが、寛文・延宝期に金沢城の石垣や建物の大規模な修復がなされ、寛永17年以来の荒廃から一転して復興に向かい、新しいデザインの切石積石垣や越前焼瓦・鉛瓦の建物が増え城内建物は甍った。

綱紀の跡を継いだ6代藩主吉徳時代にかけて、金沢城の城郭建物は最も充実していた。本丸には、寛永大火後再建された三階櫓・戊亥櫓・丑寅櫓・辰巳櫓・申酉櫓など9つの櫓が聳え威容を誇っていた。しかし、本丸御殿は綱紀時代以後、ほとんど使用されず、藩政の中心は二ノ丸御殿に移っていた。三階櫓は内部5階で最上階に高欄をめぐらす望楼型櫓である。一重目が5間四方というのは他の城の三階櫓に比べ小さいが、高さは標準的である。また一重目の外壁が海鼠壁で内部が5階構造である点は水戸城三階櫓に似ている[吉田2003]。慶長7年の焼失以来、三階櫓が天守の代わりとなったが、江戸城も明暦大火後天守を作っていない。三階櫓続きの三十間長屋に干飯や鮎の塩辛桶が寛永期以来保管されていたが、非常時の軍用食であった。東ノ丸に大獅子・小獅子と呼ばれた2棟の御銀蔵があり、利家以来蓄積した金銀を保管していた。

二ノ丸御殿の変遷

二ノ丸御殿の中心は表式台・虎の間・実検の間に続く大広間(竹の間)と能舞台である。それに続く柳の間を黒書院、能舞台の奥にある小書院を白書院と綱紀時代に呼んでいる。江戸城に倣った呼称であろう。元禄以前の二ノ丸御殿絵図に奥書院・松の間が見えない。藩主が毎日執務する部屋が御居間であり次室は御次と呼ばれ側廻り・御次内が近侍した。綱紀は菊の間に養民堂、桐の間に敬義堂という額を掲げ、部屋ごとに異なる種類の書籍を置いて仁政をこころがけた(『加賀松雲公』)。11代藩主治脩は御居間書院に出席し年寄・家老・若年寄や奉行らに諮問している(『太梁公日記1』)。

藩主が出席し御用番の年寄・家老らと政務を議する部屋が松の間であり、「御用の間」と呼ばれたというが(『加能郷土辞彙』)、宝暦大火以後の御殿間取図を見ると、松の間と別に御居間近くに「御用の間」があるので誤解され易い。藩主の執務場所や日常生活の場は「御居間廻り」と呼ばれ江戸城の中奥にあたる。子女は御広式、奥女中は教寄屋丸の御部屋方に住んだが、これらが「奥向き」である。

奥書院は諸大夫つまり叙爵された年青・八家が年頭礼を独りで行う部屋であり、八家クラスの重臣らの儀礼にも使用された。奥書院と松の間が増築されたのは、元禄末期から宝永年間（綱紀晩年）と推定される[田中 2005]。

二ノ丸御殿の修築は貞享3年のあと元禄7～10年(1694～97)に大きな増改築があり、御居間廻り・御広式を模様替えし、部屋方が二ノ丸西の散寄屋丸に増築された。元禄元年に時鐘が越後屋敷に移設されたが、享保年間に時鐘の聞こえる範囲を調査しており、金沢城から10キロほど離れた河北潟南岸でも聞こえたという。

宝暦大火後の再建プロセス

宝暦5年(1755)4月から10月まで幕府の巡検上使の査察をうけたが、城の櫓・門など建造物一覽や建物平面図などを上使に提出しており、その時点の城の全容がわかる。

その直後の宝暦9年4月、城下町金沢は未曾有の大火に見舞われ、一万軒以上の武家屋敷・寺院・町家が焼失した。金沢城も本丸・二ノ丸・三ノ丸など主要部分が全焼し、藩に与えた衝撃は深刻であった。翌年6月、幕府に城再建と石垣修復を願い出たが、添付された絵図に142箇所の焼損箇所が示された[木越 2004]。幕府から5万両の大金を借り、宝暦11年2月の二ノ丸御殿木作初め・手斧初めから再建が本格化した。宝暦13年(1763)までに二ノ丸御殿の裏式台・御居間廻り・奥向き(御広式・部屋方)が再建され、中奥に能舞台が作られたところで、藩主重教は金谷御殿から二ノ丸御殿に移った。五十間長屋の石垣台の修築は宝暦13年(1763)6月に行われたが、それを裏付ける「鍼始刻石」が発掘調査で出土している。焼けた石川門石垣は明和2年に修築された。

表御殿や本丸櫓・諸門はなお未完であったが、重教は明和8年突如隠居し、城再建は11代藩主治脩に継承された。城の大手である河北門を安永元年(1772)に再建したあと、同3年には表式台や虎の間などが再建された。二ノ丸菱櫓・御広式橋の間・部屋方御座敷は天明7年(1787)、五十間長屋・橋爪櫓・石川門は天明8年、土橋門は文化2年(1805)に再建された。財政難のため再建は遅々とし、本丸櫓群はついに再建に至らず、二ノ丸御殿の大広間・表能舞台も再建されなかった。

文化5年の火災と二ノ丸御殿再建

文化5年(1808)1月、再建なったばかりの二ノ丸御殿が全焼した。文化7年にかけて再建されたが、深刻な財政難のため家中はじめ領民から献金や資材提供をうけた。今度の火災は二ノ丸だけの火災であったので、家中や領民から自発的な見舞いや献金の声は火災直後からあがった。その結果、財政難をおして藩主斉広はわずか3年で御殿再建を成し遂げた。

御殿再建の総費用は、銀6900貫匁といわれ、このうち6000貫匁は、家中・町方・郡方・寺社および大坂等の御用商人からの献金であった。材木や石材等を献上する者もあり、領内あげて協力的であった。しかし、村や町の献金は十村組や町肝煎らを通し半ば強制的であった。

時の金沢城代村井長世・前田孝友は、文化5年4月、高島厚定ら8人を造営奉行に任命した。中に普請奉行・作事奉行と兼帯する者もいたが、4人の奉行が交代で造営方役所に詰め、近習で御用部屋詰の閤屋中務が造営奉行として藩主の意向を逐一伺いながら事業をすすめた。造営方を管轄する城代に重要事項や収支報告がなされた。再建作事の現場監督は御大工頭の高橋貞右衛門および井上庄右衛門・大西久左衛門・清水又十郎ら御大工10人であり、その下に扶持方大工や町方の金沢組大工、郡方の越中組大工や小松大工など領内各地の大工集団が動員され、その人数は1500人をこえた。

このほか御壁塗や左官職人、穴生や二十人石切のほか瓦師・鉛水干師・建具師等々、様々な職人・商人たちが動員された。大工たちは町奉行支配と作事奉行支配に分かれていたが、現場では御大工と造営方内作事奉行が監督した。腕のいい大工に宿料や割増し銀が支払われたが、宿料なしの郡方大工

もいた。二ノ丸御殿作事に召喚されない大工は、大工として面子がつぶれたため、無宿料での勤務を申し出た。各地から大工が集まったが、腕の悪い大工は村方へ戻されることもあった。文化5年5月から大工による「木作り」が始まり、同6年2月、橋爪門の上棟式がなされ棟札が納められた。同年4月26日に御殿の奥向き・居間廻りがほぼ完成したので、藩主は仮住まいの本多邸から移徙した(『御造営方日並記』上巻)。

この間、算用場では毎月300貫匁の銀を用意するのに苦慮し、5月以降の資金繰りに行き詰まり、宝暦度の例にならない、表御殿建造は中断すべきであると進言したが、斉広から、家中・領民からこれだけの献金や資材提供をうけているのに、ここで止めるわけにはいかないという意向が示され、省略工夫のうえ続行と決まった。その結果、文化6年末までに、表御殿の作事が大体終わり、内装や障壁画・欄間などが7年にかけて仕上げられた。また、五十間長屋や橋爪門続櫓・菱櫓は、文化7年に入っても作事が継続され、夏から秋に竣工した。

二ノ丸大広間周辺の内装が完成した文化7年7月をもって、御造営方役所は閉鎖となり、12月で造営は終了となった(『御造営方日並記』下巻)。文化8年2月、二ノ丸御殿および諸建物の完成を祝って金沢城下に2日間の休日が布令され、「盆正月」祭りが舉行された。2月に6日間にわたる御殿落成を祝う規式能、閏2月には5日間にわたる慰み能が行われた。わずか3年で表御殿まで再建しただけでなく、奥向きの建物が増え、能舞台が表と中奥に二つ作られ、二階面積が増えたので、宝暦以前の御殿より全体的に大きくなった。

江戸後期の金沢城

本丸建物は文化度の再建でも手がつけられず、文化3年(1806)に本丸の三十間長屋、安政5年(1858)に本丸付段の三十間長屋が再建されたにとどまり、本丸全体を太鼓塀や二重塀が囲うだけであった。三階櫓や他の隅櫓・中櫓等は、ついに再建されぬまま廃落となった。

火災のほか宝暦2年(1752)2月、天明6(1786)年11月、寛政11年(1799)5月、文政2年(1819)2月、安政2年(1855)2月、安政5年2月に金沢で地震があり、とくに寛政と安政の地震による石垣破損は大きく石垣修築が行われた。

金谷出丸は寛文・延宝頃には、御文庫・御亭・馬場・厩が整備されていたが、吉徳時代から子弟や側室のための住居が建造された。その結果「金谷御住居」と呼ばれるようになり、加賀騒動の嫌疑者である真如院が幽閉されたり、その子供たちの蟄居所もあった。藩主就任前の治脩の住居となり、重教の隠居所となった頃には、能舞台が南と北に二つあった。とくに南の能舞台は拝見所・見物所を菱形に配置し能舞台を中央に置くという斬新なプランであった。治脩・斉泰もここに隠居し、慶寧も世嗣時代、斉広夫人の真龍院とともに住んだ。12代斉広は隠居にあたり金谷御殿をきらい蓮池庭上の台地にあった学校を移転させ、そこに竹沢御殿を新築させた。現在の千歳台の一角であるが、文政5年の入居から3年後に死去したので、建物は順次金谷御殿などに移築され、最後に残った書院も文久3年に巽御殿に移築されたという。

真龍院が江戸から金谷御殿へ移住したのは天保9年(1838)のことであるが、弘化2年(1845)に世嗣慶寧も金谷御殿に入った。しかし、安政元年に真龍院は二ノ丸御殿御広式に移った。然るに、文久3年藩主斉泰の正室借(将軍家奇娘)が武家諸法度改定により、江戸から帰ることとなり、二ノ丸御殿に入り、その住居は「御守殿」と呼ばれた。同時に、二ノ丸の真龍院は、竹沢御殿のあった地に巽御殿を新築し入居させた。この巽御殿が、現在の成巽閣(重要文化財)で、藩主御殿のよすがを残すものとされる。金谷御殿も、慶応2年(1866)に隠居した斉泰が入居したので、大規模な改修を行われたが、廃藩時に、北前船の豪商木屋藤右衛門(粟崎村在住)らに払い下げられたという。

(以上の第2節は、『金沢市史 通史2(近世)』の第1編2章の木閣執筆部分に加筆訂正を加えたものである。)

第3節 本丸とその周辺の沿革

金沢城本丸の位置と環境

金沢城跡で最も標高の高い区域は「本丸・東ノ丸」エリアであり、辰巳櫓台の地点で約60mを測る。東西方向がやや長い長方形をなしており、南側は堂形（旧県庁跡）に面し、いもり堀がめぐっていた。東側は蓮池庭（兼六園）に面し蓮池（百間）堀が直下にめぐっていた。北側は東の丸付段をはさんで鶴ノ丸に接続し、西側は本丸付段をはさんで二ノ丸に続く。二ノ丸から極楽橋を渡って本丸付段に上がり、西向き表門である鉄門を入ると本丸エリアに入る。鉄門に接し本丸御殿があったが、宝暦9年（1759）の火災で炎上したあと、他の櫓群と同様に再建されることなく明治を迎えた。

寛永大火（1631年）以後の本丸は、鉄門と本丸三十間長屋・三階櫓・同統土塀で囲まれた西側エリアを指し、三階櫓・同統土塀と辰巳櫓・丑寅櫓に囲まれた東側エリアは「東ノ丸」と呼ばれている。現在は、両エリアを区別していた櫓や土塀や堀がなくなっているため、東ノ丸と本丸を区別できない状態になっている。

「本丸・東ノ丸」エリアは、昭和24年以後、金沢大学理学部の植物園として活用されたため、藩政時代からの樹木に加え、明治以後の植栽とともに鬱蒼とした森を形成している。文字通り「都心の貴重な緑」で樹相が豊富で、希少動物も生息している。このため、確認調査にあたっては、園路区域を優先的に発掘対象とし、緑地部分を確認調査する場合は、植物・動物の保全の観点から、最小限の面積に限定し環境影響調査も行ってきた。今後の城内整備の基本計画においても、石川県は、本丸・東ノ丸エリアは「豊かな緑の活用を図りつつ、城郭の中核として遺構の調査と保全対策を進める」地区、と位置付けているところである。

本丸の来歴概要

金沢城前期（1631～1759）において、「本丸・東ノ丸」エリアの建造物は最も充実しており、その四隅に、中央に置かれた三階櫓からみて、それぞれほぼ南東（辰巳）・北東（丑寅）・北西（戌亥）・西南西（申酉）の方角に隅櫓が置かれた。櫓名称はそれぞれ、方角干支の名称を付けており、その間に大鎗櫓・小鎗櫓・中櫓などが配置された。金沢城東ノ丸に置かれた辰巳櫓は、文字通り辰巳の方角に置かれた隅櫓であり、城下町を睥睨する絶好の位置に置かれたので、四つの隅櫓の中では最も意匠に工夫を凝らし、「見せる」ことを意識した櫓であった。城下町の南西部から城を見ると、とくに目立つ二重の隅櫓であり、北西の季節風が強い時期に城下町南部で火災が発生すればたちまち延焼する位置にあった。事実、寛永8年（1631）と宝暦9年（1759）の2回、城下町南部で起きた火災のため焼け落ちている。

丑寅櫓と辰巳櫓の創建時期は、櫓下に遺存する本丸東面の石垣遺構の年代からみて、文禄元年（1592）の高石垣創建時に遡ることは確実とみられる。丑寅櫓北面の野面積みの高石垣は、隅角部の勾配が緩い直線であり、算木積みになっていないことから、城内最古の石垣（文禄年間）とされている。

本丸東面の文禄期石垣に対し、辰巳櫓と申酉櫓までの長さ約200mの南面石垣は、かつて20～25mの高石垣であったが、前述の通り明治40年に旧陸軍によって改造され、現在は三分一の高さに規模が縮小された。しかし、現存する石垣遺構の観察結果により、慶長年間に創建された高石垣であると判断されることから、慶長7年（1602）の雷火による本丸天守焼失の際に、辰巳櫓なども延焼し、併せて本丸南面の「慶長石垣」の造成もあったと推定される。しかし、慶長以前に、南面石垣の一帯で、前田利家によって、どのような整備がなされたかは不明であった。今回の本丸周辺の確認調査では、関連する遺構等が一部検出されており（第4章）、慶長以前の本丸南面については、どの程度の土塁や石垣で防壁がなされていたのか、多様な可能性に留意しながら、今後も慎重に検討していくべき課題

であると考えている。

東ノ丸附段は、石垣遺構の観察などから、元和年間の創建と推定されている（第4章）。また戌亥櫓から東ノ丸唐門付近までの本丸北面石垣は、寛永期の特徴（大型刻印、隅角は切石の算木積）をもつ粗加工積み高石垣であり、寛永8年（1631）大火後の整備時に構築されたものとされている。

本丸西面の鉄門から戌亥櫓にかけては、江戸中期、宝暦～文化期の石垣遺構が大きな面積を占めており、寛文期、寛永期の遺構も部分的に混じっている。したがって、初期金沢城が寛永期に大きく改造されたのち、江戸中期以後にも、大きな石垣改修をうけたと想定される。

寛永8年（1631）の城下町大火で、本丸櫓群は焼失し再建されたと考えられるが、同時に石垣も、修復されたことが想定される。文禄・慶長に創建されたのち、元和・寛永期の修理を経た、本丸南面石垣や辰巳櫓下石垣は、寛文2年（1602）の金沢地震で孕みが出、角石が破損するなどの損害を受け、幕府に修理願絵図を提出した。しかし、前述の通り、明治40年（1907）に、石垣上部の3分2が撤去されているので、現存遺構から、寛永以後の修理状況を確認することは難しく、限界がある。

本丸御殿と三階櫓

本丸御殿は、寛永大火以前、藩の政庁であり、数寄屋・台所・奥向屋敷などがあつたという。東ノ丸には江戸前期以後は、大量の金銀を納めた獅子土蔵があり、東ノ丸唐門を出ると東ノ丸附段、そして鶴ノ丸に至る。本丸付段に現存する三十間長屋は、安政5年に再建されたもので、東ノ丸附段にあつた土蔵は嘉永元年に改築された「鶴丸倉庫」である。

三階櫓は、慶長7年（1602）に雷火で焼失した天守のあとに建立されたものである。雷火で焼失するまで城下町金沢のシンボルとして聳えていた天守が焼失したあと、三階櫓が天守の代わりとなった。その三階櫓も寛永8年（1631）の大火で焼失したが、間もなく再建され、その後、宝暦9年（1759）の大火で焼失するまでの128年間、金沢城のシンボルとして藩士や城下町の町人たちは仰ぎ見た。

しかし、寛永の大火以後、二ノ丸に造営された豪華な二ノ丸御殿が藩主の居館兼政庁となり、藩政の中枢機関となった。その結果、本丸には藩主が私的に利用する御殿（御広間）のほかは、非常用の武器・食料を蓄えた長屋や御金蔵が置かれるだけとなり、三階櫓の内部は、ほとんど使われることはなかったように思われる。

現在残っている三階櫓の立面図が三種類、確認されているが、よく知られた金沢市立玉川図書館蔵の三階櫓図を詳細に見ると、三層の櫓の各階の規模は下記のとおりで、最上階には欄干があり、建物の周囲は板戸で意匠されていた。

◎金沢城本丸三階櫓の構造（「金沢城三階御櫓之図」金沢市立玉川図書館蔵）

- 1層・・・5間四方で外壁は海鼠壁で入り口の戸は二重扉で内側は襖で意匠されていた。
- 2層・・・3間四方で平側に窓が2ずつあり、妻側に出窓（出し狭間）が付く。
- 3層・・・2間四方で周囲は窓戸や大口戸で仕切る。

吉田純一氏によれば、三階櫓の地表からの高さは8間半、約15メートルあり、外観一重目に上下2列の窓があるので内部は2階になっており、二重目も、窓のある壁面の上に出窓のある屋根裏部分に、もう1階あったとみられるので、内部は5階であったという。つまり、金沢城の三階櫓は、外観三層内部五階の櫓で、高さも他の城の「御三階櫓」と比べ遜色のない規模であった。最上階は、一層、二層のような白漆喰の塗籠壁や海鼠壁はなく、板戸で囲い、その外周に高欄付きの回廊を付けていた。つまり、最上階は望楼構造をもち、初期望楼型天守の様式に連なるものという。これと似たものは、慶長期の高崎城三階櫓、彦根城天守であり、外観三層内部五階というのは、御三家の水戸城の「御三階櫓」に共通するという。このように金沢城の三階櫓は、他の大名居城の天守や代用櫓と比べ、百万石のわりに標準的な天守代用櫓であった [吉田 2003]。

当時の藩主前田利長は、三階櫓の造営にあたり、徳川家と豊臣家の板ばさみになっており、徳川家に屈服した大名として、あまり派手な城郭普請や天守造営は控えねばならぬ状況に置かれていた。

元和6年の本丸火災

元和6年(1620)に発生した金沢城本丸火災については、『三壺聞書』など諸書に記録されるが、元和6年12月17日の前田利常書状で「当城不慮之火事致出来、無是非仕合御座候」と記すので、火災があったのは間違いなく、被災場所や被災状況は『三壺聞書』が詳しい。12月24日夜、「御城中御奥方の御次之間」の困伊真の残り火が「ねだ敷など」に引火し、「御本丸表奥方の御屋形のみ焼失して類火の屋形はなかりけり」と記すので、本丸の藩主御屋敷のみ焼失し、三階櫓はじめ本丸櫓群は類焼を免れたとみてよからう。『三壺聞書』の記事で注意したいのは、出火場所・焼失箇所を「御城中御奥方」「御本丸表奥方」あるいは「奥方より出る火なり」と記したことであり、被災した利常父子が三ノ丸興津内記邸、北ノ丸の山崎美濃屋形、横山大膳邸に移住したことである。

この本丸火災の直後、利常は幕府に普請願を提出し、翌年二月七日に、幕府年寄四人連署の金沢城普請許可奉書と添状が利常に下された。年寄連署奉書に署名した安藤重信・土井利勝・本多正純・酒井忠世は、当時「四人の御年寄衆」と呼ばれ、將軍秀忠に重用された年寄である。

この年寄連署奉書は「金沢御城本丸狭く御座候につき、西北之丸を御本丸へ御取り込み成されたきのように承り候、絵図をもって披露仕り候ところ、一段御尤に思召され、右の御普請きつと仰せ付けらるべき旨、御意に候間、その意を得させらるべく候、恐々謹言」と伝達するが、ここから次の事実が確認できる。

①当時の金沢城には本丸の西北に「西北之丸」という郭があった。

②元和6年本丸火災以前の金沢城本丸は狭く、この火災を契機に西北之丸を本丸に取り込む普請が許可された。

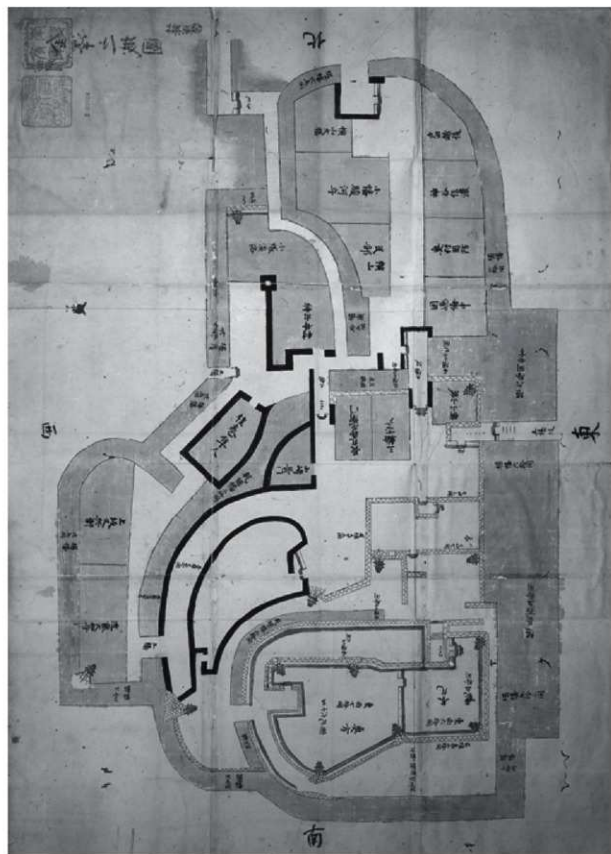
③この本丸拡張の普請を幕府に申請する際に普請箇所を明示した絵図を添付したこと。

江戸詰の藩士森祐知が藩主使者として江戸城に上がり、普請願を口頭で上申し、これにたいし將軍から直接普請許可が伝達されたのち、年寄連署奉書が下付されたものである。

初期金沢城図について

初期金沢城図には二種類の伝写系統があることは、矢守一彦氏の「主図合結記」の伝本研究で判明しており、北垣聰一郎氏は前田育徳会本「諸国居城図」と津田文庫本「諸国居城図」を比較し、津田文庫本のほうが先に成立したものと指摘し、有沢永貞による「諸国居城図」編纂過程を明らかにした。その後、濱岡伸也氏は「主図合結記」系の東大本慶長図は慶長6年から10年頃、有沢永貞の「諸国居城図」に載せる金沢城図は慶長16年前後の姿を描くとされ、二種類の初期金沢城図の存在を明確にしたが、のち有沢永貞の金沢城図は、慶長期の絵図ではなく寛永大火後の縄張りを描くと訂正した。ただし「主図合結記」系統の東大本慶長図については、慶長期の姿を示す古図であるとみている。

しかし、城内発掘調査の成果に照らすと、二系統の初期金沢城図はいずれも、慶長期の金沢城を描くと見るにはいくつか大きな矛盾が生じている。まず、有沢永貞の描いた「諸国居城図」収録の「加州金沢図」(いわゆる有沢系慶長図)における問題点は、二ノ丸五十間長屋下石垣の発掘調査によって、現在の二ノ丸と三ノ丸を画する堀・石垣ラインは寛永大火後の城郭普請のさい築造され、寛永大火以前の二ノ丸地形は大火後と比べ狭小であって、寛永大火後に盛土し拡充されたものであると判明したのに、有沢慶長図の縄張りは寛永大火後のプランで描かれている点である。このほか、いもり堀の発掘調査で確認された元和以前の「古いもり堀」のラインと、寛永以後藩末までの新しいもり堀とは大きく違っているのに、有沢系慶長図は寛永以後のいもり堀ラインを描く点も矛盾点といえる。



第4图 加州金沢之城圖（東京大学総合図書館蔵）

有沢図で唯一、慶長期の様相を看取できるのは、城内に描かれた13名の重臣屋敷であるが、それも、天正11年柳瀬の役で戦死した小塚藤右衛門を載せていたり、当時三ノ丸もしくは新丸に居住していたとされる興津内記の屋敷がないなど疑問を多く残すので、有沢元貞が行った城内居住家臣に関する考証も見直す必要がでている。有沢図は「元和以往之粗図か」という題箋を付しているが、むしろ元和期ということもできない。

しかし、藩年寄奥村丹後守家に伝わった有沢図の写本を写した湯浅祇庸や森田良見が、これに「慶長金沢御城古図」という題を与え有力資料としたので、この古図は慶長年間金沢城図とみられ、明治以後近年まで初期金沢城図の代表として利用され、通説として広まったが、この通説は通用しない。

初期金沢城図のもう一系統は、「主図合結記」所載の「加賀国金沢図」であるが、これも慶長期の姿を描いたと単純に言い切れない。元和以前の「古いもり堀」が描かれていないからである。しかし、部分的に初期金沢城につながる要素もあるので、簡単に退けるわけにいかず、慎重な検討が必要である。

「主図合結記」A類（矢守による分類）の初期金沢城図に書かれた文字情報は、蓬左文庫本のごとく「本丸、東西六十間、南北五十間」「奥方東西七十間」のほか池畑堀の長さを記す程度で、写本によっては「本丸」「奥方」のみのものもある。これにたいし南葵文庫の「加州金沢之城図」（第4図）や内閣文庫の「加州金沢城図」は城内居住家臣16名のほか本丸以外の石垣の高さや堀幅まで詳細に記すが、こうした城郭防御にとって生命線というべき情報が、これほど具体的に、慶長・元和段階において外部に流れ出てしまうものか疑問に思う。泰平の世になってからの考証によって追記されたものと見るのが妥当であろう。「主図合結記」A類が原型に近いので、これを17世紀中葉の作、文字情報の豊富な南葵文庫本・内閣文庫本は、それ以後の成立と見るべきであろう。

前に述べた元和7年の幕府年寄連署奉書から判明した事実、つまり西北の丸を本丸に繰り込んだことと、「主図合結記」A類において本丸を「本丸」「奥方」に分けて記述することの間に、何らかの関連が想定される。『三壺開書』は、本丸御殿の出火場所を「本丸奥方」と記述したが、これまで、これを御殿空間のなかの「奥」と解してきたが、この奥方は「主図合結記」A類に示された「奥方」のことではないか。とすれば、元和7年に拡張した「西北の丸」はどこか。「主図合結記」A類に書かれた方位からすると、西北は奥方に北接する東西に長い帯郭あたりと想定できる。つまり、「奥方」は「西北の丸」の一部であったのであり、元和の本丸火災を契機に、本丸に組み込まれたと考えることができる。「奥方」は、それまで藩主父子の御屋敷のあった御殿空間であり、そこが焼失したので、東側にあった本丸と同じ高さに盛り土し、本丸を拡張したと考えられる。

平成17～19年度の本丸発掘調査において、この点の裏付けとなるような成果も出ているが、詳細な報告は、次の報告書で行う予定としている。

なお、元和7年に本丸御殿の新築があったことは、五箇山から切り出した城作事用材木輸送の人足賃銀の算用記録から具体的にわかる。この本丸御殿作事の奉行は、辻助左衛門・松江次郎兵衛が勤め、領国内はもちろん上方からも細工人どもを集め、雪のうちから工事にかかり、正月下旬には家が立ち、春3月のうちに障子・襖や絵様まで仕上がり、4月上旬には藩主父子が入居したと『三壺開書』は伝える。これを事実とみるなら、利常は幕府の普請許可を待たず先に御殿再建を始め、普請が許可された2月以後、本丸拡張の土木工事に着手したと見られる。同年5月に地鎮祭執行を命じた藩年寄連署奉書があるから、本丸拡張普請は地鎮祭を行った5月以後に本格化したとみておきたい。

以上により「主図合結記」A類系統の初期金沢城図は、元和7年の本丸拡張工事以前、もしくはその直後の姿を、全面的とまでいえないが、ある程度正確に写し取った絵図であると想定されたが、検証すべき課題も多く残す。今後とも、絵図資料の批判的検討とともに、発掘所見との詳細な比較検討が求められよう。

【明治 40 年本丸南面石垣崩落に関する北國新聞資料】

（「北國新聞」以外のみ新聞名を注記した。（参考）は新聞記事の原文を、編者が要約したもの）

（1）明治 40 年 2 月 5 日（2 月 5 日付）

○百間堀道路開鑿の議

第 9 師団旧石川門前百間堀に沿へる道路は、幅員狭小に失し、阪路の勾配急激なるが為に、行人の不便一方ならず、過般來、是が開鑿を唱道しつゝなるが、陸軍省は今度、倉庫設置の爲め、井守堀を埋立てんとし、工事を進行し居れるに付、此際百間堀道路を開鑿し、倉庫通路と連絡を計るの最も得策なるを認むべく、市当時は是が調査を遂げ居り。多分明年度に於て施工するらん。

（参考）9 師団の旧石川門前百間堀沿いの道路は、幅員狭く坂道急勾配のため行人の不便一方ならず、以前より市は百間堀道路の開削を唱道しているが、陸軍省は今度、倉庫設置の爲、井守堀の埋立て工事を進行しているが、これを機会に百間堀道路開き、倉庫通路と連絡させるのが得策とみて調査を終え多分明年度にむけ実施するとか）

（2）明治 40 年 2 月 15 日（2 月 15 日付）

○広坂通取捨の決定

此程焼失の広坂通り道路を取捨めんが為、昨日特に市参会を招集せしが、右は清水美山堂より小路角なる二口旅館迄と、其相角若林洋傘店とを買収して、金沢館と軒を並べしめ、其道幅を八間とさきん設計にて、費額は預記の如く、約三千五百餘×を要し、一時公借を以てすべき見込なり、該案は既に決定を告げれば、直ちに市会に提出せしが、宮野議長は緊急議件として本日市会の議に附するときせり。

（3）明治 40 年 3 月 25 日（3 月 26 日付）

○本丸石崖崩壊実検

昨、予報の如く、午前、塚本師団長は井出經理部長、同部員大角主計等の案内に依り、旧城廓本丸城石崖の崩壊箇處を親しく実検し、又午後、足立參謀長は、井出經理部長と共に、念査を遂げたるが、兎に角、至急前後の方策を講究し、本省に対して具状の上、工事に着手せん管なりと。右崩壊原因に就ては、師団被服庫新築地設計工事とは聊か其關係を有せざること云う迄もなく、又善後方策に関しても、昨、未だ協議中に属し、之を知るに由なきが、将来危険を避けん為め、同方面石崖全部を階段斜面に改修し、桜・桃等を植えて、成るべく風致を損せざる様に努むるより他に、恰好の明案なからんかと云う。尚ほ聞き得て、更に報道する處なるべし

（4）明治 40 年 3 月 27 日（3 月 27 日付）

○旧城廓本丸石垣崩壊箇所の修理方に就いては、前号所報の如く、当師団当局者間に於て、熟講（カ）の末、同方面一帯の石崖は将来危険の虞もあれば、旁々是際、下部高さ五間通りを除き、其他の上部は尽く石崖を取崩し、階段斜面に改造して、一面に芝草の外、梅・桜・桃・躑躅等を植付け、風致を添ふべく、大体の方針を決定し、之が設計を為したる上、其筋に對し具状することとなれり。右に付、従来の号砲所、陸軍三角標は之を後方に移転し、尚、崩壊箇處を利用して本丸高地に違する坂路を新たに作成するの外、取崩しの爲め出づべき石乃至土砂を以て、右残存に決定せる下部石崖の下通りを最も堅固に爲さんため、更に地盛石垣を築造せん計画なりと云う。

△旧城本丸石垣の崩壊は、午砲発射の爲に震動せし者なりと伝ふ。ドーンか知らん。

（5）明治 40 年 4 月 4 日

○居守堀埋立地の陸軍倉庫

目下埋立中なる居守堀に於て建築せらるべき陸軍倉庫は、被服収用の用に供する目的なるが、何分にも石垣崩壊の危険、尚依然たるを以て、此危険を全然除去したる後にあらずんば、工事に着手する能はざる現状なり。故に前号記載の崩壊したる石垣処分案の指令を待ち、之に対する何等かの施設に出すべき筈なりと聞く。

(6) 明治 40 年 4 月 10 日

○百間堀道路開鑿の議

百間堀道路開鑿の議は疾くより市当局者間に於て唱道せられたるが、今度該池水を枯涸したるに拠り、是を機として道路を築き、現在堀内の片通りを通行せしむべく計画をなし、昨日堀助役、牛村技師等は現場に出張、測量を遂げたりき。

(参考) 明治 40 年 4 月 11 日付

渡瀬金沢市長が、百間堀道路開削計画を公表し、陸軍省と内務省に百間堀払い下げを依頼した。計画によれば、道路の下層に幅 8 間の道路を設け、残余の堀は埋め立て芝生を張りつけ運動場にすることにした。

(7) 明治 40 年 4 月 12 日

○百間堀払下げの出願

百間堀道路開鑿に就き、計画を整へ居れること既記の如し。右は現在道路の下層に、更に幅 8 間の道路を設け、其他は埋立ての上芝草を植ゑ運動場となすべく、尚ほ大手堀、白鳥堀も同じく運動場に充てんとし、昨日市長より内務、陸軍両大臣に対し申請せり。

(8) 明治 40 年 4 月 14 日

○百間堀払下げと当局

旧城を圍繞せる百間堀及び白鳥堀、大手堀を金沢市に払下げられんことを出願せし由は、既記の如くなるが、右は既に陸軍省へ願書を提出したれば、更に当師団に対して、意見を徴し来るならん。井出経理部長は此際各堀を、払下ぐるも別段支障を見ることなしとの方針なれば、其照会に接せば、直ちに同意を表し遣らん考へなりと云へり。

(9) 明治 40 年 4 月 26 日

○本丸石崖善後策認可

本丸石崖崩壊後の処置に就いては、会て本紙上に記したが如き計画を定めて、陸軍当局の認可申請も既に久しきこととなるが、未だ何等の指令到達せず。但し先に大角一等庄計が上京したる時、此件に関し十分の説明をなしたるを以て、当局が認可の指令を必ず与ふべしとの約束を締結したる由なれば、遠からず。其沙汰あらんこと疑を容る可らざる所なりと云ふ。因に居守堀埋立地に建築せらるべき被服庫は、該善後策完成の上に非ずんば危険にして着手す可らざること、無論既記の如しとなり。

(参考) 明治 41 年正月 17 日付

金沢市は百間堀と白鳥堀の無償払い下げに付き前年 4 月より、陸軍省と交渉してきたが、付帯条件をめぐり折り合い付かず、両堀払下の請願を取り下げた。陸軍省は両堀無償払い下げを認める代わりに、①甚右衛門坂の切り下げ、②いもり堀埋立、③衛戍監獄口高地の鋤取、④衛戍地内の樋口通水、⑤石川門前の渡橋工事、を市側負担で実施することを求めたが、金沢市の試算で、数万円の費用がかかることが判明したので、百間堀道路開削費用以外に、こうした追加負担は履行できないと判断し、当初の両堀払い下げ請願そのものを取り下げた。

（参考）明治 41 年 8 月 28 日付

百間堀無償払い下げに付き、陸軍省と内務省との協議が行われ、金沢市に付帯条件なしの有償払い下げと決まった。払い下げ額は 5000 円であった。

（参考）明治 42 年 9 月 15 日付

石川県は、さきに陸軍省から譲渡された旧城百間堀を金沢市に再譲渡する手続きをとった。その際、陸軍省から提示された条件を市参事会で承認し、請書を陸軍省に送付し、譲渡手続きをすべて完了した。

（10）明治 44 年 6 月 1 日（6 月 2 日付）

○広潤な新道路

百間堀道路の開通式各種余興と祝賀宴会

百間堀の全部と白鳥堀の一部三千四百余坪を以て、新道路に充て、道幅六間、延長三百十七間の坦々たる砥道は幅三十尺長さ三十尺の陸橋と共に、約二個年の星霜閲し、三万二千七十余円の工事費を投じて竣工を告げたにより、関係各町の有志発起人となり、昨日午後三時より新道路の開通式を挙行したり。当日は初夏の風光清々しく、若葉に薫ずる青嵐の爽やかなる好日と云ひ、角力餅投花火等の余興も催はされしこととて、附近一帯人垣を築くの盛観を呈し、堤上堤下に満つるもの実に二万人を算したりき。

（11）明治 44 年 6 月 1 日（6 月 2 日付北陸毎日新聞）

○百間堀道路開通式

当市百間堀道路開通式は既報の通り、昨一日挙行せらる、尻垂坂通、小將町々は各戸に国旗を掲げ、又尻垂坂の新道路入口は大アーチを立てて『祝開通』と大書せる扁額を掲げ、大日章旗を交叉したるが青葉吹き来る風に翻りて今日の祝意を表するが如かりき

△開通式 来賓一同小將町高等小学校内に李家知事、川崎事務官、山森市長を先頭に一同袖を連ねて幅六間、長さ三百十七間の道路を踏み、懸て石川門通路橋上に設けられたる式場に整列の上、第一鈴を以て、鬮道祭を執行し、第二鈴にて清水兼之氏発企人総代として開会の挨拶を述べ、次いで工事報告、李家知事、山森市長の祝辞ありて閉式。

△盛んなる祝宴会 開通、閉式後清水兼之氏を先頭案内として市会議事堂内に催されたる祝宴会臨む場に至れば、嚙喰たる奏楽の口窓より起して、既に酔へるが如き心地せり。斬て一同着席すれば、清水氏亦発起人を代表して開会の挨拶を述べて裏に移りし、本宴酣なる頃李家知事立つて一場の祝辞演説を述べ、次いで同知事の発声にて金沢市の万歳を三唱し、各自歓を尽くして散会せるは午後五時半なりき。

（補論） 本丸辰巳櫓の創建

本丸東面石垣の創建年代については、『三壺閑書』が前田利家の晩年、文禄元年（1592）のことで記すのが唯一で、それ以外、本丸石垣の創建時期を語る確たる文献がない。一方で本丸東面の高石垣は金沢城石垣の分類編年では第1期石垣とされ、城内最古の石垣と判断されるので、その構築時期を『三壺閑書』に従って文禄元年とするのが、現状では至当と判断される。文禄元年の東面の高石垣は、現状では丑寅櫓の北面にまで至っているが、南面にどう展開していくかは明確ではない。

しかし、辰巳櫓下に二筋の角石垣が立ち上がり、南面の慶長石垣が、文禄石垣にかぶさるように構築されている点からすると、辰巳櫓台は文禄の高石垣構築時に同時に造営されたと推定できる。文禄石垣が辰巳櫓台からどの辺まで南面に伸びていたかは、現状では判断できないが、一定の長さで南面にも構築されていて不思議ではない。その痕跡は、明治40年の大改修時に露出したかもしれないが、今となっては判断できない。少なくとも、辰巳櫓台から丑寅櫓台までの約110mの高石垣が文禄元年に構築されたことは間違いないと判断されるので、辰巳櫓の創建期も文禄元年としてよい。しかし、その意匠などは、全く不明であり、本丸天守やその周囲にあった櫓などに、金箔瓦が使用されていたこと、シャチも備えた屋根であったことが城内発掘の出土品から推測されるだけである。

天正14・5年に創建されたと推定されている本丸天守が、慶長7年10月晦日の雷火で焼失したが、この天守火災は本丸一帯に類焼し、「御本丸焼け、最早辰巳の下、鉄砲の薬倉に火入、半時ばかりの間鳴りて、町中も闇夜の如くなる。暫くありて大霹靂の如く、大山崩れる限ちる如くに響きて、方々へはねつけられ、はじかれて死したる者多し」（三壺閑書）と記録にあるので、辰巳櫓下すなわち御花畑辺にあった煙硝蔵（弾薬・火薬倉庫）に飛び火したことがわかる。

その結果、火薬庫の大爆発があり、城下町にも死傷者や延焼があったというから、火薬庫のすぐ上にあつた辰巳櫓も延焼した可能性が高い。天守が最初に被災したのなら、辰巳櫓の火の手が煙硝蔵に燃え移った可能性が大きい。本丸の再建は即座に始まったようで、翌年早々には、天守の代用として三階櫓が再建されたと伝えるが、この再建事業のなかで、二代目の辰巳櫓が造営されたとみてよい。この二代目辰巳櫓再建にあたり、現在も下層に一段だけ見える慶長新段階の石垣が造営された可能性がある。煙硝蔵の爆発は、辰巳櫓下の南面石垣に相当の損傷を与えずにおこなったと推定されるからである。

しかし、現在の石垣編年の成果によれば、現存する辰巳櫓下の南面石垣の年代は、石積みの特徴や積み石の加工手法などからみて、慶長15年前後、元和期に近い様相を呈するとされており、年代観として10年ほどのズレがある。この点は今後の検討課題となるが、後述するように辰巳櫓下の隅石垣は寛文以後も何度も修復された歴史をもっているので、慶長後半～元和初頭の修復という可能性の検証も含めて、今後の調査結果をまちたい。

この二代目の辰巳櫓は、元和6年の本丸火災で焼失の危機にさらされたが、この火災の記録には「11月24日夜、御城中御奥方の御次の間の置き囲炉裏の底に火残りて、縁の下へ火移り、根太敷に燃え付き大火になる。御本丸御屋形残らず焼失」（老翁雜記）と記され、「御本丸表・奥方の御屋形のみ焼失して、類火の屋形はなかりけり」（三壺閑書）とあるので、焼失したのは本丸奥方の御殿と表御殿などであり、三階櫓や辰巳櫓などに、さしたる被害はなかったとみられる。

なお、ここでいう本丸の「奥方」については、南葵文庫や国立公文書館にある「慶長金沢城図」に記されている本丸西側部分であり、「西北の丸」とも呼ばれたところである。この火災後の元和の本丸普請にあたり、前田利常は幕府の発した武家諸法度の規定を遵守し、絵図を添付して修築許可を求めた。その結果元和7年6月日に幕府年寄（のちに老中）四名連署奉書で、本丸を拡張し「西北丸を取

り込む」ことを容認したので、本丸が西北方向に拡張され現状に近い形状となった[木越 2002]。平成18年度の本丸発掘調査で得た所見(元和期に本丸北西部で大きな盛り土造成の痕跡確認)は上記の推定と矛盾せず、むしろ元和期の本丸の西北への拡張の事実を雄弁に裏付けてくれた。元和本丸普請は本丸西北部で大きな改変・増築があったが、辰巳櫓のあった南東部にさしたる変化はなかったもようである。

寛永8年4月14日におきた金沢城下法船寺町から出火した火災は、折からのフェーン気味の季節風におおられ、瞬間に辰巳櫓に延焼し、城の大半が被災した。いわゆる「寛永の大火」であるが、『三壺開書』は当日の気象について「大風吹きて天気よく」と記し、城へ火が移る様子は「然るに、奥村河内屋形に火懸かりて、城を打ちこし見えければ、これはこれはという内に、御城辰巳やぐらに火懸かりて御本丸を焼き、火の粉江戸町を焼き払い、田井口悉く焼け通り、金屋町にて火はとまる」と活写している。辰巳櫓が炎上したことは明瞭であるが、この火災が辰巳櫓にとって二度目の被災であり、その後、再建された姿が、正見泰の提案した「辰巳櫓Ⅰ型」にあたる[正見 2006]。辰巳櫓Ⅰ型の平面図や立面図が残っている。辰巳櫓Ⅰ型は、創建以来2度目の再建であったが、以前の意匠を基本的に継承したと推測されるものの、断定する根拠は何もないので、これ以前の姿については不明とせざるを得ない。

寛永度再建の辰巳櫓は、その後火災などに遭遇した記録がなく、比較的長く存続した。ただし、寛文2年5月の地震で辰巳櫓下石垣も損傷をうけたので、穴生たちが検証し幕府へ修理願を出した中で「本丸櫓下石垣、高拾五間、角石数三拾五本の内三本、跡々おれ申と相見、折古古御座候、其上今度地震ニ地形われ、石垣弥いたミ申候」と、辰巳櫓下石垣の被害を鑑定していた。また、辰巳櫓隅より8～9間西側の高石垣の上部に6尺四方ほど孕みが生じたことも確認し、修理を願い出でている。地震時の穴生たちの鑑定から、辰巳櫓下の角石垣の角石数が35石あったという情報は、きわめて貴重であり、明治40年当時の写真にみえる辰巳櫓台石垣の角石数との比較が可能である。しかし、破損角石3本の取り替え時期や修理方法は不明である。寛文11年までには、何らかの応急修理が実施されたと推定できるものの、大規模な石垣修理は、上にある辰巳櫓に影響を与えるので避けたのではないかと。また、南面石垣が数カ所損害をうけるような地震があった以上、櫓や塀も相当の被害を受けたと見られるが、建物被害の状況や復旧に関する資料は確認されていない。今後の資料調査にまちたい。

地震被害は、寛文2年以後も数回確認されるが、18世紀前半、享保末期に、辰巳櫓周辺石垣の大改修があり、元文元年までに修復を終えたと記す絵図が残る。この絵図に描かれた辰巳櫓は、辰巳櫓Ⅰ型の典型であるが、この石垣改修を契機に、櫓も改築されたと上記絵図に記されている。ときの藩主は6代吉徳であり、彼が延享2年に死去したあとは、相次いで若い藩主が夭折し、加賀騒動が起きるなど政情が安定していない。その間、辰巳櫓が火災などの被害に遭った記録も再建した記録もないので、吉徳晩年以後は、宝暦9年大火までの間辰巳櫓を改築したり再建した可能性は極めて低い。辰巳櫓の改築の機会としては、上述の通り元文元年の、この石垣改修時しかないと推測する。この改築によって出来たのが、正見泰の提案した辰巳櫓Ⅱである[正見 2006]。このⅡ型辰巳櫓は、10代重教のとき、城下町金沢を襲った未曾有の宝暦9年大火で、灰燼に帰したのである。

宝暦9年大火での辰巳櫓下石垣の被害は「高さ4間、長さ11間4尺孕み申し候」とあり45坪ほど孕んだようであり、南面では「高さ2尺、長さ1間」の損傷であった。その後は、櫓は再建されず仮の土塀を巡らせるだけに止まった。

安永2年には、辰巳櫓下の孕みが拡大したためであろうか、穴太正木甚左衛門(元扶持人石切)によって石垣修理がなされた。この修築のあと、一旦解体撤去した二重塀を元に戻そうとしたところ、石垣の形状が変化したため二重塀をうまく納めることができず、改変して再設営したという。この件に関し穴太方後藤彦三郎は、正木による石垣修築は前例を無視した勝手なやり方であると非難したが、

のち撤回している（『金沢城郭史料』）。

辰巳櫓下の石垣修理がなされた頃、河北門・石川門の再建が実現し、二ノ丸御殿の再建も進められたが、本丸櫓の再建は後回しにされた。寛政11年の地震のあと再び城内石垣修理が行われたが、辰巳櫓下では修理された形跡がない。文化10～13年頃に大鎗櫓下の南面石垣辺で、後藤彦三郎・奥源左衛門らが石垣修築を行ったが辰巳櫓下では行っていない。

宝暦大火後の城再建は、二・三ノ丸や新丸の建物再建が優先された。二ノ丸御殿再建がほぼ成ろうとしていた矢先の文化5年、再度二ノ丸御殿が燃えたので、本丸櫓再建はさらに遠のき、以後は竹沢御殿・金谷御殿などの新築ばかり優先された。

13代斉泰の時代になっても出費が重なり、天保の飢饉によって藩財政の借銀は膨大な額にのぼり、結局、本丸櫓は明治維新まで再建されなかった。しかし、金沢市立玉川図書館所蔵の清水文庫所蔵の辰巳櫓関係の古文書や辰巳櫓関係絵図を精査した結果、天保9年～10年頃に辰巳櫓再建にむけ、具体的な設計図面の作成を行い、材木調達、資材購入、運搬、木作りなどの作業をすすめたことが判明した〔正見2006〕。

第3章 調査の経過

第1節 既往の調査成果

第1章でも触れたが、本章では主に発掘調査成果についてやや詳細に記述する。

昭和43年(1968)・同44年(1969)の二カ年は、金沢城跡の埋蔵文化財調査の端緒で、43年は金沢大学金沢城学術調査委員会、44年は大学・石川県教育委員会が調査主体である。前者は学術発掘であり、後者は大学増築に伴う事前調査としての要素を含むが、学術調査としての色合いも濃い。

昭和50年(1975)から同61年(1986)に至る期間は、大学が行なう施設設置等工事に伴う事前調査が増加した時期である。調査主体は大学であり、考古学研究室が開設されてからはいずれも同機関が実施している。

平成3年(1991)・同4年(1992)は、金沢御堂・金沢城調査委員会が組織され、主要遺構の実態調査ということで綿密な踏査が行なわれた段階である。

平成6年(1994)から8年(1996)に至る期間の調査は、県土木部が所轄する都市計画道路寺町今町線道路整備事業に伴うもので、城域の南・東を画する堀・土橋部分を対象として、石川県立埋蔵文化財センターが実施した。

平成9年(1997)から13年(2001)に至る期間は、金沢公園整備事業に伴うものであり、平成9年度は石川県立埋蔵文化財センター、10年度以後は(財)石川県埋蔵文化財センターが調査を実施している。

平成14年(2001)以後は、金沢城の総合的な調査研究を実施する目的で、石川県教育委員会文化財課内に金沢城研究調査室が設置され、同機関により、金沢公園整備事業に伴う調査に加え、国庫補助事業である、金沢城跡埋蔵文化財確認調査事業が継続的に実施されている。なお第1章で触れたとおり、金沢城研究調査室は平成19年度(2007)より石川県金沢城調査研究所に改組された。

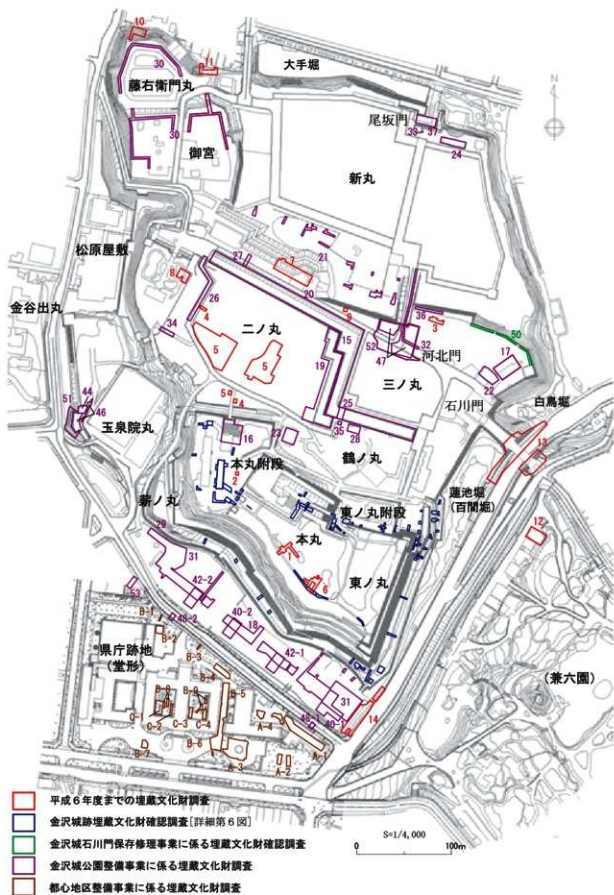
平成15・16年度においては、公園整備事業に係るいもり堀の確認調査、都市地区整備推進事業に係る県庁跡地(堂形)の確認調査が実施された。

平成17年度には玉泉院丸南西石垣の修築に係る調査が着手された。平成18年度より復元整備事業が再び本格化し、河北門の復元整備に係る調査(公園整備事業)が開始された。翌平成19年度には石川門附属太鼓塀の解体修理に係る調査(教育委員会事業)も加わり、多くの埋蔵文化財調査が生じることとなった。

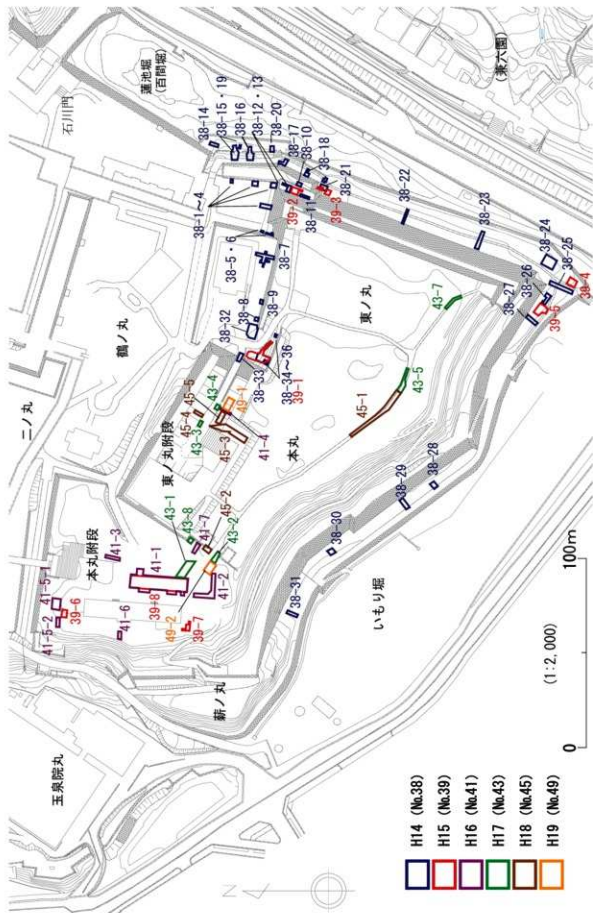
以上の埋蔵文化財・遺構調査の成果について、先に記述した金沢城の沿革と合わせて時系列的に整理すると以下のとおりである。

金沢御坊に関連すると考えられていた遺物として、かつて本丸に所在した層塔塔身、及び御宮に所在した宝塔・五輪塔があるが、現在では両者ともに15世紀以前の製品であることが判明しており[三浦1994, 1997]、むしろ御坊に先行する宗教施設の存在を示唆している。

金沢御坊段階の遺構は、明確な事例はないが、北ノ丸第1次調査区では、部分的にはあるが火葬施設と推測される遺構が検出されており、伴出遺物に恵まれないものの、金沢御坊段階に機能していた可能性が高い[湊屋・土田2001]。石川門前土橋(通称石川橋、平成6～8年度)の調査において白鳥堀調査区で検出された堀以前の遺構面[伊藤1997・1998]、内堀第1次調査区橋爪ノ門付近遺構面、三ノ丸第4次調査区の河北坂下半検出の遺構面[湊屋・土田他2001]、新丸第2次調査区遺構面[滝川2002a]、新丸第3次調査区東側遺構面等[湊屋・土田他2001]、更に近年の調査事例である河北門下層遺構群(I期)は、出土遺物からみても古相を呈する一群であるが、次代の金沢城の初期に下る可能性も否定できない。



第5図 金沢城跡発掘調査位置図(～H19)



第6図 金沢城跡埋蔵文化財確認調査地点位置図

第2表 金沢城跡発掘調査一覧

No.	調査箇所	調査年度	調査主体	調査内容	備考	文献
1	本丸	昭和43(1968)	金大史跡調査委	学術調査	西側門・礎石遺構跡	井上1969・吉岡1985・増山1999b
2	本丸附設	昭和43(1968)	金大史跡調査委	学術調査		井上1969・吉岡1985・増山1999b
3	三ノ丸	昭和43(1968)	金大史跡調査委	学術調査	川原石石積	井上1969・吉岡1985・増山1999b
4	二ノ丸	昭和43(1968)	金大史跡調査委	学術調査	能登白砂・台西縁・柳屋敷付近遺構跡	井上1969・吉岡1985・増山1999b
5	二ノ丸	昭和44(1969)	熊教香・金大	社会情報	総合録・排水・遺構・用木跡	吉岡1970・吉岡1985・増山1999b
6	本丸	昭和44(1969)	熊教香・金大	学術調査	三階櫓・三ノ丸長屋跡	吉岡1970・吉岡1985・増山1999b
7	四十間長屋	昭和50(1975)	金大	学生会館附設建設	長屋跡石・櫓石垣	上野1976・吉岡1985・増山1999b
8	二ノ丸	昭和52(1977)	金大	学術調査	明治14年焼失の御膳所	佐々木1981・吉岡1985・増山1999b
9	三ノ丸～四十間長屋間通路	昭和54(1979)	金大考古研究室	舞臺アンテナ設置	大型礎石	佐々木1980・吉岡1985・増山1999b
10	礎石南門丸北側土間部	昭和56(1981)	金大考古研究室	障壁設置	石垣跡・瓦	吉末1986・増山1999b
11	黒門礎石側廊部	昭和61(1986)	金大考古研究室	境界線並溝溝防止工事	石垣跡・切石欄干、瓦	吉末1989
12	兼六園(江口町指定地)	昭和64(1989)	県理工センター	瓦葺改築	17世紀初期の遺構(礎石建物等)	伊藤1992
13	石川門土橋(石川橋)	平成4-6 (1992-94)	県理工センター	道路整備	土橋の形成過程確認 16世紀後半～末期頃の金箔加工関連遺構、瓦等	伊藤1997・1998
14	轟櫓	平成6(1994)	県理工センター	道路整備	石垣	伊藤1996
15	内堀第1次・轟櫓	平成9(1997)	県理工センター	公園整備(復元整備)	塀・櫓部(付近から埋没された刀・鏡・銭を検出) ・轟櫓礎石	
16	本丸附設	平成10-12 (1998-2000)	財団理工センター	公園整備(復元整備)	階段跡	滝川1999 藤本・土田他2001
17	三ノ丸第1次	平成10(1998)	財団理工センター	公園整備(施設建設)	鉄砲台跡(撤去場遺構)、大濠縁部品	滝川・奥谷2006
18	一ノ丸第1次	平成10(1998)	財団理工センター	公園整備(復元整備)	天正～元和初期の堀・土橋、元和以後の櫓・櫓台	三浦1999
19	五十間長屋	平成10-11 (1998-99)	財団理工センター	公園整備(復元整備)	石垣内溝礎石 櫓・長屋礎石、17世紀初期の遺構物	滝川2000
20	内堀第2次	平成11(1999)	財団理工センター	公園整備(復元整備)	西北土堀の堀の構造確認	
21	新丸第1次	平成11(1999)	財団理工センター	公園整備(園路整備)	近代に埋没した堀の範囲確定	土田2000
22	三ノ丸第2次	平成11(1999)	財団理工センター	公園整備(施設建設)	礎石建物(番所跡)、石垣片戸	土田2000・滝川2002a
23	轟丸第1次	平成11(1999)	財団理工センター	公園整備(施設建設)	木輪・石積(仮已用水)	土田2000
24	新丸第2次	平成11(1999)	財団理工センター	公園整備(施設建設)	16世紀後半から末期頃の遺構物	土田2000・滝川2002a
25	堀川門内橋脚基礎	平成11(1999)	財団理工センター	公園整備(復元整備)	橋脚跡石垣の構造把握	
26	二ノ丸園路	平成11(1999)	財団理工センター	公園整備(園路整備)	石垣遺構	
27	三ノ丸第3次	平成11(1999)	財団理工センター	公園整備(設備設置)	土坑	
28	轟丸第2次	平成12(2000)	財団理工センター	公園整備(復元整備)	16世紀末期の遺構物	滝川・土田2001
29	一ノ丸第2次	平成12(2000)	財団理工センター	公園整備(園路整備)	慶長後半から元和年間石垣	滝川・土田2001
30	北ノ丸第1次	平成12(2000)	財団理工センター	公園整備(園地整備)	大濠遺構(16世紀後半以前)(17世紀初期に埋没) 石瓦(永安年間?)	滝川・土田2001
31	一ノ丸第3次	平成12(2000)	財団理工センター	公園整備(園路整備)	元和以前の堀・土橋・橋渡り 金箔瓦	滝川・土田他2001
32	三ノ丸第4次	平成12(2000)	財団理工センター	公園整備(園路整備)	北門門石垣台・礎石、16世紀後半～末期頃の遺構物	滝川・土田他2001
33	新丸第3次	平成12(2000)	財団理工センター	公園整備(園路整備)	尻瓦門石段、16世紀後半～末期頃の遺構物	滝川・土田他2001
34	堀川口門等	平成12(2001)	財団理工センター	公園整備(園路整備)	石段、石組礎	冨田・滝川2002
35	堀川門内橋	平成12(2001)	財団理工センター	公園整備(園路整備)	土坑、ピット	冨田・滝川2002
36	三ノ丸九十間長屋	平成13(2001)	財団理工センター	公園整備(舗装)	近世築地土・礎石	
37	堀川門	平成13(2001)	財団理工センター	公園整備(舗装)	石組礎、路面	冨田・滝川2002
38	本丸東門	平成14(2002)	金沢城研究調査室	学術調査	本丸虎口東側の把握	本報告
39	本丸西門	平成15(2003)	金沢城研究調査室	学術調査	三ノ丸長屋縁部石垣の調査等	本報告
40	一ノ丸西	平成15(2003)	金沢城研究調査室	公園整備(確認調査)	櫓台跡の検出	金沢城研究調査室2001(年報2)
41	本丸東門	平成16(2004)	金沢城研究調査室	学術調査	寛永大元以前2箇所の遺構	本報告
42	一ノ丸西	平成16(2004)	金沢城研究調査室	公園整備(確認調査)	堀城当初の形の把握を確認	金沢城研究調査室2004(年報2)
43	本丸	平成17(2005)	金沢城研究調査室	学術調査	本丸三階櫓石垣	金沢城研究調査室2006(年報4)
44	玉泉院丸	平成17(2005)	金沢城研究調査室	公園整備(確認調査)	近代の改修、石垣上部の二重櫓の基礎構造の把握	金沢城研究調査室2006(年報4)
45	本丸	平成18(2006)	金沢城研究調査室	学術調査	元和期の大規模造成、初期金沢城の礎石建物	金沢城研究調査室2007(年報5)
46	玉泉院丸	平成18(2006)	金沢城研究調査室	公園整備(石垣修築)	部分修繕の把握、初期金沢城石垣	金沢城研究調査室2007(年報5)
47	北門	平成18(2006)	金沢城研究調査室	公園整備(確認調査)	残存状況、原形、改修、創建時期の把握	金沢城研究調査室2007(年報5)
48	一ノ丸西	平成18(2006)	金沢城研究調査室	公園整備(確認調査)	南門の位置確認	金沢城研究調査室2007(年報5)
49	本丸	平成19(2007)	金沢城研究調査室	学術調査	寛永8年大元以前の大濠遺構	
50	石川門	平成19(2007)	金沢城研究調査室	文化財修理	控柱の構造の把握	
51	堀川院丸	平成19(2007)	金沢城研究調査室	公園整備(石垣修築)	改修期間と時期、初期金沢城石垣の位置の確認	
52	北門	平成19(2007)	金沢城研究調査室	公園整備(確認調査)	特別門創建前後員後員以前の遺構確認	
53	一ノ丸西	平成19(2007)	金沢城研究調査室	公園整備(確認調査)	南門の位置確認	
A	堀川跡(堂前)	平成15(2003)	財団理工センター	都心地区整備(確認調査)	礎石(堂前未築園遊建物)、近世初期以上土遺構	伊藤2004
B	堀川跡(堂前)	平成16(2007)	財団理工センター	都心地区整備(確認調査)	足輕番所、堂前馬場	伊藤2005
C	堀川跡(堂前)	平成19(2007)	財団理工センター	都心地区整備(施設建設)	古代～近世の遺構物	

佐久間氏段階の遺構も、明確にできる事例はない。ただし、上記白鳥堀調査区以下の遺構面が該当する可能性がある。

前田氏の初期、初代利家の頃の遺構としては、文禄元年（1592）構築とされる本丸（東ノ丸）東面の高石垣をまず挙げることができる。なお、丑寅櫓東側の難壇状の石垣をより古く捉える見方もあったが、今回報告するとおり、平成14～15年度の発掘調査で、高石垣と一体的に築造されたものであることが判明している。また平成16年度以後の本丸附段の調査では、本丸西側にも文禄年間に遡る、石垣を伴う堀が埋没していることが判明した。いもり堀第3次調査区では、元和年間（1615～1624）以前に遡る堀と土橋が検出されている[湊屋・土田他2001]。堀自体は前田氏段階以前に掘削された可能性もあるが、土橋の石垣は、本丸（東ノ丸）東面石垣に石材・積みの技法が類似し、文禄年間（1592～1596）頃の構築と考えられる。鶴ノ丸2次調査区遺構面でも、当該期と思われる陶磁器がまとまって出土しており[湊屋・土田2001]、金沢御坊段階、佐久間氏段階の可能性があったとした各調査区の遺構面も、少なくともその廃絶という点では、この頃まで下る場合が多いようである。

慶長以後、寛永8年の大火（1631）頃までの遺構調査例としては、いもり堀、五十間長屋下層[滝川2000]、東ノ丸唐門付近の本丸虎口[金沢城研究調査室2003・今回報告]、本丸附段[金沢城研究調査室2004・今回報告]、兼六園（江戸町推定地）[伊藤1992]、河北門[金沢城調査研究所2007]等がある。いもり堀については、先にあげた古い段階の堀は元和期頃に埋め立てられ、南西外側に新たな堀が掘削されている。後代の絵図などにみられる狭義のいもり堀はこの新堀を指す。五十間長屋や内堀の調査では、現二ノ丸の東側一帯は、寛永大火以前は現三ノ丸に近いレベルに生活面があったが、大火以後しばらくのうちに盛土造成され、二ノ丸を囲む内堀・石垣も、この頃構築されたことが判明した。東ノ丸唐門付近については、文禄・慶長期（1591～1615）から寛永8年以後定着するまで、三段階に亘る虎口の位置・形状の変遷が明らかにされた。本丸附段は、本丸西側に付随する郭で、寛永大火以前に大別二面の遺構面があり、このうち上面については、ごみ穴等の遺構が比較的高い密度で検出された。東ノ丸唐門付近・本丸附段の調査結果の詳細については、本書第4章で報告する。兼六園（江戸町推定地）は、慶長6年（1601）から元和年間頃にかけて、3代藩主前田利常の室である珠姫（2代将軍徳川秀忠娘）の付人が居住したとされる地点に該当し、調査の結果、ほぼその頃の遺構・遺物が良好な状態で検出された。小面積ではあるが、一括性の高い資料と文献記録とが合致した点で重視される[伊藤1992]。

近年では金沢城三ノ丸の正面とされる河北門の復元整備に係る調査で、一帯が屋敷地から古段階の門、新段階の門へと変遷を遂げていることが確認された。

寛永8年（1631）の大火を境とする大規模整備は、発掘調査や石垣観察から明確に窺うことができ、本丸周辺での確認調査でもこの前後の資料を得ている。内堀第1次調査区や五十間長屋調査区の成果によると、また城内各所に残る石垣も、寛永期に構築された部分がかかなり多いと考えられている。寛永大火以後についても、北ノ丸第1次調査区御宮地点における石瓦の検出[湊屋・土田2001]や、三ノ丸第1次調査区の鉄砲所の遺構[滝川・熊谷2006]など、重要な成果がある。

第2節 確認調査の経過

国庫補助事業である金沢城跡埋蔵文化財確認調査は、石川県が進める金沢城調査研究事業の一環として、埋蔵文化財調査により金沢城の構造と変遷を把握することを目指すものである。当面の目的は、絵図・文献資料の乏しい初期金沢城の構造説明であり、初期の中核部で、近世後期以降、大規模な利用が為されていないとされる本丸とその周辺を調査の主たる対象とした。但し本丸中心部の現状は、都市中心部に残された貴重な緑地であり、動植物の適切な保護を図りつつ進める必要があることから、平成14年度からの三カ年は本丸周辺部のトレンチ調査を実施することとした。今回はこの平成14～

16年度調査について報告する。本丸中心部に関しては、平成17年度以降、園路部分を対象とするものであるが発掘調査を実施している。

また本事業では、遺構確認調査と並行して、石垣の基礎的調査を実施している。石垣の測量については、土木部公園緑地課の事業として継続的に実施されてきているが、石垣の基礎的調査は、測量図をもとに、積み方や、石材に残された加工痕等を詳細に観察し、石垣編年の精緻化や、微細な部分の構築技術について認識を深めることを目的としている。遺構確認調査が初期金沢城の解明を目的としていることと連携し、本丸周辺、三ノ丸北面など、文禄～慶長期の石垣を主たる対象としている。

平成14年度 事業費 22,000,000円

平成14年度は、平成14年8月5日から15年2月12日に亘り、遺構確認調査を実施した。本丸外縁とも言ふべき、丑寅櫓北、丑寅櫓北東、東ノ丸東、本丸南において、文禄期～元和期と考えられている石垣について、前後関係を把握し、その基礎部分の特徴等を確認することで、築造時期を検証した。また、石垣の観察から留意していた東ノ丸唐門前において、従来知られていなかった初期の本丸出入口が確認され、合わせて本丸への進入ルートの変遷が明らかになるなどの成果が得られた。

平成15年度 事業費 19,700,000円

平成15年度は、平成15年5月12日から12月26日に亘り、遺構確認調査を実施した。前年度の補足をを行うとともに、本丸附段中央部における遺構の展開や、本丸附段西側に建つ三十間長屋の創建年代の解明を目的とした。調査の結果、本丸附段には寛永8年(1631)の大火以前の遺構面が良好に遺存していることが確認された。また三十間長屋は、土台石垣の基礎部分の特徴等から、その創建が寛永8年(1631)の大火後であることが判明した。

平成16年度 事業費 19,650,000円

平成16年度は、平成16年5月6日から平成17年2月16日に亘り、遺構確認調査を実施した。前年度の調査では一定の成果を収めることができたが、調査の進行に伴いさらに深化した重要な課題も多く、当該年度は引き続き初期の本丸附段の性格解明を目指し調査に取りかかることとなった。初期の遺構面は、大別して二面認められ、特に上層については、食物残渣を廃棄した土坑等があって、本丸にあった御殿に付随する奥向きの空間としての性格が推測された。寛永8年(1631)の大火以前については、本丸附段は本丸の正面ではなかったという事実から、14・15年度に調査した東ノ丸唐門側が大手であったという推測も可能になった。また調査期間の後半で、従来知られていなかった本丸西側堀・石垣の存在が明らかになった。このように本丸附段の実態が明確化するとともに、平成14年度以来の調査成果と相俟って、初期金沢城の全体的なイメージ、性格も臚気ながら浮かび上がってきたというのが実感である。

平成17年度以後は、本丸中心部を通る園路部分の調査実施について県内部での調整が図られ、実現の運びとなった。それとともに16年度の成果の一つである本丸西側堀の発見を重要視し、本丸の内部と周辺という二方向性を意識して、それぞれで効果的な方法を選択しながら事業を進める形態をとっている。これらの成果については、次回報告で取りまとめる予定である。

第4章 遺構確認調査

第1節 概要

前章では、年次ごとの調査の展開について簡単に触れたが、本章では、城内の地割等を考慮し、調査地点を大きく7つの区域に分け、年度の異なるものも合わせて報告することとした。以下の第2節（遺構）では、各区域の概要、地点の位置と地点ごとの目的、調査結果の順に記述する。なお地点については、近接した箇所と同様の目的をもったものであれば一括して報告する場合もある。また報告の順序は必ずしも番号が示す通りではない。当該区域の報告の末尾には、小結を設け、調査結果の要約、あるいは区域全体や複数の調査地点に関わる見解等を示した。金沢城内の石垣については、4桁の数字と面する方向を合わせて番号を付しており、本報告でもこれに準じて石垣を示すこととする。以下に区域と区域に属する調査地点について挙げる。なお、2004-4 地点は本丸北側に位置する調査区で、平成16年度に発掘したが、平成18・19年度にその周囲を改めて調査し、新たな所見を得たことから、次回にまとめて報告する。

[丑寅櫓北]

2002-1・2・3・4

[丑寅櫓北東・東ノ丸東]

2002-10・11・12・13・14・15・16・17・18・19・20・21・22・23

2003-2・3

[本丸南]

2002-24・25・26・27・28・29・30・31

2003-4・5

[東ノ丸附段]

2002-5・6・7・8・9

[東ノ丸唐門前]

2002-32・33・34・35・36

2003-1(2003-34・35と重複)

[本丸附段(東)]

2003-8

2004-1(2003-8と重複)・2・3・7

[本丸附段(西)]

2003-6・7

2004-5・6

第2節 遺構

1. 丑寅櫓北

a 区域の概要（第7図）

本区域は城域東部の一角を占める。区域南側の東ノ丸周囲の石垣は、城内最古の一群であり、築城初期の景観を留めている箇所として注目される。東北には蓮池堀縁へ下る通路へ通じる水ノ手門がある。西側には東ノ丸附段、東側には水の手門東側袖石垣（1221）があり、本区域の主体部分は、これらに区画された一辺20～30m程度の平地地となっている。

本区域では東ノ丸北面石垣（1121N）等の基礎構造を把握するとともに、これらの前後関係を明らか

にすることを目的として調査を行った。

b 調査地点・遺構

2002-1・2 地点 (第8図)

(位置と目的)

丑寅櫓(東ノ丸北面石垣、1121N)の北側、鶴ノ丸南東部に位置する。石垣1121Nとその北東側に接続する南北石垣(1221W)の基礎構造等を探るために設定した。

(調査結果)

2002-1 地点では、表土下約60cmまでは近代以後の土層が堆積しており、その下に近世の路面と見られる整地面と、水の手門東側の柱基礎となる、平面正方形を呈する戸室石の礎石が検出された。絵図と対応させると、この礎石は近世前期の門に伴うものと思われる。この地点では整地面の掘り下げを行わなかったが、南側の2002-2 地点では、現地表下約50cmで石垣1221Wの構築に伴う整地層を検出し、更にその下50cmで石垣根石下端を確認した。

2002-3 地点 (第9・10図)

(位置と目的)

丑寅櫓(東ノ丸北面石垣、1121N)の北側、鶴ノ丸南東部に位置する。石垣1121Nと1221Wが接する入角部分において、両者の先後関係および基礎構造を土層堆積状況から検討するために設定した。

(調査結果)

層序は六層に大別した。最下層(VI層)は地山で、表土下約2.5m、標高42.4mに位置する。上面はある程度平坦で、削平されている可能性がある。この上位に石垣構築以前の整地層及び遺構埋土(V層)が堆積している。黄褐色土・黒褐色土を主とする互層で、厚さ約80cmを測る。本層を構成する細別層は水平とは限らず、石垣1121N掘方の下位に、更に根切をもつように見える部分があるが、遺構埋土と思われる掘り込みがあること等から、石垣に先行する層と判断した。石垣1121Nは、このV層を基盤とすることになるが、掘方はごく浅く、明瞭な掘り込みを呈していない。この掘方埋土(IV層)の上位には、厚さ60~70cmの暗褐色・黄褐色土等の互層、更にその上に暗褐色土が堆積し、ともに石垣基部前面を抑える整地層と考えられる(III層)。石垣掘方埋土(IV層)とIII層下部は施工単位が異なるものとして区別したが、土質は類似しており、実態としては一体的に施工されているかも知れない。なお石垣1221Wは、III層を基盤としており、1221Nに後出することが確認された。

III層より上位には、60~70cmの厚さで瓦片が堆積しており、薄い間層をはさみ四~五層に分層できる。このうち下位の瓦層は、含まれる瓦の種類に大差なく、17世紀後半にあまり間をおかずして廃棄されたものと判断される(II層)。最上位は釉薬瓦を主体とする(瓦溜①上層)もので、この層以上が近世末期以後現代までの堆積層である(I層)。

石垣1121N・1121Wとも、構築年代を限定できる出土遺物はないが、1121Nは石垣編年1期(文祿年間頃、1592~96)に、1121Wは1121N構築後17世紀後半までの間に構築されたと考えられる。

2002-4 地点 (第10・11図)

(位置と目的)

丑寅櫓(東ノ丸北面石垣、1121N)の北側中央、鶴ノ丸南東部に位置する。石垣1121Nの基礎構造と、前面の平坦地(鶴ノ丸南東隅)の造成状況について検討するために設定した。

(調査結果)

層序は七層に大別した。本地点では石垣1121N北側において、根石下端とほぼ同じレベル(標高43.9m)で地山面(VII層)が検出された。更に北側は急傾斜で削平され、黄褐色・灰褐色系の砂質土で埋

め戻されており、石垣に先行する古い遺構ないし地業層と推定される（VI層）。石垣掘方（根切）はVI層を切っている。掘方は、石垣面からの幅、切り込み面から底面までの深さとも約50cmを測る。埋土（V層）の状態は、下位では褐灰～茶褐色系統の粘質土が厚さ数cmの単位で詰められており、上位は灰褐色砂質土の単層となる。V層の上位には石垣基部前面を抑える整地土と推測される土層（IV層）が認められる。

IV層より上位は、石垣構築後の堆積層であり、IV層上面南寄りに燻し瓦の集中廃棄層がある（III層）。瓦の種類や組成から、17世紀中葉に採用され、後半頃廃棄されたものと推定される。上位のII層は、近代の陶磁器を含む。I層はII層を緩やかに切り込み、北側へ下降する近年の落ち込みの埋土である。

c 小結

本区域における主な調査結果を整理すると下記の通りとなる。

1. 東ノ丸北面石垣（1121N）とこれに接する南北石垣1221Wの前後関係については、前者が先行することが明らかになった。
2. 東ノ丸北面石垣（1121N）の基礎構造は、明瞭な掘方が見られる箇所（2002-4地点）と、浅い掘り込みに根石を据えている箇所（2002-3地点）とが見られる。但しどちらの箇所でも石垣基部前面を抑える整地層が認められる。

2. 丑寅櫓北東・東ノ丸東

a 区域の概要（第7図・第12図・第30図）

東ノ丸東縁は、南側は直線的な二段の石垣（堀縁を含めると三段）で構成されているが、北東丑寅櫓付近では、低い石垣が積み重なる雑壇状を呈している（第7図・第12図）。これらの石垣は築石に自然石を多く用いたもので、石垣編年I期（文禄年間頃、1592～1596）の特徴を示す。さらに丑寅櫓北東側は雑壇状の様相を呈すること等から、時期的に更に遡る可能性が考えられていた。そこで調査に際しては、各石垣及び石垣に囲繞される平坦面（郭）の前後関係・年代を把握し、一帯の構築過程を復元することを第一の目的とした。

なお平坦面については、丑寅櫓台上面を除き、高所より順にI～VIまでの番号を付した。

b 調査地点・遺構

2002-11・12・13、2003-2地点（第12～16図）

（位置と目的）

丑寅櫓台の東下に位置する平坦面IIIは、標高約48mで、丑寅櫓台より約11m低い（第7図・第12図）。平面形は南北20m×東西2～5mの略長方形を呈するが、東辺の南端は鋸形に屈曲し、見かけ状いわゆる角欠きの形状をとる。西辺が平坦面Iの下部石垣（1121E）下端に接する他は周囲より高く、東辺の大半は高さ2mの石垣を介して一段低い平坦面Vに、東辺南部と南辺は高さ10mの石垣面となって平坦面VIに、北辺は高さ1mの石垣面で平坦面IVに接する（第7図）。

本地点での調査目的は、平坦面Iとの前後関係の確認である。平坦面Iの下部石垣1121Eと、平坦面III下部石垣1200Sについては、積み方から前者が先行することが判明していたが、平坦面IIIの拡張造成等も考えられたため、平坦面上に4地点（箇所）にわたり断ち割り調査区を設定した。

（調査結果）

平坦面南端の2002-11地点では、平坦面IIIを構成する整地層が平坦面I下部石垣1121Eに寄りかかるように施工されていることが判明し、この部分では外観からの石垣観察通り石垣1121Eが先行することが確認された（第13図）。北側に隣接する2003-2地点でも同様の前後関係が確認されたが（第

15・16 図)、調査区北端で石垣構築以前の堆積土及び地山が検出され、これらを切って 1121E の根石が設置されていること、またこの掘方は北方向へは続かず収束し、以北では基礎面をほとんど掘り込まず根石を置いて前面に整地層を施す構造に変化していること、さらに現状で平坦面Ⅲの東辺となる石垣 1210E の背後に埋め込まれた石垣が検出され、先に角欠き状になっているとした南北両端が直線的につながり(石垣 1200E)、本来の東辺を為していたことなどが明らかになった。

ここで上述の所見に関わる 2003-2 地点の土層(第 16 図)について整理すると、c-c' 面(北側断割南壁)では、I:表土等(実測図作成時には除去)、II:平坦面造成後の堆積層、III:埋没石垣 1200E の裏込め層、IV:背面の石垣 1121E 掘方埋土、V:石垣構築以前の堆積土に大別できる。ここでは V 層を切り込んでまず石垣 1121E が構築され、その掘方埋土(IV層)に寄りかかる状態で、石垣 1200E の上位裏込め(Ⅲ層)が形成されていることが読み取れる。

一方 d-d' 面(北側断割西壁)では、北側に IV 層の立ち上がりがあり、石垣 1121E 掘方が収束していることが認められる。石垣 1121E の基礎部分は、これより北側では V 層をほとんど掘り込まず、その上面に根石を置き、前面を整地土(IV'層)で抑える構造に変化している。b-b' 面(調査区北壁)をみると、根石前面の整地土が、平坦面Ⅲの前面石垣 1200E の裏込め(Ⅲ層)の下層に位置しており、やはり 1121E→1200E との構築過程が確認される。このことに関連して、背後の石垣 1121E の積み方に着目すると、基礎構造の変化に従って、南側が先行し、北側がこれに寄りかかるように積まれていることが認められる(第 20 図上)。なお b-b' 面では V 層最下部で地山が認められ、平坦面Ⅲが自然地形の制約を受けて形成されていることが判明した。

2002-12 地点は 2003-3 地点の北側に隣接しており、2003-3 地点北トレンチ北壁での所見と矛盾しない遺構の在り方を示す。ここでは石垣 1121E の根石は、掘方のある部分より半石分ほど前に出ており、これより上部がセットバックして積まれていることが認められた。また 2002-13 地点では埋没した石垣 1200E の延長を確認した(第 14 図)。

以上から、上方・背後の石垣 1121E が先行し、その後下方・前面の石垣 1200E が完成したことが判明した。創建年代の手がかりとなる遺物は出土していないが、石垣の積み・加工の点では大きな差異はなく、一体的な施工における工程差と見るのが妥当と思われる。従って平坦面構築の前後関係は、最終的な整備まで含めるとほぼ同時とも思われる。特に、背後の石垣 1121E 北側(深い掘方を持たない部分)と、前面の 1200E との関係については、調査地点での所見だけでは理解しがたい点がある。北面側=丑寅櫓北側(1121N)では、1200E が北側に回り込んで 1121N 下部と連続しているように見え、ここでは 1200→1121 という順序を想定せざるを得ず、同一レベルの石垣でも、面ごと、工区ごとに工程差が生じている可能性がある。このような問題もあるが、いずれにしろこれらの地点では、雑壇状の石垣群において必ずしも下段が先行するとは限らず、その逆の場合もあることが確認された。

なお、1200E 裏込め(Ⅲ層)上に堆積したⅡ層は、1200E の更に前面に構築された石垣 1210E の裏込めに相当する。この層からは瓦がまとまって出土しており、その特徴から 17 世紀中葉～後半頃の廃棄が想定される。後述するように 1210E の根石等基礎部分は、石垣編年 1 期の特徴をもつため、1210E 全体が後世に付け足されたとは言えないが、少なくとも 1210E の中位以上は 17 世紀後半以後の改修によるものと考えられる。

2002-10・17・18 地点(第 17～19 図)

(位置と目的)

2002-10 地点は、平坦面Ⅲの下方、平坦面 V に設定した(以下第 7・12 図も参照)。平坦面 V は標高 45～46m、3m×15m の南北に細長い平面形状を呈し、北側の平坦面Ⅳとはごく低い石垣(1210N)で隔てられている。2002-17・18 地点は平坦面 V の下方、平坦面Ⅵに設定した。平坦面Ⅵは現状では東

ノ丸山下に位置する帯郭状平坦面の延長部分に相当し、2002-18 地点付近での幅は約 5 m である。なお 2002-18 地点付近の平坦面Ⅵの前面は、現状では石垣 1240E の南側延長に一致する低い石垣で区画されているが、積み方から見て近代の改修を受けたものである。近世の絵図では 1240E との間に入角が見え、現状より少し西側のラインに石垣が位置していたと推測される。

平坦面Ⅳ・Ⅴの東面をなす石垣 1220E・1221E は、後世の改修をかなり受けているが、石垣編年 1 期に構築されたものである。この石垣面は、金沢城の石垣で最も普遍的な戸室石（角閃石安山岩）のほか、花崗岩等の石材が散見されること、さらに 1220E では石垣面に埋め込まれた隅角部とおぼしき目地があつて、これより南側の石垣面はやや時期を置いた拡張によると見受けられたことから、石垣編年 1 期でもとくに古相を呈する可能性が考えられていた。そこで、2002-18 地点は石垣 1220E に見られる隅角部状の目地の下端（平坦面Ⅵ）に、2002-10 地点は同じく天端付近（平坦面Ⅴ）にそれぞれ設定し、石垣の基礎構造を探るとともに、石垣拡張の可能性等、石垣 1220E の先行性を検証することとした。また 2002-17 地点については、石垣 1220E と 1221E との境である鋸出角部分下端に設け、基礎構造における両石垣の関係を探ることとした。

（調査結果）

2002-18 地点では、石垣 1220E の基礎構造について、隅角部状の目地が根石まで通っていないことが確認された。隅角部状目地直下の根石は、上部とは対応せず、南側の拡張と想定していた部分に跨って設置されていた。前面部分に近代以後の掘削を受けていたため、掘方等の状態は不明であるが、目地以南部分は拡張ではなく、一体的に築造されたものと判断される（第 19 図・20 図下）。また石垣 1220E の根石下端より約 1.6 m 東で、埋没していた石垣 1230E が確認された。これにより石垣 1220E は、石垣 1230E により形成される段（平坦面）を基盤とすることが判明した（第 19 図）。

2002-18 地点北壁（第 19 図 b-b' 面）の土層断面を見ると、次の四層に整理される。Ⅰ層は近代以後の遺物が混じる層で、近代に入り、石垣 1220E 根石前面のほとんどが一旦削平されたことを示す。この付近の平坦面Ⅵの前面を区切る石垣については、現状の近代石垣の裏込めが確認されたに留まり、近世の絵図に描かれる石垣については不明である。Ⅱ層は出土遺物がほとんど見られないが、後述するⅢ層に近世後期の陶磁器が含まれることから、近代に下る可能性がある。このⅡ層の下位で、絵図には見られない埋没石垣 1230E が検出された。石垣前面のⅢ層は、層序的には、近世初期に遡ってしかるべきではあるが、少量ながら近世後期の陶磁器が出土しており、この時期に攪乱を受けている可能性が高い。Ⅳ層は 1230E の裏込め、背後の石垣 1220E の基盤であり、根固めを充填する掘方最下部がわずかに遺存していた。

2002-10 地点では、平坦面Ⅴの中央に設定し、石垣 1220E で見られる隅角部状目地について、平面的に石垣出角を形成しているか否かを検討した。その結果、石垣出角は検出されず、平坦面の基盤として地山が展開していることが確認された（第 17 図）。

隅角状目地の背後は、石垣前面より幅 3 m まで裏込め掘方が検出された。隅角状目地の南側、つまり拡張と想定していた部分の石垣裏込め土と、目地北側裏込め土とはほとんど同質で（Ⅴ層）、掘方背後には地山が確認されたのみであった。このことは、石垣隅角と見えた箇所が、築留であることを示している。上述した 2002-18 地点の状況と合わせて考えると、一体的な施工における工程区画と解釈するのが妥当と思われる。

なお 2002-10 地点では、石垣 1220E と、その上位の石垣 1210E との関係についても検討したが、両者に伴う裏込め・掘方埋土（Ⅳ・Ⅴ層）に明確な切り合い関係は認められず、本来の整地土と流土を区別し難いこともあり（第 17 図等）、前後関係については判断し難いが、調査区南壁等（第 17 図）のⅢ層が 1210E の前面整地土とすれば、1210E が後出すると言える。ただし、1210E の下部も石垣編年 1 期の特徴をもつため、いずれにしろ大きな時期差は考えにくく、工程差とするのが妥当である。

2002-17 地点は、石垣 1220E と北側の 1221E とが接する鋭角下端に設定した（第 18 図）。ここでは 1220E・1221E の根石の下位まで近代の削平が及んでいたが、基本的に 2002-18 地点で認められたのと同様、1220E・1221E の東側に埋没石垣 1230E が検出され、1230E が東面をなす段（平坦面）を基盤として 1220E・1221E が構築されていることが判明した。

2002-21・2003-3 地点（第 19～25 図）

（位置と目的）

2002-21・2003-3 地点は、2002-18 地点の南側、平坦面VIに設定した。調査目的は、2002-17・18 地点で検出された埋没石垣 1230E の南側延長の様相を把握することである。

（調査結果）

2002-21-1 地点では、埋没石垣 1230E の南側延長部分が検出された。西側上方の石垣 1220E が出角を形成して南面石垣 1220S に連続するのにはほぼ平行し、1230E も南側に回り込んでいることが確認された（1230S）。ただし出角部分は後世に破壊されている。2003-3-1・2 地点は、石垣 1230S の収束状況を確認するために設定したものであり、調査の結果、南側（2003-3-1 地点側）へは屈曲せず、西側（2003-3-2 地点）に延びて石垣 1200E に接して収束していることが確認された（第 23 図）。両石垣の接し方から見て、石垣 1200E が先行し、1230S が後から構築されたと考えられる。

なお 2002-21 地点で地表下 90～100 cm、2003-3-1 地点で 120～30 cm までは、近世末期以後の遺物を含む攪乱層である（第 22・24・25 図 I 層）。2003-3-1 地点では攪乱層の下位において厚さ 30～40 cm の瓦集中廃棄層が検出されており（第 24 図 IV 層）、一括性の高い出土瓦の特徴から、寛永 8 年（1631）の大火で廃棄されたものと考えられる（第 126 図 T3～T5、第 132 図 T59～T64）。2002-21-1 地点において石垣 1230S を覆っている瓦層（第 22 図 IV 層）には、近世後期以後の瓦・陶磁器が若干混じるものの、層序的には 2003-3-1 地点の瓦層と基本的に同一と考えられ、寛永 8 年（1631）大火を契機に石垣 1230S・1230E が埋め立てられたことが想定される。

2002-21-2 地点では、石垣 1243E、1240E 南延長（近代）石垣を検出した（平面図第 21 図、断面図第 22 図）。石垣 1243E は、近世の絵図に見える石垣で、石垣 1230E の前面（東側）に位置している。ただし石垣 1230E はここでは明瞭には検出されておらず、石垣 1243E 構築時に上部が解体され、その裏込めに覆われたものと考えられる。石垣 1243E の裏込め中には刻印のある築石残欠が認められ、その構築年代は遡っても慶長後期頃（石垣編年 2 期新）であり、おそらく寛永 8 年（1631）以後、石垣編年 4 期とするのが妥当と思われる。石垣 1243E もまた、近代になって上部を削平され、前面（東側）に構築された石垣の裏込めに埋め込まれている。

2002-14・15・16・19・20 地点（第 21・26～29 図）

（位置と目的）

丑寅櫓北東、水ノ手門外側に位置する。一帯の郭配置を概観すると、南北に細長い帯郭状の平坦面 IV・VI・VII がほぼ平行し、東側に向かい階段状に下降しつつ連なる状況を呈する。2002-14 地点を設けた平坦面 VII の北端は、近世以来の井戸がある箇所、本地点の調査は、井戸の構造、構築年代等についての情報を得ることを目的とした。また平坦面 VI・VII を区画する石垣 1241E は、近世の絵図にみられる石垣であるが、現状では近代の改修が著しいため、2002-15・16・19・20 地点を設け、現地表下において当初の形状を探ることとした。なお 2002-15・16・20 地点は、石垣 1241E が部分的に破壊され、長軸 4～5 m、短軸 3.5 m 前後の平面楕円形の堅坑が遺存する箇所（箇所）に設けている。また 2002-19 地点は、石垣 1241E に接する石段状の構造物の一部が観察された箇所（箇所）に設けている。いずれも表面観察では近代以降の可能性が高いと判断した遺構であるが、石垣 1241E の遺存状況の探査と合わせて構

造等について確認することとした。

（調査結果）

2002-14 地点では、近世以来遺存している井戸周辺を調査した（第 26 図）。井戸は、凝灰岩製の円形井戸枠を有し、井戸側を円礫（河原石）で組み上げたもので、現状では上面から 3.4m 下が水面、それより 1.2m 下が底面（堆積土）となっている。調査の結果、井戸周辺には予想以上に近世末期以降の土砂が堆積していることが判明し、調査は近世末期以前の土層を検出するに留まった。凝灰岩製井戸枠が近世末期以前に遡らないこと等は確認されたが、井戸構築当初の遺構面を抑えることはできず、構築年代を特定するには至っていない。なお調査区南西では、厚さ約 10 cm を測る戸室石製板石の一部が 2 段検出されており、近世の絵図に見られる、平坦面ⅦとⅥとを連絡する階段の一角である可能性がある。

2002-15・16・19 地点の調査では、石垣 1241E について、概ね現地地表より下で、石垣編年 1 期（文禄年間頃）の特徴を有し、構築当初の形状を留めていることが判明した。2002-15 地点では、高さ 1.5 m 分検出しており、地表以下では全体的に良好に遺存しているものと推測される（第 27 図）。

なお 2002-15・16 地点で見られた堅坑については、性格は不明であるが、土層の堆積状況から見て、近代以降でも比較的新しい段階に構築されたものであることが確認された（第 27～29 図）。2002-20 地点は地表観察の折り 2002-15 地点の東側で見られた石材の集中箇所へ設けたものであるが、これは石垣 1241E を破壊した際の石材廃棄箇所と推定される。また 2002-19 地点の構造物についても、ごく近年に付加された石段であることが確認された（第 21 図）。

2002-22・23 地点（第 30～33 図）

（位置と目的）

2002-22・23 地点は、東ノ丸東下側、東ノ丸東面高石垣 1131E の下端に位置する（第 30・31 図）。石垣編年 1 期を代表する 1131E の基礎構造と、帯郭状となっている平坦面Ⅵの造成状況について検討するため設定した。

（調査結果）

2002-22 地点（第 32 図）では、根石への影響を最小限とするため、小規模なサブトレンチを補足的に設け、根石の探査を行った。その結果、現地地表下約 1.5m（標高 37.1m 付近）で、石垣 1131E の根石下端と考えられる箇所へ達した（第 32 図左）。サブトレンチ内のごく小範囲での観察を元にした所見であるが、1131E の基礎構造は、明確な掘方（根切）をもたず、根石下に根固層（Ⅴ層）、前面に整地層（Ⅳ層）を設けて根石を抑えるものと推測される。本地点では地山は未確認で、石垣基盤面が周囲より低かった可能性があり、上記のような基礎構造が採用されても矛盾はないと考える。

調査地点付近の造成状況に係り、石垣構築後の土層の堆積状況を検討する。Ⅳ層上位には、特徴的な軟質胎土を示す瓦の一群がまとまって出土する土層（Ⅲ層）がある。瓦はその特徴から 17 世紀初頭の廃棄を推測できるもので、Ⅲ層は石垣構築後の堆積層ないし整地層と考え得るが、この段階では構築当初からの高さは 20～30 cm 程度である。Ⅲ層より上位は、石垣 1131E 寄りに厚さ 20～30 cm の瓦集中廃棄層（瓦層 2、Ⅱ-3 層）が堆積し、砂利層等 50～60 cm の土層（Ⅱ-2 層）を隔て、現表土のほぼ直下にも瓦集中廃棄層（瓦層 1、Ⅱ-1 層）が見られる。瓦層 1 と瓦層 2 は、同じく寛永 8 年（1631）大火前後に使用されたと推定される瓦で構成されており（第 126 図 T6～T8、第 133 図 T65～T67 等）、時期差は考えにくいこと、両層間において遺構が形成される遺構面は認められないこと等から、この間の土層は 17 世紀前半から中葉のある時期に、一体的に整地された可能性が高い（Ⅱ層）。なおⅡ層上部東側の大半は、近代に一旦削平された攪乱層と考えられ（Ⅰ層）、石垣 1131E 寄りで見られる細かな単位の土層は認められない。

2002-23 地点では、現地表下約 1 m (標高 37.0~37.2m) で地山が確認された (第 33 図 VII 層)。地山上位には 10~30 cm 程の暗灰褐色の粘質土層が堆積する部分があり、これを基盤とするピットがあるが、性格等は不明である (VI 層)。

遺構埋没後、瓦集中廃棄層が形成される (V 層)。その下部は先行する堆積土を若干切り込み、浅い土坑状の様相を呈するもので、大型の破片が含まれる。上部は小礫混じり土が土手状に盛り上げられた部分と、これと石垣 1131E との挟まれた凹み状の部分とに細別されるが、含まれる瓦はいずれも小片である。このように瓦集中廃棄層は上部と下部で堆積状況が異なり、少なくとも上部は二次的に堆積したものと考えられるが、含まれる瓦は、まとまった特徴を有し、2002-22 地点と同じく、寛永 8 年 (1631) 大火前後に使用されたと推定できる (第 127 図 T11~T19、第 133 図 T68~T72 等)。ただし、後述する 2002-7 地点 VI 層や、2004-1 (2003-8) 地点 SK11 出土資料より新しい要素があり、廃棄時期自体が後出するのか、廃棄の段階は同じであるが、新旧の交代期にあつて、場所により比率に差が出たのか、検討すべき課題がある。

瓦集中廃棄層より上位については、表土及び鉄管等の掘方等 (I 層) を除くと、出土遺物が少なく、時期判定の決め手に欠けるが (II~IV 層)、近世の整地土が遺存している可能性を考えたい。

c 小結

本区域における主な調査結果を整理すると下記の通りとなる。

1. 丑寅櫓東側の「雛壇状」石垣群は、南側の東ノ丸東面石垣 (1131E) より年代が遡るものではなく、石垣編年 1 期 (文禄年間頃、1592~96) の段階に、一体的に形成されたと考えられる。
2. 平坦面 III 上の調査区 (2002-11・12・13、2003-2 地点) において、東ノ丸東面石垣 1131E の北側延長 1121E の少なくとも南側が、その前面下位にある 1200E・1200S より先行して構築されたことが判明した。また平坦面 VI 上の調査区 (2002-18・21、2003-3 地点等) では、平坦面 VI の下に埋没していた石垣 1230E・1230S が、1220E・1220S に先行する一方、1200E・1200S より後に構築されたことが判明した。
3. 以上の点から、1121E (南側) →1200E・1200S→1230E・1230S→1220E・1220S という石垣構築過程が明らかになった。古式の石垣に見られるような、下位より順番に段築状に積み上げていく工法とは異なる点、また隅角部状の目地や、戸室石以外の石材が見られることで古相を呈すると考えていた 1220E が、構築順序からすれば後出する点等が注意される。なお、第 108 図に石垣構築過程の推定図を示した。ここでは 1121E 北側=丑寅櫓台直下より 1200E を先行させているが、検討の余地が多いことは先述した通りである。
4. 「雛壇状」の形状となった原因の一つとして、自然地形の状態が挙げられる。平坦面 III・IV では下層に地山が検出されており、一帯が元来東側に向かい尾根状に張り出した地形であったことを示している。すなわちこの部分については、旧地形を大きく改変することのないまま、石垣普請が図られたと言える。
5. なお、文禄年間頃と考えられる構築当初の形状は、寛永 8 年 (1631) 大火後に若干変容していることが、埋没石垣やこれを埋める瓦集中廃棄層等より判断される。寛永 8 年 (1668) 頃に作成された絵図『加賀国金沢之絵図』では、近代改変部分を除けば、現状と類似した状況が描かれており、調査結果と矛盾しない。
6. 本区域における石垣編年 1 期の石垣基礎の構築方法については、明確な掘方をもつ場合と、明確な掘方をもたず、根石の前面を整地土により抑える場合の二つのパターンが確認された。

3. 本丸南

a 区域の概要 (第34・47図)

本区域は、城城南側を区画する「いもり堀」に面した帯郭状の平坦面に相当する。この平坦面は、近世後期の絵図では「御花畑」と記される箇所、東ノ丸東下とは明確な段差をもたず、一連の面である。平坦面背後にあたる本丸・東ノ丸の南側石垣 1140S・1140E は、東ノ丸東側の石垣 1131E・1131S の南方に付加する形で構築されており、その結果、本丸・東ノ丸南端の石垣隅角部は、1140S・1140E 間の出角(大角)、1140E・1131S 間の入角、1131S・1131E 間の出角(小角)で構成される。

「御花畑」については、明治40年(1917)、いもり堀埋め立てと同時に南側の大半が削平され、現況では、北側の本丸・東ノ丸南面石垣(1140S)から幅10m前後の部分が遺存するのみとなっている。またこの時本丸・東ノ丸南面石垣の一角が崩壊し、十三間あったという辰巳櫓直下も三段に改修され、近世の形状を留めているのは最下段の高さ約8.5m分のみである。

本区域における、近代の改変を受ける前の景観については、東ノ丸東側の石垣(1131E・1131S)が石垣編年1期(文禄年間頃、1592～96)、本丸・東ノ丸南側の石垣が石垣編年2期後半(慶長年間後期、1610年代前半頃)、いもり堀が元和年間頃(1615～1624)にそれぞれ構築されたと推定されることから、近世初期の数十年間で暫時的に形成されたものと考えられる。さらに、平成10・12年度の公園整備事業に係る調査では、いもり堀に先行する本丸南堀(以下、古いもり堀と記述)の南岸が検出されており、今回の調査では、「御花畑」の下層に埋没していると推定される古いもり堀北岸の確認を含め、一帯の形成過程を把握することを目的としている。

b 調査地点・遺構

2002-24・25・26、2003-4 地点 (第35～41図)

(位置と目的)

いずれも本区域の南東部で、辰巳櫓直下の「御花畑」上面に設定した。一帯の造成状況を確認するべく2002-24・25・26地点を設けたところ、2002-25・26地点で埋没した東西方向の石垣が検出された。2003-4地点は2002-25地点で検出された石垣の延長を探るため、その西側に設定した。

(調査結果)

本区域北東端の2002-24地点では、表土及び若干の近代以降の堆積土を除去すると一面に地山が検出された。近世の遺構・整地土は削平を受けて失われていると考えられるが、地山の高さからみて、当初より浅い位置にあったと判断される。

2002-25地点では、東西方向の南面石垣が二列検出された(1801S・1802S、第35図)。ともに数段分ではあるが、自然石・割石を築石とする石垣編年1期(文禄年間頃)の特徴をもつ。2003-4地点では石垣1802Sの東側延長(第39図)、2002-26地点(第37・38図)では石垣1801Sの西側延長が検出されている。

以下では、両石垣の構築過程とその関係、さらに埋没過程について、主として2002-25地点の土層堆積状況(第36図)を整理することで説明し、必要に応じ2002-26地点、2003-4地点での知見を補足する。

調査区上手(本丸側)の石垣1801Sは現地地表下約40cmで検出された。1801Sは北側背後の地山(第36図Ⅷ層)に掘方を設けて据えられ、土と栗石が混合した裏込め(Ⅷ層)を伴っている。なお1801Sは、検出面である標高36.0m前後が天端と考えられ、高さについては、基盤が未確認のため確定できないが、2002-26地点(第37・38図)や、後述する2003-5地点での検出状況(第44・45図)から、少なくとも2mは越えるものと推定できる。1801Sの前面(南側)には、乱雑な河原石積を交えた土層があり、1801Sはこれに埋め立てられている(Ⅵ層)。埋立土は段をしながら下降するが、Ⅵ層下段の前面に、石垣1802Sが構築されている。Ⅵ層との間には、栗石主体層と黄褐色系の砂質土を互層

として裏込めが設けられている（V層）。石垣 1802S の天端は標高 34.7～35.0mの間であり、高さは 1.5mまで検出されているが、実態は更に高いものと推定される。以上の状況から、石垣 1801S から 1802S への変遷が認められ、両者が並存することは考え難い。なお石垣 1802S 構築に際し、1801S 埋立土を明確に整形している様子が窺えない。かつ 1802S を 1801S の作り替えと考えれば、1801S 埋立と一体的に構築されたとみてよいと考えられる。

石垣 1802S の上位には、礫が多く混じった褐色～暗褐色系砂質土が堆積している（IV層）。2002-25 地点では、1802S の天端石の位置に乱れが認められるが、この層はその状態を覆っていることから、石垣 1802S 構築後時間差をもって堆積したと推定できる。ただし 1802S の石垣面は被覆していないので、1802S 存続中の改修と考えられる。1802S 前面の土層は、あまり礫が混じらない砂層主体であり、堆積状況から二段階に分けられる（II・III層）。この状況は 2003-4 地点の方が明確で（第 41 図西壁）、下部は南へ下降する斜め堆積で、上部は水平に堆積する。斜め堆積層により石垣 1802S が被覆されるとともに、「御花畑」の造成が為されたと考えられる。これより上位は、近世末期以降の軸葉瓦を多く含むもので、近代以降の堆積土である（I層）。

最上層以外は、時期を確定できる遺物が出土していないが、石垣 1801S の構築から斜め堆積層の堆積まで、文禄～元和（1592～1624）の間とするのが妥当と思われる。

2002-27、2003-5 地点（第 42～46 図）

（位置と目的）

2002-26 地点の西側に連続する箇所を設定しており、一連の調査区と言えるが、説明が煩雑になるため便宜上分割した。2003-5 地点は、2002-25・26 地点における様相の西側への展開を確認する目的で設定した。2002-27 地点は、本丸・東ノ丸南面石垣（1140S）の基礎構造の確認と、「御花畑」平坦面との関係を把握する目的で設定した。

（調査結果）

2003-5 地点の遺構配置・土層堆積状況は複雑な様相を呈する。ここでは上述した 2002-25・26、2003-4 地点の調査結果を踏まえ、復元的に整理する（第 42～45 図）。

石垣 1801S は、東側 2002-26 地点からの延長が確認されるが、上部二段が失われ、その部分には、1801S 埋立土の一部とみられる東側からの土砂・栗石の堆積（V層）と、これを掘り込んで構築されている南北方向の石積が認められる（第 42・44 図）。石積は、栗石（小型の河原石）を用材とし、1801S 三段目上端と前面（南側）埋立土、さらに埋立土中に廃棄された石垣石材（第 45 図上等）を基盤とする。この石垣石材は、1801S の失われた上段の一部である可能性が高い。

上部が削平された 1801S の西端は、調査区中央において西面する南北石垣 1803W の背面（裏込め）に被覆される（VI層、第 44 図 1803W 裏込め状況）。先の石積は 1803W に平行しており、1803W と一連の工程において構築されたと考えられる。1803W の前面では、南へ下降する地山斜面が確認された（平面第 42 図、断面第 44 図南北アゼ）。1803W の下端は、この斜面に規定されており、したがって南へ向かって高さが増す。高さは調査区南端で 2.1mを測る。調査区南西部では、1803W 上面において南へ屈曲するコーナー部を検出しているが、その下端までは検出できていない。また 1803W の南面にあたる部分には石垣ではなく、土羽となっているが、これは 1801S を被覆する埋土（V層）であり、2002-25 地点で検出した当該土層の上段に対応すると思われる（第 44 図東壁、第 45 図拡張部東壁）。

なお 2002-25 地点・2003-4 地点で検出された石垣 1802S については、本地点ではその延長を確かめることはできなかった。ただし、南北石垣 1803W の検出最下端のレベルが、1802S の天端より 1m以上低い位置にあることから、1802S の天端に変化がない場合、1803W に西に延長していたとは考え難い。

石垣 1803W は、下位が砂層を主体とし（III層）、上位が灰白色系のシルト質土となる土層（II層）で

埋め立てられる。このシルト質土は、2002-26 地点等にも認められ、「御花畑」形成時における上位基盤面を形成するものと考えられる（なお、Ⅱ・Ⅲ層、Ⅳ・Ⅴ層については、細分できなかった箇所もある）。

以上から、本地点では、①石垣 1801S の構築→②1801S の埋め立て→③石積遺構の構築→④1803W の構築→⑤1803W の埋め立てという変遷が窺える。

2002-27 地点は、2003-5 地点の西側に隣接する。2003-5 地点以東では、調査区北側で標高 35.5m を保つ地山の平坦面がみられるが、本地点では現地表より約 2m 下まで掘削しても地山は確認できない。このことから本地点付近の地形は、南北方向の谷状を呈していると推定される。

本地点の下部では、南に向かい下降する栗石層が検出された（第 46 図Ⅲ層）。栗石層は谷状地形の下部を埋め込み、本丸・東の丸南面石垣（1140S）の基盤となるもので、石垣の根石は栗石層最上部に埋め込まれている。栗石層の上位には、地点南端に砂質土が、そのほかの大部分は南から北へ下降する暗灰褐～灰褐色系の粘質土が堆積している（Ⅱ層）。これらの層は、石垣 1140S の基礎を整えるとともに、谷状地形の平坦化を図り造成されたものと考えられる。粘質土直上は近世末期以後の軸葉瓦が混じる層となり（Ⅰ層）、近世前半～近世後期の土層は元の状態を保っていない。

以上から石垣 1140S は、2003-5 地点で検出された南北石垣 1803W の前面と連続する地形を埋め込んで構築されたことが判明した。ただし、土層の堆積状況は 2003-5 地点とはやや異なっており、「御花畑」の造成との前後関係については、同時の可能性もあるものの、いもり堀の変遷との整合性等、なお検討の余地がある。

2002-28・29・30・31 地点（第 47～50 図）

（位置と目的）

本丸南辺が南に向って鈍角に突き出す「大鑪」から北西側一帯の「御花畑」平坦面に設定した。この付近では、背後（北側）の本丸南面石垣はいわゆる輪取りとなっており、旧地形が谷状を呈することが予測されたため、その確認を主たる調査目的とした。

（調査結果）

各地点の土層堆積状況は類似しており、大略は次の通りである。上部には南側を中心に、削平された「御花畑」崖面保護のため築造された近代石垣の裏込めと、これに伴う造成土が 1m 前後堆積しているが、この下に栗石や越前産の赤瓦が多く混じる暗褐色土が認められる。赤瓦の年代からみて、暗褐色土は 17 世紀後半以後に堆積したものと推定される。なお赤瓦については、宝暦 9 年（1759）の大火で焼失するまでいもり堀沿いにあった長屋との関連が注目される。

東側（大鑪側）の 2002-28・29 地点では、標高 32.5～32.8m で地山が確認されているが（第 48・49 図）、西端の 2002-31 地点においては、そのレベルでは検出されず、より深い位置にあることを示している（第 50 図）。なお 2002-29 地点の地山レベルは、東端の 2002-28 地点より全体的にやや高くなることが予測され、また暗褐色土層のレベルも高い。以上から、西端 2002-31 地点付近の旧地形はやはり谷状を呈しており、「御花畑」造成後もある程度自然地形の影響を受けていたこと、また東側については 2002-29 地点付近に尾根の高まりが存在することなどが明らかになった。ただし「御花畑」造成状況の詳細等については追求できなかったところが多く、課題を残すこととなった。

c 小結

1. 近世初期に機能し廃絶した石垣が三列確認された。本区域の辰巳槽下付近は、これらを中心に極めて複雑な変遷を遂げている状況が認められた。ここでは、各石垣の石材・積みの特徴を述べ、続いて各石垣の構築から廃絶に至る経過について改めて整理する。

(石垣の特徴)

- ・東西石垣 1801S：戸室石の自然石・粗割石を用いる。これらは丸みを帯びたものが多いように思われる。間詰石は顕著でない。高さは少なくとも2m以上であると推定される。
- ・東西石垣 1802S：戸室石の自然石・粗割石を用いる。面を横長に置く場合が見られる。間詰石は1801Sに比べると多い。高さ1.2m程度検出しているが、実際の高さは不明である。
- ・南北石垣 1803W：戸室石の自然石、粗割石のほか、大型の川原石を多く用いる。石垣石材（戸室石）の端材らしきものもあり、前二者と比べると粗雑な印象を受ける。高さは約2.1m分検出したが、最も高くなると推測される南端は未確認である。

(構築～廃絶過程)

- ①最初に、石垣1801Sが地山をカットして構築される。高さは少なくとも2m以上であると推定される（なお1801Sは間詰め石が顕著でなく、埋め立てを前提とした「石積」であった可能性も否定できないが、1801S西側埋立土中（2003-5地点）に石垣石材が含まれることから、ここでは露呈していたとみなし、次に示すように②の過程を経たものとしておく）。
- ②1801S西側の上部が崩壊、あるいは意図的に崩される。
- ③1801Sの前面に乱雑な河原石積み混じりの土層が形成され、1801Sが埋め立てられるとともに、これを基盤として1802Sが構築される。1802Sの天端は1801Sの天端（北側地山面）と1m以上の高低差があり、1802S構築当初は天端面が犬走り状を呈している。
- ④一方、西側の2003-5地点では、1801S埋立土上部が掘り込まれ、南北方向の石積遺構が設けられると一体的に1803Wが構築される。

1802Sと石積・1803Wとの前後関係を直接示す状況は確認できないが、1802S構築に対し、石積遺構構築は、1801S埋立土の掘り込みという工程があり、1801S埋立土から若干時間差を置いたものと解釈した。また、石垣石材の相違という点からみても、1802Sと1803Wが同時に構築されたとは考え難い。

なお1802Sの天端は、犬走り状の面から、直接1801S天端（地山面）にすり付く斜面へ変容しているが、石積遺構・1803W構築との前後関係は不明である。また上述のとおり、1802Sは、1803W以西には延びないと考えられる。1803Wの西側には南北方向の谷状地形の存在が推測されることも、この想定と矛盾しない。

以上から、1803W構築後の、辰巳櫓下一帯の景観を推定する。西面上手（北側）には1803W、下手には1802Sから連続する西面石垣（「1802W」）の存在が推定される。両者の関係については、1803Wから連続する南側土羽（1801S埋立斜面）に「1802W」が取り付いて入角が形成されていた可能性を考えておきたい。これらの西側には、2002-27地点で認められた南北方向の谷状地形が存在していた。南面は、1802Sが露呈した状態で、その上部は土羽となって北側背後の地山平坦面に接続していた。

⑤1803W構築後、一定期間を置いて、西側谷状地形が埋め立てられ、高さ20mを越える本丸・東ノ丸南面石垣1140Sが構築される。1140S構築以前の本丸南面については、東ノ丸東面石垣がある程度南側に回り込んでいたと想像されるが、不明な点が多い。

⑥1802S前面（南側）が盛土で覆われる段階で、古いもり堀の埋め立て、「御花畑」の造成、いもり堀の掘削・整備が一体的に施工されたと考えられる。明治末期まで受け継がれた景観は、この時形成されたと考えられる。

なお、1140S構築と、1802S南側つまり「御花畑」造成との前後関係は、層位関係からは確定できない。上述した通り一体的な施工の可能性はあるが、「御花畑」造成と一連の施工である古いもり堀の埋め立て土中の出土遺物、同じく一連の施工であるいもり堀の石垣が、ともに1140Sの特

徹より新しい元和期の特徴をもっていることも事実であることから、ここでは1140Sの構築が先行する可能性を考えた。

2. 古いもり堀の北岸については、上述してきた石垣1801S・1802Sがその一部を構成していた可能性が高い。しかし複雑な変遷過程を経ていることが明らかであり、旧地形も単純でないことからすれば、北岸の全容を推測することは困難である。

4. 東ノ丸附段

a 区域の概要 (第51図)

東ノ丸附段は、東ノ丸の北側に接する小郭で、平面規模は東西約60m、南北約30mを測る。高さは北東角で約6mを測り、東の丸の最高所より9～10m低い。東面・南面には石垣が設けられている。現在、嘉永元年(1846)に建造された「鶴丸倉庫」と称する土蔵があるが、絵図等からはこれ以前にも宝暦～嘉永、宝暦以前の二時期に異なる形状の土蔵があったことが知られている。

本区域では、東ノ丸附段の築造年代と初期の遺構面の確認を目的として調査を行った。

b 調査地点・遺構

2002-5・6 地点 (第52・53図)

(位置と目的)

丑寅櫓(東ノ丸北面石垣、1110N)の北西に位置する。2002-5 地点は1110Nと、東ノ丸附段東面石垣(1710E)との交点に設定した。石垣1710Eは、現地表面上の観察では、1110Nの築石面に当って構築されており、明らかに後出的であるが、全般的に積み直しの痕跡が認められることもあり、基礎部分を抽出した上で、年代や1121Nとの前後関係を検討することとした。2002-6 地点も、同じく1710Eの基礎構造及び構築年代の確認を目的として設定した。

(調査結果)

層序は次のように大別した。Ⅰ層：表土および近世末期以降の瓦廃棄層。Ⅱ層：17世紀後半頃の瓦廃棄層及び上下の栗石・整地層。Ⅲ・Ⅳ層：石垣構築時ないし改修時の掘方埋土及び上面の整地層。Ⅴ層：石垣構築以前の整地層および遺構埋土。Ⅵ層：地山層。

2002-5 地点では、東ノ丸北面石垣1110Nに、東ノ丸附段東面石垣1710Eの根石が乗り上げている状況、さらに1110N根石下の根切埋土が、1710E根石掘方に切られている状況が確認された(第52図)。また1710Eの根石は戸室石の割石であり、小面にはノミ加工痕が明瞭に認められるなど、1710Eの主体を占める石材と同じ特徴を持っていることも確認された。以上から、1710Eは1110Nより後に構築されたことが明確であり、その年代は、石垣石材等の特徴から、石垣編年Ⅲ期(元和年間頃、1615～1623)に属すると考えられる。

なお2002-6 地点では、石垣1710E構築過程について、その前後の様相も含め所見が得られた(第53図)。1710E構築以前は、地山(Ⅵ層)上に固く締まった淡褐色～淡黄色のシルト、粘質土、粗砂が堆積し、この整地層を切ってピットが構築され、ピット埋積後さらに整地されている状況にある(Ⅴ層)。Ⅴ層からは遺物が出土しておらず、詳細な年代は不明であるが、近世以前に遡る可能性も考えられる。1710Eは本地点ではⅤ層を切って構築されている。掘方幅は根石面から50～100cm、深さは約30～40cmである。掘方下半に礫混じり土を入れ、根石を据えた後、根石をほぼ覆うように、黄褐色・暗褐色土の互層を施し、石垣基部前面を抑えている(Ⅳ層)。Ⅳ層の上面は掘り方状に切り込まれ、栗石等が充填された上、黄褐色土で覆われている(Ⅲ層)。Ⅳ層が構築(創建)時、Ⅲ層は改修時の造作を反映すると考えたいが、ともに構築時に遡る可能性もあり得る。Ⅱ層中に含まれる瓦は薫し瓦であり、2002-3・4 地点と同じく、17世紀中葉に採用され、後半頃廃棄されたものと推定される。

2002-7・8・9 地点 (第54～57 図)

(位置と目的)

いずれも東ノ丸附段上面南側、東ノ丸北面石垣(1110N)との接続部に設定した。東ノ丸北面石垣と東ノ丸附段本体との前後関係、及び東ノ丸附段の遺構面の状況を確認するために調査を行った。

(調査結果)

どの地点でも、現地表から約2m掘り下げ、調査区南壁において、東ノ丸北面石垣(1110N)が面として連続していることが確認された。合わせて2002-7地点では、築城初期の火災により生じた焼土、被災した瓦・陶磁器等がまぎらって廃棄されている状況が検出され、造成時期についての手がかりとともに、及び本丸・東ノ丸における瓦・陶磁器の使用事例についての知見を得ることができた。

2002-7地点の土層堆積状況は次の通りである(第55図)。最下部は灰色系の砂質土を主体とする土層(VII層)で、炭片は層をなして混じるが、より上位で顕著な焼土が本層では少ない。この上位に焼土や被災した瓦・陶磁器が最大1mの厚さで堆積している(VI層)。焼土層・瓦層は間層を含み細別できるが、出土遺物の年代や種類から一時期に廃棄されたものと考えられる。VI層は本地点南側、石垣際のみ認められ、その北側にはほぼ同じレベル・厚さで栗石層がみられる(VI層)。ただしVI層との間には近代以後の攪乱坑(I層)があり、両層間の堆積の形状、前後関係は明確ではない。V1層の北側は北へ下降する斜面となるが、調査区北端で類似した栗石層が再び立ち上がる(V2層)。断面皿状を呈するこの間は、灰褐色～暗灰褐色を呈し、炭粒・焼土粒を含む砂質土・粘質土が水平堆積をなしているが、下部(IV層)に対し上部(III層)は細別層がいずれも固く締まっている。南側VI層の上位にも一部固く締まった層が認められる(III2層)。なおIII1層上面とV1層上面は連続した面を形成しており、栗石を敷いた石敷面が認められる。これより上位は暗灰～淡灰褐色を呈する粘質土主体の層が若干見られるが(II層)、近現代の削平を受けて、元の堆積状況を留めていない。

2002-7地点で遺構面として考えられるのは、VII層上面、III層～V1層上面の二面である。この間のVI層出土資料は、17世紀前半の特徴を示しており、廃棄の契機としての火災は元和6年(1620)ないし寛永8年(1631)が想起されるが、とくに瓦の在り方は、他地点との比較において、寛永8年の大火で廃棄されたことを強く示唆している。これは、VII層中より出土している土師器皿が元和期以前の特徴をもつことや、2002-5・6地点との調査結果とも矛盾しない。従ってVII層上面は寛永8年以前、東ノ丸附段の構築当初の遺構面と考えられる。なおVI層を中心として出土した陶磁器は、細片ではあるが、景德鎮系五彩皿や華南三彩の壺等、中国製の優品が多く認められる(第113図P44～P46、P60等)。第III層～V1層上面は、寛永8年以後の遺構面となるが、詳しい時期は明確にできていない。例えば宝暦9年(1759)の大火片付層に顕著な、溶解した鉛瓦片はほとんど見いだせないことなどから、削平による整地も受けていると考えられ、時期の限定を困難なものとしている。

2002-8・9地点は、2002-7地点の西側延長に相当する。2002-7地点で検出されたような明瞭な焼土・瓦層は確認されておらず、2002-7地点の土層と厳密な対応関係を見いだすのは難しい。

2002-7地点により近い2002-9地点では(第57図)、標高49.2m前後に黒灰色シルト層、その下位に黄褐色系の砂質土層が認められるが(IV層)、これは土質やレベルの点から2002-7地点で東ノ丸附段構築当初の面を形成するとしてVII層にほぼ相当しよう。本地点では標高49.4～49.6m付近でも黒灰色シルト層が検出されており、この層より下位は東から西へ(III層)、上位は西から東へ下降する堆積傾向となっている(II層)。III層上面も遺構面の可能性が残るが、2002-7地点との対応は明確ではない。なお本地点付近背後(南側)の東ノ丸北面石垣(1110N)は、上部が石垣編年5期(寛文～元禄年間頃、1661～1704)に改修されており、本地点ではII層上面で改修掘方が検出された。このことはII層以下が17世紀後半までに整地されたことを示し、またII層上面が、近代以後若干の削平を受けてい

る可能性があるものの、2002-7地点との対比から、寛永8年(1631)大火後に形成された遺構面に近い位置にあることを示唆している。

2002-8地点での土層堆積状況は(第56図)、黄褐色系の整地土がみられず、また黒灰色シルト層は認められるものの、レベルとしては2002-9地点の上層・下層の間に相当するため、2002-7・9地点との対応について明確さを欠くが、大別して、黒灰色シルト層の下位(Ⅳ層)、上位(Ⅱ・Ⅲ層)、近代以降(Ⅰ層)となる。Ⅲ層からは、寛永8年(1631)の大火で廃棄されることの多い三葉文軒平瓦、Ⅱ層からはやや後出的な右巴文軒丸瓦が出土しており、Ⅳ層以下を東ノ丸附段構築時の造成土とする可能性は残る。

c 小結

本区域における主な調査結果を整理すると下記の通りとなる。

1. 東ノ丸附段東面石垣(1701E)は、東ノ丸北面石垣(1110N)より後に構築され、石垣編年3期(元和年間頃(1615~1624))の特徴をもつことが確認された。これにより東ノ丸附段は元和年間に整備された郭であることが判明した。
2. 東ノ丸附段上面の調査地点においても、東ノ丸北面石垣が先行することが改めて確認された。また、寛永8年(1631)の大火に伴う廃棄層を検出し、東ノ丸附段構築当初の遺構面の位置をほぼ特定できた。なお寛永8年(1631)以後については、17世紀後半までに整地されたレベルを抑えたことで、これ以後の遺構面の形成が若干の造成・削平程度によるとの見通しを得た。

5. 東ノ丸唐門前

a 区域の概要(第51図)

東ノ丸唐門は、本丸と東ノ丸との境北側に位置する。西側の鉄門と並ぶ、本丸・東ノ丸への主要な出入り口である。本丸北西張出部の東面(1300E)南端から東に折れて連続する北面石垣(1300N)の塁線と、丑寅槽側から連続する東ノ丸北面石垣(1110N)の塁線とを食い違いとすることにより、平面L字形の出入り口空間が形成されている。唐門本体は、このL字形の東端において西面する。L字形の西側・南側は、上記石垣に圍繞されるが、北側・東側は、東ノ丸附段の西縁に面している。折れ部以東は、東ノ丸北面石垣(1110N)上を辿るが、石垣上端は胸壁状を呈し、通路側にも面をもつ。前面(北側)に擁する東ノ丸附段を含めると、折れと枳形状の空間が加わり、更に複雑な構成となる。なお通路本体は、現状ではL字形の空間全体に広がらず、中央部を緩やかなカーブを描いて通っている。

近世の絵図では、唐門手前で通路の幅が広がり石段となっていることを描くものもあるが、これを除くと、現状は絵図に描かれた形状を概ね留めている。後述の通り、この形状は寛永8年(1631)の大火後に形成されたと考えられる。

この区域は、出入り口として重要であり、とくに石垣1300Nに古い時期の石垣が埋め込まれている状況が観察されたため、その構造・変遷の把握を目的に調査を行った。

b 調査地点・遺構

2002-33・34・35・36、2003-1地点(第58~64図)

(位置と目的)

北面石垣1300Nは、高さ8mを測り、石垣編年4期(寛永年間頃、1624~1640)に現在の形状に改修されたと考えられる。しかし上述のとおり、この石垣面中には石垣編年1期(文禄年間頃、1592~96)に遡る石垣隅角部が観察され、文禄・慶長期(1592~1615)には櫓台状の石垣が東側にあり、西側に開口部を設けた出入り口があったことを推定させる状況であったため、その前面(北側)にトレンチを2箇所設けて検証することとした(2002-34・35地点)。本地点については、周辺部を拡張するな

と翌年度も調査を継続しており（2003-1 地点）、調査結果は合わせて報告する（第 58～63 図）。

また 1300N と入り角を介して連続する 1300E は、東ノ丸唐門前の通路空間西側を区画している。現況では、近代に陸軍が行った本丸北西拡張部の弾薬庫造営に関係し、中央部が V 字形に大きく割り取られた状態となっている。この石垣の根石を確認するため、石垣が完存している部分を避け、地表以上について撤去されている箇所を選択して調査箇所を設定した（2002-33 地点、第 64 図）。

2002-36 地点は、東の丸北面石垣 1110N と出角を介して連続する西面石垣 1110W が南へ延長している可能性を考慮して設定した。

（調査結果）

本地点では、出入り口における三段階の形状変化が捉えられた。最下層では、北面石垣 1300N に埋め込まれた石垣に関連する遺構が確認された（第 I 段階）。その上位では、北面石垣に平行する戸室石の石段、その東側の側壁を形成する石垣列が検出された（第 II 段階）。さらにこの石段を埋め立て、現況に近い状態とした造成が確認された（第 III 段階）。以下ではこれらの段階ごとに記述する。

（第 I 段階）

北面石垣 1300N 中の 1 期石垣（1111）は、本来櫓台状を呈していたと思われるが、埋め込まれる以前に損壊しており、天端、東辺は確認できず、露呈している北面（1111N）、後出の石垣に塞がれている西面（1111W 南）が部分的に残っている（第 58・59 図）。隅角部は、従って北西角に相当するが、石口から西面を観察したところ、北面に対し鈍角（鈍）で交わっている。

この前面（北側）を掘り下げたところ、現地表下約 40 cm で、平面的に 1111N・1300N に斜交する、上記隅角部西面（1111W 南）の延長部分となる石垣（1111W）が検出された（第 58・59 図）。確認できた範囲は、延長 3.5 m、高さ 1 m までであり、延長・高さとも全体規模は不明である。石垣を構成する築石は、いずれも自然面を小面とするが、特徴的なものとして、幅 90 cm、高さ 80 cm に達する、大型で平滑な面を呈するものが見られる。周囲の築石とは異質であり、鏡石としての機能を持たせたものと推測される。このことから、西面石垣（1111W）は、通路の側壁を構成していた可能性が考えられるが、路面・側溝等については、掘削範囲の制約上深く掘り下げることができず、確認されていない。なお、1111W の天端は、1111N の根石とほぼ同じレベルで、その基盤面となっている。ここから 1111W 南下部・1111W に反映される土台部分に、1111N・1111W 南上部に反映される櫓台状の部分の載るという構造が考えられる。

以上から、第 I 段階の出入り口については、①本丸に向かう場合、現状のように東に折れるのではなく、やや南西に振った状態で直進して進入する、②通路東側には側壁石垣があり、本丸側では更に一段高くなって櫓台状となる、等の形状が推定される。なお、石垣 1111W の上部が通路となる可能性もあるが、鏡石状の築石の存在から 1111W を側壁石垣とする見方を優先したい。

なお 2002-36 地点は、西面石垣 1110W が南へ延長していた可能性を考慮して設定したが、調査の結果石垣は検出されず、またとくに造作をしている様子は窺えなかった。

（第 II 段階）

この段階の出入り口遺構としては、北面石垣 1300N にほぼ平行する階段（三段分）と、西側側壁となる石垣列が検出されている（第 58・59 図）。

階段は、現在の園路に平行して設定した東側のトレンチでまず検出され、その後下段部分について西側へ拡張したところ、西側側壁となる石垣列に至ることが判明した。また北面石垣 1300N までの間については、平面的には未調査であるが、階段西端の断削により、石垣際に約 80 cm 幅の小段があるほか、段は見られないことが判明した（第 60・61 図）。このように南端・西端は抑えることができたが、北・東延長については未確認であり、全体の規模・形状は不明である。検出した部分については、幅（東西）6.4 m 以上、一段の奥行きは下段が約 1.0 m、最上段は約 2.4 m、蹴上は約 30 cm を測

る。

階段は、足掛かり部分に角柱状の石材（雁木）を横方向に連ねるもので、より奥の踏み面は暗灰褐色砂質土等、固くしまった土の面が露呈している（V層）。雁木は戸室石の割石ないし自然石で、切石は認められない。横幅60～100cm、奥行30cmを測る。階段の西端は直接側壁石垣に接し、側溝は見られない。

踏み面の勾配は、検出された下二段についてはほぼ水平であるが、最上段は上部（南）に向かう勾配が付いている。第60図下（階段西端の断割）に示した箇所では、奥行き約2mに対し高低差が45cmと急勾配で、歩行に適さない。一方東側では高低差は30cm弱となり低減されている。西側辺に側溝が見られないことを考えると、東側への排水も配慮し、西側を取って急勾配としている可能性がある。なお、石垣1300Nの際で確認された小段は、奥行き約80cm、高さ30cmを測るもので、段前面に戸室石を配する（第60図下の右端）。ただし全体の中での位置や、段前面の石の形状が雁木状ではないこと等から見て、階段本体ではなく、1300Nの根固めとして付加されたものと考えたい。

西側の側壁となる石垣は、南北に並ぶ根石二基のみ検出した（第58・59図）。南側の一石は、北面石垣と近接しており、かつ隅角部としての要素をもたない。そのためこの石垣は、本来は南北に延長し、北面石垣1300Nにほぼ直交して接続していたと推測される。高さや北側の遺存状態は不明であるが、第Ⅲ段階の整備時に大方破却されていると考えられる。残存していた二石は戸室石の粗加工石で、長軸1.5m、幅60cmを測る。小面には縦方向のノミ加工が見られ、刻印をもつ。

階段本体では、サブトレンチにより、雁木の下位で地山が確認されている（第61図X層）。一方西側の側壁石垣の下部は栗石である（第60図上VI・VII層、第60図下VIII・IX層）。このように、東側は地山を整形し、西側は先行する第Ⅰ段階の通路を栗石で埋め立て、一体的に構築していると推測される。

階段踏み面には、焼土や炭粒が多量に混じった土が薄く堆積している（第60図下52・53層）。踏み面自体が焼け締まっているわけではないが、火災直後の片付け等を示唆しており、これを契機に廃絶したことを推測させる。

第60～63図に示した大別層について、第Ⅱ段階に関連するものを改めてまとめると、第Ⅰ段階通路部分を埋めている栗石層を、VI・VII層としたが、VI層については第Ⅱ段階通路廃絶時に攪乱されている可能性を想定している。VIII・IX層は側壁石垣上部を埋めている栗石層で、VII層も含め一体的に考えるべきかも知れない。V層は上記した通り、第Ⅱ段階通路の路面を形成するものである。

第Ⅱ段階の出入り口形態については、上記の通り全容は明確ではないが、以下のような推測が可能である。まず第Ⅰ段階の通路が栗石で埋め立てられていることから、第Ⅱ段階で櫓台状石垣の西側出入り口が閉鎖され、石垣1300Nが現況に近い形状になったと考えられる。また、西側側壁石垣が、北面石垣まで到達していると考えられることから、本丸へ向かう場合、現況と同じく1300Nに突き当たり東側へ折れるプランが復元される。折れ部以東の段数等は不明であるが、やはり雁木を用いた階段の存在が想定できよう。

なお、1300Nの下部は、櫓台状部分を除くと、4期（寛永年間頃、1624～1644）の特徴をもつ築石で占められる。この4期石垣は、本丸北西張出部東辺にも認められるもので（後述）、第Ⅱ段階の階段西側の側壁石垣廃絶後に構築されたことが明らかであり、第Ⅱ段階の1300Nは、平面形状はともかく、築石の状態は、現況と異なっていたと考えざるを得ない。

出土遺物については、中国磁器青花芙蓉手鉢ないし碗の破片の他、瓦片が若干側壁石垣周辺の栗石層等から出土しているが、ごく少量である。瓦片は流入の時期についても、側壁石垣構築以前か、破却後に下るものか、判別し難い。

以上の石垣の様相と、階段面を覆う焼土・炭片混じり層の存在からすると、第Ⅱ段階の通路・出入り口は、元和7年（1621）、前年の本丸火災を契機とした整備の一環として、第Ⅰ段階通路を塞いで構

築され、寛永8年(1631)の大火後廃絶したと考えるのが妥当であろう。

なお、『加州金沢之城図』(第4図)には、本区域相当部分に、第Ⅱ段階の形状と似た平面形・石段表現が記されており、「坂カンキ」(坂雁木)との書き込みが見られる。本絵図の作成年代は元禄期以降とされるが、元和期に加賀藩から幕府に提出した絵図が情報源となった可能性を指摘する見解[木越2003]がある。

(第Ⅲ段階)

第60～63図Ⅳ層は、第Ⅲ段階の造成に伴うものである。階段面は、灰褐～褐灰色の砂・砂質土で覆われ、これより上位は、焼土が多量に混じる層と、黄褐色の粘質土・砂質土層が互層状となる部分が目立つ。Ⅳ層上部は第Ⅱ段階側壁石垣を覆い、北面石垣1300Nまで達している。上記の通り、北面石垣1300Nの下部は、4期(寛永年間頃)の特徴を示し、Ⅳ層と一体的に構築されたと推定される。

また東面石垣1300Eも、1300N下部と同じ特徴をもつ。2002-33地点(第64図)では、現地表より約1.5m下で、石垣1300Eの下部2～3段が確認された。最下段の根石を含め、石材は粗加工石で、小面に大きく刻印が入る4期(寛永年間頃、1624～1644)の特徴を示す。石垣の前面は、黄褐色～明褐色の粘質～砂質土や栗石層が堆積している。上記第Ⅱ段階通路の埋立土と類似しており、石垣遺存部分は構築当初から地中に埋め込まれていたものと思われる。なお最下段は南側が北側より一段高く設置されており、1300Eの基礎部分全体が階段状に傾斜していることが予想される。

以上から、第Ⅲ段階は、第Ⅱ段階通路(階段)の西側側壁石垣を破却し、通路面ともども埋め立てるとともに、石垣を西側にセットバックさせ、出入り口空間を拡張していることが窺える。その時期は、寛永8年(1631)の大火後間もない頃と考えられる。

石垣破却部分(第62図)については、最も下位が栗石単層(Ⅶ層)、中位が栗石と土の層との互層(Ⅵ層)、上位が焼土混じり層と黄褐色土層との互層(Ⅳ層)となっている。下位は石垣構築時の層であり、上位は石垣破却後の整地層と考えられるが、中位については確定し難い。

第Ⅲ段階整地土上面は、路面として明確な痕跡が見いだせず、また直上で19世紀代の磁器片が出土している(第61図Ⅲ層)ことから、この頃に削平を受け、当初の路面は既に失われていると考えられる。しかし周囲の状況から、近世の多くの絵図に描かれている通りの姿、すなわち緩やかに屈曲する、第Ⅱ段階に較べ幅の狭い形状だったと考えて矛盾はない。

この面で検出された遺構としてSK01・SX01がある。本来の掘り込み面についてともに明瞭ではなく、また時期を推定できる遺物も出土していない。ただし出入り口内部に位置しており、近世に属するとすれば、火災後の片付けに関する遺構である可能性が考えられる。あるいは近代初頭まで下るものかも知れない。なおⅢ層上位のⅡ層・Ⅰ層は近世末・近代初以後に堆積したと考えられる。

2002-32 地点 (第65～68図)

(位置と目的)

本地点は、東ノ丸唐門前通路(出入り口)と東ノ丸附段上面との境に設定した。南側東半は、東ノ丸北面石垣1110N、南側西半は現状では南から北へ下降する比較急な斜面となっている。また西側も現園路が一段高いため調査地点側へ下降する斜面となる。通路(出入り口)東側の構造の把握と、東ノ丸附段との関連を検討することが目的である。

(調査の結果)

本地点では、石垣1110Eに接して平行する南北方向の石組溝(SD01)が検出された。本地点の土層堆積状況については、焼土・炭片・小礫の混じる、概して類似した層が累積しており、大別が困難であった。また隣接する2002-34・35地点(2003-1地点)、2002-8地点との対応関係が明確にできなかったため、ここでは本地点の状況を単独で記述することとした。

SD01の基盤となる地盤の高さは、標高50m前後であり、2002-7、2002-9地点等で検出した、東ノ丸附段構築当初の地盤より約1m高い。SD01の規模は、内法で幅40cm、深さ30cmを測る。側壁には戸室石・川原石を併用し、形状に応じて小口積・横置きとする。底面にも平石を用い、内面を整えるように意識している。南から北へ向かい下降する地形上にあつて、底面には30cmの段をもつ。掘方は確認できず、周囲の整地層と一体的に構築されたと考えられる。また溝内には水流を示す砂層が側壁高まで充満していた(第65～67図)。

SD01は、石垣1110Eに直接接する部分では、上面に石積を伴い、暗渠状となる。この石積は、高さ1mで、石垣1110Eの北面延長にあたる1110Nに面を揃えており、露呈していたことを示す。石積は横長の河原石を多く用いるが、粗雑な印象を受ける。石積み西側裏込めは被災した瓦が主体の層である(第66図7層・7'層)。

SD01と石積の前後関係については、石積の裏込となる瓦層の在り方が焦点となる。瓦層は、SD01開渠部分(北側)でも確認できる。SD01と一体的に造成された整地層の上位に位置し、平面的にはSD01本体部分を避けるように西側に広がるが、一部SD01側壁上端と重複する。以上からすれば、SD01→瓦層(ただしSD01が埋まらないように堆積)→石積・SD01暗渠化という順序が考えられる。また石積構築以後においては、SD01開渠部分(北側)のすぐ西側で、瓦層・礫層が露呈している状態であったと考えられる。

SD01は、その位置から、上記の東ノ丸唐門前の通路・出入り口との関連が留意される。上述の通り、土層堆積状況の対応関係に問題がある等、確定するのは困難であるが、可能性について言及しておく。

まず、SD01と石積との構築時間差については、上述した石積構築後のSD01開渠部分周辺の状況や、SD01本体部分に対する石積の粗雑さから、SD01が単独で存在した段階があつたことが一応想定できる。

SD01の年代に関しては、石積の裏込めを構成する瓦が、その型式から寛永8年(1631)の大火まで使用されたものと考えられるため、SD01の暗渠化は、東ノ丸唐門前通路・出入り口の第Ⅲ段階に対応すると想定される。また上記の想定通り、SD01が単独で存在したとすれば、それは元和7年(1621)に構築された、第Ⅱ段階の通路・出入り口に伴う可能性がある。この場合、SD01に隣接する通路部分は、踊り場状となる。

なおSD01に隣接する東ノ丸北面石垣1110Nには、SD01とほぼ近いレベルに長さ約1.8mにわたり、暗褐色に変色した部分が認められる。火災に際し、材木等を介して被熱したものと推定され、さしあたり寛永8年(1631)の大火に伴う可能性が考えられる(第66図石垣立面)。

以上、構築当初のSD01が、第Ⅱ段階通路・出入り口に伴う可能性を示したが、調査結果の全てがこれを指示するものではない。2002-32地点東側では、標高49m前後で黄褐色を呈する砂質土が見られ、2002-7地点のⅦ層、2002-9地点のⅣ層等、附段構築時の造成土に対応する可能性がある。これらからすると、SD01は、東ノ丸附段が嵩上げされた以後の所産、つまり寛永8年(1631)の大火後のある期間に本体・石積ともに構築された可能性も否定できない。また、SD01上面と同レベルの地盤においては、先に述べた石垣1110Nに残された痕跡の他は、強い被熱の痕跡は認められない。

なお、SD01の廃絶は、石積構築後=暗渠化の後、比較的短期間であつたと推定される。上記の通り、石積も粗雑であり、SD01のすぐ脇に瓦・礫層が露呈していたとすると、長期間そのままの状態であつたとは考え難い。あるいは第Ⅲ段階通路の整備が完了するまでの仮設物だったとも思われる。

なお、本地点の上面では、2002-7地点Ⅵ層等と共通し、意匠的な形状をもつ香炉ないし置物と見られる青花製品等、優品と呼べる陶磁器が出土している(第114図P80～P87)。

c 小結

本区域における主な調査結果を整理すると下記の通りとなる。

1. 東ノ丸唐門前の本丸出入り口が、三段階の変遷を遂げていることが判明した。
2. 第Ⅰ段階は、石垣1300Nに埋め込まれたⅠ期石垣（文禄年間、1592～1596）隅角部に連続するもので、石垣1300Nの西寄りの所に本丸への進入口を設けている。この部分のみをみると、直線的な出入り口形態を採る。第Ⅱ段階は、第Ⅰ段階の進入口を塞ぎ、石垣1300Nの手前で東へ折れるように改修し、幅広い石段を設ける。第Ⅲ段階は、ルートは第Ⅱ段階を継承しつつ、石段を厚い整地層で覆い、出入り口空間を拡張したものである。
3. 第Ⅰ段階は文禄期（1592～1596）の構築で、以後、第Ⅱ段階は元和7年（1621）頃、第Ⅲ段階は寛永8年（1631）頃の改修に拠るものと推定される。現状は第Ⅲ段階の形状を留めている。以上の変遷については、更に多くの推測を交えているが、第108図に模式的に示した。

6. 本丸附段（東）

a 区域の概要（第69図）

本丸附段は、本丸の西側に隣接する郭である。北辺が長く、南辺が短い逆台形の平面形を呈し、現状で、最長部東西80m、南北100mを測る。但し、明治40年（1907）の本丸南側石垣崩落に伴う改変により、南縁部が削平されており、削平以前の南北長は、約110～120mに復元される。中央平坦部の標高は約55.6～55.8mで、本丸最高所より3m程度低い。

地形上は、東ノ丸・本丸から西側へ延長してきた尾根が、北西に向かう屈曲部に相当する。北辺は、幅13m、深さ9m以上の石垣を伴う堀切により二ノ丸と区画される。西辺は、部分的に石垣を伴う比較的急勾配の斜面で、北側は玉泉院丸の庭園に面し、南側は約14m下位の薪ノ丸に達する。東辺では、北側が高さ7mの石垣で下位の鶴ノ丸と、南側が上位の本丸と接する。南辺は、現状では階段状の切岸となっているが、改修前は下位の御花畑まで高さ20m以上の高石垣で区画されていた。

『加賀国金沢之絵図』等の絵図を見ると、周囲の郭との間に6箇所（本丸方面3、二ノ丸方面1、二ノ丸・鶴ノ丸方面1、薪ノ丸方面1）があったことが判る。このうち二ノ丸方面へは、幅19mの階段、堀切に掛かる橋（極楽橋）を伴うが、門自体は簡略であった。また本丸方面では、櫓門である鉄門を中心に、北側に石垣を潜る埋門、南側に申西櫓台脇に付随した小門があった。但し、埋門は軍隊により封鎖、申西櫓台上述の通り明治末期に撤去されており、旧状は損なわれている。以上の縄張りの形状は、寛永8年（1631）の大火後に確定したものと考えられる。

建造物については、近世前期には、上記出入口部に伴う門の他、三十間長屋を始めとする長屋・櫓が郭周辺に配されていた。これらは宝暦9年（1759）の大火で焼失し、以後は安政5年（1858）に三十間長屋が再建されるまで、簡素化された門と、番所・物置が置かれたのみであった。

なお、極楽橋南側の階段部分については、平成10年度に公園整備事業に係る発掘調査が実施されている。絵図に描かれる通り、階段は幅約20mを測る大規模なもので、寛永8年（1631）の大火後に構築されたこと、これに先行する通路が存在したこと等が確認されている。

このように本丸附段は、絵図を見る限り、中央部に建物を持たない広場として現在に至っているため、初期金沢城段階の遺構が良好に遺存していると予想された。この特徴を踏まえ、本区域では、本丸に近接した郭における、初期の遺構面の広がりを確認し、郭の利用の在り方を検証する目的で、比較的広い範囲を対象に発掘調査を行った。

b 調査地点・遺構

2004-1(2003-8)地点（第70図～90図）

（位置と目的）

本地点は、本丸附段の中央において、三十間長屋に並行して、東西約7～9m、南北約30mの範囲

で設定した。上述の通り、本丸附段の中央部には近世前期以来建造物が見られないことから、初期遺構の広がりを詳細に確認する目的で、やや広い調査区を設けた。なお、平成15年度と16年度では地点の呼称が違っているが、同一箇所を継続して調査している。

(調査結果)

調査区割 (第66図)

調査地点の区割については、調査区の形状に応じ、南北軸に沿って東西に二分割してE区・W区とし、更にそれぞれ南北に5m間隔で六分割し合計12の区割を設けた。これらについて南から順に番付し、E1～E6区、W1～W6区と呼称することとした。なおE区の東に1箇所、W区の西に3箇所、拡張区がある。

基本層序 (第74図)

現地表下は、公園整備に係る客土を最新とする、近代以後の整地層が見られる(I層)。近世の土層は全般的に削平を受けており、現地表下からの深さは、W1～W6区・E1区で30～60cm、E2区～E6区では、昭和30年代にあった建物の基礎による攪乱のため、70～140cmで確認される。

比較的遺存状況が良好であった調査区北部W5拡張区付近(第75図)では、I層の下位に、溶解した鉛が付着した陶磁器が混じる砂質土主体層(II層)、戸室石砕片・焼土・炭片が混じる層(III層)がそれぞれ10～20cm程度の厚さで認められる。II層が宝暦9年(1759)の大火後、III層が寛永8年(1631)の大火以降の整地層に比定される。III層最下層は、焼土・炭片の包含がとくに顕著であり、寛永8年大火直後の整地を示すものと理解される。宝暦9年大火の片付けに係る遺構(土坑、ピット)の他、寛永8年大火以降の遺構は少ない。なお3区以南では、II・III層は北側に較べやや高い位置に堆積していたらしく、削平によりほとんど遺存していない。

寛永8年大火以前の遺構面は、W4～W6区では、現地表下50～60cm、標高55.0m前後で検出されるが、W3区以南では、高い所で55.3mに達する部分もあり、南側が一段高くなっている様子が窺える。W3区以南でも標高55.0m前後で検出される遺構が認められるため、一段高い部分は、ある段階に嵩上げたものと判断される。この嵩上げ層をIV層とするが、土質・厚みとも一定しておらず、認識したい所もある。またW3区以北では、IV層に対応するものが認められない。そこでここではIV層の上下の面を合わせて初期遺構面Iとし、出土遺物の様相も加味して新・古の区別を設けることとした。

なお、初期遺構面I(古)の段階では、本丸と本丸附段との間に幅20mを測る大規模な堀があったことが、平成16～17年度の調査で判明した。この本丸西側堀(2004-1・2・7地点SF01)については、今次報告では概略のみに留め、次回の報告で詳細に説明する。

初期遺構面I(古)の基盤は造成土(V層)であり、調査区北部の6区では厚さ120cm、中央部3区では80～120cm、南部1区では60～70cmを測る。上部は概ね黄褐色粘質土・砂礫質土が主体で、黒褐色粘質土が層状・ブロック状に混在し、下部は暗灰色・灰褐色土で上部より砂質で、E3区トレンチでは5～15cm程度の礫が多量に混じっている状態が確認された。なお、南部1区では上部の黄褐色土のみ認められる。また造成土下部について観察できた箇所は少ないが、これを基盤とした遺構はみられず、土質からみても遺構面基盤としては不相当で、上部と下部は、施工単位としては一体的であったと考えられる。

V層の下位は、地山(基盤層、VI層)が確認されている。レベルについては、北部の6区では、現地表下約1.8m、標高53.8mであるが、南部の1区では54.2mと高い。上述したV層の厚さは、大略地山の高低に起因すると判断されるが、1区で検出された地山面はかなり平坦で、旧表土に相当する層が見られないため、V層の造成以前に、旧地形をある程度整形していると見られる。なお、地山の土質は一様ではなく、調査区北部では亜角礫の混じる黄灰白色砂礫土、中央以南では淡黄褐色系の均質な粘質土が認められる。

地山（VI層）面の状況はトレンチや遺構の底面でわずかに窺えるのみであるが、W1区からE2区にかけて、溝状の掘り込み（SX03）が確認されており、密度・時期は不明ながら遺構が構築されていたことは明らかで、初期遺構面Ⅱとして扱う。

以上を整理すると、下記の通りとなる。

初期遺構面Ⅱ（基盤：地山（VI層））→下部造成土（V層）→初期遺構面Ⅰ（古）（基盤：V層）→上部造成土（IV層、南部のみ）→初期遺構面Ⅰ（新）（基盤：IV層（南部）・V層（北部））→寛永8年大火→Ⅲ層→宝暦9年大火→Ⅱ層→Ⅰ層

遺構

本地点で確認された遺構は、塀、土坑、溝、ピット、掘り込み、粘土面、焼土面、石敷等がある。土坑（SK）は長軸100cm以上で、略円・略方など比較的形状が定まっているものとし、大型で不定形ないし全体が不明なものを掘り込み（SX）とした。

ここでは種類ごとに個別の遺構について記述し、各遺構面のまとまりについては、本区域の小結の項において改めて詳述する。

なお遺構番号について欠番が生じているが、これは、近現代の小穴や整地層の窪みに付けた番号を省略したことや、調査の進展により遺構名を変更したことなどの理由による。

【SD01（SA01）】（第76・77図）

E3区からW2区にかけて、北東-南西方向（N-25°-E）に延長する遺構で、上面を検出した当初は溝として認識していたが、底面に約1.5mの間隔でピットが確認されたことから、布掘り基礎を有し、掘立柱を支柱とする塀の跡と考えるに至った。切り込み面は、北部ではV層上面、南部ではIV層上面で、初期遺構面Ⅰ（新）に属する。

溝状の布掘基礎は、幅56~69cm、深さ55~82cmを測り、断面は深い逆台形の形状を呈する。北東端では、長軸190cm、幅130cmの土坑状を呈し収束しており、門の位置を示している可能性があるが、SK04等の遺構に切られている。東側に類似する遺構SD02（SA02）が並ぶが、SD01（SA01）に比べ主軸は北に対しやや東に振っており、南西側ではSD01（SA01）がSD02（SA02）に切られている。

底面のピットは長軸50~70cmを測り、このうち一部について掘り下げたところ、深さは23cmであった。

ピット上に位置するW3区土層断面では、幅10数cm程度でほぼ直立する、柱痕跡と見られる土層が確認されており、柱抜き取りに際しては全て根元から撤去されたのではなく、ある程度掘削を受けた後引き抜かれたり、切断された場合も想定される。遺物は瓦等の小片が出土したのみである。

【SD02（SA02）】（第76・77図）

SD01（SA01）の東側に隣接し、同じく北東-南西方向に走る遺構で、SD01（SA01）と同じく、布掘り基礎を有する塀の跡と考えられる。布掘り基礎の幅は63cm~111cmを測るが、概ね80cm以上であり、深さも72~113cmとSD01（SA01）より大きい。SD01（SA01）の項で述べた通り、SD01（SA01）に比べ、主軸が北に対しやや東に振っており（N-32°-E）、南西側でSD01（SA01）の埋土を切っている。また、E2区ではSK11の裏込め土を切るが、構築時の掘り方によるものか、廃絶時の柱抜き取りに伴うものか判断しがたい。しかしSD01（SA01）より後出することは明らかであり、初期遺構面Ⅰ（新）に属する最も新しい遺構の一つである。

布掘り基礎底面には、約1.5mの間隔で長軸30~50cm程度の川原石が設けられている。支柱の根石として機能したものと考えられ、SD01（SA01）との構造上の相違が見出させる。SD01（SA01）と同じく、根石上において、幅10cm程度の柱痕跡と見られる土層が確認されている。

同じく塀跡とみなされるSD01（SA01）との位置・前後関係から、SD01（SA01）を造替したものと判断される。遺物は越前陶器大甕片や瓦等若干出土している。廃絶年代については、Ⅲ層に覆われるこ

とから、寛永8年(1631)の大火を契機とすると考えられる。

[SK04] (第78図)

調査区北部、E5区に位置する土坑で、V層を基盤とし、初期遺構面I(新)に属する。南端ではSD01(SA01)北端を切っている。平面長円～隅丸方形を呈し、長軸409cm、短軸377cm、深さ66cmを測る。近代以後の掘り込みにより長軸方向に沿って大きく損壊を受けており、全容は明瞭ではないが、部分的なトレンチ等からの所見によると、次のような特徴をもつ。

土坑の掘り方は、東側については、ほぼ垂直に近い急勾配であり、北側・西側もこれに近いが、南側は比較的緩やかな斜面を呈する。底面は、確認できた箇所では平坦である。

土坑内部については、まず北東-南西方向に沿って礫が帯状に集中する部分がある。土層断面によると、元は東側に面を向けた粗雑な石積みであったと考えられる。掘り方との間にある暗褐色の砂質～粘質土は裏込め土として充填されたものであろう。また北側では、石積みは見られないが、主たる埋土と異なる土層が立ち上がり際に認められ、裏込め土の可能性もある。

東側掘り方際や、平坦な底面の上面には、幅数cm程度の薄い褐色～暗灰色砂質～シルト質土が認められる。東側掘り方際ではほぼ直立しており、板や筵のような有機質の製品を反映していると考えられる。本遺構の主たる埋土は、黄褐色系のシルト質～粘質土で、若干瓦が混じるものの比較的均質である。なお西側の礫集中部分付近の上面には、瓦片を多く含む淡褐色砂質土が見られる。

以上から本遺構の形成過程を復元すると、①掘削に際し、東側をほぼ垂直に、底面を平坦に整え、②西側には粗雑な石積みと、掘り方との間を充填し、③東側掘り方と底面に板・筵等を充て、④黄褐色シルト質～粘質土を充填したものと推定される。

土坑の機能については明確にできないが、掘り方と黄褐色土との間に、板・筵等が充てられていたらしいことが注目される。また西側では黄褐色土の堆積が薄く、その上面に淡褐色砂質土が認められることから、黄褐色土が削りとられた(使用された)痕跡とも思われる。そこで可能性の一つとして、黄褐色土を何らかの用途で利用するまで保管・貯蔵していた施設を考えておきたい。

出土遺物については、瓦片が多く出土しているが、全体を窺えるものは第143図T146等少数である。この他陶磁器が若干出土している。

[SK05・SK06・SK07・SK08] (第72・79図)

いずれもW4区に近接して位置する比較的小型の土坑である。SK05は長軸105cm、短軸60cm、深さ23cmを測る平面長円形の土坑で、SD01上に造られている。埋土は灰褐色砂質土で若干礫が混じる。SK06は径105～98cm、深さ38cmを測る平面略円形の土坑で、SX01・SK09の上面に造られている。埋土は濁暗灰褐色粘質土である。SK07は径110cm、深さ86cmの略円形の土坑で、前二者に比べ深い。SK06と同様、SX01の上面に造られている。埋土はSK05と同質である。SK05・SK07は、初期遺構面I(新)を覆う焼土を切り込んでおり、寛永8年(1631)大火以後の遺構であると判断される。SK06については、焼土との切り合いは確認できていないが、埋土の状態等からSK05等と同じく新しい時期の遺構と考えられる。

SK08は長軸128cmを測る。当初SX01上面埋土と考えていたが、埋土より溶解した鉛が付着した陶磁器片が出土し、宝暦9年(1759)大火後の遺構であることが判明した。

[SK09] (第79図)

W4区に位置する土坑で、SX01を切って構築され、SK06に切られている。初期遺構面I(新)を覆う焼土層の下位で検出されている。平面長円形を呈し、長軸162cm以上、短軸71cm、深さ72cmを測る。埋土は濁暗灰褐色粘質土である。遺物は出土しておらず、性格も判然としないが、初期遺構面I(新)に属すると考えられる。

[SK10] (第72・76図)

W4区南側に位置する平面略方形と推定される土坑で、東西120cm以上、南北160cm以上、深さ42cm以上を測る。上面に堆積する淡黄灰色シルト質土は、初期遺構面を覆う焼土の上位にあり、SK10の埋土の一部とするべきか判断が難しく、SK10の年代的位置付けを不明瞭なものとしている。ここでは西側に隣接するSD01と主軸が類似していることから、SK10の下部を対象に、初期遺構面I（新）に属する可能性を考えておきたい。SK10の下層は、底面近くに焼土を顕著に含む灰褐色砂質土であるが、詳細な年代を特定できる遺物は出土しておらず、遺構の性格も明確ではない。

【SK11】（第77・80～83図）

E2区に位置する大型の土坑で、北側ではV層、南側ではIV層を基盤とし、初期遺構面I（新）に属する。近・現代に攪乱を受け、全容は必ずしも明確ではないが、平成17年度第1地点で南東側延長部と考えられる箇所が確認されており、これも含めて考えると、北西-南東方向に主軸をとる、長円形、あるいは舟形の平面形を呈し、長軸840cm、短軸400cm以上の規模が復元される（第80図・81図）。北西部と中央部（2004-1地点上は南東端）にはそれぞれ径166cm・355cmを測る平面略円形の掘り込みがある。後者の西側は二段掘りとなっており、掘り込み上面からの深さ30～40cmの位置に、幅60～80cmのテラス状の小段が巡る。深さについては、北西部・中央部掘り込み部分で、それぞれ86cm・162cmを測るが、この間は50～60cmと比較的浅い。底面については、北西部ではV層下部に、中央部では地山に達している。

埋土は五層に大別される。E層は北西部において認められる褐色系の粘質土で、平面においてA～B層の堆積範囲の外側をほぼ並行に巡り、箇所によっては垂直ないし袋状の断面形となる堆積状況を呈するもので、本層の内側に水平気味に堆積するA～B層とは土質も含め対照的である。E層は、SK11に先行する遺構埋土等とも考えられるが、内側を板等の土留め材により支えられていた裏込め土であって、SK11廃絶時に土留め材を抜き取られた状態と考えておきたい（第77図上・第81図上）。

D層は中央部掘り込みの最下層で、上層の主体である濁灰褐色土・濁暗灰埴土と、地山質を示す淡灰褐色系の粘質土が混在する。遺物はほとんど出土しない。C層は中央部掘り込みの下層で、濁灰褐色・濁暗灰色等暗い色調の粘質土が主体を占め、上層に比べ量は少ないものの、ほぼ同型式の土師器皿が出土している（第81・82図）。

B層は構成される層の土質は必ずしも斉一的ではないが、複数の炭層が介在するため、一つの単位と見なした。本遺構のほぼ全域で見られる。なお中央部掘り込みでは、B層最下層をなす炭層が、テラス状の小段から中心に向かって急激に落ち込む状況が確認される（第83図上、C断面）。炭層は木炭片を多く含み、藁等が原位置を保って炭化したものとは考えられないが、垂直に近い掘方壁面を薄く覆うように堆積しているため、意図的に整えられた可能性も考えられる。

A層は、砂層・砂質土が主体となる。これらは質・色調・焼土の多寡等により数cm程度の単位に細別され、水平を指向するように堆積し、固く締まっている場合が多い。B層同様な遺構のほぼ全域で認められる。本層の堆積状況（埋め戻し行為）は、本地点の他の遺構と比較しても例を見ないものである。

A・B層からは、土師器皿、瓦が多く出土しており、その他の陶磁器も若干共伴している（第115図P94～第117図P144等）。瓦は中央部掘り込み北側でまとまって廃棄されていた。

本遺構で特に注目される遺物として馬の頭蓋骨がある（第83図）。中央部掘り込みの西側、テラス状小段の落ち際において、仰向け（内面が上）の状態で見出された。歯骨はほぼ完存していたが、全体の遺存状況は必ずしも良好ではない。頭蓋骨の基盤となる面は、テラス状小段に堆積した厚さ5～10cmの粘質土面であり、頭蓋骨は上述したB層最下層である炭層で覆われている。下顎骨、四肢骨等、馬骨の他の部分は検出されていない。なお、この頭蓋骨検出地点のすぐ北で、遊離した状態であるが牛の歯骨も検出されている。これら獣骨の科学的分析とその結果は第6章、出土意義の詳細等に

については第7章に譲るが、遺構の埋め戻しに際し、ある種の儀礼行為のもと、意図的に安置されたものと考えるのが妥当であろう。

本遺構の特徴を改めてまとめると、

- ①長大な土坑で深い部分と浅い部分で構成される、
- ②裏込め土と想定される土層を伴う、
- ③広い範囲に亘り、丁寧に特異な埋め戻し行為が行われる、
- ④馬の頭蓋骨が安置される等、儀礼行為の対象となっている、

等が挙げられる。以上からすれば、本遺構の性格については「池」「水溜」等が有力であると考えられるが、水性堆積を思わせるような土層は確認されておらず、確定するには至っていない。

[SK13A・SK13B・SK13C] (第84・85図)

調査区南部、W1・W2・E1・E2区に位置する。検出時において切り合い関係が把握できず、当初大型の一土坑としていたが、掘り下げるに従って3基に分かれることが判明したものである。ただしいずれにおいても、規模・形状について部分的にしか確認されていない。

SK13A (第84図) は、E1区・E2区境に位置する。掘り方上端は未確認であるが、南端では初期遺構面Ⅰ(古)に属するSK13Cの埋土が上位に重複する。その一方、本遺構は初期遺構面Ⅱに属するSX03埋土を切っている。以上から、初期遺構面Ⅰ(古)でも比較的古い時期の所産と考えられる。

北東-南西方向に軸をとる平面略方形～長円形の土坑であり、長軸220cm以上、短軸180cm前後、深さ95cm以上を測る。掘り方は、西側は垂直に近く、南～東側は上部が内側にややせり出す袋状を呈する(北側は未検出)。掘り方の壁は、西側がSX03埋土、南～東側は黄褐色～褐色の地山である。底面については、北側は不明であるが、南側は、南西端と長軸中央部(幅約10cm)を一段高く残し、その他の部分はこれより10cm程度掘り下げた上、灰色粘質土・褐色粘質土で埋め戻すという造作が認められる。また西壁の立ち上がり沿いには、更に幅20cm程度の溝が切られている。

埋土は、下層に地山に起因する褐色粘質土が見られ、上位には茶褐色土が30cm程度の厚みでほぼ水平に堆積し、南端ではSK13C・SK13B、北側ではSK11の埋土が上位に重複する。

遺構の性格については、まず南～東側の掘り方が袋状を呈することが注意される。一方、西側は垂直に近いが、ここは遺構(SX03)埋土を切り込んでいる箇所であり、また底面の溝状遺構は、何らかの施設の基礎と考えられることから、崩落防止用として板材等を充てていたと推測するのが妥当である。以上から本遺構は、いわゆる地下室(穴蔵)である可能性が考えられる。埋土下層が地山質の褐色粘質土で構成されていることも、天井部の崩落を示す可能性が考えられる。底面の整地地業の意味については不明であるが、あるいは底面を平坦に整える必要があったのかも知れない。但し、立地している場所は、後述する堀(SF01)に近接しており、地下室の位置としては問題が残る。なお地下室以外の可能性としては、採土坑等が考えられるが、その場合、SX03埋土を一部切り込んでいることや、底面の造作の解釈が問題となる。出土遺物は瓦・陶器・土師器皿が少量出土している。

SK13C (第84・85図) は、SK13Aの南西に隣接する土坑で、V層を基盤とする初期遺構面Ⅰ(古)に属し、SX03・SK13Aを切る一方、SK13Bに切られ、IV層に覆われる。平面楕円形の土坑で、主軸はSK13Aと近似し、長軸340cm以上、幅200cm前後、深さ122cmを測る。掘り方壁面の傾斜は強いが少し弧を描き、底面との境は丸みを帯びる。底面は壁際を除くと平坦に仕上げられている。なお、底面と南～西側壁面は、V層・SX03埋土・地山であり、北側壁面はSK13A埋土である。東側については未掘削のため不明である。

埋土の堆積は水平を指向しており、大きく三層に分かれる(第85図)。下層は底面際の土層で、黒灰色土等(90層等)で構成される。中層は濁灰色粘砂質土で、単位が大きく、焼土片・炭粒を顕著に含む(89層)。上層は、厚み5～20cm程度の灰褐～褐色を主とした粘質土・砂質土で構成され、

礫が顕著に混じる層も認められる（77層等）。

遺構の性格については、SK13A との位置・前後関係や、本遺構自体の形状、底面付近でほぼ完形となるものを含む平瓦が出土していること等から、廃棄土坑とは考えがたく、形態は異なるものの、SK13A に後続する地下室と考えておきたい。出土遺物は少ないが、上記の瓦の他、若干の磁器・土師器皿がある。遺物の年代は1620年以前と推測される。

SK13B（第84・85図）は、SK13C に西側に隣接する土坑で、V層を基盤とし、初期遺構面Ⅰ（古）に属する遺構であるが、切り合い関係ではSK13A、SK13C より後出する。平面略方形～長円形を呈し、長軸3m以上、短軸1.2m、深さ77cmを測る。断面形は逆台形を呈し、壁面には凹凸がある。底面は地山まで達しておらず、SX03 埋土やSK13A 埋土が認められる。本遺構の埋土は概ね三層に分かれ、上位は黄灰褐色の礫混じり土、中位は炭片が多く混じる褐灰色土、下位は暗黄褐色土であり、いずれもしまりが悪い。遺物には瓦・陶器・土師器皿があるが、土師器皿にはSK13A・SK13C 出土資料より後出的なものが含まれる。本遺構は、形状等の点からSK13A・SK13C とは異なり、地下室ではなく、廃棄土坑と考えられる。

【SK14】（第86図）

W2区に位置する土坑で、V層を基盤とし初期遺構面Ⅰ（古）に属する。SK15に切られる。平面略円形を呈し、径136～144cm、深さ84cmを測る。断面形は、上部は擂鉢形、下部は箱形を呈する。底面はV層下部に達している。埋土中位には、褐灰色系のやや締まった粘質土があり、その下位に炭片や貝殻、魚骨等を含む脆い土層、炭層等が堆積している。食物残滓が顕著に混じることから、廃棄土坑と考えられる。遺物は貝・骨等の他、陶器・土師器皿・瓦・鉄製品等が少量認められる。

【SK15】（第86図）

W2区に位置する土坑で、V層を基盤とし初期遺構面Ⅰ（古）に属する。SK14を切り、SK11に切られる。平面楕円形を呈し、長径217cm、短径132cm、深さ89cmを測る。断面形は逆台形～半円形を呈する。底面下部はV層下部に達している。SK14と類似した土層堆積状況を示し、埋土中位に灰褐色粘質土があって、あたかも蓋のように、食物残滓が混じる埋土下位を塞いでいるように見える。下位の土層からは、魚骨・貝殻がまとまって出土しており、当該期の食生活の一端を窺うことのできる良好な資料として評価される（第6章）。これらのことから、本遺構は廃棄土坑と考えられる。

陶磁器・土師器皿・瓦等も共伴しており、特に陶磁器・土師器皿については、初期遺構面Ⅰ（古）の組成を示すものとして重要である（第119図）。

【SK16】（第72図）

E4区に位置する土坑で、現代建物基礎掘り方の下位で検出されたため、切り込み面は不明である。SD02に切られる。平面長円形を呈し、長軸360cm、短間軸97cm、深さ89cmを測る。詳細は不明であるが、SD02に切られていることや若干出土している瓦の特徴等から、初期遺構面Ⅰ（古）に属する可能性がある。

【SK17】（第73図）

W1区に位置する遺構で、IV層ないしこれより上位を基盤とする。全容は調査区外にも延びるため不明であるが、長軸235cm以上、深さ143cmを測るやや大型の土坑であると考えられる。断面形は一部袋状を呈する。埋土は礫が多く混じる濁暗褐色粘砂質土が主体である。

出土遺物には土師器皿小片、瓦等がある。確証は得られていないが、埋土の状態が、近世に属する他の遺構と異なることや、検出面が高いこと等から、近代に下る可能性がある。

【SK18】（第86図）

W2区に位置する土坑で、V層を基盤とし初期遺構面Ⅰ（古）に属する。SK14に切られる。平面は長方形を呈し、長軸225cm以上、短軸152cm、深さ54cmを測る。断面は箱形を呈し、底面は概

ね平坦である。埋土の下層は、炭粒と少量の貝類が混じる暗灰色粘質土で、陶磁器や土師器皿も少量出土した。遺構の形状からすると、木枠等を伴っていた可能性もあるが、壁面や底面にその痕跡は認められない。性格については、廃棄土坑の可能性がある。

なお、SK15・SK14・SK18 は、若干重複しつつ隣接しているが、三基の遺構を貫く軸は北東-南西方向であり、SK13A・SK13Cの主軸と近似する。初期遺構面Ⅰ（古）においても、この方向に規制があることが判断される。

【SK19】（第87図）

W2区に位置する小型の土坑で、長軸102cm、短軸56cm、深さ61cmを測る。埋土は暗灰褐色の粘質～砂質土で、径数cm～10cm大の円礫が多く混じる。V層で検出したが、本来の基盤であるかどうか不明である。

【SK20】（第73図）

E1区に位置する大型の土坑で、近代以後の堆積層（Ⅰ層）を除去した時点で検出された。Ⅳ層以上を基盤とする。平成17年度第1地点（2005-1地点）で延長を検出しており、これによると、平面は略円形で、長軸356cm、短軸推定280cmを測る。断面は箱形を呈し、深さは115cmを測る。埋土には戸室石砕片や5～30cm大の円礫が多く混じる。遺物には陶器土瓶、土器火鉢、磚等の小片の他、溶解して変形した鉛瓦片等が出土した。このことから宝暦9年（1759）の大火以後に形成されたと判断される。

【SK21】（第87図）

E5区に位置する土坑で、現代建物基礎掘方の下位で検出された。長軸130cm以上、短軸110cm以上を測るが、調査区際で部分的に確認されたものであり、平面形、全体規模等は不明である。土師器皿小片、瓦片が少量出土しており、その特徴から初期遺構面Ⅰ（古）に属する可能性が高い。

【SK23】（第87図）

W3区に位置する小型の土坑で、SK10埋土上に構築されており、初期遺構面Ⅰ（新）ないしそれ以後に属するものである。平面形は不整形な略方形を呈し、長軸に沿って四隅が若干伸びる。長軸117cm、短軸83cmを測る。断面形は皿状で深さは約10cm程度である。本土坑からは鉄釘と見られる破片が数点出土しており、側板の長い木箱が据えられていた可能性がある。

【SF01（SK24）】（第69・73図）

本地点ではE1区で確認した。調査当初（2004-1地点調査時）は土坑（SK24）と認識していたが、同年下半年期に行った2004-7地点、翌年の2005-1地点等の調査により、掘（SF01）の一角であったことが判明したものである。

本地点で検出された部分は、SF01西岸のごく一部であり、V層（黄褐色粘～砂質土）が東へ下降する状況が確認されている。このV層の落ちは、平面的には約3m分検出されただけであるが、方向は北東-南西方向を向いている。

SF01は、上記別地点での調査で、初期遺構面Ⅰ（古）の段階で埋め立てられたことが判明している。規模は幅約20m、ボーリング調査による推定では現地表から堀底まで約10mを測る。なお本遺構の詳細については、調査年次が平成17年度以降にも互るため、次回報告書で改めて言及したい。

【SK25】（第87図）

E1区に位置する土坑で、SK13Aを切って構築されている。平面は略円ないし長円形を呈すると推測される。長軸185cm以上、短軸76cm以上、深さ37cmを測る。埋土は上部が暗灰褐～灰褐色粘砂質土、下部は淡黄灰褐色砂質土である。肥前陶器擂鉢片等の陶磁器や瓦がごく少量出土しており、初期遺構面Ⅰ（新）に属すると考えられる。

【SK26】（第87図）

E6 拡張区に位置する土坑で、SX02 埋土上に構築されている。長軸 215 cm 以上、深さ 98 cm 以上を測るが、調査区際で部分的に検出されたのみであるため、全体の形状、規模等は不明である。埋土は灰褐色系の砂質土で 10~20 cm 大の円礫が多く混じる。少量の陶磁器、若干の瓦が出土しており、17 世紀末以後の肥前磁器や越前赤瓦も含まれる。

[SK27] (第 76 図)

W2 拡張区に位置する土坑で、SD01 (SA01) を切って構築されており、初期遺構面 I (新) の新しい段階に属すると考えられる。平面は長円形を呈し、長軸 118 cm、短軸 64 cm、深さ 61 cm を測る。埋土は暗褐色~暗黄灰褐色を呈する砂質土である。瓦など少量の遺物が出土している。

[SK29 (P22)] (第 87 図)

W5 拡張区に位置するピット (小土坑) で、Ⅲ層を基盤とする。長軸 95 cm、短軸 65 cm、深さ 27 cm を測る。中央部に円礫が集中しており、柱の基礎となる可能性もある。埋土はしまりの弱い灰茶褐色砂質土である。著しく熱を受け、表面がガラス化した土壁片が出土している。宝暦 9 年 (1759) 大火後に構築された遺構と考えられる。

[SK30] (第 72 図)

W3・W4 区に位置する土坑で、長軸 180 cm 以上、短軸 145 cm、深さ 33 cm を測るが、上部に SK10・SK23 等の遺構が構築されていることもあり、全体の形状は明確ではない。土師器皿、瓦等ごく少量出土した。初期遺構面 I (古) に属する遺構と考えておきたい。

[SD03] (第 90 図)

W5 拡張区に位置する溝状遺構で、V層を基盤とし、濁黄褐色を呈する土間状の硬化面に覆われ、更に P13~P15、P20、P21 (SK29) 等に切られている。検出した大部分はほぼ南北方向に軸を取り、幅 80 cm を測るが、南端で西側に大きく屈曲しこの部分では幅 90 cm となる。掘り下げを行った箇所では、堀方壁面が垂直に近い、箱形の断面形を呈し、深さは 40 cm を測る。

埋土の大部分は、暗黄灰褐色を呈するしまりの悪い砂質土であるが、西壁際の約 10~20 cm 幅の部分は、特にしまりの悪い暗褐色土が認められ、垂直に近い壁の状態とも合わせ、板状の施設が埋め込まれていたことを示す可能性がある。遺物は瓦・土師器皿の小片数点の他、鉄滓が 1 点出土している。土師器皿の特徴や、他の遺構との重複関係から、初期遺構面 I (古) に属する可能性がある。

[SX01] (第 88 図)

W2 区に位置する不整形の掘り込みである。基盤面は V層で、SK06~10 はいずれも SX01 上面に構築されており、土間状硬化面に北端の一部が覆われる。長軸 300 cm 以上、短軸 240 cm 以上を測る。底面は一定しておらず、深さは浅い箇所 (南側) で 43 cm、部分的に深くなった箇所 (北側) では 79 cm である。埋土は褐色土系・黒褐色土系・黄褐色土系の粘質土主体の土層が互層をなす。なお北側の調査区壁際では、柱穴掘方状の埋土が見られるが、別遺構なのか、一体的な掘り込みとすべきか確定に至っていない。

遺物については、陶磁器・土師器皿・瓦が若干出土している (第 120 図)。これら遺物の特徴から、本遺構は初期遺構面 I (古) に属すると考えられる。

[SX02] (第 71・89 図)

W6・E6 区のほぼ全域、W5・E5 区の北部に及び検出された遺構で、V層を基盤とする。確認されたのは南岸の一部であり、全体の形状・規模は不明であるが、少なくとも幅 5 m 以上ある大規模な遺構である。南岸の平面形状は凹凸が顕著で、W・E 区境付近では、南側に向かって 270 cm×200 cm 程の範囲が入り込んでいる。断面形状は 50~60° の比較的急な斜面を為し、比較的平坦な底面に続いている。底面は地山の直上にほぼ対応しており、最深部の深さは 138 cm である。

埋土は、南岸下端付近に黒灰褐色の流土が見られる他、南から北へ下降する大きな単位の暗灰褐色

土・暗黄灰褐色土が主体で、埋め立ては短期間で行われたと考えられる。なお埋土最上部は、淡黄灰褐色を呈する均質な砂が、5cm前後の厚さで敷かれている。

出土遺物には陶磁器・瓦等がある(第120・130・145図)。丸瓦内面の切り離し痕はコピキAを呈するものがほとんどで、これらの特徴から、本遺構が開放されていたのは初期遺構面Ⅱ(古)の段階であり、初期遺構面Ⅰ(新)の段階には埋め立てを受け、砂が敷かれた状態であったと考えられる。

本遺構の性格については、本丸と二ノ丸を結ぶルート上に位置することから、堀ないし段のような機能をもつものと考えられる。

[SX03] (第89図)

W1区・W2区・E2区で検出された、VI層(地山)を基盤とし初期遺構面Ⅱに属する唯一の遺構である。全体の形状、規模は不明で、遺構の南東側掘方のみ確認されているが、北東-南西方向(N-27°-E)を軸とし、6.5m以上直線的に延長していることから、溝状の遺構である可能性がある。E1区南側に設けたサブトレンチの所見では、掘方の断面は弧状を呈しており、壁面と底面との境に明確な稜を持たず、底面が緩やかに西へ下降している状況が窺える。ここでの深さは80cmを測る。一方E1区北側では、SK13Bの底面においてSX03下半部が検出されているが、ここではSX03の底面に、幅10cm程度の畦状を呈する地山質土が確認された。高さについては、SK13Bにより削平されているようであるが、現状でも底面より20cmほど高い。

埋土については、南側サブトレンチでは暗灰褐色粘砂質土・濁灰褐色粘土が主体である一方、SK13Bの下位では暗黄褐色・黒褐色土が顕著に混じり、一様ではないが、中位に円礫が集中する点は共通している。出土遺物は認められず、年代は特定し難いが、16世紀代に遡る可能性も否定できない。

本遺構の性格を考える上で、上述した地山質土(地山の削り残しか)が目玉される。類似の施設として、障子堀の底面における仕切が想起されるが、確認されたのは一箇所のみであり、遺構の性格を確定する根拠としては充分ではない。

[SX04] (第90図)

W5区に位置する小規模な遺構で、V層を基盤とし、P18・P21(SK02)に切られている。中心をなすのは概ね10cm未満の礫が集中する約40cm×20cmの範囲で、礫の平面形を子細にみると、馬蹄形の片側先端のようにやや湾曲しているように見え、また数段積み重ねているようにも見受けられる。礫の間には炭片が混じる他、輪の羽口の破片が認められる。掘方の規模は長軸74cm以上、幅58cm、深さ9cm程度を測るが、本来の形状は不明である。

遺構の性格については、鍛冶炉等金属加工に関わる施設の一部ではないかと想定しているが判然としない。所属時期を特定する根拠に乏しいが、初期遺構面Ⅰ(新)に属する可能性を考えておきたい。

[P05] (第73図)

W2区に位置するピットで、径47cm、深さ18cmを測る。SK13Bを切っており、初期遺構面Ⅰ(新)に属する可能性がある。遺物は出土していない。

[P06] (第73図)

W1区に位置するピットで、径55cm、深さ39cmを測る。土師器皿小片が出土しており、その特徴から、初期遺構面Ⅰ(古)に属する可能性がある。

[P11] (第73図)

W2区に位置するピットで、径57cm、深さ45cmを測る。SK18を切っている。埋土には柱痕跡と思われる土層が見られ、本遺構は柱穴と考えられるが、対になる遺構は不明である。土師器皿小片が出土しているが、SK18に由来するものの可能性がある。初期遺構面Ⅰ(古)ないしⅠ(新)に属すると考えられる。

[P13・P14・P15・P20] (第90図)

全て W5 拡張区に位置し、SD03 上の硬化面に構築されている。P13 は平面略方形で、一辺 65 cm、深さ 6 cm、P14 は平面略円形で、径 52 cm、深さ 13 cm、P15 は平面略円形で、径 50 cm、深さ 20 cm、P20 は平面略円形で、径 55 cm、深さ 20 cm を測る。このうち P13・P14 はそれぞれ P20・P15 の一部を切っている。P13・P14 は浅い皿状のピットで、内部の大部分は炭層であり、下部に若干の焼土混じり層が堆積している。P15 の埋土は暗茶褐色の砂質土である。P20 の埋土は上層が赤褐色、下層が暗赤灰褐色の砂質土で、ともに焼けた壁土等に由来すると思われる。P13 からは越中瀬戸播鉢片が出土している。これらの遺構は、いずれも鍛冶等金属加工に係るものと推測され、初期遺構面 I（新）に属すると考えられる。なお、P15 南側に略円形を呈する赤化面が見られる。焼土を含むピットか、地盤自体が被熱しているのか不明であるが、やはり鍛冶等金属加工に関連する遺構であろう。

【P17・P18】（第 90 図）

W5 区・W5 拡張区に位置する。Ⅲ層以上を基盤とする遺構で、P17 は長軸 90 cm、短軸 53 cm、深さ 57 cm、P18 は径 80 cm、深さ 41 cm を測る。P17 の埋土は暗褐色の砂質土で比較的均質、P18 の方はやや粘性があって炭片等が混じる。P17 からは越前赤瓦片が出土している。性格については判然としない。

【P19】（第 90 図）

W5 区に位置するピットで、V層を基盤とする。長軸 70 cm、短軸 52 cm、深さ 22 cm を測る。埋土は上層に焼土に由来する淡赤褐色砂質土等が見られ、中層が炭化物層で構成されている。基盤面は V 層上位に形成された黒化面（＝土間状硬化面）である。P20 等と同じく鍛冶等金属加工に関連する遺構と推測され、初期遺構面 I（新）に属すると考えられる。なお、周辺には略円形を呈する赤化面が幾つか認められ、本遺構との密接な関わりが推定される。

【P21（SK02）】（第 90 図）

W5 区に位置する。調査当初は土坑と認識していた。長軸 84 cm、短軸 53 cm、深さ 30 cm 以上を測るピットで、SX04 を切っている。切り込み面＝基盤面は未確認であるが、埋土は暗褐色の砂質土であり、Ⅲ層以上である可能性が高い。遺構の形状から柱穴のようにも見えるが性格は確定できない。

【土間状硬化面】（第 90 図）

W5 区・W5 拡張区に展開する。北側は石敷、南は SX01 北端、東は SK04 付近まで認められる。V層上面を覆っており、SX01、SD03 等はこの下位となる。箇所によっては、薄い層（濁黄褐色土、焼土、炭化物層等）が確認できるが、V層上面自体が硬化している部分も見受けられる。P13・P19 等炭・焼土を多く含む小ピットや赤化面が分布する範囲とほぼ一致しており、上部の整地土等一帯から鉦濚・鍛造剥片が出土している（第 6 章第 2 節）ことから、金属加工に関連するものと推測される。

【石敷】（第 71・72・90 図）

W5 区・W5 拡張区に位置する。幅 80～130 cm 程度で、北西～南東方向に軸を採っている。土間状硬化面と SX02 上面の砂層との境をなし、SD03 北端を覆う。石敷上には、等間隔ではないが小ピット状の空洞が見られ、本遺構が何らかの区画施設の基礎であった可能性を示す。なお、石敷の下位に、方向が一致する掘り込みが検出されているが、石敷範囲と必ずしも合致しない。他の遺構との位置関係等から、本遺構は初期遺構面 I（新）に属すると考えられる。

2004-2 地点（第 91～93 図）

（位置と目的）

本地点は、2004-1 地点の南側に設定した。2004-1 地点で検出された遺構面の南側への展開を確認することが目的である。なお調査時は認識できなかったが、次年度以降の調査結果より、本地点の大部分が本丸西側の堀（SF01（2004-1・2 地点））の範囲に相当することが判明した。

（調査の結果）

調査区割（第91図）

調査区の区割については、L字形を呈する調査区を長さ6m程度に4分割し、北・西側から順に1区～4区と呼称する。

基本層序（第90～93図）

本地点では土層を10層に大別した。現地表下約30～60cmは、現代～近代の整地土（I層）で、調査区の全域で見られる。II層は2・3区に位置する石列SW01の掘方及び裏込層である（第91・92図）。IV層は3・4区にのみ見られる土層（第93図）で、溶解した鉛瓦片等が混じり、宝暦9年（1759）大火の片付けに係る層と見なされる。同じく3・4区で見られるIII層は、IV層より上位にあり、近世後期の所産と考えられる。

V層もまた3・4区で認められる土層で、V1層・V2層に区分される。V1層は、焼けた壁土の破片の他、瓦・陶磁器が出土しており、寛永8年（1631）大火後の片付け・整備に係る層と考えられる。なおV1層は、形状不明の掘り込みSX02（2004-2地点）の埋土と一連のもので、SX02の外側（東側）まで広がっている。V2層は、SX02外側に広がるV1層の下位に見られ、SX02の基盤面であるVII層（本丸西側堀埋土）上面を薄く覆っている。

VII層は、2004-1地点のIV層（上面＝初期遺構面I）に対応する。このうちVII層は4区で見られ、本丸西側堀SF01（2004-1・2地点）の埋立土に相当する（第93図）。黄褐色粘～砂質土が基調で、焼土混じり層が帯状に介在する。VII層は1区北端で見られ、暗黄灰～暗黄灰褐色粘質土主体の土層である（第92図）。VI層は3区西側で確認されたもので、VII層との前後関係が明確ではなく、焼土混じり層（VI3層）から瓦・陶磁器がまとまって出土していることから、VII層を基盤とする遺構の存在を考え、SX01埋土としたが、土質はVII層に類似しており、VII層の一部を構成する可能性もある（第91・92図）。

VIII層は1・2区で見られ、2004-1地点のV層（上面＝初期遺構面II）に対応する（第92図）。黄褐色土が基調となり、暗灰褐色土・黒色土等も混在する層で構成されるが、全般的に水平を指向して整地されている。

IX層は1・2区で見られ、地山層（X層）の上面に堆積している黒色土である（第92図）。遺物は出土していないが、近世以前の遺構埋土である可能性がある。

X層は1・2区で見られる地山層である（第92図）。上層は暗茶褐色土で、下層は褐色土である。X層の検出レベルは54.28mであり、2004-1地点南部より若干高い。なお3・4区では、一部1・2区より深く掘り下げた箇所もあるが、X層は確認されておらず、この部分を本丸西側堀（SF01）に比定する根拠の一つとなっている。

遺構

〔4区ピット等〕（第91図）

西端で検出されたP01は、V1層の掘り下げ中に確認したもので、V1層上面から切り込まれていた可能性が高い。長軸75cm、短軸47cmの長円形を呈し、中央に径25cm程の柱痕跡状埋土が認められる。P02はVII層を基盤とし、V2層に覆われていた径35cm程度の小ピットで、深さは13cmと浅い。埋土は暗黄褐色粘～砂質土で、焼土・炭片が顕著に混じる。P02と類似した遺構は他に数基あり、ピットないし溝状を呈するが、いずれも浅く、埋土に焼土・炭片が顕著に混じる。

P01は建物基礎の可能性はあるが、寛永8年（1631）大火後に、付近に恒常的な建物があったとは考えがたく、仮設の建物の存在を考えるべきかも知れない。P02と類似の遺構は、性格は判然としなが、2004-1地点の初期遺構面Iの段階に属すると考えられる。

〔SW01〕（第91図）

2・3区で検出された一段の石列で、全容は不明であるが、調査区内では、北西-南東方向を示す北側列と、北東-南西方向を示す西側列が見られる。前者の南東端と後者の北東端がほぼ直角に交わり、出角を形成する。用材は石垣築石で、切石や粗加工石が混在しており、置き方においては、本来の面を外側に向けることを基本としつつ、側面を正面に向ける箇所も見られる。石材の上面は平坦に整えられており、更に何らかの材が据えられていたとすれば、建物基礎である可能性が考えられる。

石材のうちに、石垣編年6期（宝暦～安永年間、18世紀後半）の切石材が認められ、更に『御城中巻分墓絵図』（天保元年（1831））、『御城分間御絵図』（嘉永3年（1850））等の絵図に見えないため、19世紀後半以後に構築されたと判断される。

[SX01]（第91・92（C断面）図）

石列SW01の下位で確認した土層について、遺構埋土の可能性を考えSX01としたものであるが、平面形状等は不明であり、本丸西側堀SF01の埋土を構成する可能性も否定できない。上述の通り、基本土層のVI層に対応する。なおVI層は灰茶褐色砂質土、VI2層は黄褐色土・暗灰褐色土等が互層状をなすもので、VI3層は焼土混じりの層を主体とする。

[SX02]（第91・93図）

3・4区に位置する掘り込みで、VII層（本丸西側堀SF01埋土）を基盤とする。平面形状は不明で、全体の規模を窺うことはできないが、少なくとも全長4m以上ある。掘方は東側の一部のみ確認されている。壁面はほぼ垂直で、深さは約110cmである。埋土は基本土層のV1層であり、暗黄褐色土、暗灰褐色土等で構成される。色調や土質の似通ったものが多く、これらのわずかな差異の他、瓦片・礫の流入の在り方等により細分される。瓦は下層から多量に出土しており、熱を受け赤化したものもかなり見られる。また焼けた壁土片も多い。

SX02付近の土層断面をみると、SX02の外側（東側）にも、SX02埋土と類似した土が東側から堆積している状況が窺える。層位関係からすれば、SX02が埋まり切る前に堆積したものである。最終的にはこの外側堆積部分の上位から、SX02への埋め立てが行われた結果、SX02内の埋土は顕著な斜め堆積を呈することになったと考えられる。更にSX02埋土は、標高55.3m付近で不自然な形で水平に揃っているが、これはSX02への埋め立てが超過し、逆に盛り上がったところを削平したためと推測される。

これらは、VII層上面、つまり2004-1地点の初期遺構面Iに対する嵩上げをも意図したものであり、出土した瓦や陶磁器の特徴とともに、寛永8年（1631）大火後の片付け・整備の一環であることを示している。

[SX03]（第91・92図）

1・2区で検出された掘り込みで、石列SW01掘方を切って構築されている。全体の形状は不明であるが、全長6.4m、深さ100cmを測る。埋土は単層に近く、短期間に埋め戻された印象を受ける。

出土遺物は認められないが、SW01より後出土するものであり、近世末期～近代にかけての遺構と思われる。

[SX04]（第91・92図）

1・2区の最下層、X層（地山面）上面に黒褐色を呈するIX層が堆積しているが、ピットないし浅い落ち込みの埋土となる可能性がある。遺物は出土していないが、検出レベルや土質の点からすれば、中世以前に遡る可能性も考えられる。

2004-3地点（第94図）

（位置と目的）

本地点は、2004-1地点と、本丸附段北端の階段との間に位置する。2004-1地点北端で検出された大規模な掘り込みSX02の北側への広がり、階段に伴う造成の南側への広がりについて、併せて把握す

ることを目的に設定した。

(調査結果)

本地点南側では、現地地表下60~70cmのところで、ビット状の遺構が数基検出された。性格は判然としなが、近世末期以前の所産と考えられる。全体的な掘り下げはここで停止したため、当初の調査目的であった2004-1(2003-8)地点SX02の広がりについては明確にできなかった。ただし、調査区中央北寄り深さ約2mまで断割を行った結果、地山が北へ向かって緩やかに下降していることが判明した。最も低いレベルは53.10mで、SX02底面で検出された地山より70cm低い。地山より上位の整地土は、黄褐色土・黒褐色土の互層を主体とするもので、他の地点との対比より17世紀前半以前に造成されたと想定されるが、遺物が出土していないこともあり、SX02の埋土(元和7年(1621)頃)であるか、あるいは北側の階段造成の連続であるか、判別することは困難である。

ここでは一つの可能性として、SX02が削り放しの切り岸状の遺構であり、底面(地山面)が北へ向かって緩やかに下降していた状況を考えたい。

なお、2004-1(2003-8)地点SX02の上面に堆積していた砂層は、ここでは認められなかった。

2004-7 地点 (第95図)

(位置と目的)

本地点は、鉄門の北側に位置し、本丸西面石垣(1350W)に直交するように設定した。調査の目的は、本丸西面石垣の創建年代を確認することである。本丸西面石垣は切石積で、明和3年(1766)に改修を受けており、現地地表上の大部分はこの時期の所産であるが、下方の一部にIV期(寛永年間)の特徴をもつものが認められていたので、当初は寛永期の創建を明確にするという見込みを持っていた。

(調査結果)

本地点においては、明和3年(1766)改修石垣1350Wの下位で、自然石積石垣(1352W)が検出された。この石垣の特徴から、本丸西面石垣の原形は文禄年間(1592~1596)に遡り、寛永期に改修を受けたことが判明した。また石垣は、2004-1(2003-8)地点における基盤面(地山)より下位に続いていくことが確認され、本丸西面に堀が存在したことも明らかとなった。

本地点では両端に断割を入れ、最深で現地地表から約2.2m下、標高約53.4mまで掘り下げた。堀の埋土と考えられる土層は、暗褐色・黄褐色・黒褐色土の互層で、粘質土が主体となる。この堀埋土上面を基盤とする遺構(SK02等)が数基認められる。時期を特定できる遺物が無く、性格も判然としなが。これらの遺構は灰褐色ないし黄褐色土に覆われ、更にその上位に、均質な褐色砂質土が堆積している。褐色砂質土中からは、宝暦9年(1759)大火で被災した遺物が若干出土している。また石垣際では、戸室石などの石材残欠や大型の栗石が集中しており、これらは明和3年(1766)改修時の根固めと考えられる。こうしたことから、褐色砂質土は、明和3年(1766)改修時の整地層である可能性が高い。

本地点の堀埋土出土遺物は少量で、堀の廃絶時期の特定はできないが、平成17年度以後の調査結果からは、文献記録に見える元和7年(1621)の造成時に埋められたとするのが妥当と思われる。

なお堀については、平成17年度以後周辺に幾つかの調査地点を設け、新知見を得ているが、本地点も含め詳細結果は次回報告に記載することとした。

c 小結

本区域では、2004-1(2003-8)地点を中心とし、寛永8年(1631)大火頃までの遺構が高い密度で展開していることが確認された。また本丸と本丸附段との間に大規模な堀が存在していることが判明した。以下では、区域全体の遺構の様相について、2004-1(2003-8)地点において検出した遺構面の

変遷に基づきまとめておく（第109図）。

①〔初期遺構面Ⅱ〕

地山をベースとする遺構面で、検出できた範囲はごく一部である。明確な遺構としては溝である可能性が高い2004-1（2003-8）地点SX03がある。SX03の軸線は、上部の初期遺構面Ⅰの主たる地割線と同じで、北東-南西方向を示す。先述した通り、SX03が防御的な性格を有するとすれば、SF01に先行すると見なすのが妥当であり、初期遺構面Ⅱの形成が文禄期以前に遡る可能性も考えられるが、築造時のSF01との関係は層序・切り合い等からは判然とせず、年代を特定できる遺物も欠いており、確証を得ることはできない。

廃絶時期についても明確ではないが、地山上位の整地層（2004-2地点Ⅷ層、2004-1（2003-8）地点Ⅴ層相当）出土遺物や、初期遺構面Ⅰ古段階の出土遺物の年代観から見て、17世紀初頭以前となる。

この段階の本丸附段の土地利用については想像の域を出ないが、SX03の形状、遺物の希少さから、防御的な性格を持った場の可能性を考えておきたい。

②〔初期遺構面Ⅰ（古）〕

2004-1（2003-8）地点Ⅴ層等をベースとする遺構面。この段階の遺構には2004-1（2003-8）地点SK13A・SK13C・SK14・SK15・SK18・SX01・SX02等がある。堀SF01はこの段階まで開口している（平成17年度第1地点の調査では、2004-1（2003-8）地点Ⅴ層が堀外側のみに見られ、堀の西岸上部を構成していた）。SK13A・SK13Cは地下室の可能性を持つもの、SK14・SK15・SK18は食物残渣等の廃棄土坑であり、いずれも屋敷地に通有する、生活に密着した感の強い遺構と言える。なおこれらの遺構の配置状況も、北東-南西方向を意識しているように思われる。SX02はこの遺構集中区域の北側を限る「段」（小規模な切岸？）と推測される。

この段階の年代の一端については、SK15等の陶磁器・土師器皿の特徴から、17世紀初頭、慶長〜元和期と考えることができる。文献記録では、元和7年（1621）に、前年の火災を契機として本丸とその周辺を造成した点が見えるが、出土遺物や遺構の前後関係から見て、SF01・SK13C・SX02等の埋め立てもこの時に行われたと見るのが妥当である。

土地利用の在り方は、堀の存在が確認される一方で、廃棄土坑等も展開している状況であり、防御的な空間から、本丸御殿の奥側ないし裏手の空間として取り込まれて行く、過渡期の様相を呈しているように思われる。

③〔初期遺構面Ⅰ（新）〕

堀SF01や2004-1（2003-8）地点SX02が埋め立てられ、2004-1（2003-8）地点の南側は若干の嵩上げが行われる。初期遺構面ⅡやⅠ（古）と同じく、北東-南西方向の区画が意識され、布堀基礎の塀（SA01・02（SD01・02））が設けられている。塀の東側（本丸側）には、池・水溜の可能性のあるSK11等、塀の西側には金属加工に関わる遺構群等が展開しており、塀により柵内が機能別に細分されている様子が窺える。金属加工関連の遺構群については、塀による仕切があるとは言え、御殿空間の一角に存在している点が注目される。御殿の作事に直結する作業場として稼働していたものと推定されるが、近世前期以降の様相とは異なり、むしろ戦国期以来の特徴を留めているように思われる。

この段階は、元和7年（1621）の造成を端緒とし、SK11の出土遺物、あるいは遺構面を覆うⅢ層の状態から、寛永8年（1631）年の大火を契機とし整地を受け終焉したものと思われる。なお、2004-2地点SX02（Ⅴ層）は、寛永8年大火後の遺構であり、切り込み面のレベルは初期遺構面Ⅰ（新）とほとんど変わらないが、最終の埋土上面は当初切り込み面より高く、廃材処理と周囲の整地が最終的に一体化していったことを示している。

この段階の土地利用の在り方は、本丸西側堀（SF01）の埋め立てが完了する等、本丸との一体化がより進行し、御殿の奥側ないし裏手の空間としての位置づけが明確化したと考えられる。ただし、遺

構が集中するのは郭の南半部のみで、北半部とは利用状況に違いがあったようである。

以上のように、本区域は17世紀初頭以後、廃棄土坑等の遺構が多く集中する場所となっていることが判明した。そのため本丸正面としては不相当であると言え、このことから、寛永8年(1631)の大火までは、東ノ丸唐門が正面であったと考えることができる。本区域(本丸附段)が正門になるのは、むしろ御殿が二ノ丸に移った後であり、極楽橋南側の大規模階段の存在に示されるように、二ノ丸との位置関係が考慮されたためと推測される。

7. 本丸附段(西)

a 区域の概要(第69図)

本区域は、本丸附段のうち、北西～西側縁辺部を取り上げたものである。本丸附段の西辺寄りに建造された三十間長屋や、本丸附段西側下方にある薪ノ丸との通路降り口際にあつた櫓(武具土蔵)等、本丸附段の建造物周辺に調査地点を設け(2003-6地点、2004-5-1地点、2004-5-2地点、2003-7地点)、その創建年代を確認することが、本区域を調査の対象とした主たる目的である。この他、本丸附段西辺の形状を探るため、西側縁辺際にも1箇所調査地点を設けている(2004-6地点)。

調査の主たる対象となった三十間長屋は、金沢城内に残る近世建造物の一つで、国の重要文化財に指定されている。絵図・文献からその変遷を追うと、寛文7年(1667)の城下絵図(「寛文七年金沢図」)からすでにその存在が認められ、宝暦9年(1759)の大火で焼失、以後しばらく石垣台のみを残すこととなっていたが、安政5年(1858)年に再建されて今日に至っている。近世前期の絵図には、「台所奉行預かり」「御家具土蔵」等の記載があり、周辺の発掘調査においても大型の皿を中心とした陶磁器が多く出土していることから、焼失以前は什器類を保管する倉庫であったことが窺える。なお幕末に再建された現三十間長屋は、武具蔵として使用された。また近世前期の段階は北端に二層の櫓が接続していたが、幕末再建時にはこの部分は除外された。

b 調査地点・遺構

2003-6地点・2004-5-1地点・2004-5-2地点(第96図～104図)

(位置と目的)

三十間長屋の北西に位置する。上記した通り、長屋北側には櫓が接続しており、宝暦9年(1759)の大火による焼失後も櫓台石垣は残っていたが、長屋部分の再建後、おそらく近代になって破壊され、現地表上には遺存していない。今回の調査では、櫓台石垣の基礎部分を確認し、その特徴から、櫓、引いては三十間長屋の創建年代について所見を得ることを目的とした。

2003-6地点は櫓台西辺、2004-5-1地点は櫓台北辺を検出することを目的に設定した。2004-5-2地点は、2003-6地点の西側延長部に設定した。これは2003-6地点の調査結果を受け、櫓台基盤上における遺構の展開、遺物廃棄状況の確認を想定したものである。

(調査結果)

櫓台西辺・北辺ともに、櫓台石垣の基礎1～2段が遺存していることが確認された。以下では、まず土層堆積の検討を通じ、石垣構築・改修過程とその後の周辺の整地状況を中心に説明し、続いて石垣本体の特徴、その他の遺構について言及する。

(石垣構築過程・周辺整地状況)

西辺(2003-6地点・2004-5-2地点)と北辺(2004-5-1地点)とでは、土層の様相は大略では一致するものの、必ずしも異同を確認できたわけではないため、それぞれについての検討結果を記す。

西辺では層序をI～IX層に大別した(第96～98・103・104図)。石垣掘方の切り込み面(基盤)はIX層である。IX層は黄褐色粘質土ブロックが顕著に混じる淡灰色・褐色・黒灰色系粘質土等により互

層状に構成される整地層である。年代を特定できる遺物は出土していない。IX層を切り込んだ掘方は幅約1.6m、深さ1.13mを測る(第97図)。2003-6地点では石垣は2段分検出された(第96図)。下段は粗加工石、上段は切石であり、ともに小面に大型の刻印を有する。石垣掘方内埋土(VIII層)はIX層より小さな単位で、概ね水平を意識した層位に細別される(第97・98図)。VII層上位には、灰黄褐色粗砂に代表される整地層(VII層)が堆積し、掘方範囲を超えて西側に展開する。VII層上面には赤化した部分があり、当初は火災によるものとも考えられたが、西側に延長する2004-5-2地点ではほとんど認められず、火災の痕跡として積極的に評価できない。他の土層に比べ、上面が固く締まり、土質も特徴的であること等から、石垣完成時の整地面とするのが妥当である。VII層上面には、若干の小ピットが掘られているが、建物造営時に伴うものと考えたい。

西辺VI層以上は、石垣構築以降に堆積したものと考えられる。VI層は石垣際(東端)にやや厚く堆積するが、2004-5-2地点西端まで認められる。煉し瓦がまとまって出土している。V層は石垣際(東端)まで及ばず、北側に薄く、南側に厚い層で、土質は必ずしも一定ではないが、越前赤瓦が混じることでまとめられる(第97・98・103図等)。IV層はVI層・V層の上位に部分的に認められる層で、遺物は認められない(第98図)。

更に上位のIII層は、2003-6地点の石垣掘方以西・2004-5-2地点のほぼ全域に分布する層で、多量の焼土粒が混じり、暗赤灰褐色を呈する部分が多い。陶磁器が多数出土しており、そのほとんどに溶解した鉛の付着が認められる。これは鉛瓦が高熱によって溶解した影響と見てよく、陶磁器の年代観からも、宝暦9年(1759)の大火時の被災資料と判断される(第97・98・104図等)。

II層は2003-6地点の北部で認められるが、その下部に戸室石の破片が多く混じっており、宝暦大火後の石垣修復に係り形成された可能性がある。I層は石垣破壊後の堆積層である。石垣の破壊は近代以降と思われるが、確証は得ていない(第97・98図)。

西辺の土層堆積状況は以上の通りであるが、時期を推測する上ではV層・III層が重要である。V層は越前赤瓦に含むが、その下層であるVI層には煉し瓦しか出土していない。越前赤瓦が使用される時期は17世紀中葉、廃棄時期は概ね17世紀後半と考えられる。またIII層は宝暦9年(1759)の大火直後の片付け層と判断され、II層はその後の石垣改修に伴うと思われる。以上から、VI層:17世紀中葉、V層:17世紀後半、IV層:18世紀前半、III層・II層:18世紀後半という年代観が与えられる。石垣構築以後の整地に係る年代が以上の通りであるため、石垣構築自体は、寛永期ないしそれ以前に位置付けられる。西辺では石垣築石の特徴もこのことと矛盾しない。

北辺(2004-5-1地点、第100~102図)では層序をI~VI層に大別した。北辺は西辺と異なり、石垣掘方が二段になっている。この解釈の一つとして、改修を示すとの見方がある。上部からの掘方の深さが1.7mに達し、西辺に比較して相当深いこと、また掘方埋土III層とその外側のV層、上部ではII層とIV層が対になっていること等は、改修とする見方を支持すると思われるが、上部(II層)と下部(III層)との明確な切り合い関係は見いだせない。また後述する石垣の特徴からは、むしろ根石ごと改修している可能性も否定できず、全体が改修とすれば掘方の深さも異とするに当たらない。いずれにしても今回の調査では確定するに至っていないため、以下では層の特徴のみを示す。VI層は明褐色粘質土で、地山である。石垣掘方の底面付近に位置する。V層は砂質・粗砂等で構成された整地層で、下部から珠洲焼が出土している。IV層は、本丸附段北面石垣の裏込層南端に相当する。掘方埋土下部(III層)は、西壁側トレンチ(トレンチ1)では砂質土が主体であるが、東壁側トレンチ(トレンチ3)では最下部は粘質土が主体となり、一定しない。掘方埋土上部(II層)が明確に遺存している箇所は、調査地点西側の一角のみである。褐灰・灰褐・暗灰色等の粘砂質土で構成されている。掘り方自体は上面幅は約1.5mを測る。築石を掘るに際しては、掘り底面との間に円礫を挟み、安定を図っている。I層は石垣破壊後の堆積層である。

北辺Ⅱ～Ⅳ層からの出土遺物は少ない。石垣掘方埋土ⅡないしⅢ層（トレンチ 3）から寛永 8 年（1631）大火前後に廃棄される事例の多い燻し瓦瓦当が出土した程度であり、遺物から各層の堆積時期を明らかにすることは難しい。

（石垣の特徴）

槽台石垣は、西辺では 2 段 3 石（根石 2 石、上段 1 石）、北辺では 2 段 12 石分（根石 10 石、上段 2 石）が検出された。

西辺で検出された部分は、土層堆積の状況から、構築（創建）時の様相を保っていると考えられる（第 96 図）。下段は粗加工石で、小面（正面）は 60×60 cm、控えは 1 m 以上である。小面には明瞭にノミ痕が入る。上面は割面が主体で、側面に大きく自然面を残すものも見られる。上段の一石は切石で、小面（正面）は幅 70 cm×縦 60 cm、控えは 1 m 以上である。小面はノミで仕上げているが、向かって左端は凹凸が著しい。上面前端、向かって左側面前端には平刃工具による丁寧な加工（合場加工）が認められる。上面は全体的に平坦に仕上げられている。なお上段・下段とも小面には刻印が認められる。以上のような西辺における石垣の様相は、土層堆積状況から導き出された見解と概ね合致する。

北辺で検出された部分は、西辺と異なる様相を呈する（第 99 図）。上段・下段の石材とも小面は一边 50～60 cm、控えの長さ 100 cm 前後を測る。上段・下段 12 石中 10 石に刻印が認められる。刻印の形状は石垣編年 4 期を特徴付けるものであり、これらの築石が寛永年間（17 世紀前半）より使用されたことは明白である。

下段を構成する石材（根石）は、小面の形状を大略矩形に仕上げ、上面を平坦に調整した切石材である。側面の合端加工は必ずしも一定ではなく、割面や粗いノミ仕上げのままとする個体も見られる。但し、小面の形状が明確に多角形となる個体も一部見られ、これは刻印に示される段階（4 期）より新しい 5 期（寛文～元禄年間、17 世紀後半）以後の特徴とされる。この個体には、上段石材と接していない小面の一边に丁寧な合場加工が施されており、旧材の再利用、ひいては根石自体が構築当初の状態を保っていない可能性を示唆するものとして注意される。

上段の石材は切石で、下段より数 cm 前方に出た状態で検出された。石材の小面は、緩やかな角落としにより五角形を呈する。上面・側面ともに丁寧な合場加工が認められる。小面の形状は、やはり石垣編年 5 期以後の特徴とされるものであり、4 期の石材を再加工して用いていると判断される。

以上を踏まえ、北辺石垣の創建・改修時期について整理する。

まず、下段の石材は、切石用として石垣編年 4 期に採取されたもので、加工については石切丁場で施された段階に留まっている個体が多い。但し小面が多角形を呈し、丁寧な合場加工を有する個体も一部に見られ、これを石垣編年 5 期の使用を経て根石に転用されたと考え、最終的な改修時期は石垣編年 6 期（宝暦～安永年間、18 世紀後半）以後に下る可能性も否定できない。このような状況からすると、これ以前の改修や創建の状態についてはさまざまな可能性が考えられ、特定は難しいとせざるを得ない。ここでは、西辺と比較して、改修により当初の状態が捉えにくくなっているものと解釈しておきたい。

（その他の遺構）

2004-5-2 地点では、長軸 2 m 以上の掘り込みが南壁沿いで検出された（SX01、第 99・103 図）。埋土からは越前赤瓦が出土しており、寛文年間頃（17 世紀後半）の三十間長屋改修に関連する遺構と考えられる。これに切られる遺構（SX02 等）もあるが、年代を特定できる遺物は見られない。2003-6 地点・2004-5-2 地点では、Ⅶ層上面で小ピットが検出された。遺構の形状等からは性格を特定し難いが、三十間長屋建設に係る遺構の可能性がある。

2004-6 地点（第 105 図）

（位置と目的）

三十間長屋の西側、本丸階段平坦面の西縁辺部に位置する。この付近は、現状では石垣が明確には認められないが、本地点付近の下位では、二、三の戸室石が石列状に並ぶ箇所がある。本来本丸階段西側に石垣があった可能性も考えられたことから、裏込めの有無等について確認するため設定した。

（調査結果）

予想を越えて整地土が複雑で、かつ良好な瓦廃棄層（V層）を検出するなどしたため、当初の目的は果たせなかった。基本土層は12層に大別している。VI層～XII層については17世紀中葉以前の整地層ないし遺構埋土と見られるが詳細は明らかではない。V層は越前赤瓦を主体とするもので、まとまった出土例としては、平成16年度のいもり堀調査に次ぐものである（第131・136・146・150図）。出土位置からすれば、三十間長屋の屋根瓦として使用された可能性が高いと言える。また、僅かながら、17世紀後半頃と考えられる陶磁器（第124図P252等）や、梅鉢文燻し瓦（第131図T51）が伴っていること、瓦廃棄層の上位に薄い間層（IV層）を置いて、焼土及び溶解鉛が付着した陶磁器（第124・125図）が多数含まれる、宝暦9年（1759）の大火片付け層（III層）が堆積していることなどから、越前赤瓦の使用年代、梅鉢文瓦や鉛瓦との前後関係を想定する上で、重要な資料であると言える。なおII層は近世後期、I層は近世末期以降の堆積と推測される。

2003-7 地点（第 106・107 図）

（位置と目的）

三十間長屋の南西側、薪ノ丸への通路口の際に、宝暦9年（1759）の大火まで建っていた櫓の土台石垣を確認するため設定した。この櫓は、絵図には「武具奉行預かり」「御武具土蔵」等と記載されており、武器・武具の類を収蔵していたことが窺える。

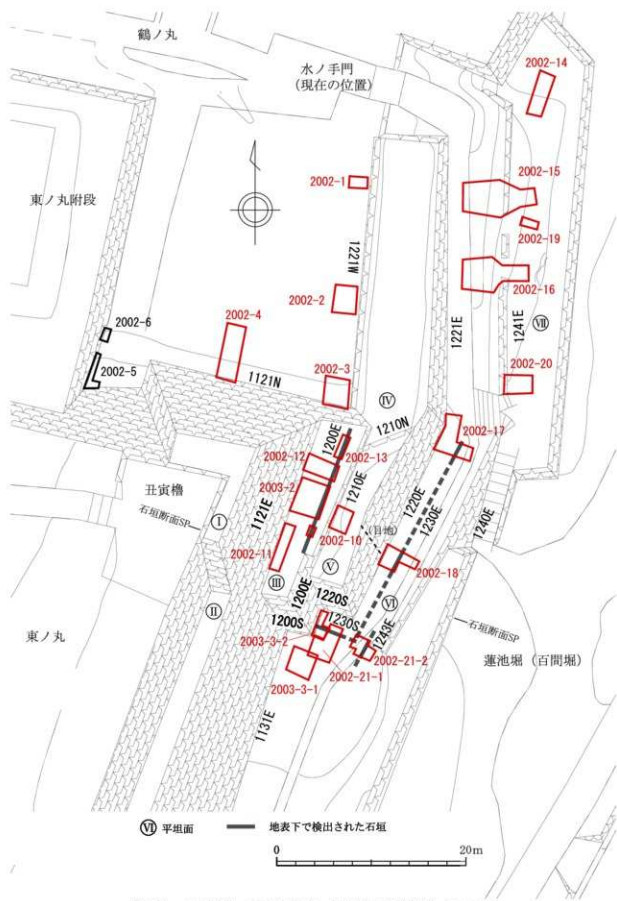
（調査結果）

現地表から約1m下まで近代の攪乱層であり、この層を除去すると近世初期の整地層が検出され、想定していた櫓の土台石垣は、近代以後ほぼ完全に撤去されていることが判った。また一部断割を行った結果、現地表から2.3m下位で地山が確認された。地山は本丸中央部に比べやや深い位置にあり、地山が西側へ向かって傾斜している可能性が指摘できる。

c 小結

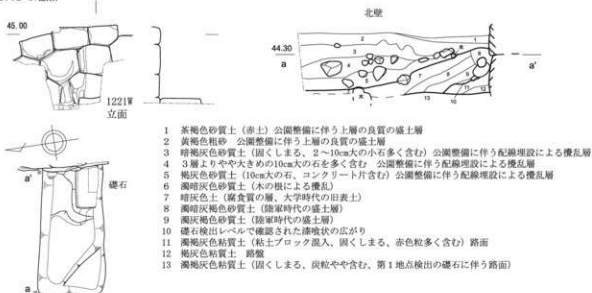
本区域における主な調査結果を整理すると下記の通りとなる。

1. 三十間長屋の北側に接続する櫓の土台石垣基礎が確認された。西辺では、土層堆積状況から、根石及びその上段の一石は構築当初の形態を留めていると判断され、石垣の特徴や、本丸階段中央部（2004-1（2003-8）地点）での遺構の在り方から、石垣編年4期（寛永年間（1624～1640）頃）に築造されたものと考えられる。北辺でも根石と二段目の一部が検出されたが、改修を想定させる状況にあり、また改修を認めたとしても、その範囲や回数についても決定的な確証を得ることが困難であった。
2. 本丸階段の形成過程や西縁の状況、三十間長屋以外の建物についての情報は課題となって残ったが、2004-6 地点では、越前赤瓦を中心に屋根瓦の変遷に資する所見を得ることができた。

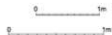
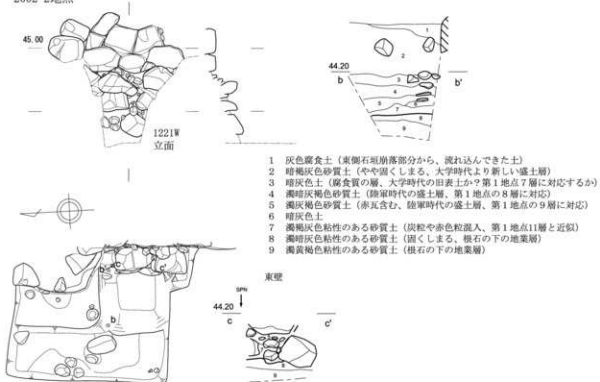


第7図 丑寅櫓北 丑寅櫓北東 調査地点等位置図 (S=1/400)

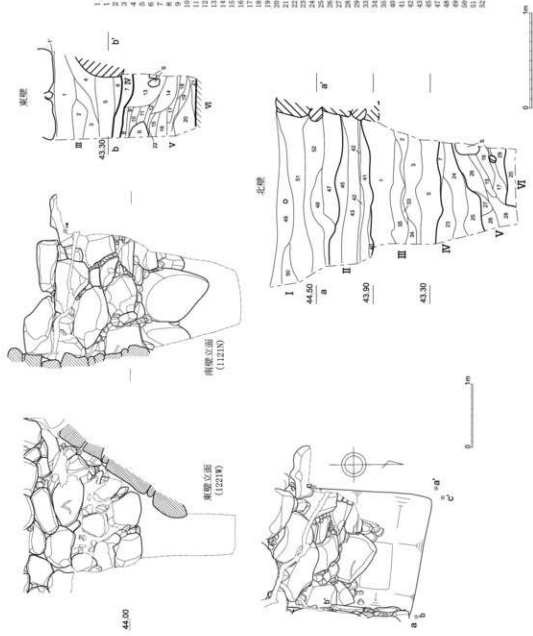
2002-1地点



2002-2地点

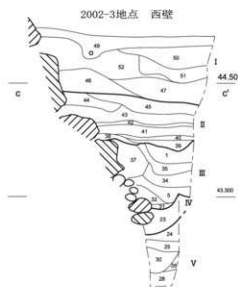


第8図 2002-1・2地点 遺構図(土層断面1/40、平面・石垣立面(断面)1/60)



- 1 褐色砂質土 (砂利多く含む、層くしまる、横石の基盤層状)
- 2 褐色粘土 (小砂利、1~2mの石を多く含む、白色粘土状含む)
- 3 褐色粘土 (3~5cm程度の石、多量含む)
- 4 褐色粘土 (小砂利、1~2m程度の石を多く含む)
- 5 褐色砂質土 (砂利、右巻干含む)
- 6 褐色砂質土 (砂利若干含む)
- 7 褐色砂質土 (砂利若干含む)
- 8 褐色砂質土 (砂利若干含む)
- 9 褐色砂質土 (粘土状若干含む) 以降と同層
- 10 褐色砂質土
- 11 褐色砂質土 (粘土状若干含む) 以降と同層
- 12 褐色砂質土 (粘土状若干含む)
- 13 灰褐色土 (小石多く含む)
- 14 褐色シルト (地山質)
- 15 褐色シルト
- 16 褐色シルト
- 17 褐色シルト
- 18 褐色シルト
- 19 褐色シルト
- 20 褐色砂質土
- 21 褐色粘土 (小砂利多く含む)
- 22 褐色粘土 (小砂利多く含む)
- 23 褐色粘土 (小砂利多く含む)
- 24 褐色砂質土 (埋積シルト層状に含む)
- 25 褐色砂質土 (埋積シルト層状に含む)
- 26 褐色砂質土 (埋積シルト層状に含む)
- 27 灰褐色土 (しじり少なく、3~5cmの石を含む)
- 28 灰褐色土 (しじり少なく、3~5cmの石を含む)
- 29 灰褐色土 (しじり少なく、3~5cmの石を含む)
- 30 灰褐色土 (しじり少なく、3~5cmの石を含む)
- 31 灰褐色土 (しじり少なく、3~5cmの石を含む)
- 32 灰褐色土 (しじり少なく、3~5cmの石を含む)
- 33 灰褐色土 (しじり少なく、3~5cmの石を含む)
- 34 灰褐色土 (しじり少なく、3~5cmの石を含む)
- 35 灰褐色土 (しじり少なく、3~5cmの石を含む)
- 36 灰褐色土 (しじり少なく、3~5cmの石を含む)
- 37 灰褐色土 (しじり少なく、3~5cmの石を含む)
- 38 灰褐色土 (しじり少なく、3~5cmの石を含む)
- 39 灰褐色土 (しじり少なく、3~5cmの石を含む)
- 40 灰褐色土 (しじり少なく、3~5cmの石を含む)
- 41 灰褐色土 (しじり少なく、3~5cmの石を含む)
- 42 灰褐色土 (しじり少なく、3~5cmの石を含む)
- 43 灰褐色土 (しじり少なく、3~5cmの石を含む)
- 44 灰褐色土 (しじり少なく、3~5cmの石を含む)
- 45 灰褐色土 (しじり少なく、3~5cmの石を含む)
- 46 灰褐色土 (しじり少なく、3~5cmの石を含む)
- 47 灰褐色土 (しじり少なく、3~5cmの石を含む)
- 48 灰褐色土 (しじり少なく、3~5cmの石を含む)
- 49 灰褐色土 (しじり少なく、3~5cmの石を含む)
- 50 灰褐色土 (しじり少なく、3~5cmの石を含む)
- 51 灰褐色土 (しじり少なく、3~5cmの石を含む)
- 52 灰褐色土 (しじり少なく、3~5cmの石を含む)

第9図 2002-3地点 遺構図 (断面1/10、平面・立面1/60)



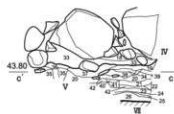
- 1 暗褐色土 (小砂利、1～2cmの小石多く含む、白色粘土粒含む)
- 5 黄褐色砂質土 (砂利、石、若干含む)
- 23 暗灰褐色砂質土 (黒褐色シルトブロック若干含む)
- 24 灰黄色砂質土 (黒褐色シルト塊状に入る)
- 25 暗褐色土 (3～5cmの石を含みしまりがない)
- 26 淡灰褐色砂質土 (黄色、白色粘土ブロック含む)
- 28 淡灰黄色土 (3～5cmの石、黄色粘土ブロック含む)
- 30 暗褐色砂質土 (5～6cmの石、小砂利若干含む、しまり少ない)
- 31 淡黄灰色土 (2～3cmの石若干含む)
- 32 暗褐色土 (やや粘性あり、砂多く含む)
- 34 黄褐色砂質土 (砂、小石多く含む、黄赤褐色粘土粒含む)
- 35 暗褐色砂質土
- 37 灰褐色土 (黄褐色粘質土ブロック含む)
- 38 黄褐色粘質土
- 39 暗褐色砂質土+瓦 (瓦層③)
- 40 灰黄色粘質土 (整地土③)
- 41 暗褐色土+瓦 (瓦層②)
- 42 赤黄褐色粘質土 (整地土②)
- 43 淡褐色土+瓦 (瓦層①)
- 44 淡灰褐色土
- 45 淡褐色粘質土+瓦 (瓦層①下層)
- 46 淡褐色砂質土+瓦 (輪葉瓦含む) + 礫石大の石
- 47 褐色粘質土+瓦 (瓦層①上層)
- 49 黄色砂
- 50 灰褐色砂質土
- 51 黒色腐食土
- 52 淡灰褐色砂質土

2002-4地点 東壁



- 12 暗灰褐色砂質土 (やや粘りあり)
- 15 黄褐色粘質土 (いぶし瓦を多く含む、黄褐色粘土ブロック混入、瓦層①)
- 18 明黄褐色砂質土+明灰色砂 (10cm大の礫含む、やや粘る)
- 20 黄明黄褐色砂質土
- 33 黄明灰褐色砂質土
- 35 黄褐色灰色細砂 (鉄分の沈着あり、やや粘る)
- 36 黄褐色粘質土 (粒子細かい)
- 43 18よりやや粘い

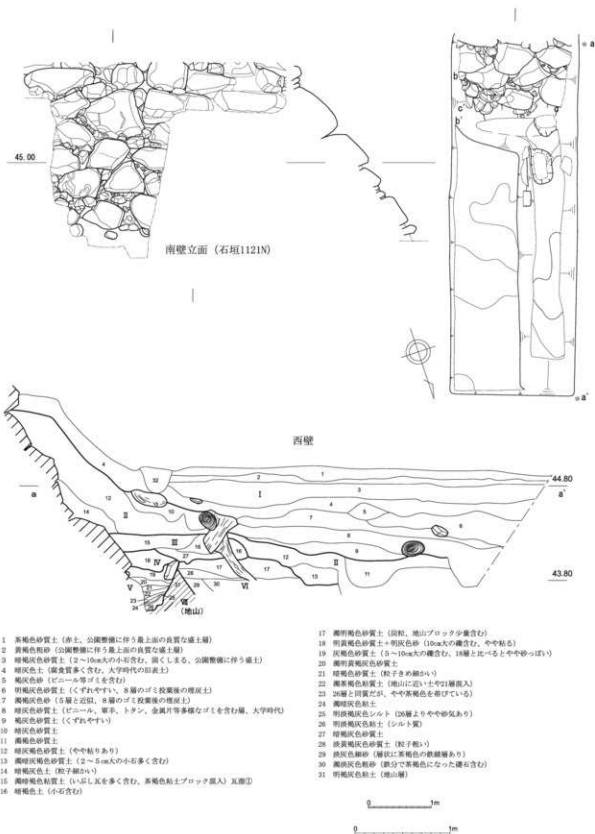
2002-4地点 南壁



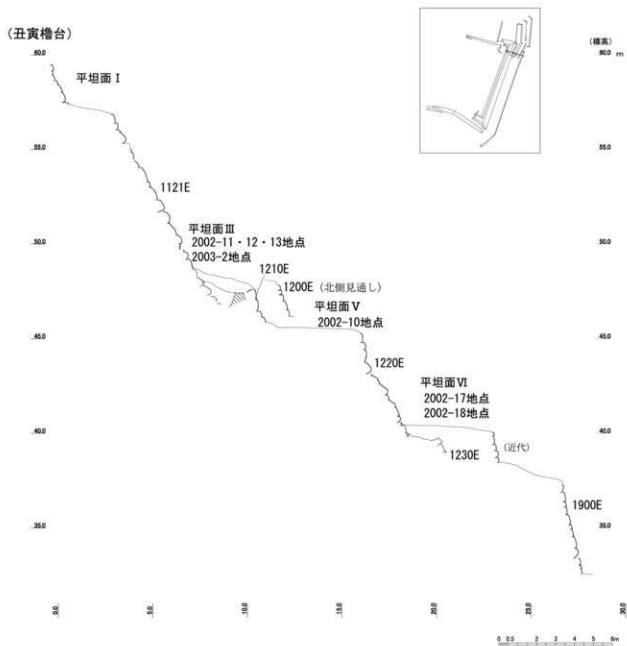
- 18 明黄褐色砂質土+明灰色砂 (10cm大の礫含む、やや粘る)
- 19 灰褐色砂質土 (5～10cm大の礫含む、18層に比べるとやや砂っぽい)
- 20 黄明黄褐色砂質土
- 21 暗褐色砂質土 (粒子きめ細かい)
- 22 黄褐色粘質土 (地山に近い土や2層混入)
- 23 26層と同質だが、やや黄褐色を帯びている
- 24 黄褐色粘質土
- 25 明灰褐色シルト (26層よりやや砂気あり)
- 26 明灰褐色粘質土 (シルト質)
- 33 黄明灰褐色砂質土
- 34 灰明灰色細砂
- 35 黄褐色灰色細砂 (鉄分の沈着あり、やや粘る)
- 36 黄褐色粘質土 (粒子細かい)
- 37 黄褐色粘質土
- 38 淡灰褐色粘質土 (粒子細かい)
- 39 暗褐色砂
- 40 暗褐色粘質土
- 41 黄褐色粘質土
- 42 黄褐色砂質土



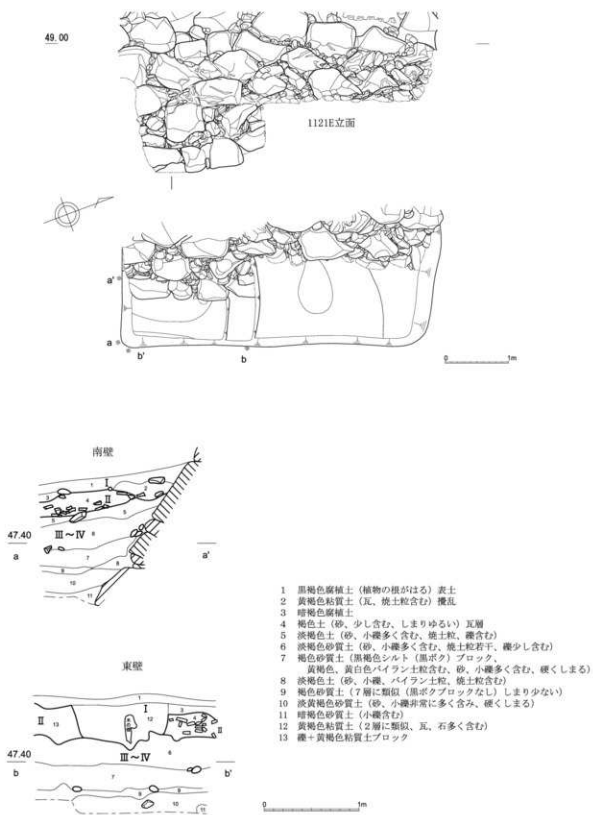
第10図 2002-3・4地点 断面図 (1/40)



第11図 2002-4地点 遺構図 (土層断面1/40、平面・石垣立面 (断面) 1/60)

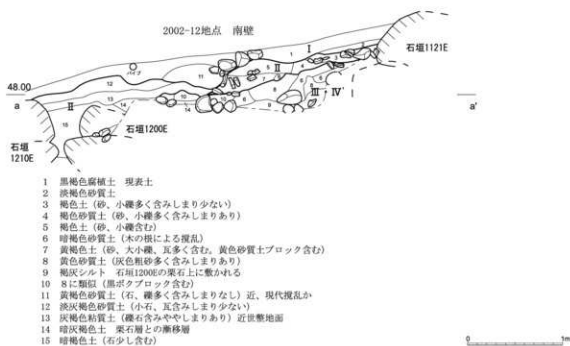
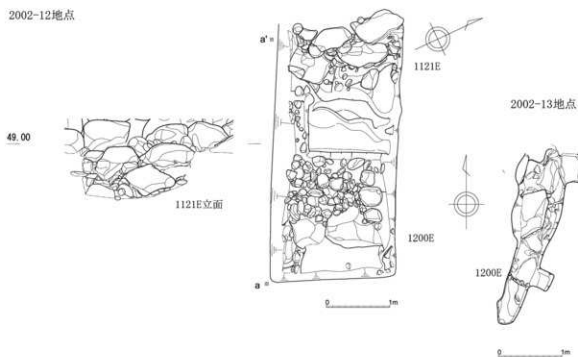


第12図 丑寅槽北東 石垣・平坦面断面図 (1/200)

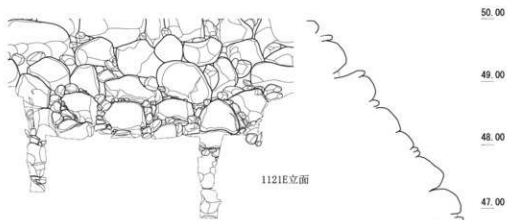
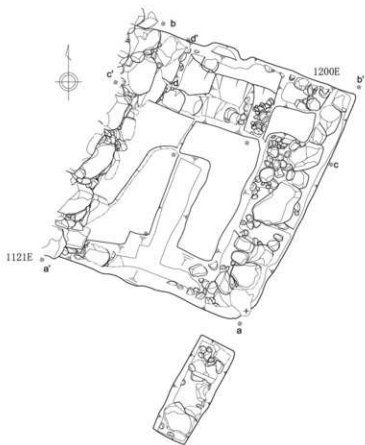


第13図 2002-11地点 遺構図 (断面1/40、平面・立面1/60)

2002-12地点

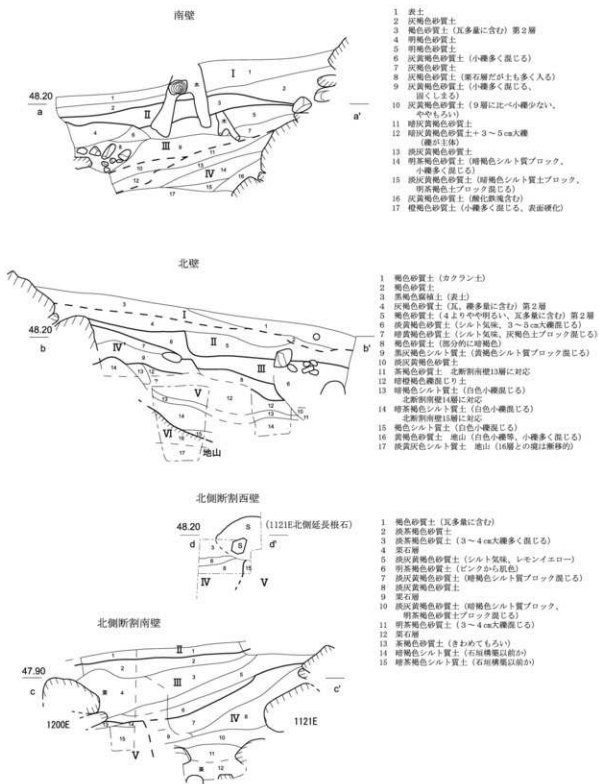


第14図 2002-12・13地点 遺構図 (断面1/40、平面・立面1/60)



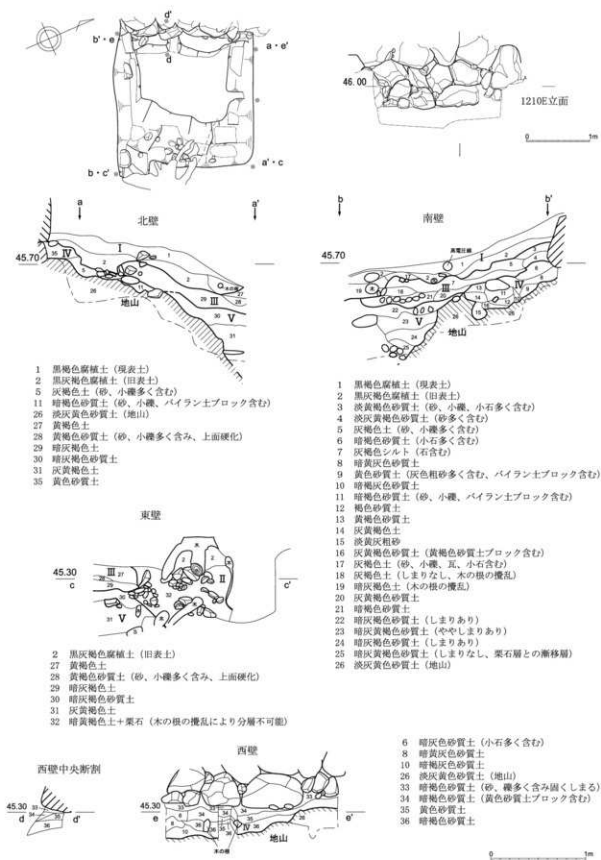
第15图 2003-2地点 遗構图 (1/60)

0 1m

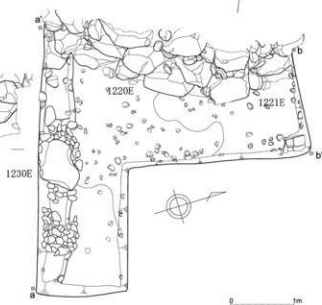
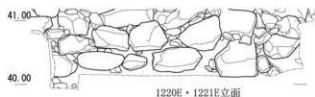


第16図 2003-2地点 断面図 (1/40)

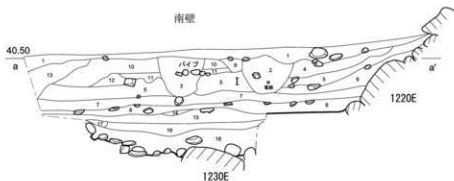
0 1m



第17図 2002-10地点 遺構図 (断面1/40、平面・立面1/60)

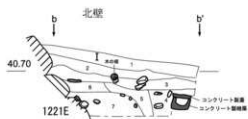


南壁



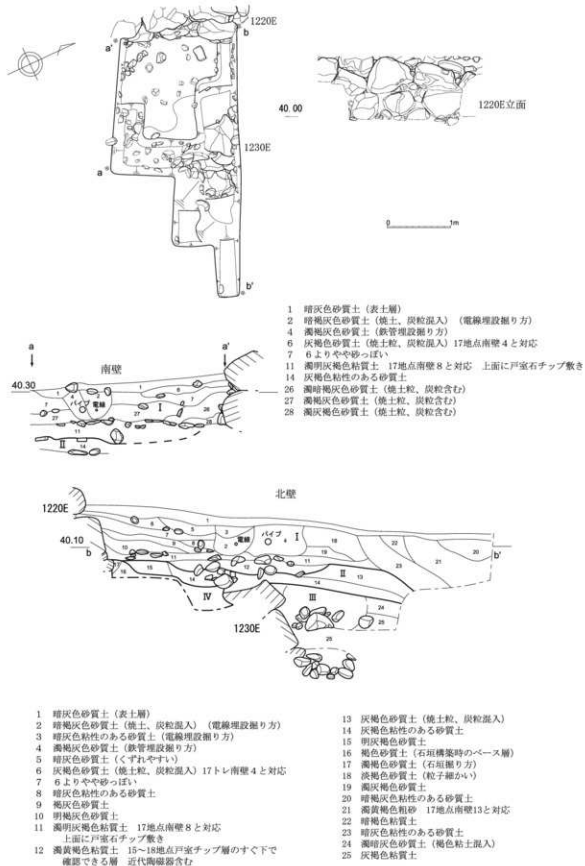
- 1 暗灰色砂質土（表土層）17地点北壁2と対応
- 2 濁灰色粘性的のある砂質土（電線埋設廻り方）
- 3 濁褐色砂質土（鉄管埋設廻り方）
- 4 灰褐色砂質土（焼土粒、炭粒混入）ビール瓶含む層
- 5 暗灰褐色砂質土（焼土粒、炭粒混入）17地点北壁7と対応
- 6 濁灰褐色砂質土
- 7 暗灰色砂質土（焼土粒、炭粒含む）16トレ13と対応
- 8 濁明灰褐色粘質土 戸室石チップ含む
- 9 灰褐色砂質土（電線廻り方の一部）

- 10 濁灰黄褐色粘質土
- 11 暗灰褐色砂質土（やや砂っぽい）
- 12 濁暗灰色砂質土（焼土粒含む、炭粒多く含む）
- 13 濁黄褐色粗砂（東側にある明治石垣普請に伴う層）
- 14 黄灰褐色粘質土
- 15 暗灰褐色粘質土（粗砂混入）
- 16 暗灰色砂質土
- 17 濁黄褐色粘土
- 18 暗灰褐色粘性のある砂質土

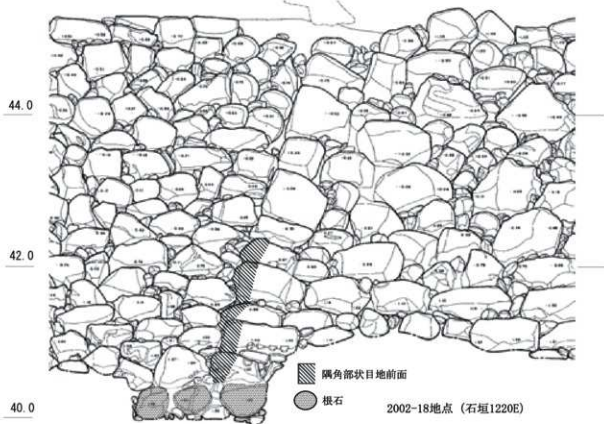
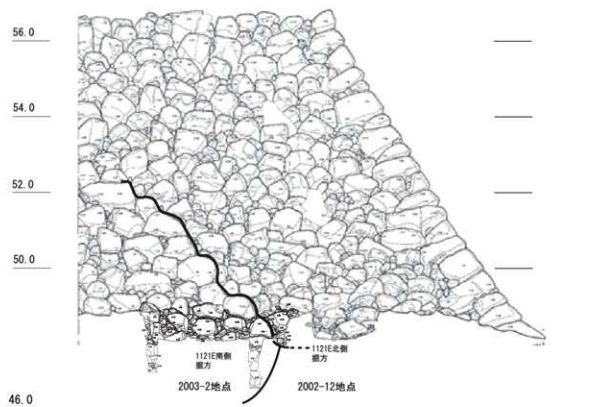


- 1 黄褐色土（公園整備造成盛土）16地点1層と対応
- 2 暗灰色砂質土（旧表土）16地点2層と対応
- 3 暗灰褐色砂質土
- 4 濁灰褐色砂質土（コンクリート暗渠埋設時の廻り方、やわらかい）
- 5 灰褐色砂質土（やわらかい）
- 6 灰褐色砂質土（焼土粒、炭粒含む）16地点10層とやや異なるが、対応する層
- 7 暗灰褐色砂質土（焼土粒、炭粒含む）16地点11層と対応

第18図 2002-17地点 遺構図（断面1/40、平面・立面1/60）

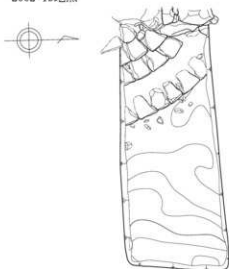


第19図 2002-18地点 遺構図(断面1/40、平面・立面1/60) 0 1m



第20図 2003-2地点・2002-18地点 石垣立面図 (1/100・1/50)

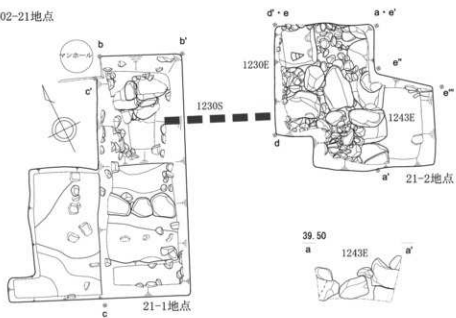
2002-19地点



2002-20地点



2002-21地点



0 1m

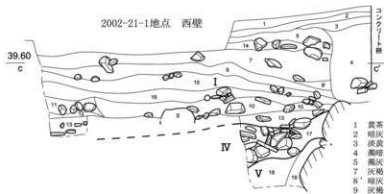
第21図 2002-19・20・21地点 遺構図 (1/60)

2002-21-1地点 北壁



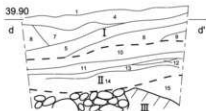
- 1 黄褐色砂質土 (公園造成盛土)
- 2 暗灰色砂質土 (旧表土)
- 3 淡黄褐色砂質土 (コンクリート構造物時の盛土)
- 4 黄褐色砂質土 (コンクリート構造物工事の際の崩り方)
- 5 黄褐色砂質土 (粘土粒、炭粒混入、粗砂混じり)
- 6 黄褐色砂質土 (粘土粒、炭粒混入)
- 7 灰褐色砂質土 (粗砂混 粘土粒、炭粒混入)
- 8 暗灰色砂質土
- 9 暗褐色粘質土 (粗砂混 粘土粒、炭粒混入)
- 10 灰褐色粘質土 (現代のボタン検出)

2002-21-1地点 西壁



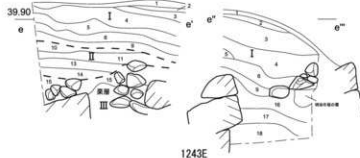
- 1 黄褐色砂質土 (公園造成盛土)
- 2 暗灰色砂質土 (旧表土)
- 3 淡黄褐色砂質土 (コンクリート構造物時の盛土)
- 4 黄褐色砂質土 (コンクリート構造物工事の際の崩り方)
- 5 黄褐色砂質土 (粘土粒、炭粒混入、粗砂混じり)
- 7 灰褐色砂質土 (粗砂混 粘土粒、炭粒混入)
- 8 暗灰色砂質土 (粘性が強い)
- 9 灰褐色砂質土 (粗砂粒多く含む)
- 10 灰褐色粘質土 (現代のボタン検出)
- 11 暗褐色砂質土
- 12 暗褐色粘質土
- 13 明灰褐色粘質土 (いぶし瓦層積層 比較的小片のものが多い)
- 14 灰褐色粘質土 (現代のボタン)
- 15 黄褐色粘質土 (5cm次の石を含む)
- 16 暗褐色粘質土 (戸塚石砕石層)
- 17 暗灰色砂質土
- 18 黄褐色粘質土
- 19 暗褐色粘質土 (黄褐色粘質土ブロック混入)

2002-21-2地点 西壁



- 1 暗灰色砂質土 (旧表土)
- 2 黄褐色粘質土
- 3 黄褐色粘質土
- 4 黄褐色粘質土 (粘土粒、炭粒混入、粗砂混じり)
- 5 黄褐色粘質土 (粘土粒、炭粒混入)
- 6 暗褐色粘質土 (粘土粒、炭粒混入)
- 7 黄褐色粘質土 (粘性が強い)
- 8 7よりやや明るい (粘土粒、炭粒混入)
- 9 暗褐色粘質土 (2cm次の小石混入)
- 10 暗褐色粘質土
- 11 戸塚チップ細粒層 第17地点16と対応
- 12 暗褐色粘質土
- 13 黄褐色粘質土
- 14 黄褐色粘質土 (炭粒混入)
- 15 明灰褐色粘質土 (現代のボタン)
- 16 暗褐色粘質土
- 17 黄褐色粘質土
- 18 明褐色粘質土 (炭粒混入)

2002-21-2地点 北壁

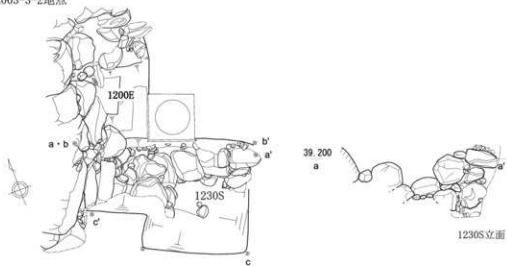


1243E

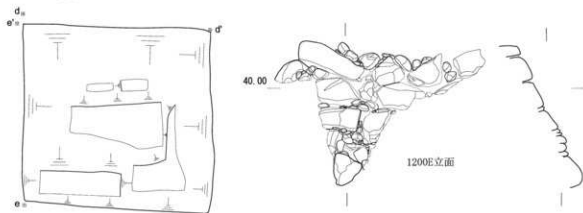
第22図 2002-21地点 断面図 (1/40)

0 1m

2003-3-2地点

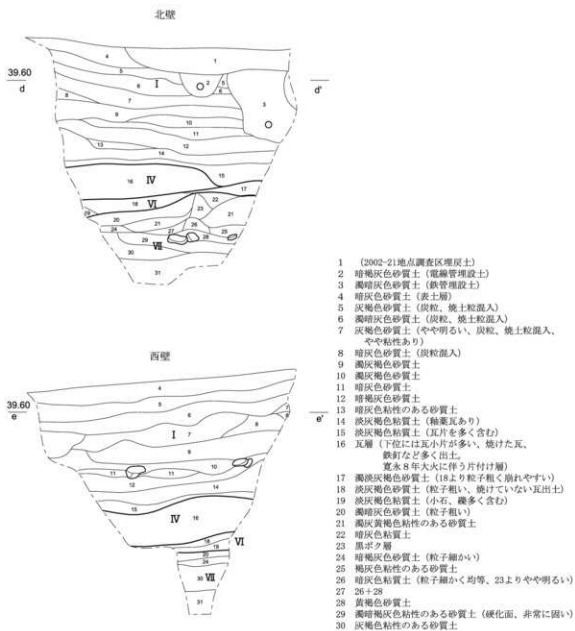


2003-3-1地点



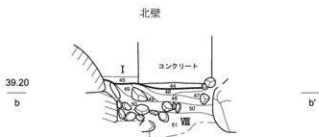
第23图 2003-3地点 遺構図 (1/60)

0 1m

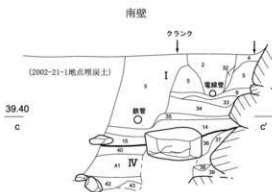


第24図 2003-3-1地点 断面図 (1/40)

0 1m



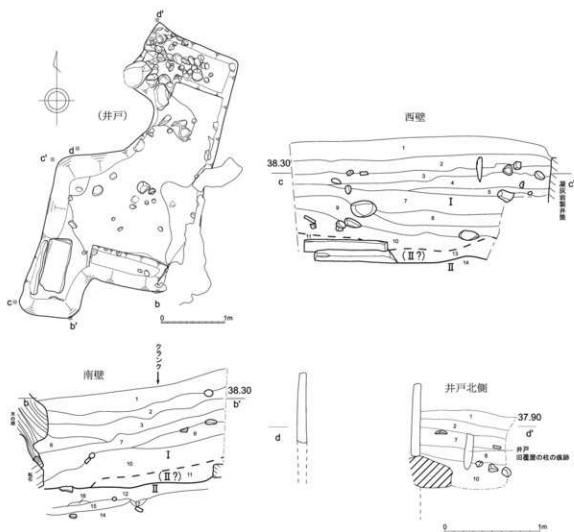
- 44 青灰色砂利層 (コンクリート埋設基盤層) 現代層
 45 暗灰色粘質土 (炭粒、焼土粒混入) 現代層
 46 濁灰色砂質土 (まだら状に腐植土混入、固くしまる)
 47 褐灰色砂質土 (固くしまる)
 48 明灰褐色砂質土 検出石垣の裏込めの位置に相当
 49 濁暗灰色粘質土 (炭粒、焼土粒含む) 検出石垣の裏込めの位置に相当
 50 灰褐色砂質土 (やや粘性あり) 検出石垣の裏込めの位置に相当
 51 灰褐色細砂 (39と近似、異物混入なし) 検出石垣の裏込め位置に相当、高石垣の築石まで伸びている



- 2 暗褐色粘質土 (電線管理設土)
 3 濁褐色粘質土 (鉄管埋設土)
 4 暗灰色砂質土 (表土層)
 5 灰褐色砂質土 (炭粒、焼土粒混入)
 6 濁暗灰色粘質土 (炭粒、焼土粒混入)
 14 淡灰褐色粘質土 (軸葉瓦あり)
 15 淡灰褐色粘質土 (瓦片を多く含む)
 32 2と34との混合土
 33 濁暗灰色砂質土 (焼土粒、炭粒混入)
 34 濁灰褐色粘質土 (焼土粒、炭粒混入、軸葉瓦含む層)
 35 灰褐色粘質土
 36 濁褐色粘性のある砂質土
 37 褐色粘性のある砂質土 (しまりなく、柔らかい)
 38 乳灰色細砂 (たたきしめられた層)
 39 灰褐色細砂 (しまりのある固い層)
 40 灰褐色粘性的のある砂質土
 41 淡灰褐色砂質土 (サラサラで粘りなし、2002-21-1地点瓦層と対応)
 42 灰褐色粘性的のある砂質土
 43 濁灰黄褐色粘性のある砂質土 (小石、粗砂混入)

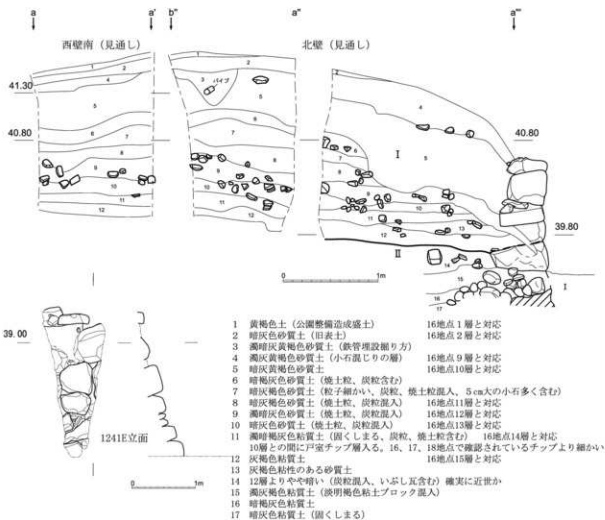
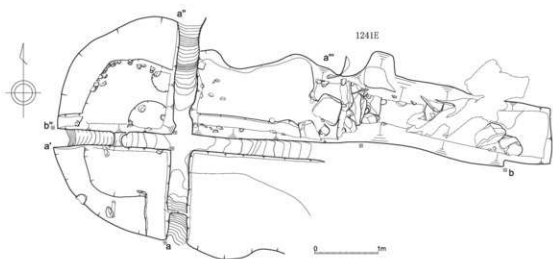
第25図 2003-3-2地点 断面図 (1/40)

0 1m



- 1 茶褐色細砂 (赤土：公園整備盛土)
- 2 黒灰色砂質土 (公園整備盛土造成以前の表土)
- 3 褐灰色砂質土
- 4 褐灰色砂質土 (2cm大の小石含む、焼土粒ごく少量あり、比較的固い)
- 5 暗褐色砂質土 (焼土粒、炭粒含む)
- 6 灰褐色砂質土 (焼土粒、ごく少量含む)
- 7 灰褐色粘性のある砂質土 (焼土粒、炭粒含む、固くしまる)
- 8 褐灰色砂質土 (粒子やや荒い、比較的もろい)
- 9 褐灰色砂質土
- 10 濁暗褐色砂質土 (軸葉瓦が出土している、5cm以上の川原石多く含む)
- 11 暗灰色砂質土 (炭粒、焼土粒混入)
- 12 灰褐色砂質土
- 13 濁暗褐色砂質土
- 14 暗褐色砂質土 (粒子細かい)
- 15 濁黄褐色粘質土
- 16 12+15
- 17 15+14

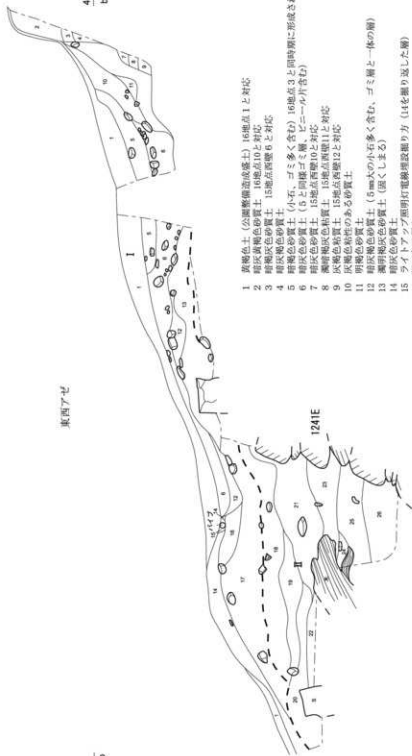
第26図 2002-14地点 遺構図 (断面1/40、平面1/60)



第27図 2002-15地点 遺構図(土層断面1/40, 平面・石垣立面(断面) 1/60)

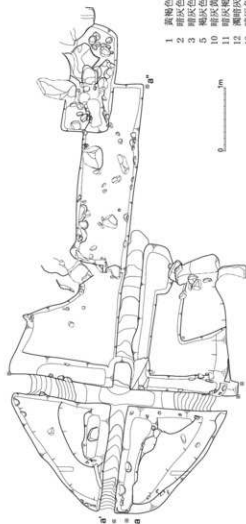
東西アズ

40.60
B



- 1 黄褐色土 (公團整備造成盛土) 16地点1と対応
- 2 暗灰黄褐色砂質土 16地点10と対応
- 3 暗褐色砂質土 15地点西壁6と対応
- 4 暗褐色砂質土
- 5 暗褐色砂質土 (小石、ゴミ多く含む) 16地点3と同時期に形成されたゴミ層と考えられる
- 6 暗褐色砂質土 (石と向斜状層、セメント片含む)
- 7 暗褐色砂質土 15地点西壁1と対応
- 8 暗褐色砂質土 15地点西壁2と対応
- 9 暗褐色砂質土 15地点西壁3と対応
- 10 灰褐色粘状のある砂質土
- 11 明褐色砂質土
- 12 暗褐色砂質土 (5mm次の小石多く含む、ゴミ層と一体の層)
- 13 暗褐色砂質土 (固くしまる)
- 14 暗褐色砂質土
- 15 ライトアップ照明灯電源埋設配管の方 (14を掘り返した層)
- 16 褐色砂質土 (固くしまる、塵土粒、炭粒混入)
- 17 黄褐色砂質土 (粘り強い)
- 18 黄褐色砂質土 (粘り強い)
- 19 黄褐色砂質土 (粘り強い)
- 20 黄褐色砂質土 (明区褐色粘土ブロック混入)
- 21 黄褐色粘状のある砂質土 (粗い粒子)
- 22 黄褐色粘状土
- 23 暗褐色粘状土
- 24 暗褐色砂質土 (やわらかく、崩れやすい)
- 25 灰褐色砂質土 (粗砂混入、崩れやすい)
- 26 暗褐色砂質土 (崩れやすい)

第28図 2002-15地点 断面図 (1/40)



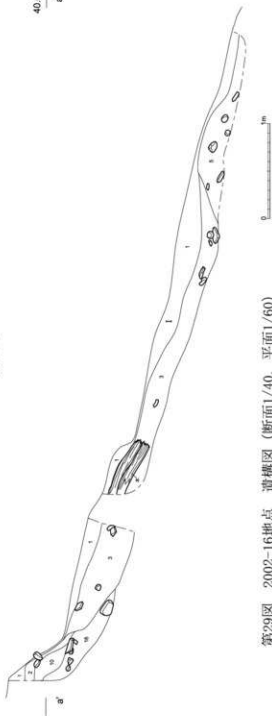
- 1 黄褐色土 (公団建設造成土)
- 2 暗灰色粘質のある砂質土 (田舎土)
- 3 暗灰色砂質土 (近現代の遺物が多く入るゴミ層)
- 5 暗灰色砂質土 (灰子ややぐらくもろい、河原石10cm入、瓦等含む)
- 10 暗灰黄褐色砂質土 (灰子ややぐらくもろい)
- 11 暗灰褐色砂質土 (粘土粒、炭粒含む)
- 12 濃暗灰色砂質土 (瓦片混入)
- 13 暗灰色砂質土 (粘土粒、炭粒混入)
- 14 暗灰色粘質のある砂質土
- 15 灰褐色粘質土
- 16 灰褐色砂質土

断面西壁

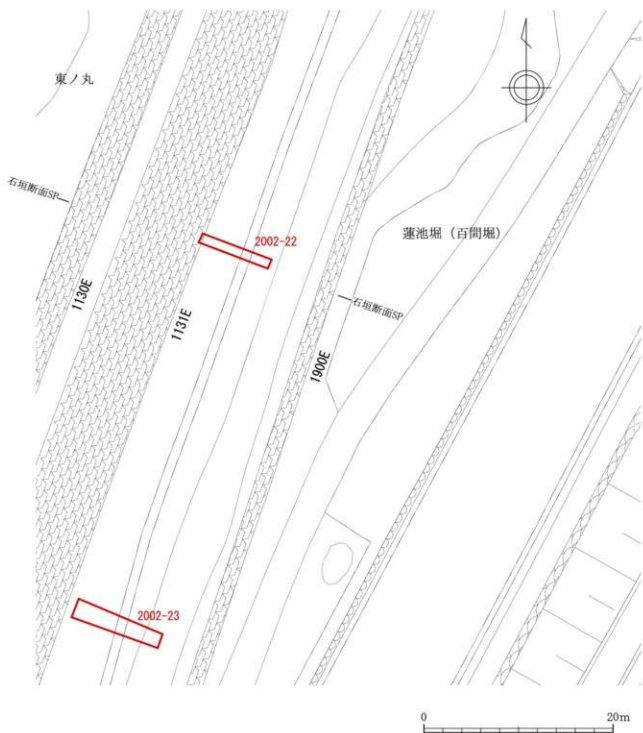


東西丁七

40.60
m

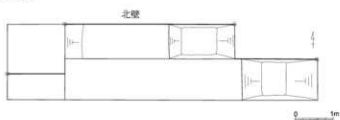


第29図 2002-16地点 遺構図 (断面1/40、平面1/60)

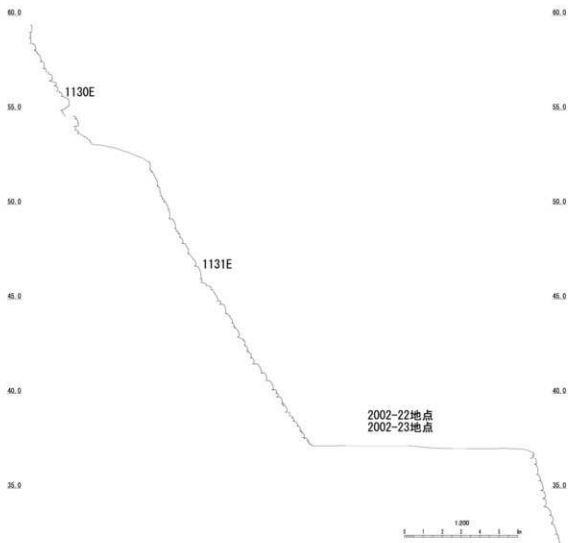
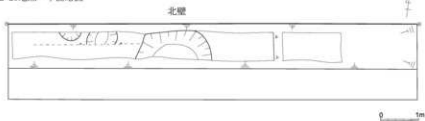


第30図 東ノ丸東 調査地点等位置図 (S=1/400)

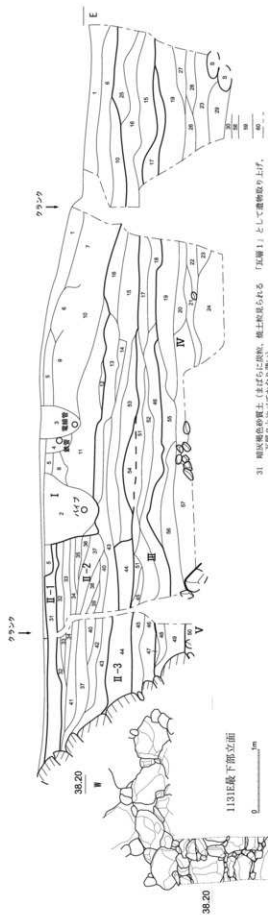
2002-22地点 平面略図



2002-23地点 平面略図

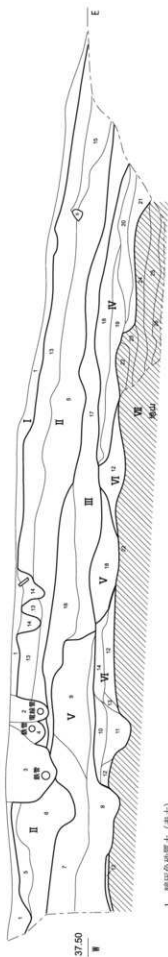


第31図 2002-22・23地点平面略図 (1/100) ・東ノ丸東石垣・平坦面断面図 (1/200)



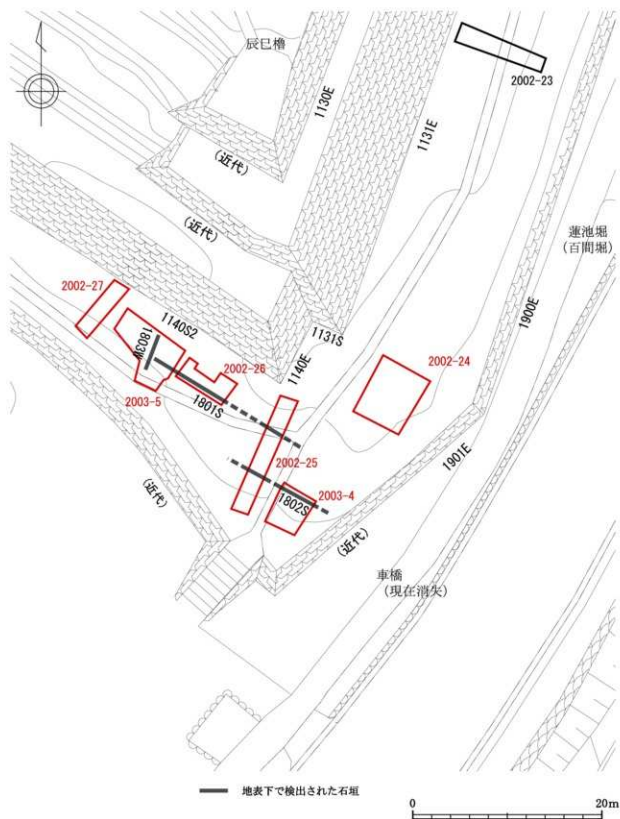
- 31 暗灰色粘質土（まばらに炭粒、礫土粒混入。埋設物も散在。「瓦層1」として遺物層の上げ。
 32 暗灰色粘質土（礫土粒混入）
 33 暗灰色粘質土（乳白色粘土質土プロック混入）
 34 明灰色粘質土（2cm未満の小石含む）
 35 暗灰色粘質土（埋設物も散在）
 36 暗灰色粘質土（埋設物も散在）
 37 暗灰色粘質土（1cm未満の小石、5cm未満の土塊を含む層）
 38 暗灰色粘質土（埋設物も散在）
 39 暗灰色粘質土（3cm未満の小石含む層、暗灰色粘土プロック混入）
 40 暗灰色粘質土（5cm未満の小石多量を含む層）
 41 暗灰色粘質土（灰土層かい、礫土粒、炭粒混入）
 42 暗灰色粘質土（埋設物も散在）
 43 小穴群（5cm程度）
 44 瓦層2（5cm未満の埋設物の2cm未満の小石混入も多量あり、灰片瓦の層間に入る）
 45 暗灰色粘質土（暗灰色粘土プロック、炭粒混入）
 46 暗灰色粘質土（埋設物も散在）
 47 暗灰色粘質土（6cm以上10cm未満の小石）
 48 暗灰色粘質土（10cm未満の石混入）
 49 暗灰色粘質土
 50 暗灰色粘質土
 51 暗灰色粘質土
 52 暗灰色粘質土（水や粘土もあり、瓦片まばらに含む層）
 53 暗灰色粘質土（炭粒混入）
 54 暗灰色粘質土（埋設物も散在）
 55 暗灰色粘質土（埋設物も散在、1cm未満の小石、炭粒、礫土粒含む）
 56 暗灰色粘質土
 57 暗灰色粘質土（炭粒混入）
 58 暗灰色粘質土（炭粒混入）
 59 暗灰色粘質土（炭粒混入）
 60 暗灰色粘質土（埋設物も散在）

第32図 2002-22地点 遺構図（断面1/40、立面1/60）

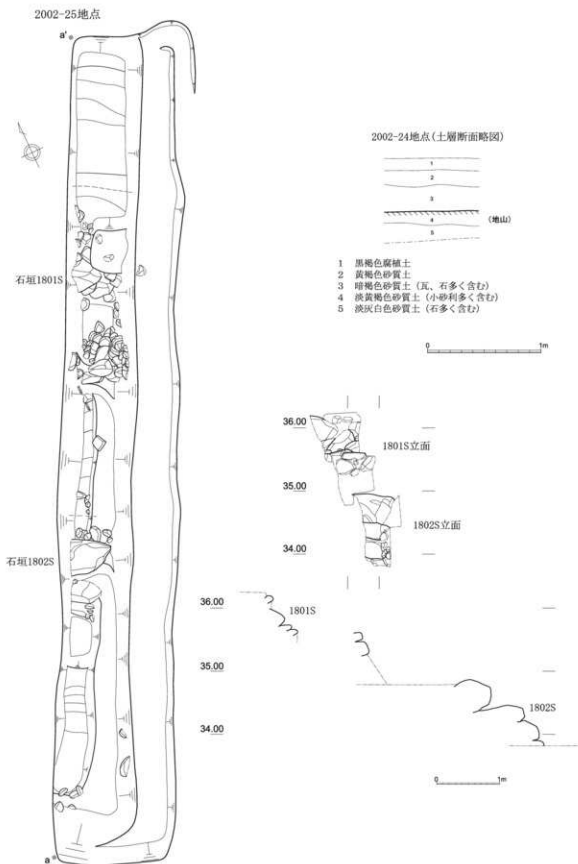


- 1 明灰色砂質土 (黄土)
- 2 明灰褐色砂質土 (埋藏埋設物、もろく崩れやすい土)
- 3 埋藏埋設物 (4の鉄管より新しい時期の鉄管埋設物)
- 4 灰褐色砂質土
- 5 灰褐色砂質土 (10cm未満の小石多く含む)
- 6 灰褐色砂質土 (30cm以下の礫多く含む)
- 7 明灰褐色砂質土 (粗砂多く含む)
- 8 灰層 (7と比較して大きな礫が目につく)
- 9 1~10cmの小石混層 (互小片含む)
- 10 濁茶褐色粘土
- 11 明灰褐色土 (砂子の大きき揃い、石や遺物といった埋入物なし)
- 12 明灰褐色粘質土 (粗砂多く含む)
- 13 濁茶褐色土
- 14 濁茶褐色砂質土 (カクランか、鉄管等の埋設物層よりは占む)
- 15 明灰褐色砂質土 (砂子非常に揃かく、やや粘りあり)
- 16 明灰褐色土 (灰肥、硬土層まばらに埋入)
- 17 16よりやや粘り強い
- 18 明灰真褐色砂質土 (明灰山が明けたよりな土色、土より互の方が多い多く含まれる、比較的大きな礫片が目立つ)
- 19 濁茶褐色粘質土 (10cm未満の川原石多く含む層)
- 20 灰褐色粘質土 (やや粘性があるが砂子やや粗い)
- 21 灰褐色砂質土
- 22 濁茶褐色粘性的のある粗砂 (埋山層)
- 23 明灰褐色粘土 + 真褐色粘土
- 24 濁茶褐色粗砂 (粘性なし、10cm未満の小石埋入)
- 25 明灰褐色粘土
- 26 濁茶褐色粗砂 (淡明灰褐色粘質土や小石埋入)

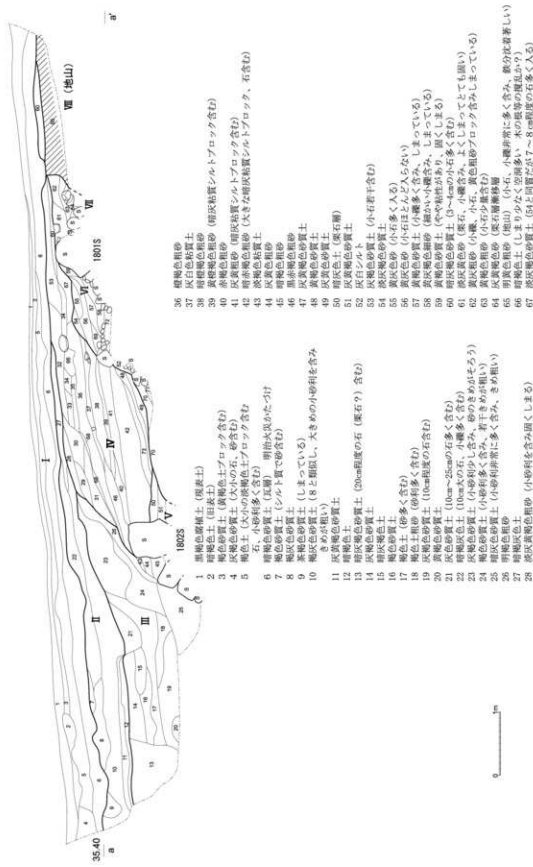
第33図 2002-23地点 断面図 (1/40)



第34図 本丸南（辰巳櫓南） 調査地点等位置図 (S=1/400)



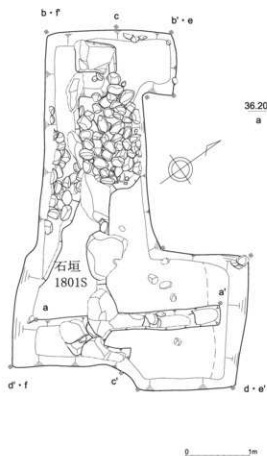
第35図 2002-24・25地点 遺構図(土層断面1/40、平面・石垣立面(断面) 1/60)



- 36 暗褐色粗砂
- 37 灰白色粘質土
- 38 暗褐色粗砂
- 39 黄褐色粗砂 (暗灰粘質シルトプロック含む)
- 40 赤褐色粗砂 (暗灰粘質シルトプロック含む)
- 41 赤褐色粗砂 (暗灰粘質シルトプロック含む)
- 42 暗褐色粗砂 (大きな暗灰粘質シルトプロック、石含む)
- 43 暗褐色粘質土
- 44 灰黄色粘質土
- 45 暗褐色粗砂
- 46 黒赤褐色粗砂
- 47 灰黄褐色粘質土
- 48 黄褐色粘質土
- 49 灰黄色粘質土
- 50 暗灰色土 (灰石層)
- 51 灰黄褐色粘質土
- 52 灰白シルト質土 (小石若干含む)
- 53 灰黄褐色粘質土
- 54 灰黄褐色粘質土 (小石多く含む)
- 55 黄褐色粘質土 (小石多く含む)
- 56 黄褐色粘質土 (小石多く含む)
- 57 黄褐色粘質土 (小石多く含む、しまっている)
- 58 灰黄褐色粗砂 (細かい小礫含む、しまっている)
- 59 黄褐色粘質土 (やや粘性があり、固くしまる)
- 60 暗灰色粘質土 (3~4cmの小石多く含む)
- 61 暗灰色粘質土 (灰石、小礫含む、よくしまっている)
- 62 黄褐色粗砂 (灰石、小石、黄褐色粗砂プロック含む、しまっている)
- 63 黄褐色粗砂 (灰石少量含む)
- 64 黄褐色粗砂 (灰石少量含む)
- 65 暗褐色粘質土 (小礫非常に多く含む、部分的に著しい)
- 66 暗褐色粘質土 (しまり少なく固い)
- 67 灰黄褐色粘質土 (54と同質だが7~8cm程度の石多く含む)

- 1 黒褐色腐植土 (腐葉土)
- 2 暗褐色土 (田表土)
- 3 暗褐色粘質土 (赤褐色土プロック含む)
- 4 灰褐色粘質土 (赤褐色土プロック含む)
- 5 黄褐色土 (小石の濃褐色土プロック含む、石、小砂利多く含む)
- 6 暗褐色粘質土 (灰層) 明治水田かたづけ
- 7 暗褐色粘質土 (シルト質で砂含む)
- 8 暗褐色粘質土
- 9 赤褐色粘質土 (しまっている)
- 10 暗褐色粘質土 (8と類似し、大きな小砂利を含む、さが粗い)
- 11 灰黄褐色粘質土
- 12 暗褐色粘質土
- 13 暗褐色粘質土
- 14 暗褐色粘質土
- 15 暗褐色粘質土
- 16 暗褐色粘質土
- 17 暗褐色粘質土 (砂多く含む)
- 18 暗褐色粘質土 (砂利多く含む)
- 19 暗褐色粘質土 (10cm程度の石含む)
- 20 暗褐色粘質土
- 21 暗褐色粘質土 (10cm~25cmの石多く含む)
- 22 暗褐色粘質土 (10cmの石、小礫多く含む)
- 23 暗褐色粘質土 (小砂利少し含む、砂の量がそろそろ)
- 24 暗褐色粘質土 (小砂利多く含む、やや大きな粗い)
- 25 暗褐色粘質土 (小砂利非常に多く含む、さが粗い)
- 26 暗褐色粘質土
- 27 暗褐色粘質土
- 28 暗褐色粘質土 (小砂利を含む、固くしまる)

第36図 2002-25地点 断面図 (1/60)



石垣背面断削

36.20
a



- 1 淡褐色砂質土 (非常に固くしまる、小砂利多く含む)
- 2 淡褐色砂質土 (固くしまる、こぶし大以上の石入る)
- 3 灰色砂質土 (10cm以下の石含む)
- 4 淡灰褐色粘質砂質土
- 5 橙褐色砂質土 (地山)

西壁



- 1 黒褐色腐植土 (表土)
- 2 暗褐色土 (田表土)
- 3 暗茶褐色土 (瓦、石少量含む)
- 5 暗褐色土 (瓦、石、機土を多く含む)
- 10 褐色土 (3cm程度の石少し、砂多く含む、ややしまっている)
- 13 褐灰色砂質土 (小礫多く含む)
- 15 黄色砂質土 (硬くしまる)
- 25 茶褐色土 (砂、石若干含む)
- 26 黄灰褐色土

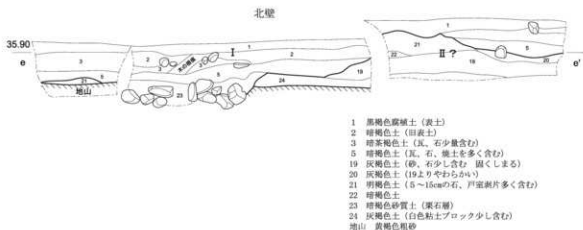
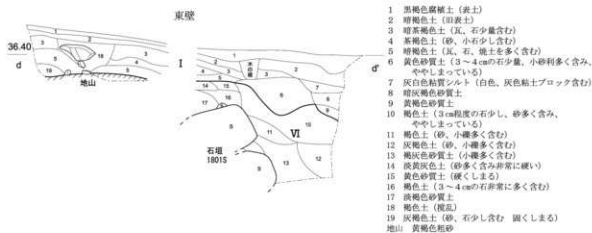
36.40

石垣1801S立面



- 1 暗褐色土 (北壁・南壁23層の栗石層下) (砂やや少ない)
- 2 淡褐色砂質土 (石垣背面断削2層に相応)

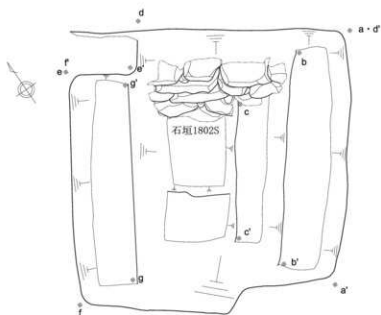
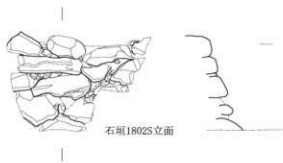
第37図 2002-26地点 遺構図(断面・石垣立面1/40、平面1/60)



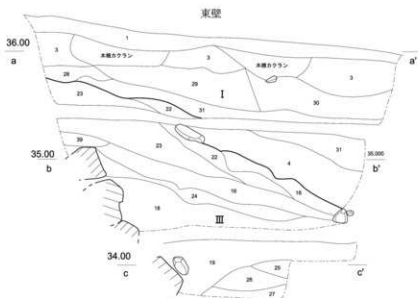
第38図 2002-26地点 断面図 (1/40)

0 1m

35.00



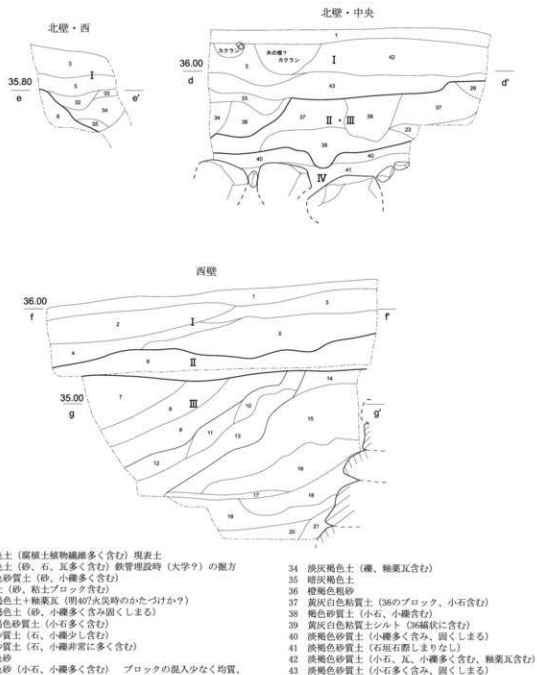
第39图 2003-4地点 遺構図 (1/60)



- 1 黒褐色土 (腐植土、植物繊維を多く含む) 現表土
- 3 黄褐色砂質土 (砂、小礫多く含む)
- 4 褐色土 (砂、粘土ブロック含む)
- 16 淡灰色粘質土 (淡灰色砂ブロック、白色シルトブロック、小石、砂多く含む)
- 18 淡黄灰シルト (暗褐色粘質ブロック、黄灰細砂、縞状に入る)
- 19 淡黄灰粘質シルト
- 22 褐色土 (暗褐色土、淡灰粘質土ブロック、小石入る)
- 23 淡灰色粘質土 (石少し入る、黄灰砂、縞状に少し入る、黄灰粘質シルトブロック状に入る)
- 24 褐色砂質土 (白色粘土ブロック多く含む、石少し入る)
- 25 暗灰色粗砂 (石含み強い)
- 26 暗褐色粗砂 (石、小石、小礫多く含む、固く脆い)
- 27 淡黄灰色粘質シルト
- 28 灰褐色砂質土 (小礫、石少し含む)
- 29 灰褐色砂質土 (こぶし大の石、小石多く含む)
- 30 灰褐色砂質土 (こぶし大 (栗石) の石非常に多く含む)
- 31 褐色土 (きめ細かく、砂を含み、こぶし大の石含む)
- 39 黄灰白色粘質土シルト (36縞状に含む)

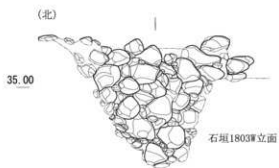
0 3m

第40図 2003-4地点 断面図1 (1/40)



第41図 2003-4地点 断面図2 (1/40)

0 1m



第42図 2003-5地点 遺構図 (1/60)

0 1m

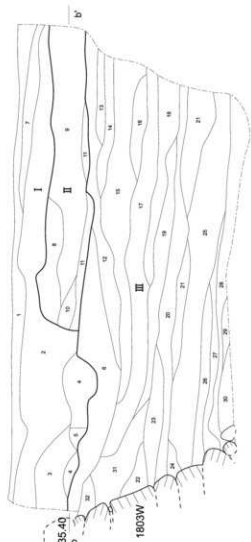
中央北壁



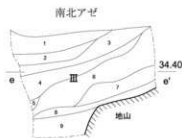
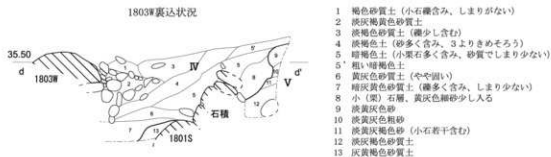
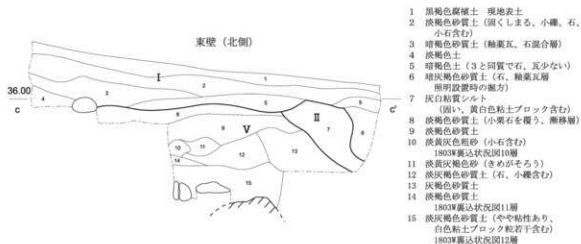
- 1 黒褐色腐植土 (現表土)
- 2 黒褐色腐植土 (1より繊維少ない) 旧表土
- 3 灰褐色土 (小礫、砂多く含む、二ホシ大の石少し入る)
- 4 暗褐色土 (石、細礫真多く入る)
- 5 淡褐色粘質土 (大きな石、灰色粘土ブロック多く入る)
- 6 暗褐色土 (砂、白色粘土ブロック多く含む、固くて重い)
- 7 暗褐色粘質土 (石、小礫多く含む、固くて重い)
- 8 暗褐色粘質土 (地山)

- 1 黒褐色腐植土 現地表
- 2 灰褐色粘質土
- 3 淡褐色粘質土 (石、小石、小礫多く含む)
- 4 褐色粘質土 (小石、黄色シルトブロック含む)
- 5 灰褐色砂
- 6 黄褐色粘砂 (白色シルトブロック含む)
- 7 淡灰褐色細砂
- 8 淡褐色粘質土
- 9 暗褐色粘質土
- 10 暗褐色粘質土
- 11 暗褐色粘質土
- 12 暗褐色粘質土
- 13 淡褐色粘砂 (小礫、小石多く含む)
- 14 黄褐色粘砂 (シルト)
- 15 黄褐色粘質土 (小礫、小石多く含む)
- 16 黄褐色粘質土 (礫石非常に多く含む)
- 17 淡灰黄色粘質土
- 18 淡褐色土+小礫 (小砂利、小石間)
- 19 淡灰黄色粘砂
- 20 小礫、小石層 (100の砂少し含む)
- 21 淡褐色粘砂 (白色シルトブロック含む)
- 22 暗褐色粘砂 (白色シルトブロック含む)
- 23 暗褐色粘砂 (少し入るが、砂のきめがそろろう)
- 24 褐色粘質土
- 25 淡茶褐色粘砂 (暗褐色粘砂含む)
- 26 黄褐色粘質土 (小石多く含む)
- 27 黄褐色粘質土 (やや粘性ある)
- 28 褐色粘砂 (石、小石多く含む、しまり少ない)
- 29 黄褐色粘砂 (きめがそろろう)
- 30 暗褐色粘砂 (バイラン土、石多く含む、重い)
- 31 褐色粘砂 (きめがそろっている)
- 32 黄褐色粘砂 (白色シルトブロック、小石多く含む)

南壁



第43図 2003-5地点 断面図1 (1/40)



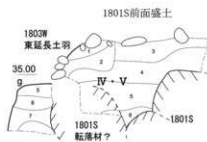
- 1 淡黄褐色砂 (石、礫含む)
- 2 淡灰黄褐色砂
- 3 淡褐色粗砂+小石 (白色シルトブロック含む)
- 4 褐色砂質土 (細かい白色シルトブロック含む)
- 5 灰褐色粗砂 (小礫多く含む)
- 6 淡褐色砂質土 (細かい白色シルトブロック少し入る)
- 7 淡褐色粗砂
- 8 淡褐色粗砂 (小礫、小石多く含む、しまり少ない)
- 9 灰褐色粗砂 (礫、石含む、固くしまる)



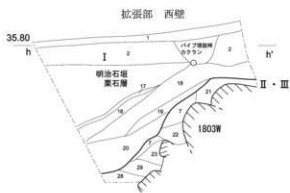
- 1 淡褐色砂質土 (小石を含み固くしまる)
- 2 淡褐色砂質土 (小礫を含み、1より砂多い)
- 3 褐色砂質土 (小(梁)石層) 石積を覆う小(梁)石層
- 4 灰白色砂質土 (地山)

第44図 2003-5地点 断面図2 (1/40)

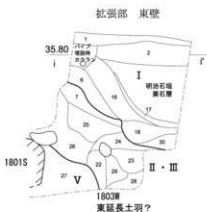
0 1m



- 1 淡黄褐色粘質土
- 2 暗褐色土夾石層
- 3 黄灰褐色砂質土 (砂、小礫、小石多く含む)
- 4 黄灰褐色砂質土 (3より粒子細かい)
- 5 灰黄色細砂 (小礫少し入る)
- 6 灰黄色粗砂 (小石、小礫非常に多い)
- 7 灰黄色細砂 (5より粒子細かい)

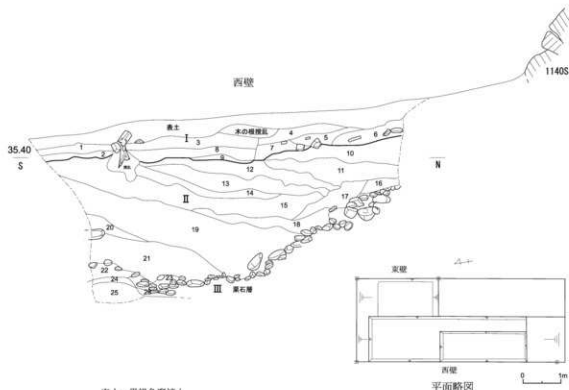


- 1 黒褐色腐植土 現地表土
- 2 淡褐色砂質土 (固くしまる、小礫、石、小石含む)
- 6 暗灰褐色砂質土 (石、軸梁瓦層、照明設置時の掘方)
- 7 灰白粘質シルト (固い、黄白色粘土ブロック含む)
- 16 黄褐色細砂
- 17 暗褐色粘質土 (砂多く含む、栗石層の床土か)
- 18 黄灰褐色砂質土 (小礫多く含む、16より粗い)
- 19 灰黄色粗砂
- 20 灰褐色粗砂
- 21 淡褐色粘質土
- 22 暗褐色土 (軟い)
- 23 明褐色粗砂 (小石多く含む、固い)
- 24 灰褐色土 (白色粘土粒、小石含む、固い)
- 25 灰白色細砂 (黄色砂多く含む)
- 26 明褐色土 (小石含む、軟い)
- 27 黄灰砂質土 (やや固くしまる)
- 28 黄褐色土 (黄色土の小ブロック含む、御花畑造成時の盛土か)
- 29 黄色土 (やや粘性あり、小石、白色土ブロック含む)
- 30 栗石層+灰黄褐色砂



第45図 2003-5地点 断面図3 (1/40)

0 1m



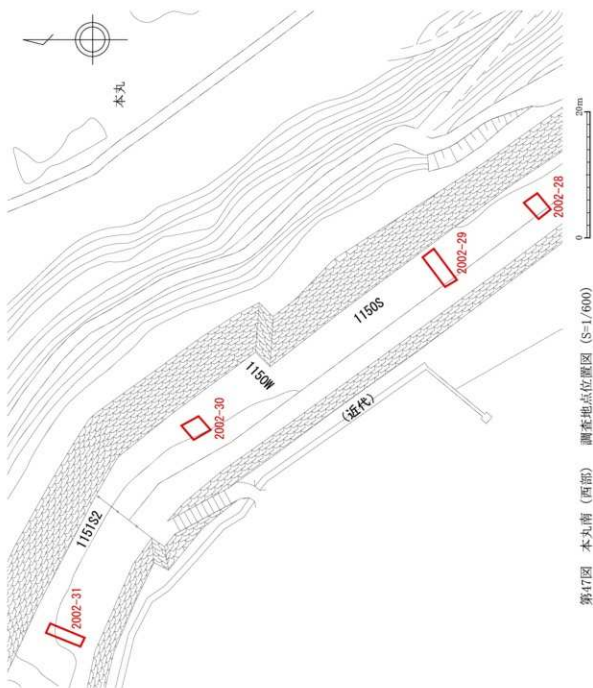
表土 黒褐色腐植土

- 1 淡褐色砂質土 (しまり少ない) 旧表土か?
- 2 淡灰褐色土 (ややしまっている) 旧表土か?
- 3 褐色砂質土 (焼土粒、炭化物粒含む、石、瓦含み、しまり少ない) 杉根の覆土か?
- 4 黄褐色砂質土 (ややしまりあり)
- 5 褐色砂質土
- 6 黄褐色粘質土 (しまっている)
- 7 黄褐色土 (砂多く含む、炭化物含む、しまりあり)
- 8 暗褐色粘質土 (炭粒、灰色粘土ブロック含む)
- 9 黄褐色粘質土 (6に類似)
- 10 黄褐色シルト (灰色、白色、黄色粘土ブロック、小石含む)
- 11 灰褐色粘質土 (灰色、白色、黄色粘土ブロック、黄色粗砂多く含む)
- 12 灰褐色粘質土 (11より粘土ブロック、粗砂ブロック大きい)
- 13 灰褐色粘質土 (黄色粗砂、灰色粗砂多く含む)
- 14 灰褐色粘質土 (粗砂の混じり少ない、白色、灰色粘土ブロック多い)
- 15 灰褐色粘質土 (灰色、白色粘土、白色シルト、黄色粗砂ブロック含む)
- 16 黄灰色粘質土 (粗砂多く含む)
- 17 灰色粘質土 (白色粘土ブロック、灰色シルトブロック、暗褐色粘土ブロック、大きな塊で混じる)
- 18 灰色シルトと灰褐色粘質土ブロックの混成層
- 19 黄褐色砂質土 (黄色粗砂、灰色シルトブロック多く含む、褐色粘土ブロック含む)
- 20 暗灰褐色粘質土
- 21 灰色砂質土 (黄色粗砂、灰色シルトブロック含む)
- 22 黄色粗砂+果石 (果石漸移層)
- 23 灰色粘質土 (粗砂多く含む) (果石漸移層)
- 24 灰色粗砂 (地山由来)
- 25 黄色粗砂 (小石、砂多く含む、黒褐色土ブロック、白色粘土ブロック含む) (地山由来)
- 26 黄色粘質土 (小石、砂含む、固くしまる) 果石設置のための貼床か?

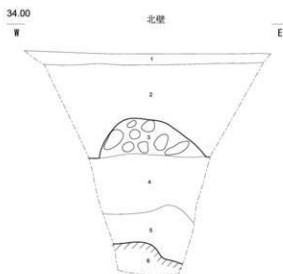
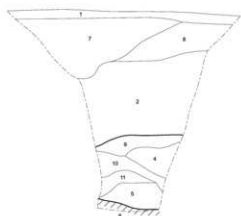
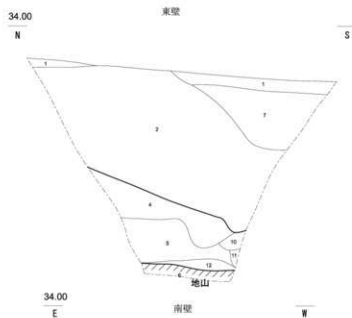


- 1 淡褐色粘質土
- 2 淡褐色土 (覆土か?)
- 3 淡褐色粘質土 (シルト多く含む)
- 4 黄褐色粘質土 (西壁の6に相応)

第46図 2002-27地点 遺構図 (断面1/50、平面略図1/100)



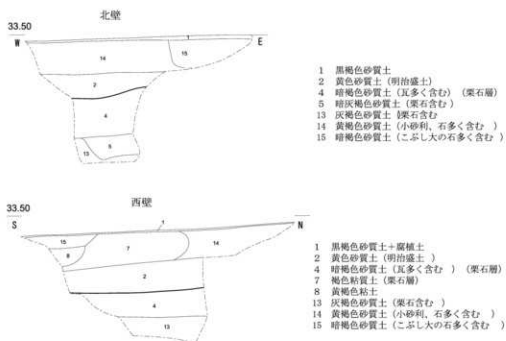
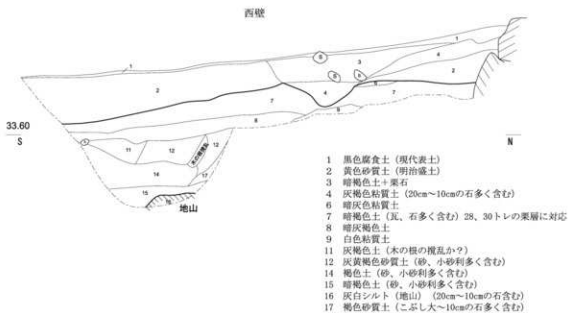
第47図 本丸南（西部）調査地点位置図（S-1/600）

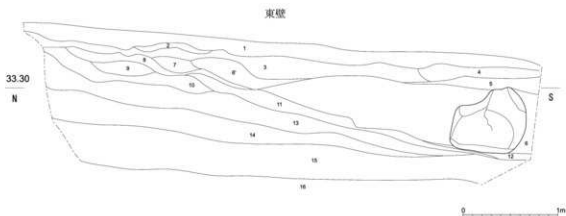


- 1 黒褐色砂質土 (表土)
- 2 黄色砂質土 (砂利、小礫多い、しまりなし) (明治盛土)
- 3 褐色土+栗石
- 4 暗褐色砂質土 (瓦、栗石多く含む) (栗石層)
- 5 暗灰褐色砂質土
- 6 灰白シルト (地山)
- 7 褐色粘質土 (栗石層)
- 8 黄褐色粘質土 (灰粘粘土ブロック含む)
- 9 黄灰褐色砂質土
- 10 灰黄褐色砂質土
- 11 暗褐色砂質土
- 12 暗灰褐色砂質土

第48図 2002-28地点 断面図 (1/40)

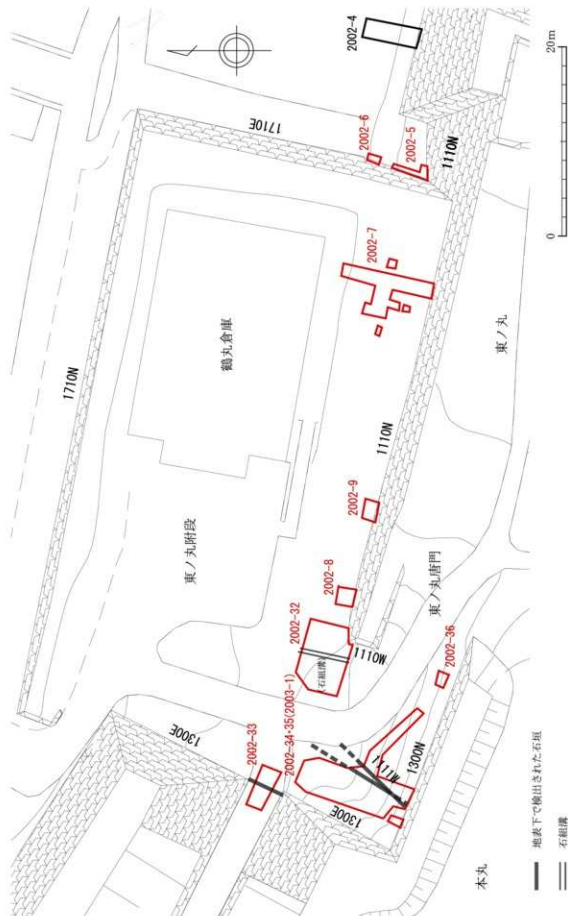
0 1m



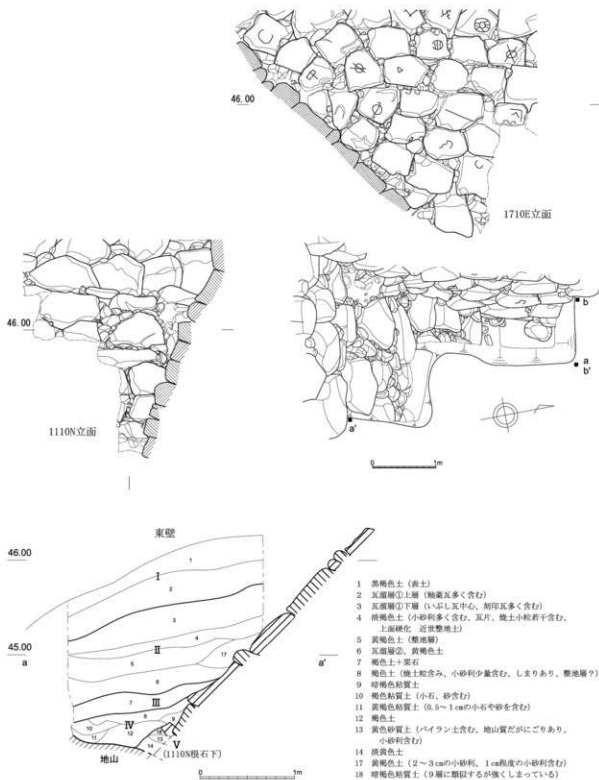


- 1 黒褐色砂質土 (表土層)
- 2 灰色砂質土
- 3 灰黄褐色粘質土 (炭粒、焼土粒まばらに混入)
- 4 濃暗灰色粘質土+3
- 5 黄褐色粘質土 (赤褐粘土ブロック混) 28地点南壁8と対応
- 6 栗石層 (6' と異なり殆ど栗石だけで、隙間に土なし)
- 7 暗灰色砂質土+栗石
- 8 濃暗灰色砂質土 (黄褐色粘質土ブロック混入)
- 9 暗灰色粘質土+黄褐色粘質土 (焼土粒、炭粒含む)
- 10 濃暗灰色粘質土
- 11 濃黄茶褐色粘質土 (暗灰色粘質土混入)
- 12 灰色粘質土
- 13 濃暗灰色粘質土 (焼土粒、炭粒比較的多く含む)
- 14 暗灰色砂質土 (1cm程度の小石、焼土粒、炭粒含む)
- 15 暗褐色砂質土 (栗層、瓦多く含む) 30地点北壁4と対応
- 16 暗灰色粘質土

第50図 2002-31地点 断面図 (1/40)

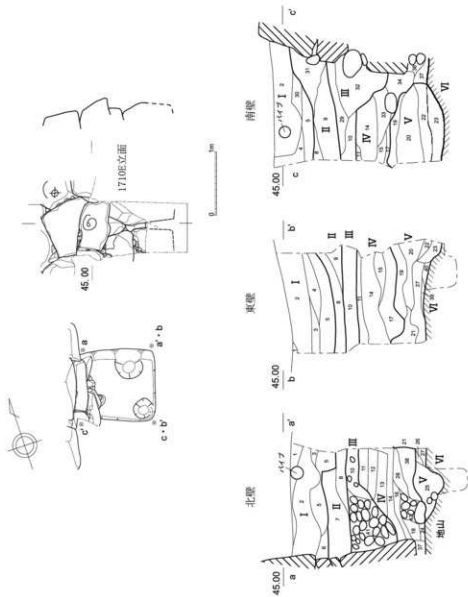


第51図 東ノ丸附段・東ノ丸唐門 調査地点等位置図 (S=1/400)

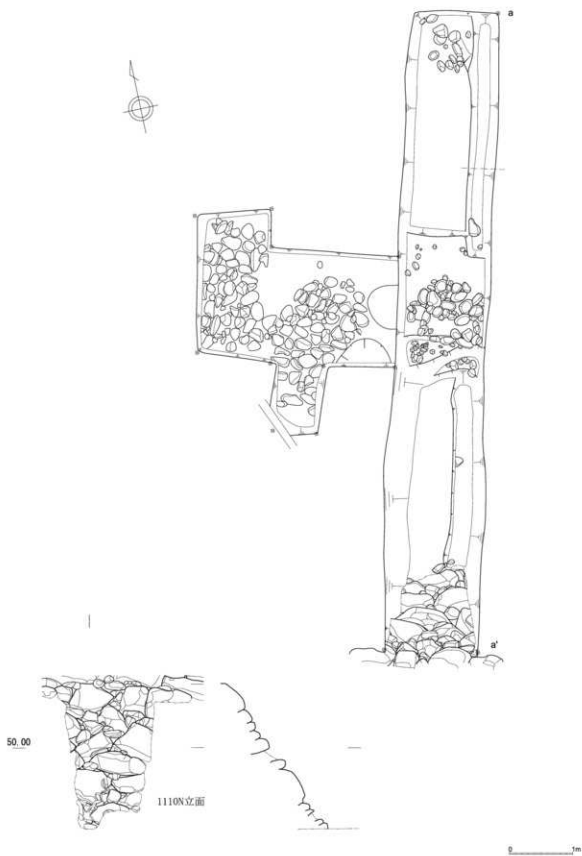


第52図 2002-5地点 遺構図(断面1/40、平面・立面1/40)

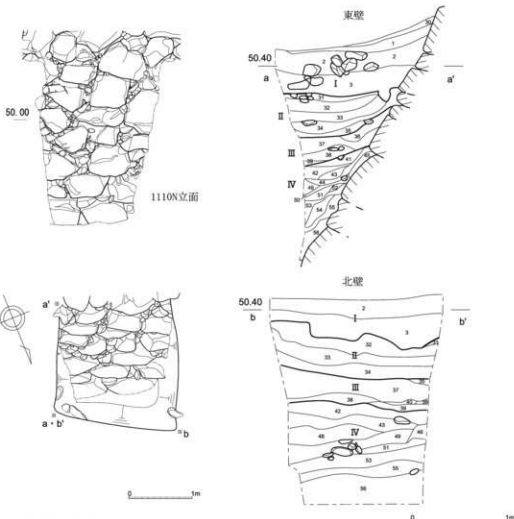
- 1 灰色粗砂
- 2 黒褐色粘質土
- 3 黒褐色砂質土
- 4 明灰褐色土 (K, 3~5cmの石含む)
- 5 瓦・灰褐色土 瓦面①
- 6 暗褐色粘質土・礫石
- 7 黄褐色土 (小石、小砂利多く含む) 近世整地面
- 8 明褐色土 (小石、小砂利多く含む、上面硬化)
- 9 暗褐色砂質土・瓦 瓦面②
- 10 暗褐色粘質土・礫石
- 11 黄褐色土
- 12 暗褐色土
- 13 暗褐色粘質土
- 14 暗褐色砂質土
- 15 暗褐色粘質土
- 16 暗褐色砂質土
- 17 暗褐色土 (黄色粘土粒 (地山層)、小石含む)
- 18 暗褐色土 (砂、小石多く含む)
- 19 黄褐色粘質土 (砂、小石、ハイラン土粒多く含む)
- 20 暗褐色粘質土 (19層のフロクタ、地山フロクタ、砂含む)
- 21 暗褐色シルト (大きなハイラン土粒含む、27層と同層)
- 22 暗褐色粘質土 (砂、小石)
- 23 暗褐色粘質土 (砂、小石)
- 24 暗褐色土 (砂、小石含む)
- 25 暗褐色粘質土 (砂、小石含む)
- 26 暗褐色シルト (砂含む固い、地山由来)
- 27 暗褐色シルト (砂多く含む、固くしまる、地山由来)
- 28 暗褐色粘質土 (砂、小石、小砂利多く含む)
- 29 暗褐色粘質土 (瓦、灰を含む)
- 30 暗褐色粘質土 (瓦、灰を含む)
- 31 礫石、瓦含む
- 32 礫石 (明灰礫粗砂)
- 33 暗褐色粘質土 (ハイラン土、腐食石片多く含む)
- 34 暗褐色粘質土 (砂、小石、小砂利多く含む)
- 35 暗褐色粘質土 (炭化層、粘土粒少量、砂多く含む)
- 36 暗褐色土 (砂利多く含む)
- 37 暗褐色粘質土 (小砂利、小粒のハイラン土粒含む)
- 38 暗褐色粘質土
- 39 暗褐色粘質土
- 40 暗褐色砂 (強くしまる)
- 41 礫石
- 42 礫石



第53図 2002-6地点 遺構図 (断面1/40、平面・立面1/60)

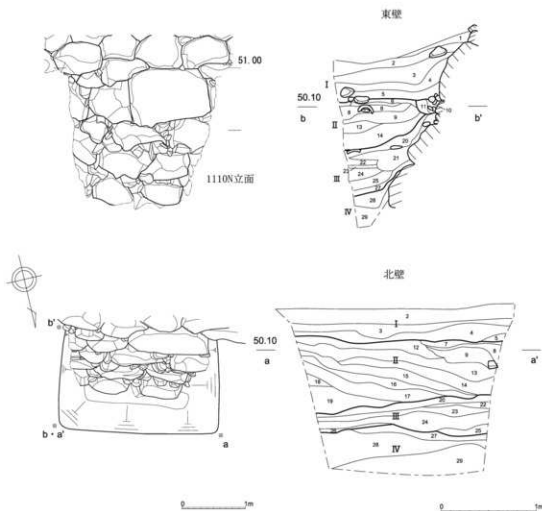


第54图 2002-7地点(主要部) 遺構図 (1/60)



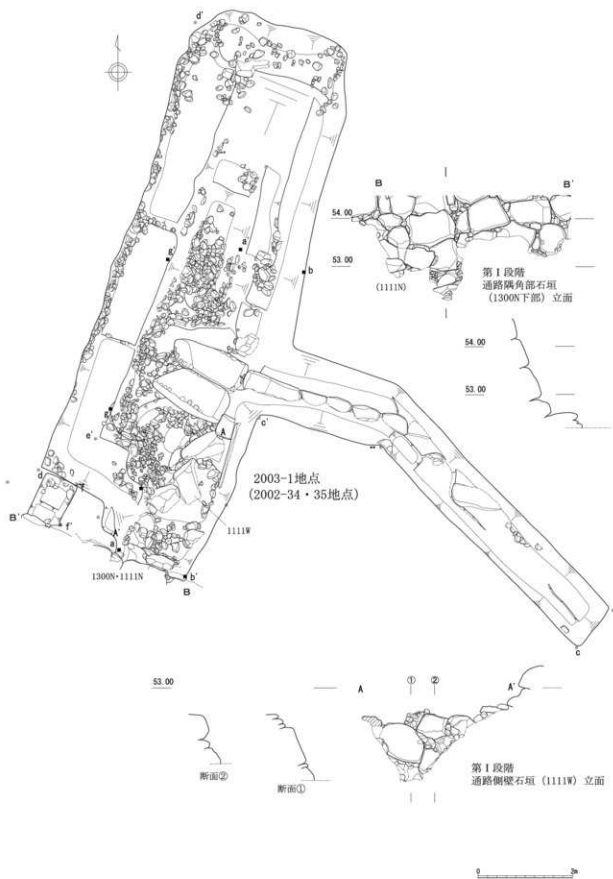
- 1 暗灰色土 (表土)
- 2 黄褐色砂質土 (やや粘性あり、10~20cm大の礫多く混入) 近代以降の盛土層
- 3 暗褐色砂質土 (5~10cm大の礫石多く混入) 近代以降の盛土層
- 30 黄褐色土 (表土上に盛られた最近の層)
- 31 暗灰褐色粘質土
- 32 濃灰褐色粘性のある砂質土 (褐色粘土ブロック)
- 33 濃灰褐色粘性のある砂質土 (炭粒及び灰褐色粘土ブロック、10cm未満の小石混入)
- 34 濃暗褐色粘性のある砂質土 (灰褐色粘土ブロック混入)
- 35 濃暗灰褐色砂質土
- 36 暗灰褐色砂質土 (炭粒、焼土粒少量混入)
- 37 灰褐色砂質土 (やや粘性あり、5~20cm大の礫が混入)
- 38 灰褐色粘性のある砂質土
- 39 黒灰色シルト (第9地点の26層に対応する可能性が高い)
- 40 濃暗灰褐色砂質土 (やや粘性あり、焼土粒、炭粒混入)
- 41 濃赤褐色砂質土 (やや粘性あり)
- 42 濃淡灰褐色砂質土 (炭粒及び淡褐色粘土ブロック混入)
- 43 暗灰色砂質土
- 44 暗青灰色砂質土 (粒子細かく揃う、やや粘りあり、上面は鉄分の沈着によるものか、茶褐色を呈する)
- 45 茶褐色粘土 (わざと石垣際に貼り付けたものか)
- 46 灰褐色砂質土 (やや粒子粗い)
- 48 暗灰色粘質土 (5cm未満の小石、炭粒混入)
- 49 灰褐色粘質土 (10cm未満の石多く混入)
- 50 灰茶褐色粗砂 (粒子やや細かい)
- 51 灰褐色砂質土 (やや粘性あり)
- 52 濃灰褐色粘質土
- 53 濃暗褐色灰色粘質土
- 54 灰茶褐色粘質土
- 55 濃淡灰褐色粘質土
- 56 暗褐色粘質土 (10cm未満の小石多く混入)

第56図 2002-8地点 遺構図 (断面1/40、平面・立面1/60)

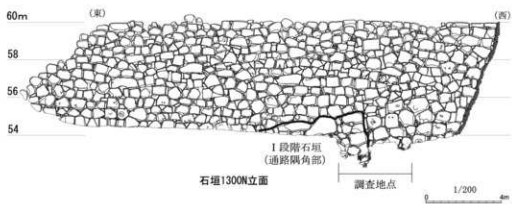
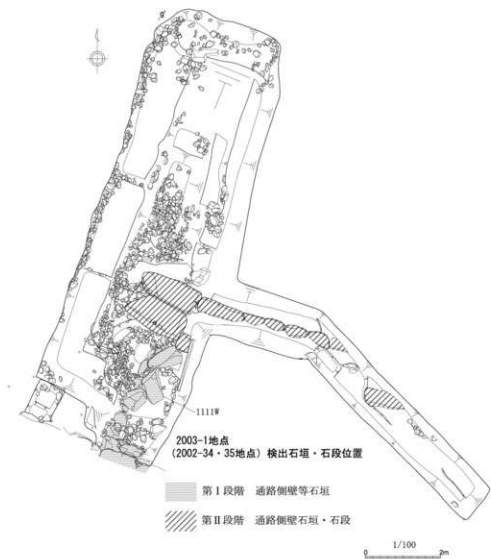


- 1 暗灰色土（表土）近代以降の盛土
- 2 黄褐色砂質土（やや粘性あり、10～20cm大の礫多く混入）近代以降の盛土
- 3 暗褐色砂質土（5～10cm大の砂石多く混入）近代以降の盛土
- 4 暗灰色砂質土（明治以降の表土？）近代以降の盛土
- 5 灰色砂質土（やや粘りあり、2～10cm大の礫比較的多く混入）近代以降の盛土
- 6 暗褐色粘質土（近世の遺構面）
- 7 暗褐色粘質土（少量の焼土、炭粒含む）
- 8 黄褐色粘質土（炭粒少量含む、他の層と比して瓦片が多い）
- 9 黄褐色粘質土（5cm未満の小石、瓦を含む）
- 10 灰色砂質土（10cm未満の小石多く含む、第5層から掘り込んだもの）
- 11 黄褐色粘質土（第5層から掘り込み、第20層を掘り込んでいるため、第20層の濁った色となっている）
- 12 暗褐色砂質土（やや粘性あり、5cm未満の小石を含む）
- 13 暗褐色粘質土（ごく少量の焼土粒、炭粒混入）
- 14 黄褐色砂質土（5～20cm大の礫多く含む）
- 15 黄褐色砂質土（やや粒子粗い）
- 16 15層よりやや明るい
- 17 黄褐色粘質土（5cm未満の小石が充填する層）
- 18 黄褐色粘質土（炭褐色粘土ブロック混入）
- 19 暗褐色粘質土（5cm未満の小石が充填）
- 20 黒灰色シルト（火災に伴う灰層の可能性あり、サンプル採取）
- 21 灰色砂質土（やや粘性あり、5～20cm大の礫多く含む）
- 22 黄褐色粘質土（茶褐色粘質土ブロック混入、固くしまる）
- 23 暗褐色粘質土（少量の焼土層、炭粒を含む、固くしまる）
- 24 23層より黄土粒多く混入、5～20cm大の礫混入）
- 25 暗褐色砂質土（比較的に粗い）
- 26 黒灰色シルト（第20層よりも黒い）
- 27 焼灰色細砂
- 28 黄褐色粘質土（やや粒子粗い、10cm未満の小石含む）
- 29 28+灰色粘質土ブロック

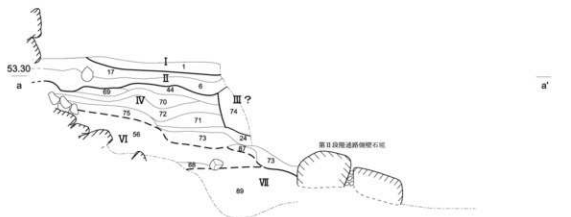
第57図 2002-9地点 遺構図（断面1/40、平面・立面1/60）



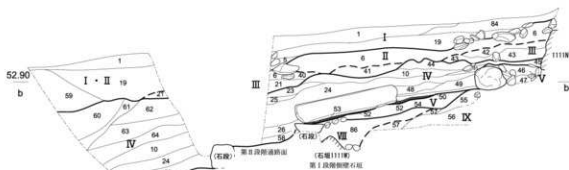
第58图 2003-1 (2002-34・35) 遺構図 (S=1/80)



第59図 2003-1 (2002-34・35) 地点 検出石垣等位置・石垣立面図 (1/100・1/200)



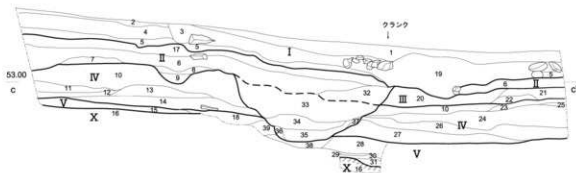
- 1 黄褐色土 (公園整備盛土)
- 6 暗灰褐色粘性のある砂質土 (焼土粒、炭粒ごく少量混入、5~20cm大の石多く含む)
- 17 暗灰褐色粘性のある砂質土 (焼土粒、炭粒少量だが含む)
- 24 暗灰褐色粘性のある砂質土 (全体に炭粒[やや大きく2~3cmほどの塊もある]、焼土が混入する暗い色の層)
- 44 10+灰褐色砂質土
- 56 栗石層
- 69 暗灰褐色粘性のある砂質土 (炭粒、焼土粒含む)
- 70 24より焼土粒多く含む
- 71 24より焼土粒多く含むため、全体に赤味を帯びる、灰黄褐色粘質土ブロック混入
- 72 暗灰色砂質土 (炭粒多く含む、黒い)
- 73 濁暗灰色砂質土+灰黄褐色砂質土 (粒子やや粗い)
- 74 濁暗灰色砂質土 (焼土粒、炭粒、20cm未満の石混入) 遺構埋土
- 87 暗灰色粘性のある砂質土 (固くしまる)
- 88 濁暗灰色粗砂 (炭粒等橙褐色粘質土ブロック混入)
- 89 栗石層 (石列前面の栗石、灰褐色粗砂若干含む)



- 1 黄褐色土 (公園整備盛土)
- 5 暗灰色砂質土 (造成前の旧表土、粒子細かい、混ざり物なし)
- 6 暗灰褐色粘性のある砂質土 (焼土粒、炭粒ごく少量混入、5~20cm大の石多く含む)
- 10 濁黄褐色粘質土 (炭粒及び、橙褐色粘土ブロック混入)
- 19 雜層 (10~30cm大の川原石及び卵石充満層、隙間には暗灰色粘質土)
- 21 濁暗灰色粘性のある砂質土 (炭粒、5cm未満の玉石含む層)
- 23 濁暗灰色粘質土 (10層混入)
- 24 暗灰色粘性のある砂質土 (全体に炭粒[やや大きく2~3cmほどの塊もある]、焼土が混入する暗い色の層)
- 25 濁暗灰色砂質土 (炭粒、2cm大の小石混入)
- 26 濁灰黄褐色粘性のある砂質土
- 40 濁灰褐色粘性のある砂質土
- 41 灰褐色砂質土 (5cm大の石含む)
- 42 灰粘質土 (粒子細かく、しっとりしている、褐色粘質土層状に混入)
- 43 暗褐色粘質土
- 44 10+灰褐色砂質土
- 45 灰褐色砂質土 (全体に焼土混入し赤味を帯びている)
- 46 暗褐色粘質土
- 47 明灰褐色粘質土
- 48 暗灰色砂質土 (2~3cm大の石混入)
- 49 淡褐色粘質土 (粒子細かくしっとりしている)
- 50 淡褐色粗砂 (27と対応の可能性あり)
- 51 灰褐色砂質土 (黄褐色粘土ブロック、焼土粒、炭粒混入)
- 52 暗褐色粘質土 (焼土、炭粒含む、全体に赤味を帯びる)
- 53 2より焼土少ない
- 54 暗褐色粘性のある砂質土 (灰褐色粘質土ブロック、1~2cm大の石混入、固くしまる)
- 55 濁灰色粗砂
- 56 栗石層
- 57 灰黄褐色粘性のある砂質土
- 58 濁暗灰色砂質土 (炭粒、焼土粒混入) 寛永8年大火時の焼土層
- 59 濁暗灰色砂質土 (もろくて崩れやすい、粒子細かい)
- 60 黄褐色細砂
- 61 濁暗灰色砂質土 (雜物質多く混入し、旧表土であろう)
- 62 灰黄褐色砂質土 (2~10cmの石混入、固くしまる)
- 63 濁暗灰色砂質土 (炭粒、瓦片、小石まばらに混入、比較的やわらかい)
- 64 濁暗灰色砂質土 (炭粒混入、粘りがなくもろく崩れやすい)
- 66 灰褐色粘性のある砂質土
- 84 灰褐色砂質土
- 86 栗石層 (灰褐色砂質土が入る)

第60図 2003-1 (2002-34・35) 地点 断面図1 (1/50)

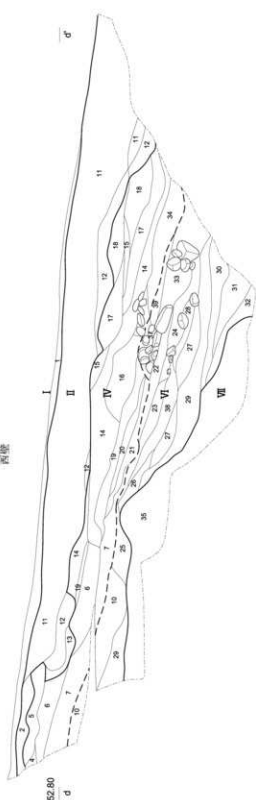
0 1m



- 1 黄茶褐色土 (公園整備盛土)
- 2 暗灰色砂質土 (表土)
- 3 澱暗灰色砂質土 (1 造成前の表土層)
- 4 灰褐色粘性のある砂質土
- 5 暗灰色砂質土 (4 造成前の旧表土層、粒子細かく、混ざりものなし)
- 6 暗灰褐色粘性のある砂質土 (焼土粒、炭粒ごく少量混入、5~20cm大の石多く含む)
- 7 暗灰褐色粘質土 (少し焼土及び炭粒混入)
- 8 灰褐色砂質土 (やわらかい)
- 9 灰褐色砂質土 (茶褐色粘土ブロック、10~20cm程度の石混入)
- 10 澱黄褐色粘質土 (炭粒及び橙褐色粘土ブロック混入)
- 11 澱暗灰褐色粘性のある砂質土 (炭粒混入)
- 12 澱黄褐色粘質土 (固くしまる、5~20cm程度の石混入)
- 13 暗灰色粘性のある砂質土 (10cm前後の石多く混入)
- 14 灰褐色砂質土 (しまりない、2~20cm大の石多く混入)
- 15 暗灰色粘質土 (2m付近は層は薄いのが全体に黒い、1.2m以東はやや層が厚くなり、茶褐色粘質土ブロック及び焼土粒混入、固くしまる)
- 16 茶褐色粘質土 (地山層)
- 17 暗灰褐色粘性のある砂質土 (焼土粒、炭粒少量だが含む)
- 18 澱暗灰色粘質土 (固くしまる、15より黒くない、20cm大の小石や茶褐色粘土ブロック混入)
- 19 礫層 (10~30cm大の川原石及び割石充滿層、隙間には暗灰色粘質土)
- 20 灰褐色砂質土
- 21 澱暗灰褐色粘性のある砂質土 (炭粒、5cm未満の玉石含む層)
- 22 暗灰色粘性のある砂質土 (5cm未満の小石混入)
- 23 澱暗灰色粘質土 (10層混入)
- 24 暗灰色粘性のある砂質土 (全体に炭粒[やや大きく2~3cmほどの塊もある]、焼土が混入する暗い色の層)
- 25 澱灰褐色砂質土 (炭粒、2cm大の小石混入)
- 26 澱灰黄褐色粘性のある砂質土
- 27 褐灰色砂 (2cm大の小石まばらに混入)
- 28 澱黒灰色粘質土 (2cm大の小石、茶褐色粘土ブロック混入、炭層) (層の表面固くしまる炭層及び焼土が確認される)
- 29 淡灰褐色粘質土 (固くしまる)
- 30 澱淡灰褐色粘質土 (黒灰色土が混入)
- 31 黒灰色灰層 (粒子細かく、混入物なし、しっとりしている)
- 32 澱淡灰褐色粘性のある砂質土 (炭粒、2cm大の小石混入、灰黄褐色粘質土ブロック混入)
- 33 澱暗灰褐色粘性のある砂質土 (灰黄褐色粘質土ブロック混入)
- 34 澱暗灰色粘性のある砂質土 (橙褐色粘質土ブロック、炭粒混入)
- 35 黒灰色灰層+暗灰色粘質土、橙褐色粘質土ブロック
- 36 暗灰色粘性のある砂質土+黒灰色灰層 (35は黒灰色の割合が高く、36は暗灰色の割合が高い)
- 37 暗灰色粘性のある砂質土+灰褐色粘質土
- 38 澱灰褐色砂質土 (炭粒混入、やや粘りあり)
- 39 暗灰色砂質土 (もろく崩れやすい、1cm大の小石多く混入)

0 1m

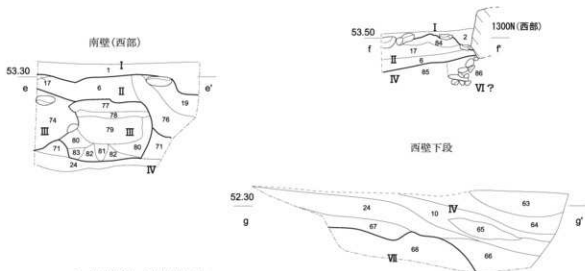
第61図 2003-1 (2002-34・35) 地点 断面図2 (1/60)



52.80
d

- | | |
|---|---|
| <p>1 洪積土 (現代の礫土)</p> <p>2 洪積土 (大小の礫多く含む) 東石層上の礫層</p> <p>3 洪積土 (大小の礫多く含む)</p> <p>4 洪積土 (小石含む)</p> <p>5 洪積土 (礫多量含む)</p> <p>6 洪積土 (礫多量含む)</p> <p>7 洪積土 (礫多量含む)</p> <p>8 洪積土 (礫多量含む)</p> <p>9 洪積土 (礫多量含む)</p> <p>10 洪積土 (礫多量含む)</p> <p>11 洪積土 (礫多量含む)</p> <p>12 洪積土 (礫多量含む)</p> <p>13 洪積土 (礫多量含む)</p> <p>14 洪積土 (礫多量含む)</p> <p>15 洪積土 (礫多量含む)</p> <p>16 洪積土 (礫多量含む)</p> <p>17 洪積土 (礫多量含む)</p> <p>18 洪積土 (礫多量含む)</p> <p>19 洪積土 (礫多量含む)</p> <p>20 洪積土 (礫多量含む)</p> <p>21 洪積土 (礫多量含む)</p> | <p>22 洪積土 (礫多量含む)</p> <p>23 洪積土 (礫多量含む)</p> <p>24 洪積土 (礫多量含む)</p> <p>25 洪積土 (礫多量含む)</p> <p>26 洪積土 (礫多量含む)</p> <p>27 洪積土 (礫多量含む)</p> <p>28 洪積土 (礫多量含む)</p> <p>29 洪積土 (礫多量含む)</p> <p>30 洪積土 (礫多量含む)</p> <p>31 洪積土 (礫多量含む)</p> <p>32 洪積土 (礫多量含む)</p> <p>33 洪積土 (礫多量含む)</p> <p>34 洪積土 (礫多量含む)</p> <p>35 洪積土 (礫多量含む)</p> |
|---|---|

第62図 第2003-1 (2002-34・35) 地点 断面図 3 (1/50)

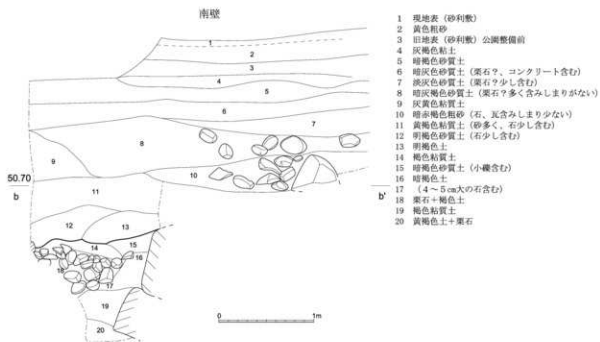
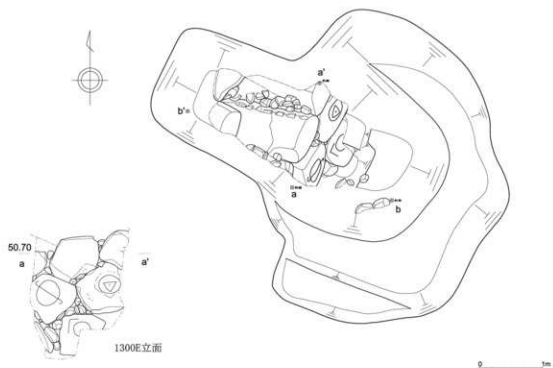


- 1 黄茶褐色土 (公團整備盛土)
- 2 暗灰色砂質土 (表土)
- 6 暗灰褐色粘性のある砂質土 (焼土粒、炭粒ごく少量混入、5~20cm大の石多く含む)
- 10 濁黄褐色粘質土 (炭粒及び暗褐色粘土ブロック混入)
- 17 暗灰褐色粘性のある砂質土 (焼土粒、炭粒少量だが含む)
- 19 礫層 (10~30cm大の川原石及び割石充満層、隙間には暗灰色粘質土)
- 24 暗灰色粘性のある砂質土 (全体に炭粒[やや大きく2~3cmほどの塊もある]、焼土が混入する暗灰色の層)
- 63 濁黒灰色砂質土 (炭粒、瓦片、小石まばらに混入、比較的やわらかい)
- 64 濁黒灰色砂質土 (炭粒混入、粘りがなく、もろく崩れやすい)
- 65 暗灰色粘性のある砂質土 (炭粒混入)
- 66 灰褐色粘性のある砂質土
- 67 淡灰褐色粘性のある砂質土
- 68 栗石層
- 73 濁暗灰色砂質土+灰黄褐色砂質土 (粒子やや粗い)
- 74 濁暗褐色灰色砂質土 (焼土粒、炭粒、20cm未満の石混入) 遺構埋土
- 76 暗灰色砂質土 (5~10cm大の河原石混入)
(19と同時に形成されたと考えられる新しい時期の攪乱)
- 77 黒灰色細砂 (粒子非常に細かく、湿気あり、戻層か)
- 78 77より更に細かい
- 79 1~5cmの石充満層
- 80 暗黒灰色細砂 (77と同様の状況、戻層か)
- 81 80+82 (82の中に80のブロックが混入している)
- 82 淡茶褐色粘質土 (粒子細かく、湿気あり、地山層と近似した土)
- 83 暗灰色粘質土 (80+82)
- 84 灰黄褐色粘性のある砂質土
- 85 灰褐色粘性のある砂質土 (炭粒、焼土粒含む)
- 86 栗石層

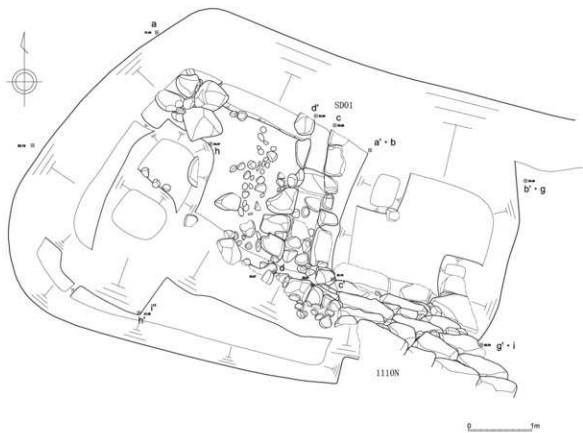
遺構埋土

第63図 2003-1 (2002-34・35) 地点 断面図4 (1/40)

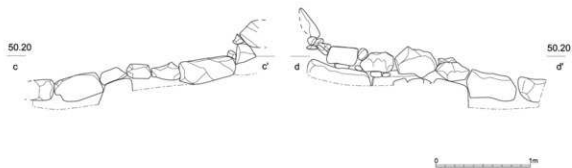
0 1m



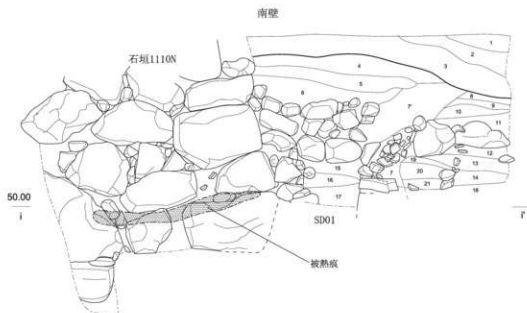
第64図 2002-33地点 遺構図(断面1/40、平面・立面1/60)



石組構SD01立面



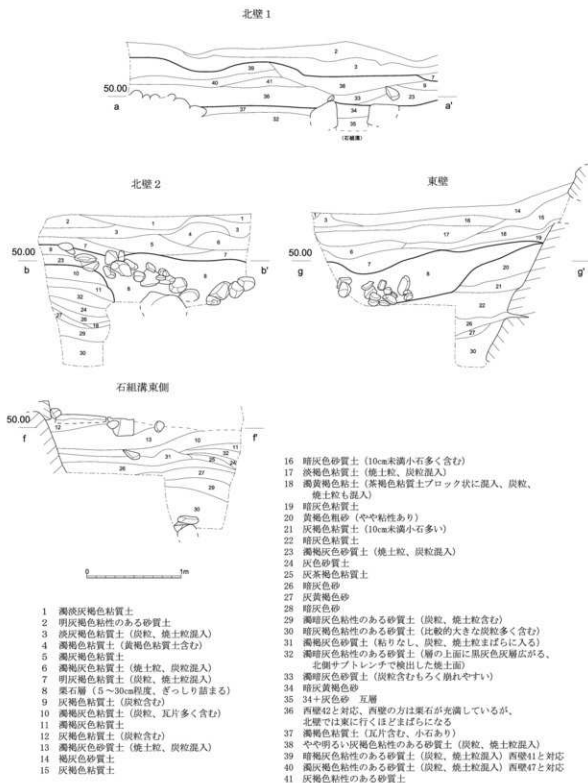
第65図 2002-32地点 遺構図（立面1/40、平面1/60）



- 1 黄褐色粗砂
- 2 黄灰色粗砂
- 3 淡褐灰色粘質土 (1~20cm大の小石含む、炭粒まばらに含む)
- 4 3より砂質分少なく粘質が高い
- 5 灰褐色粘性のある砂質土 (炭粒、焼土粒まばらに含む)
- 6 5よりやや明るい
- 7 濁褐灰色粘性のある砂質土 (10cm程度の小石、瓦多量に含む、炭粒、焼土粒まばらに含む)
- 7' 瓦片も含むが、2~10cmの玉石を多く含む
- 8 7とほぼ同様、ただし瓦は断面には見られない (5~20cm大の石多く含む)
- 9 濁褐灰色粘性のある砂質土 (5~20cm大の石多く含む)
- 10 濁褐灰色粘質土 (炭粒、焼土粒多く含む、5~20cm大の石多く含む)
- 11 暗灰褐色粘質土 (炭粒、焼土粒混入)
- 12 灰色粘性のある砂質土 (焼土、炭粒含む、10ほどではないが赤味がかる)
- 13 濁灰色粘質土 (黄褐色砂ブロック状にまばらに含む、炭粒含む)
- 14 濁暗灰色粘質土 (炭粒多く混入、黒い)
- 15 濁灰褐色粘性のある砂質土
- 16 灰色粘土+灰色粗砂
- 17 淡灰色細砂 (鉄分が層状に堆積した様相を示す)
- 18 濁褐灰色粘質土 (粗砂多く含む) 東壁2と対応
- 19 濁暗灰色粘質土 (黄褐色粘土ブロック混入)
- 20 灰褐色細砂 (5cm大の河原石入る)
- 21 灰褐色砂質土 (炭粒混入、焼土粒のため全体が赤味帯びる)

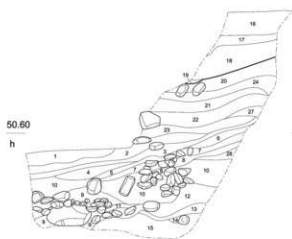
0 1m

第66図 2002-32地点 断面図1 (S=1/40)

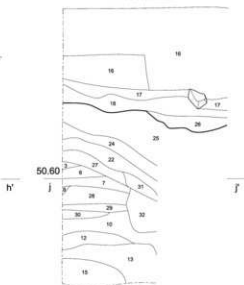


第67図 2002-32地点 断面図2 (S=1/40)

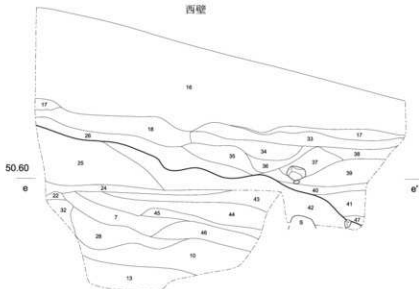
西側断割東壁



西側断割南壁



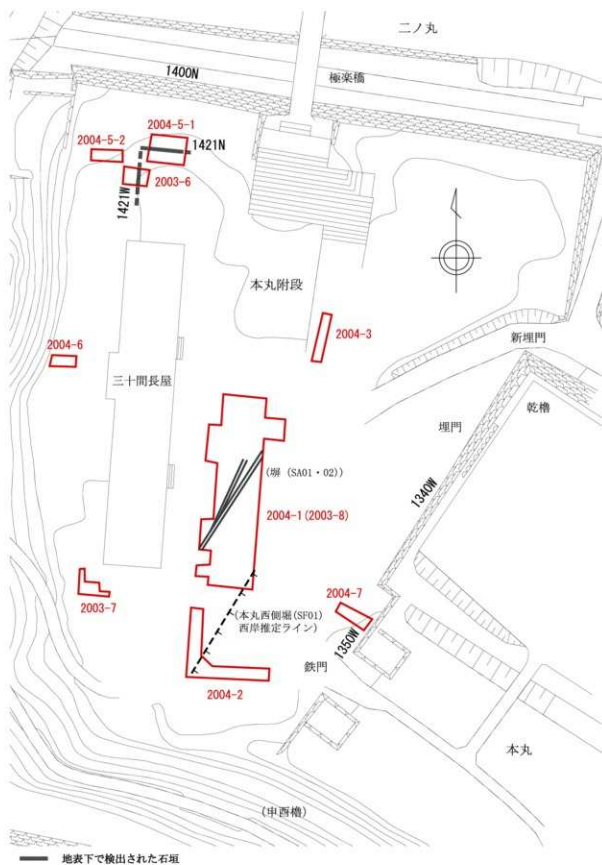
西壁



- | | |
|--|---|
| <p>1 灰褐色粘質土 (炭粒混入、瓦の広がりが確認された層)</p> <p>2 褐色粘質土 (粗砂、炭粒多く混入)</p> <p>3 暗灰色粘質土 (炭層)</p> <p>4 灰色砂質土 (5cm程度の粗砂多く混入)</p> <p>5 暗灰色粘質土 (3より粗くない)</p> <p>6 褐色粘質土 (10cm大の石あり、灰色砂、炭粒混入)</p> <p>7 黄褐色砂質土 (やや粘性あり)</p> <p>8 灰褐色灰層 (第8地点で確認されている灰層と対応)</p> <p>9 灰色砂</p> <p>10 黄褐色粘質土 (粗砂、暗褐色粘土ブロック、10~20cm程度の円形石混入)</p> <p>11 黄褐色粘質土 (炭粒混入、北側ほど濃密に炭粒あり)</p> <p>12 暗灰色粘質土 (炭粒混入)</p> <p>13 褐色砂質土 (炭粒、焼土混入、粗砂含む)</p> <p>14 茶褐色粘質土</p> <p>15 黄褐色粘質土 (炭粒、焼土粒、粗砂混入)</p> <p>16 黄褐色細砂 (南壁2と対応)</p> <p>17 黄褐色粗砂 (南壁2と対応)</p> <p>18 灰褐色粘質土 (南壁3と対応)</p> <p>19 暗褐色粘質土 (南壁8と対応)</p> <p>20 黄褐色粘質土 (炭粒、焼土混入、南壁9と対応)</p> <p>21 暗褐色粘質土 (炭粒、焼土混入、南壁11と対応)</p> <p>22 黄褐色粘質土 (10cm未満の小石含む)</p> <p>23 灰色粘性のある砂質土 (南壁12と対応)</p> <p>24 黄褐色粘質土 (炭粒、焼土多く含む、全体赤味を帯びる、南壁10と対応)</p> | <p>25 5~20cm程度の礫石が充満している層 (東側に行くに従い、石少なくなる、20と対応)</p> <p>26 褐色砂質土</p> <p>27 暗灰色砂質土 (10cm程度の石、焼土粒混入)</p> <p>28 褐色粘質土 (粘性あり、炭粒、焼土粒混入)</p> <p>29 灰褐色粘質土</p> <p>30 暗褐色粘質土</p> <p>31 灰褐色粘質土 (焼土粒、炭粒混入、やや全体に赤味を帯びる)</p> <p>32 暗褐色粘質土 (焼土粒、炭粒混入、数の層と比べて瓦片目立つ)</p> <p>33 黄褐色粘質土 (焼土粒、炭粒混入、5cm未満の小石混入)</p> <p>34 黄褐色粘質土</p> <p>35 暗褐色粘質土 (混入物殆どなし)</p> <p>36 灰色砂質土</p> <p>37 1cmの小石充満層 (近代煉瓦瓦片)</p> <p>38 暗褐色粘質土</p> <p>39 灰褐色粘質土 (粘りなし)</p> <p>40 灰褐色粘性のある砂質土</p> <p>41 暗褐色粘性のある砂質土 (炭粒、焼土粒混入)</p> <p>42 5~10cm程度の礫石充満層 (25の礫石層より石が小ぶり)</p> <p>43 暗褐色粘質土 (炭粒、焼土混入)</p> <p>44 黄褐色粘質土 (炭粒、焼土混入)</p> <p>45 黄褐色細砂 (粒子非常に細かい、鉄分の沈着みられる)</p> <p>46 黄褐色粘質土 (炭粒、茶褐色粘質土ブロック混入)</p> <p>47 黄褐色粘性のある砂質土 (北壁40と対応)</p> |
|--|---|

第68図 2002-32地点 断面図3 (1/40)

0 1m

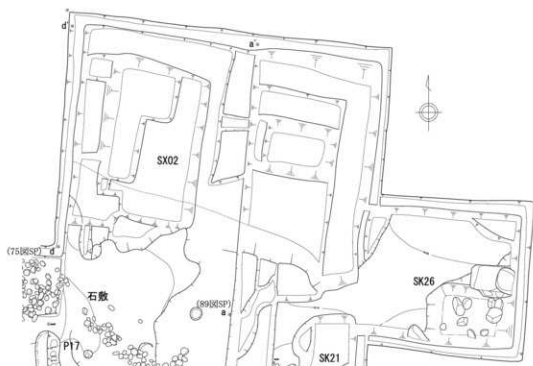


第69図 本丸附段(東・西) 調査地点等位置図 (S=1/600)





第70图 2004-1 (2003-8) 地点 遺構全体図・区割図 (S=1/150)



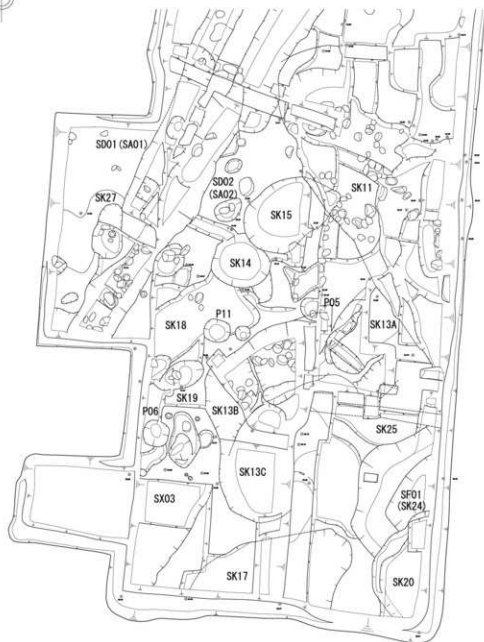
第71图 2004-1 (2003-8) 地点 遗構図1 (S=1/80)

0 10m



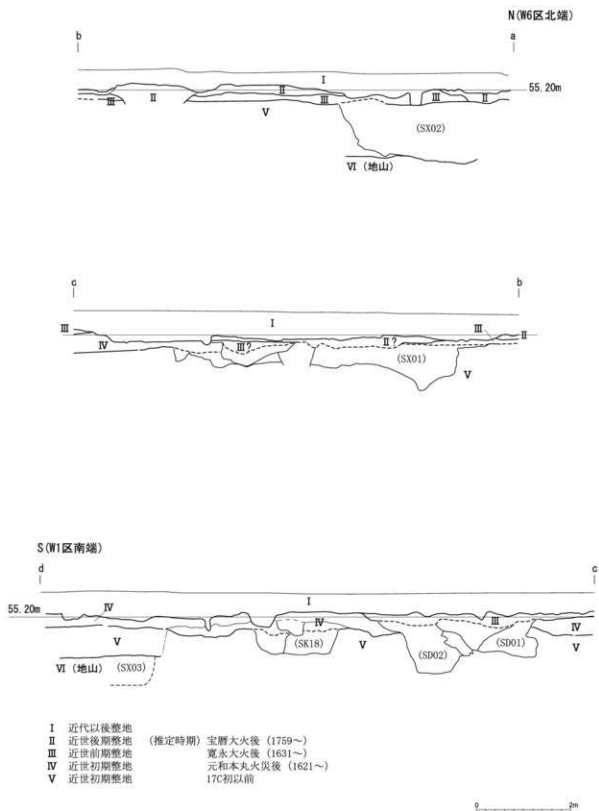
第72図 2004-1 (2003-8) 地点 遺構図2 (S=1/80)

0 1m

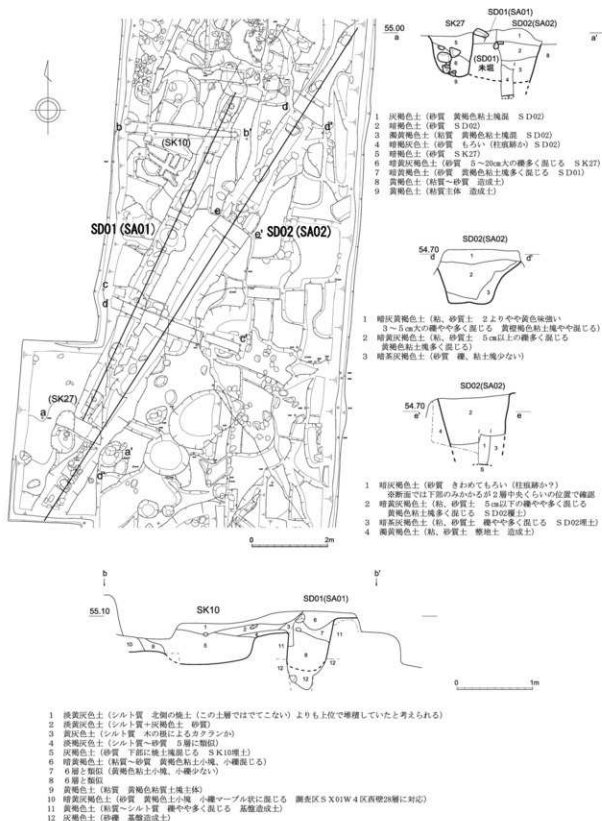


第73図 2004-1 (2003-8) 地点 遺構図3 (S=1/80)

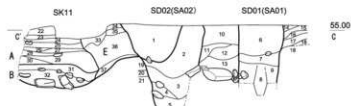
0 1m



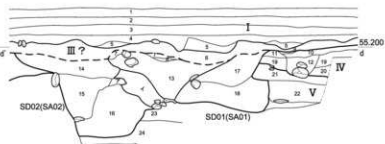
第74図 2004-1(2003-8)地点 西壁土層断面図 (1/80)



第76図 2004-01(2003-8)地点 SD01(SA01)・SD02(SA02) 遺構図 (断面1/50, 平面1/100)

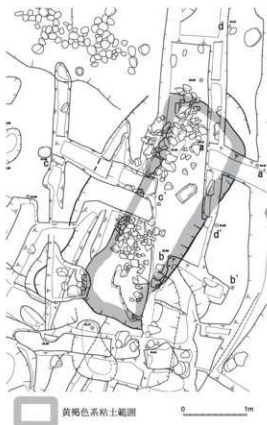


- 1 明黄褐色土 (粘質～砂質 5～20cm大の塊状の 炭片、黄褐色粘土塊混じる ビット覆土)
- 2 暗黄褐色土 (粘質～砂質 1～5cm大の塊 黄褐色粘土塊 (コアブル?) 多く混じる)
- 3 暗灰褐色土 (砂質 径1cm未満の小塊きわめて多く混じる 径5～10cm大の塊、黄褐色粘土塊混じる もろい)
- 4 暗褐色土+褐色土 (砂質 層状の混土)
- 5 暗褐色土+黄褐色土 (砂質 (暗褐色土)) 粘質 (黄褐色土) 黄褐色粘質土上部を中心に堆積 下部はマーブル状に混じる 21層に由来する砂質土が主体 黄褐色粘土塊もやや混じる S D02相当層上?)
- 6 黄灰褐色土 (砂質 黄褐色粘土塊、炭片混じる)
- 7 暗灰褐色土 (粘質～砂質 炭片きわめて多く混じる)
- 8 暗褐色土 (砂質 もろい 粒盛?)
- 9 暗灰褐色土 (粘質～砂質 7層に比べ炭片少ない)
- 10 暗褐色・暗灰褐・黒褐・黄褐色土 (粘質～砂質 後三者塊状に混じり主体をなす すき間に暗褐色砂質土が見られる)
- 11 灰褐色土 (粘質～シルト質 均質)
- 12 黒褐色土+黄褐色土 (粘質～シルト質 黒褐色土基調だが黄褐色粘土塊きわめて多く混じり全体としてモザイク状の混土をなす)
- 13 黒褐色土 (粘質～シルト質 均質)
- 14 黄褐色土 (粘質土 黄褐色粘土塊多く混じる)
- 15 黄褐色土 (砂質～粘質土 黄褐色粘土塊混じる)
- 16 黒灰褐色土+褐色土 (黒灰褐色土 (砂質) 褐色土 (粘質) 混土 モザイク状)
- 17 黒灰褐色土 (砂質 5～10cm大の塊多く混じる 炭片多く混じる)
- 18 黄褐色土 (粘質)
- 19 明黄褐色土 (粘質土 造成土)
- 20 明褐色土 (粘質土 造成土)
- 21 褐色土 (砂礫土 造成土)
- 22 灰褐色砂質土 (固くしまる 塵土粒含む SK11f-d'断面第1層に対応 22～33SK11覆土)
- 23 暗灰色粘砂 (固くしまる)
- 24 灰褐色粘砂質土
- 25 暗灰褐色粘砂質土 (固1～3cm程度多く混入)
- 26 灰褐色粘砂土 (固くしまる)
- 27 暗灰色粘砂土
- 28 灰褐色粘砂土 (灰褐色粘土ブロック、2cm大の小石混入)
- 29 褐色粘砂質土
- 30 暗灰色粘砂質土 (固くしまる)
- 31 炭礫 (土粒細粒、片殻等多く混入 SK11e-a'断面第7層に対応)
- 32 黄褐色粘砂質土
- 33 暗灰色粘質土 (茶褐色粘質土粒混入 固くしまる)
- 34 暗褐色粘質土
- 35 黄褐色粘質土 (暗褐色粘質土混入)
- 36 暗灰褐色粘質土 (整地土層)
- 37 黄黒灰褐色粘質土 (暗灰褐色粘質土ブロック混入 整地土層)



- 1 明黄褐色粘砂 (クリカ層 金沢城公園整備に伴う盛土層)
- 2 砂石層 (金沢城公園整備に伴う盛土層)
- 3 黄褐色粘砂質土 (0.5～5cm大の小石多く混入、ビニール片も混入することから大学時代盛土層か 固くしまる)
- 4 暗褐色粘砂質土
- 5 暗褐色粘砂土
- 6 灰褐色粘質土 (5cm未満の石まじりに混入)
- 7 黄褐色粘質土 (暗褐色粘質土混入)
- 8 暗褐色粘質土
- 9 暗灰褐色粘質土
- 10 黄黒灰褐色粘質土 (炭粒混入)
- 11 黄暗褐色粘質土
- 12 灰褐色粘砂質土 (炭粒、塵土粒混入 SD01・02より新しい遺構)
- 13 黄暗褐色粘砂質土 (5～10cm大の石まじりに混入 黄褐色粘質土ブロック少量混入 SK SD02埋戻し)
- 14 黄暗褐色粘質土 (暗褐色粘砂質土混入 SK SD02埋戻し)
- 15 黄暗褐色粘砂質土 (灰褐色粘質土ブロック混入 SK SD02埋戻し)
- 16 暗褐色粘砂質土 (炭粒、塵土粒混入 SD01覆土)
- 17 暗褐色粘砂質土 (炭粒、塵土粒混入 SD01覆土)
- 18 暗褐色粘砂質土 (炭粒、塵土粒、黄褐色粘質土ブロック混入 SD01覆土)
- 19 黄暗褐色粘質土 (灰褐色粘質土ブロック、黄褐色粘質土粒混入 19～24埋戻し層)
- 20 暗褐色粘質土 (炭粒、塵土粒が微粒で混入)
- 21 灰褐色粘質土+灰黄褐色粘質土との互層
- 22 黄褐色粘砂質土
- 23 褐色粘質土 (混入物なし)
- 24 暗褐色粘砂質土 (粗砂、塵多く混入) ア SD02覆土 (SD01側オーバーハンダしている 黄褐色粘質土 灰褐色粘質土ブロック混入) イ SD01覆土 (暗褐色粘質土) (SD02を切るように見えるが実際には切られていない) 断面図がSDに対して斜めに切っておりSD02がオーバーハンダしているため)

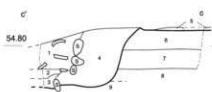
第77図 2004-1 (2003-8) 地点 SD01 (SA01) ・SD02 (SA02) 断面図 (1/50)



- 1 明灰褐色土 (砂質, 小礫混じる)
- 2 灰黄褐色土 (粘質~シルト質 SK04構成土)
- 3 黄褐色土 (粘質~シルト質 SK04構成土 1より明るい色調)
- 4 淡黄褐色土 (砂質 SK04構成土, 均質 上部不連続)
- 5 淡黄褐色土 (砂質 SK04構成土 5cm以下の礫混じる)
- 6 灰褐色土 (砂質 灰褐色土 2~5cm大の礫混じる)
- 7 暗黄褐色土 (砂質~粘質 2~3cm大の礫混じる)
- 8 暗黄褐色土 (砂質~粘質 黄褐色シルト質土塊混じる)
- 9 黄褐色土 (粘質 暗褐色土, 黄褐色粘質土塊モザイク状に混じる)
- 10 暗黄褐色土 (粘~砂質ペーストなる整地土か)
- 11 暗黄褐色土 (砂質~砂礫 地山 (基盤層) か)



- 1 黄褐色土 (粘質 SK04構成土)
- 2 淡褐色土 (粘質 SK04構成土)
- 3 淡褐色土 (砂質 SK04構成土)
- 4 暗褐色土 (砂質 5mm程度小礫混じる SK16ないし, 硬きの土灰か) 覆土
- 5 暗黄褐色土 (砂質 SK16ないし, 硬きの土灰か) 覆土
- 6 暗黄褐色土 (砂質 黄褐色土小塊マール状に混じる SK16ないし, 硬きの土灰か) 覆土
- 7 黄褐色土 (粘質~砂質 黄褐色土, 黄褐色土塊混じる SK16ないし, 硬きの土灰か) 覆土
- 8 暗黄褐色土 (粘質~砂質 5mm程度の小礫まると比較的均質 SK16ないし, 硬きの土灰か) 覆土
- 9 淡褐色土 (砂質, 砂礫 黄褐色土ペーストの下)



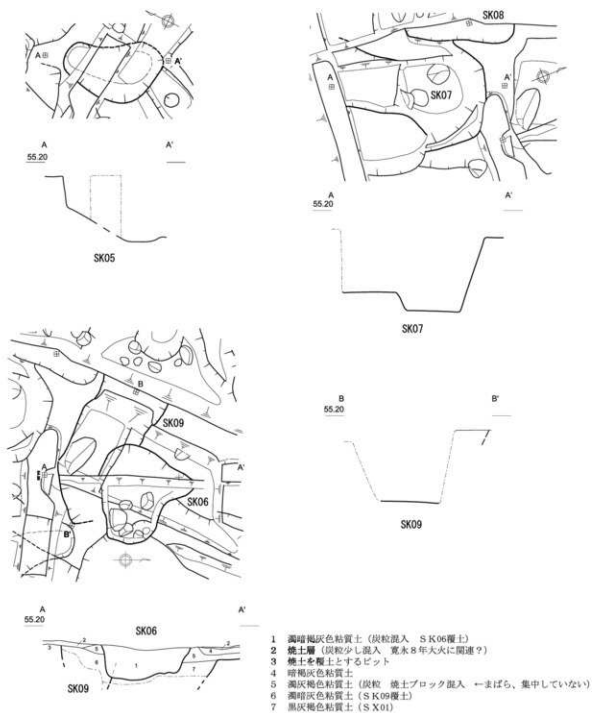
- 1 暗褐色土 (砂質 丸, 平瓦合 SK04構成土)
- 2 黄褐色土 (粘土~シルト質土 SK04構成土 SK04の南面, 東部ではきわめて厚い)
- 3 淡褐色土 (シルト質 SK04構成土)
- 4 暗褐色土 (砂質~粘質 SK04構成土 黄褐色粘質土小塊, 礫多く混じる)
- 5 淡黄褐色土 (小礫混じり土質を呈する)
- 6 黄褐色土 (砂質~粘質 径2~5cmの礫多く混じる)
- 7 暗黄褐色土 (茶褐色粘質土小塊多く混じる)
- 8 灰褐色土 (砂質)
- 9 暗褐色土 (粘質~砂質 5~10cmの礫混じる, しまり悪い)



- 1 暗褐色土 (砂質 粘土小塊 炭片 混じる ビット?)
- 2 暗褐色土 (砂質 炭片多く混じる 砂質 ビット?)
- 3 暗褐色土 (粘~砂質 炭片混じる ビット?)
- 4 明灰褐色土 (砂質 小礫混じる SK04構成)
- 5 黄褐色土 (粘質塊部分的に砂質 礫混じる SK04構成)
- 6 暗褐色土 (炭片多く混じる 礫多く混じる 砂質 SK04構成)
- 7 暗黄褐色土 (均質 粘性強い SK04構成)
- 8 暗褐色土 (比較的均質 シルト質 SK04構成)
- 9 明褐色土 (均質 炭片少量混じる SK04基盤)
- 10 暗黄褐色土 (炭片, 礫, 焼土塊混じる 砂質 SK04基盤)
- 11 暗黄褐色土 (10に比べ炭片, 礫, 焼土塊少ない 砂質強い SK04基盤)
- 12 暗褐色土 (小礫, 黄褐色粘土小塊混じる 砂質 しまり悪い SK04基盤)
- 13 灰褐色土 (抜き取り後? 礫多く混じる~前帯以降の遺構心?)
- 14 暗黄褐色土 (粘~砂質 黄褐色土塊多く混じる SK05埋土か?)
- 15 暗褐色土 (黄褐色土塊, 炭片少し混じる 造成土 S D01に先行可能性あり)
- 16 暗褐色土 (均質 シルト質 造成土 S D01に先行可能性あり)
- 17 暗褐色土 (砂質 16よりやや粗い 造成土 S D01に先行可能性あり)
- 18 淡褐色土 (砂質~砂礫 小礫混じる 造成土 S D01に先行可能性あり)
- 19 淡黄褐色土 (砂質 造成土 S D01に先行可能性あり)

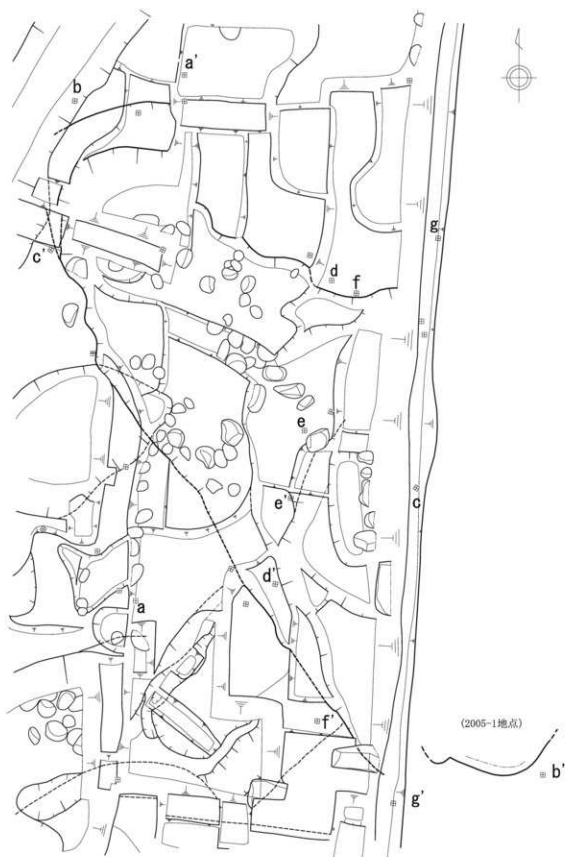


第78図 2004-1(2003-8)地点 SK04 遺構図 (断面1/40、平面1/60)



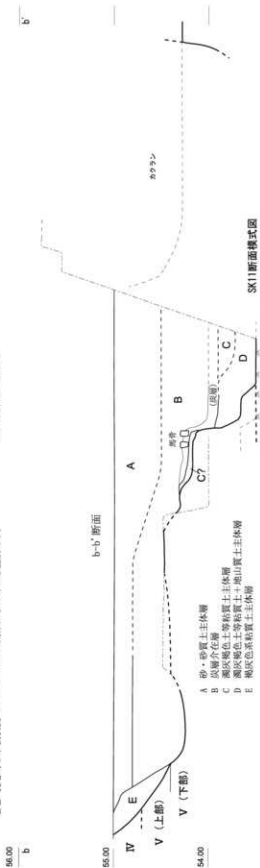
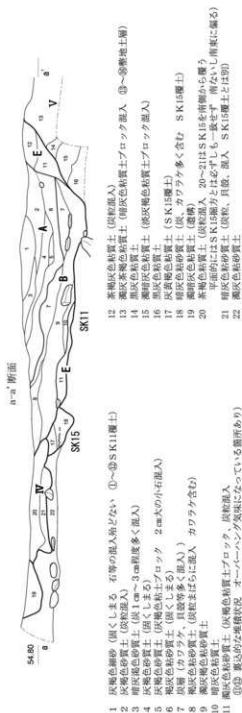
0 1m

第79図 2004-1(2003-8)地点 SK05・06・07・08・09 遺構図 (1/40)



第80图 2004-1(2003-8)地点 SK11 平面图 (S=1/40)

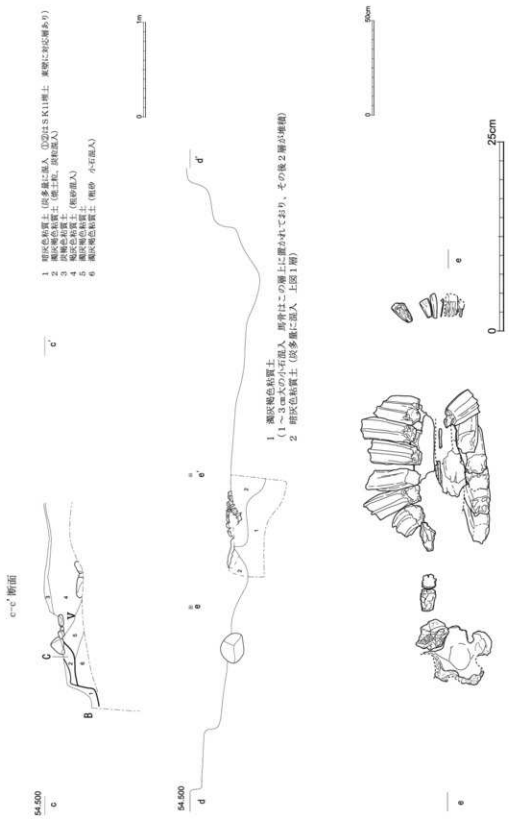
0 1m



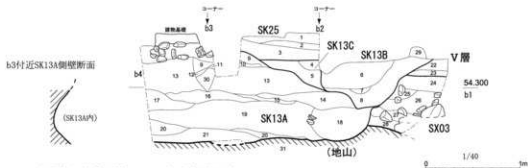
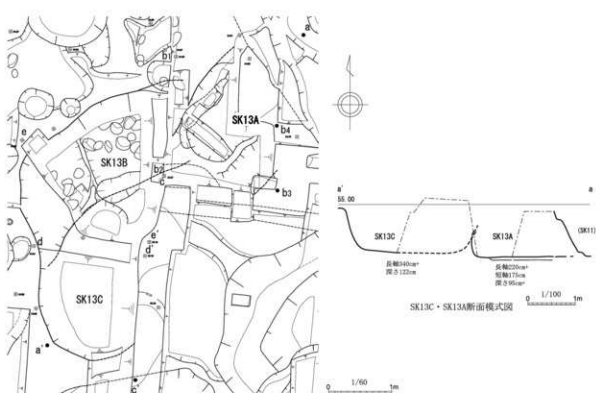
第81図 2004-1(2003-8)地点 SK11 断面図1 (S=1/40)



第82図 2004-1 (2003-8) 地点 SK11 断面図 2 (S = 1/40)

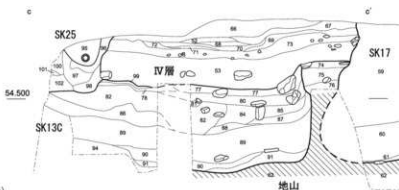


第83図 2004-1(2003-8)地点 SK11 断面・馬骨出土状況 (平面1/5、断面1/20、1/40)

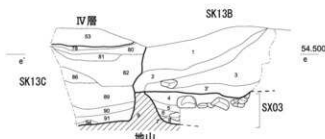
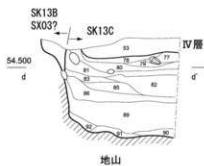


- 1 埋戻し層 (粘質～砂質 1～5cm大の礫多く混じる)
- 2 灰褐色土 (砂質)
- 3 洗灰褐色土 (砂質 黄褐色粘土塊、炭片混じる 1～3: SK25埋土)
- 4 黄褐色土 (粘質 炭粒、焼土粒混入 c-c' 86層 SK13C埋土)
- 5 黄褐色土 (粘質～砂質 炭粒、焼土粒混入 c-c' 89層 SK13C埋土)
- 6 黄褐色土 (粘質～砂質 1～5cm大の礫、黄褐色粘土塊多く混じる しまり悪い SK13B埋土)
- 7 埋戻し層 (砂質 炭片ややま多く混じる SK13B埋土)
- 8 埋戻し層 (粘質～砂質 1～5cm大の礫、黄褐色粘土塊多く混じる 黒褐色粘土塊混じる しまり悪い SK13B埋土)
- 9 洗黄褐色土 (粘質～砂質 9～21S K13A埋土)
- 10 黄褐色土 (粘質 黄褐色土一部混じる)
- 11 明褐色土 (粘質 地山ブロッコ土塊)
- 12 埋戻し層 (砂質 黄褐色粘土塊多く混じる)
- 13 埋戻し層 (砂質 礫の混じり比較的少ない 黄褐色粘土塊、黒褐色粘土塊多く混じる マーブル状)
- 14 黄褐色土 (粘質～砂質 黄褐色粘土塊多く混じる 黒褐色粘土塊混じる 8層に比べ粘土塊やや大きい)
- 15 黄褐色土 (砂質 暗褐色粘土塊混じる ややもろい)
- 16 灰褐色土 (砂質 黄褐色粘土塊多く混じる ややもろい)
- 17 埋戻し層 (砂質 13層に類似するが部分的に礫が集中する 黒褐色粘土塊層5cm混じり層状をなすため分離可能)
- 18 埋戻し層 (砂質 上面に2～5cm大の礫混じる 19層に比べ暗い色混)
- 19 黄褐色土 (砂質 褐色粘土塊上に多い 黄褐色粘土塊多く混じる 炭片ややま混じる 炭片あり)
- 20 埋戻し層 (粘質 黄褐色粘土塊、黒褐色粘土塊混じる)
- 21 褐色土 (粘土 炭片やや混じりもろい 地山土)
- 22 黄褐色土 (粘質～砂質 5～15cm大の礫混じる 造成土)
- 23 褐色土 (粘質土 均質な細山質土 造成土)
- 24 埋戻し層 (粘質 褐色粘土塊多く混じる 24～28S X03埋土)
- 25 埋戻し層 (粘質)
- 26 埋戻し層 (粘質～砂質 褐色粘土塊混じる (24層より少ない) 5mm以下の小礫混じる)
- 27 埋戻し層 (粘質 均質)
- 28 埋戻し層 (粘質 黄褐色粘土塊混じる)
- 29 黄褐色土 (粘質～砂質 造成土)
- 30 褐色土 (粘質 均質 地山)
- 31 洗黄褐色土 (粘土～礫混粘土 地山)

第84図 2004-1(2003-8)地点 SK13 遺構図(土層断面1/40、平面1/60、断面略図1/100)

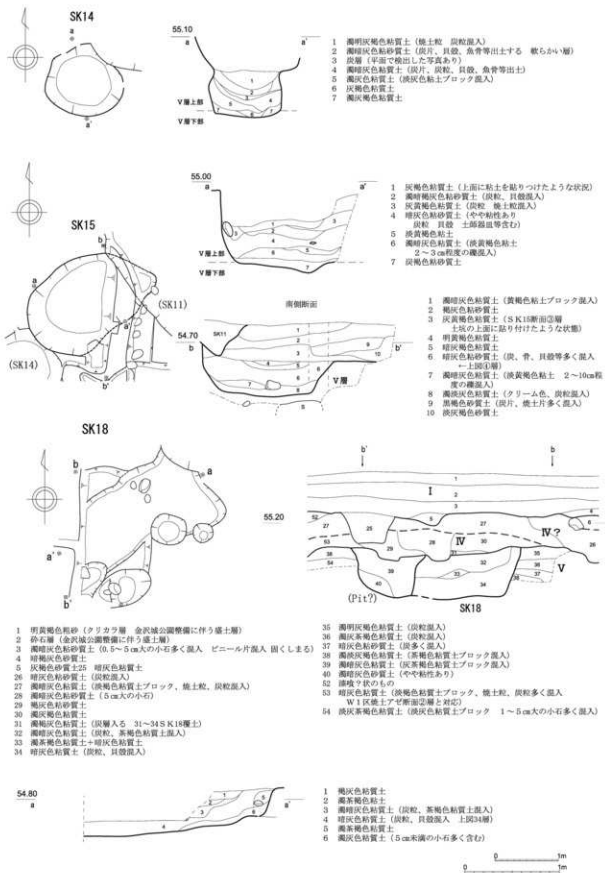


- 52 (凍塊状粘質土)
- 53 暗灰色粘質土 (黄土粒・炭粒多く混入)
- 55 暗灰色粘砂質土 (粗砂多く含む)
- 56 濁褐色粘砂質土 (1~5cm大の小石・焼土粒)
- 57 濁茶褐色粘質土 (暗灰色粘質土混入)
- 58 濁暗褐色粘砂質土
- 59 濁暗褐色粘砂質土 (1~30cm大の石まばらに混入 59~61 S K17層土)
- 60 濁暗褐色粘砂質土 (59と比べて石多く混入)
- 61 濁褐色粘質土 (暗灰色粘質土 焼土混入 59・60と比べると地山質的)
- 62 淡灰褐色粘土 (1~2cm程度の小石や10cm程度の礫多く混入 固くしまる地山層)
- 63 49がオーバーハンダしたSK17へ崩落したもの (63・64, 65がオーバーハンダしたSK17へ崩落したもの)
- 64 褐色粘土 (地山層と同質の土)
- 65 淡灰褐色粘土 (地山層)
- 66 灰褐色粘土 (0.5~3cm程度の小石多く混入)
- 67 灰褐色粘土
- 68 淡褐色粘土
- 69 濁灰褐色粘質土
- 70 濁灰褐色粘質土
- 71 濁灰褐色粘質土 (暗灰色粘質土混入)
- 72 濁褐色粘質土 (炭粒・焼土粒微量に混入)
- 73 暗灰色粘質土 (0.5~3cm大の小石多く混入)
- 74 灰褐色粘砂質土 (0.5~3cm大の小石混入 74~76整地土 S K13Cは第7層から切り込んだ遺構である)
- 75 灰褐色粘砂質土
- 76 黄褐色粘土
- 77 灰褐色粘砂質土 (5~20cm大の礫混入 77~83はS K13C層土)
- 78 灰茶褐色粘質土 (灰茶褐色粘質土)
- 79 褐色粘土 (褐色粘質土)
- 80 濁暗褐色粘質土 (炭粒・淡褐色粘質土小ブロック混入)
- 81 暗灰色粘質土 (淡灰褐色粘質土ブロック混入)
- 82 濁暗褐色粘砂質土 (1~10cm大の石混入)
- 83 褐色粘砂質土 (もろく崩れやすい)
- 84 褐色粘土 (もろく崩れやすい)
- 85 濁灰褐色粘砂質土 (炭粒混入)
- 86 濁褐色粘質土 (炭粒・焼土粒混入)
- 87 濁暗褐色粘質土 (茶褐色粘質土混入)
- 88 濁暗褐色粘砂質土 (黒灰褐色粘土ブロック混入)
- 89 灰褐色粘砂質土 (炭粒・焼土粒混入)
- 90 黒灰色粘土
- 91 灰褐色粘土 (粗砂混入)
- 92 暗褐色粘土
- 93 (欠番)
- 94 暗黄褐色土 (粘~砂質 黄褐色粘土小塊・黒褐色土塊混じる)
- 95 濁暗褐色土 (砂質土)
- 96 暗黄褐色土 (砂質土)
- 97 淡黄褐色土 (砂質土 比較的均質)
- 98 濁黄褐色土 (砂質土 黄褐色粘土塊多く混じる)
- 99 淡灰褐色土 (砂質土 混入物少なく均質)
- 100 暗灰褐色土 (粘質~砂質 1~5cm大の礫多く混じる)
- 101 灰褐色土 (砂質)
- 102 淡黄灰褐色土 (砂質 黄褐色粘土塊・炭片混じる 100~102: S K25埋土)

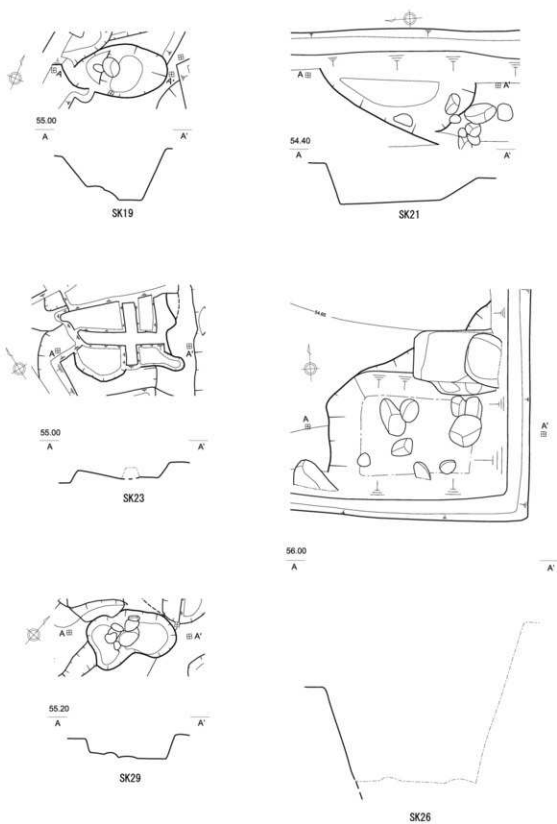


- 1 黄灰褐色土 (粘質砂質 5~10cm大の礫 黄褐色粘土塊多く混じる)
- 2 暗灰色土 (砂質 炭片きわめて多く混じる)
- 3 暗黄褐色土 (粘砂 炭片少ない 黄褐色粘土塊混じる)
- 4 灰褐色土 (粘・砂質 黄褐色粘土塊混じる)
- 5 暗褐色土 (粘・砂質 黄褐色粘土小塊やや多く混じる 5~15cm級の礫多く混じる S X03)
- 6 暗黄~茶褐色土 (粘質 粘性強、比較的均質 5~15cm級の礫多く混じる S X03)
- 7 炭層 (S X03)
- 8 黒褐色土 (S X03)
- 9 地山
- (SK13C側の土層注記番号は上図と共通)

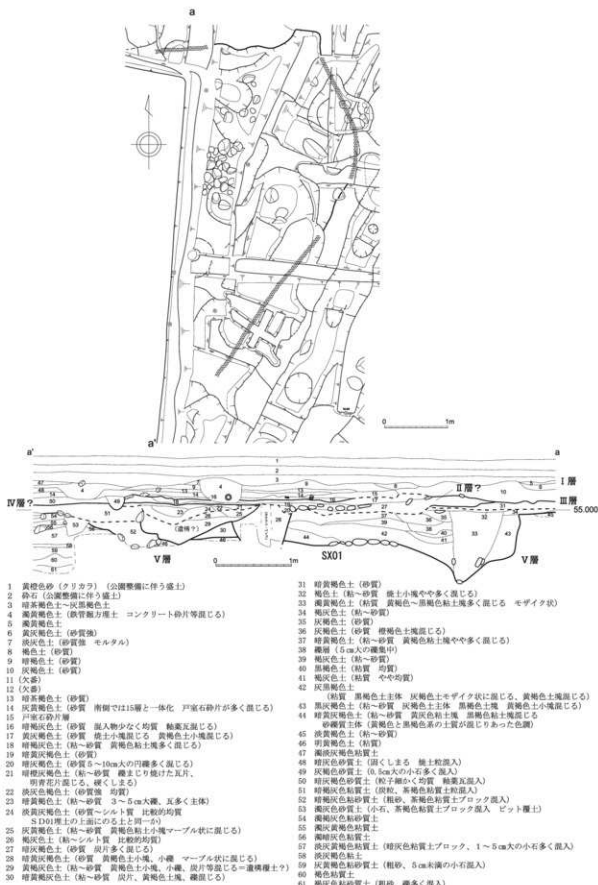
第85図 2004-1地点 SK13 断面図 (S=1/40)



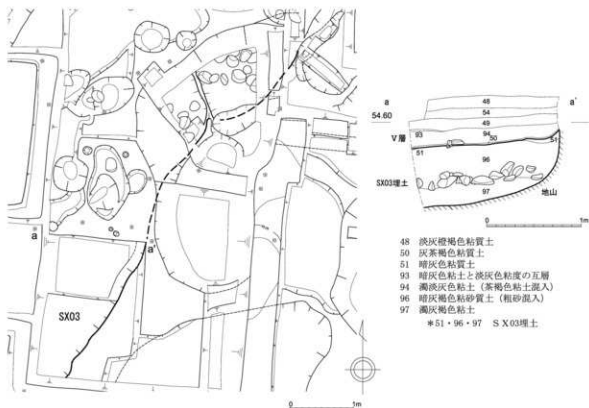
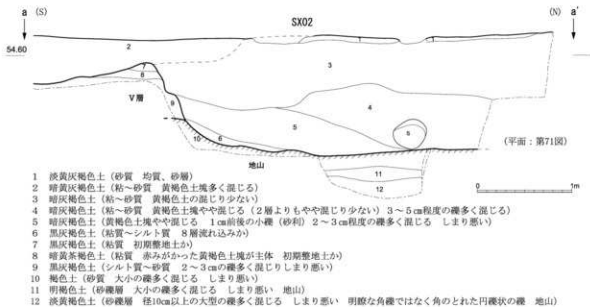
第86図 2004-1(2003-8)地点 SK14・15・18 遺構図(断面1/40、平面1/60)



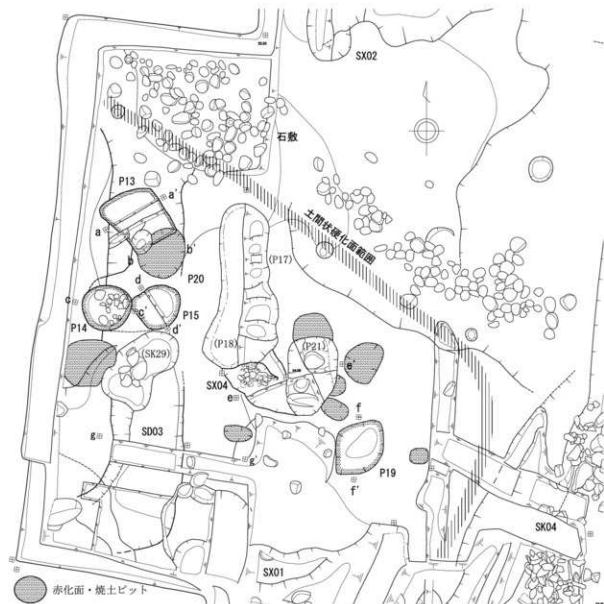
第87图 2004-1(2003-8)地点 SK19·21·23·26·29 遺構図 (1/40) 0 1m



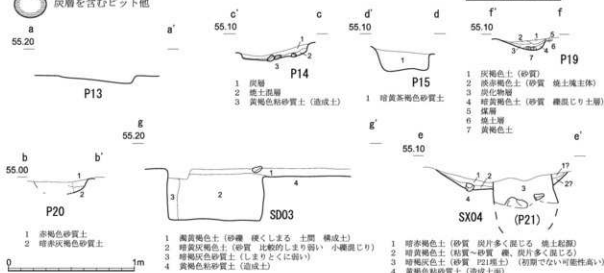
第88図 2004-1 (2003-8) 地点 SX01 遺構図因 (断面1/50、平面1/60)



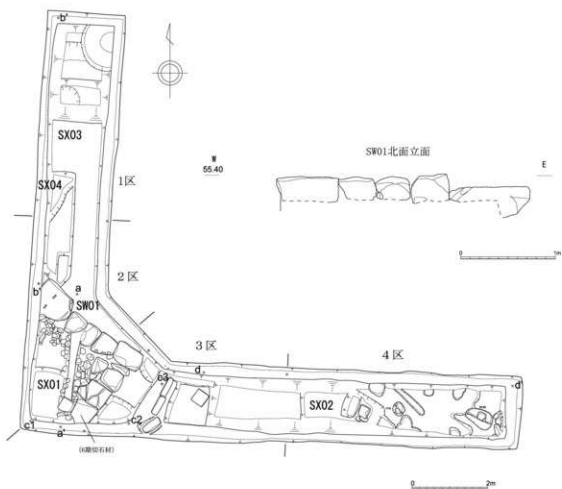
第89図 2004-1 (2003-8) 地点 SX02・SX03 遺構図 (断面1/40、平面1/60)



- 赤化面・焼土ピット
- 炭層を含むピット他



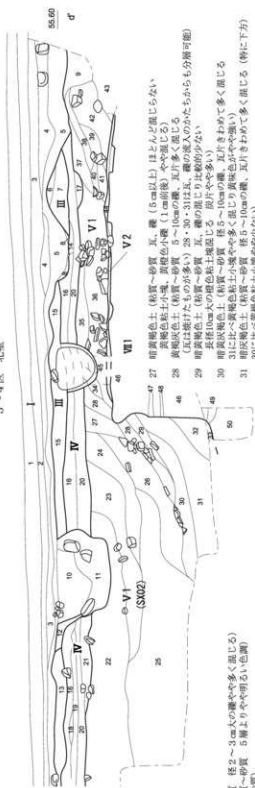
第90図 2004-1 (2003-8) 地点 土間硬化面周辺ピット・溝等 遺構図 (断面1/30・平面1/40)



- 1 灰褐色土 (砂質) 戸室石 径10~20cmの礎多く混じる (南壁ではコンクリート片あり)
近代以後)
- 2 黄褐色土 (砂)
- 3 黄灰褐色土 (粘質~砂質) 炭片、黄褐色粘土塊多く混じる)
- 4 暗(茶)灰褐色土 (粘質~砂質) 炭片、焼土片多く混じる)
- 5 暗黄褐色土 (粘質~砂質) 黄~橙褐色土塊まじる)
- 5' 黄褐色土 (粘質) 黄~橙褐色粘土塊主体 5層の一部か)
- 6 暗灰褐色土+赤褐色土 (焼土) (焼土 炭片きわめて多く混じり主体の一部を構成
寛永大火?元和火災?)
- 7 黄褐色土 (粘質) 5~15cm大の礎混じる)

第91図 2004-2地点 遺構図 (断面・立面1/40、平面1/100)

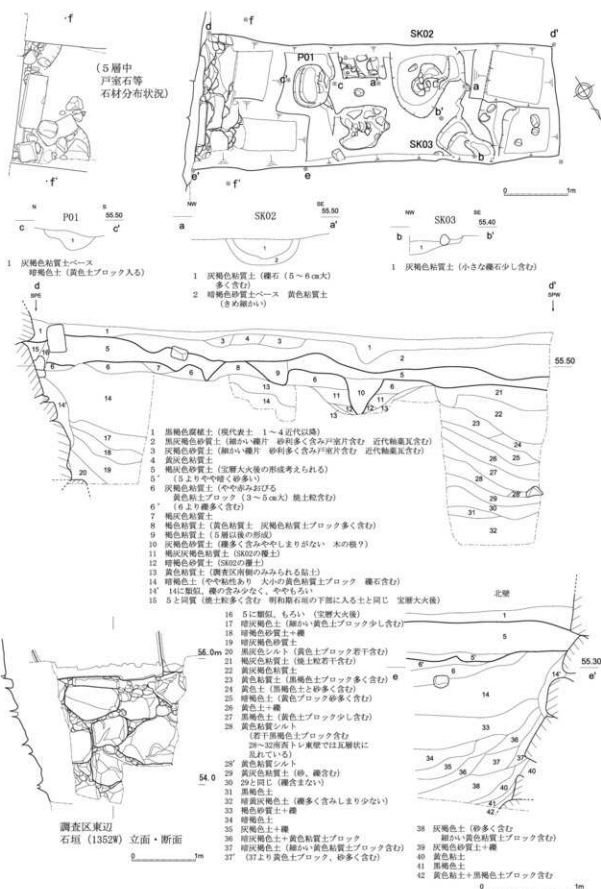
3～4区 北壁



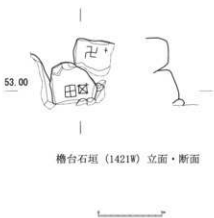
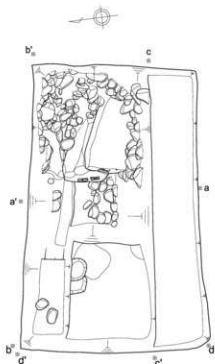
- 1 ヲリカラ砂
- 2 暗赤褐色土 (粘質)
- 3 暗赤褐色土 (粘質)
- 4 暗赤褐色土 (粘質)
- 5 暗赤褐色土 (粘質)
- 6 暗赤褐色土 (粘質)
- 7 暗赤褐色土 (粘質)
- 8 黄褐色土 (砂質)
- 9 暗赤褐色土 (粘質)
- 10 暗赤褐色土 (粘質)
- 11 暗赤褐色土 (粘質)
- 12 暗赤褐色土 (粘質)
- 13 暗赤褐色土 (粘質)
- 14 暗赤褐色土 (粘質)
- 15 暗赤褐色土 (粘質)
- 16 暗赤褐色土 (粘質)
- 17 暗赤褐色土 (粘質)
- 18 暗赤褐色土 (粘質)
- 19 暗赤褐色土 (粘質)
- 20 暗赤褐色土 (粘質)
- 21 暗赤褐色土 (粘質)
- 22 暗赤褐色土 (粘質)
- 23 暗赤褐色土 (粘質)
- 24 暗赤褐色土 (粘質)
- 25 暗赤褐色土 (粘質)
- 26 暗赤褐色土 (粘質)
- 27 暗赤褐色土 (粘質)
- 28 暗赤褐色土 (粘質)
- 29 暗赤褐色土 (粘質)
- 30 暗赤褐色土 (粘質)
- 31 暗赤褐色土 (粘質)
- 32 暗赤褐色土 (粘質)
- 33 暗赤褐色土 (粘質)
- 34 暗赤褐色土 (粘質)
- 35 暗赤褐色土 (粘質)
- 36 暗赤褐色土 (粘質)
- 37 暗赤褐色土 (粘質)
- 38 暗赤褐色土 (粘質)
- 39 暗赤褐色土 (粘質)
- 40 暗赤褐色土 (粘質)
- 41 暗赤褐色土 (粘質)
- 42 暗赤褐色土 (粘質)
- 43 暗赤褐色土 (粘質)
- 44 暗赤褐色土 (粘質)
- 45 暗赤褐色土 (粘質)
- 46 暗赤褐色土 (粘質)
- 47 暗赤褐色土 (粘質)
- 48 暗赤褐色土 (粘質)
- 49 暗赤褐色土 (粘質)
- 50 暗赤褐色土 (粘質)

第93図 2004-2地点 断面図2 (S=1/40)

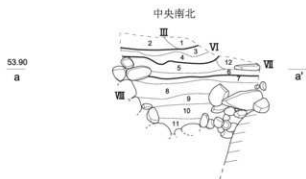




第95図 2004-7地点 遺構図 (土層断面1/40、平面・石垣立面(断面)1/60)



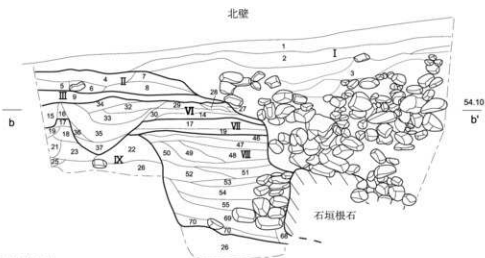
橋台石垣 (1421W) 立面・断面



- 1 暗灰色砂質土 (焼土粒、炭粒含む、宝暦大火後の層)
- 2 1よりやや明るい、暗灰色砂質土 (灰褐色粘質土ブロック混入、もろく崩れやすい)
- 3 褐色粘質土
- 4 濁暗灰色粘質土
- 5 灰黄褐色砂質土 (小石、粗砂多く含む)
- 6 暗灰色粘質土
- 7 濁茶褐色粘質土 (黒灰色粘質土ブロック、褐色砂質土混入)
- 8 濁褐色粘性のある砂質土 (黄褐色粘質土ブロック混入)
- 9 濁褐色粘性のある砂質土 (もろく崩れやすい、3~15cmの石混入、黒灰色ブロック混入、土師器皿出土)
- 10 暗灰色粘性のある砂質土
- 11 明褐色粘性のある砂質土
- 12 暗灰色砂質土 (遺物は出土していない)

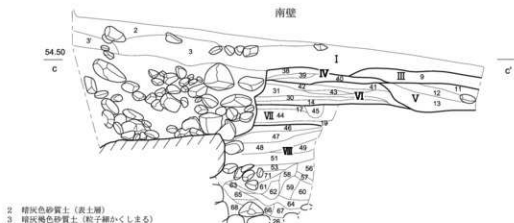


第96図 2003-6地点 遺構図 (断面1/40、平面・石垣立面 (断面) 1/60)



- 1 暗灰色砂質土 (表土層)
- 2 暗灰褐色砂質土 (粒子細かくしまる)
- 3 (壁石主体層)
- 4 暗灰色砂質土 (もろく崩れやすい)
- 5 褐色砂質土 (粒子細かい、粘土粒混入)
- 6 黄褐色砂質土 (もろく崩れやすい、10cm程度の石混入)
- 7 灰褐色砂質土 (5cm程度の戸室石細片混入、層全体が赤褐色を呈す)
- 8 暗褐色砂質土 (1cm前後の戸室石細片非常に多く混入、層全体が赤褐色を呈す)
- 9 暗灰色砂質土 (塊石、炭粒、餅けた色が特徴した陶磁器片混入) 中央セクション第1層に対応 (宝暦の大大火の層)
- 14 黄褐色粘質土 中央セクション第4層に対応
- 15 暗灰色粘性のある砂質土 (直径約25cm、深さ26cmのピット、宝暦大火以前の遺構)
- 16 黄褐色粘性のある砂質土 (黄褐色粘質土混入)
- 17 灰褐色色粘砂 (固くしまる。表面、部分的に焼けて酸化したもの抽出、ピットあり) 中央セクション第5層に対応
- 18 黄褐色粘質土 (黄褐色粘質土ブロック、黒灰色粘質土ブロック混入)
- 19 暗灰色粘質土 (黄褐色粘質土混入) 中央セクション第6層に対応
- 21 黄褐色粘質土 (黄褐色粘質土ブロック混入、粗砂混じり、非常に固くしまる)
- 22 21と同だが、粗砂の混入量が少ない
- 23 黄褐色粘質土 (まばらに黄褐色粘質土混入)
- 25 褐色粘質土
- 26 黄褐色粘質土
- 27 黄褐色粘質土
- 28 灰褐色粘質土
- 29 暗褐色粘質土
- 30 灰褐色粘質土
- 32 暗灰色粘性のある砂質土 (黄褐色粘質土ブロック、炭粒、小石混入)
- 33 暗灰色砂質土
- 34 暗灰色砂質土 (1cm未満の小石多く混入)
- 35 暗灰色砂質土 (5~25cm大の石混入)
- 36 暗灰色砂質土 (暗灰色粘質土混入)
- 37 暗灰色砂質土 (炭粒混入)
- 46 黄褐色粘質土 (黒灰色粘質土ブロック、褐色砂質土ブロック混入) 中央セクション第7層に対応
- 47 黄褐色粘性のある砂質土 (黄褐色粘質土ブロック、炭粒混入) 中央セクション第8層に対応
- 48 黄褐色粘性のある砂質土 (もろく崩れやすい、1~15cm大の石が多く混入) 中央セクション第9層に対応
- 49 黄褐色粘性のある砂質土 (砂と骨なり、石が目立たない、2~5cm大の骨がたが多く混入) 中央セクション第9層に対応
- 50 暗褐色粘性のある砂質土 (黄褐色粘質土粒混入するが、全体の色調としては暗褐色)
- 51 暗褐色粘性のある砂質土 (赤褐色、黄褐色、黒灰色の粘質土ブロック及び、5cm程度の石混入) 中央セクション第10層に対応
- 52 暗褐色粘性のある砂質土 (50と同質だが、混入する黄褐色粘質土粒がやや大きい)
- 53 黄褐色粘質土 (黄褐色粘質土ブロック、1cm程度の小石及び砕石混入)
- 54 暗褐色粘性のある砂質土 (赤褐色、黒灰色、黄褐色粘質土ブロック、及び1~5cm大の石混入)
- 55 54と同質だが石が物が見えられない
- 56 暗褐色砂質土 (もろく崩れやすい)
- 59 暗褐色粘質土 (固くしまる)
- 70 黄褐色粘質土 (黒灰色粘質土、小石混入)

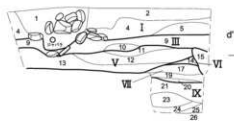
第97図 2003-6地点 断面図1 (1/40)



- 2 暗灰色砂質土 (表土層)
- 3 暗褐色砂質土 (粒子細かくしめる)
- 3 暗褐色砂質土 (しまりやや弱い)
- 9 暗灰色砂質土 (粘土粒、炭粒、継けた黏が付着した陶磁器片混入) 中央セクション第1層に対応 (宝暦の大火後の層)
- 11 灰白色粘性のある砂質土 (2~3cm未満の筒谷石類片多く含むため、全体に青灰色を呈する)
- 12 黄褐色粘質土
- 13 灰褐色粘質土 (2~3cm大の小石多く含む)
- 14 濃褐色粘質土 中央セクション第4層に対応
- 17 灰黄褐色粗砂 (固くしめる、表面酸化したもの検出、ピットあり) 中央セクション第5層に対応
- 19 暗灰色粘質土 (灰褐色粘質土混入) 中央セクション第6層に対応
- 26 濃黒灰色粘質土
- 30 灰褐色粘質土
- 31 暗灰色砂質土 (灰褐色粘質土ブロック混入) 中央セクション2層に対応
- 38 黄褐色粘質土 (もろく崩れやすい)
- 39 濃灰褐色粘性のある砂質土
- 40 濃灰褐色砂質土 (わずかながら粘土粒、炭粒みられる)
- 41 濃褐色粘質土 (灰褐色粘質土、黒灰色粘質土混入)
- 42 濃暗灰色粘性のある砂質土
- 43 濃灰黄褐色粘性のある砂質土
- 44 17よりやや明るい 17、44で、中央セクション第5層に対応
- 45 暗灰色砂質土 (粗砂多く混入) 第5層で検出した遺構
- 46 黄褐色粘質土 (黒灰色粘質土ブロック、暗灰色砂質土ブロック混入) 中央セクション第7層に対応
- 47 濃暗灰色粘性のある砂質土 (黄褐色粘質土ブロック、炭粒混入) 中央セクション第8層に対応
- 48 濃暗灰色粘性のある砂質土 (もろく崩れやすい、1~15cm大の石が多く混入) 中央セクション第9層に対応
- 49 濃暗灰色粘性のある砂質土 (8と異なり、石が目立たない、2~5cm大の黒ボクが多く混入) 中央セクション第9層に対応
- 51 灰白色粘性のある砂質土 (茶褐色、黄褐色、黒灰色の各粘質土ブロック及び、5cm程度の石混入) 中央セクション第10層に対応
- 53 黄褐色粘質土 (黄褐色粘質土ブロック、1cm程度の小石及び砕石混入)
- 56 濃灰褐色粘質土 (黒灰色粘質土混入)
- 57 濃灰黄褐色粘性のある砂質土
- 58 57と同色 (淡茶褐色粘質土ブロック混入)
- 59 濃淡灰色粘性のある砂質土 (もろく崩れやすい、茶褐色、暗灰色粘質土ブロック混入)
- 60 濃淡灰色粘質土 (暗灰色、茶褐色粘質土ブロック混入)
- 61 濃暗灰色粘質土 (炭粒混入)
- 62 60と同質
- 63 淡褐色粘質土
- 64 黄暗灰色粘質土 (茶褐色粘質土混入)
- 65 淡褐色粘質土 (固くしめる)
- 66 濃茶褐色粘質土+暗灰色粘質土
- 67 濃暗灰色粘質土
- 68 暗灰色砂質土 (もろく崩れやすい)
- 71 濃茶褐色粘質土

西壁

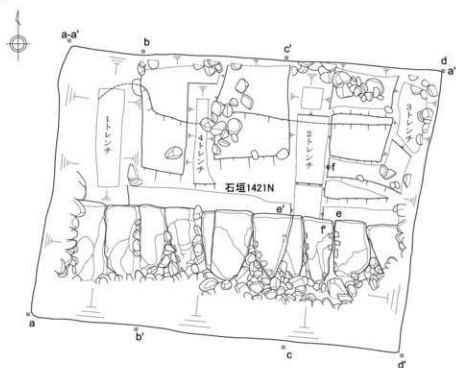
d
54.10



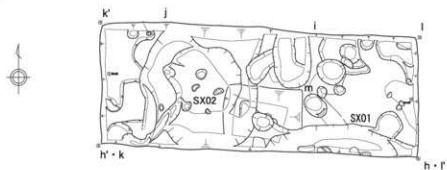
- 1 濃暗灰色砂質土 (電線杆埋没層土)
- 2 暗灰色砂質土 (表土層)
- 4 褐色砂質土 (もろく崩れやすい)
- 5 褐色砂質土 (粒子細かく、粘土粒混入)
- 9 暗灰色砂質土 (粘土粒、炭粒、継けた黏が付着した陶磁器片混入) 中央セクション第1層に対応 (宝暦の大火後の層)
- 10 9層+明褐色砂質土
- 11 灰白色粘性のある砂質土 (2~3cm未満の筒谷石類片多く含むため、全体に青灰色を呈する)
- 12 淡灰褐色粘質土
- 13 灰褐色粘質土 (2~3cm大の小石多く含む)
- 14 濃暗褐色粘質土 中央セクション第4層に対応
- 15 暗灰色粘性のある砂質土 (直径約5cm、長さ25cmのピット) 宝暦大火以前の遺構
- 17 灰黄褐色粗砂 (固くしめる、ピットあり) 中央セクション第5層に対応
- 19 暗灰色粘質土 (灰褐色粘質土混入) 中央セクション第6層に対応
- 20 濃暗灰色粘性のある砂質土 (固くしめる)
- 21 濃暗灰色粘質土 (黄褐色粘質土ブロック混入、粗砂まじり、赤泥に固くしめる)
- 23 濃暗灰色粘質土 (まばらに黄褐色粘質土混入)
- 24 濃白灰色粘質土 (黄褐色粘質土混入)
- 25 褐色粘質土
- 26 濃黒灰色粘質土

第98図 2003-6地点 断面図2 (S=1/40)

2004-5-1地点



2004-5-2地点

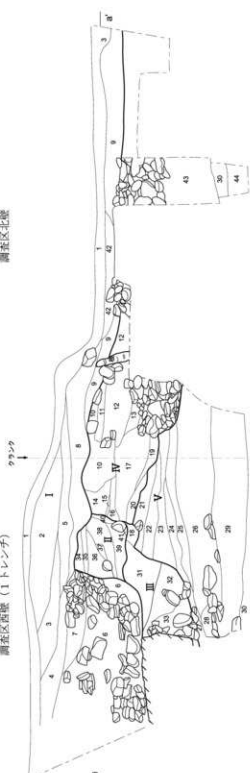


第99図 2004-5地点 遺構図 (1/60)

0 1m

調査区西壁 (1トレンチ)

調査区北壁

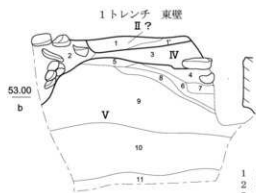


- 1 埴原色粘質土 (表土層 1~8石を石置き取り後埋戻し土)
- 2 赤石層 (埋戻土、カワチコア (石を石置き取り後石州のすき間にあったものが埋戻したものか))
- 3 埴原色粘質土 (もろく潰れやすい)
- 4 埴原色粘質土 (戸ネチコア層片非常に多く含む全体に赤戸原石の色を呈している)
- 5 埴原色粘質土 (床土と土とに分布の塊りあり)
- 6 埴原色粘砂質土 (赤土)
- 7 埴原色粘砂質土 (赤土)
- 8 埴原色粘質土 (5~20cmの石混入)
- 9 埴原色粘砂質土 (やわらかい、小石混入、木根、硬底あり)
- 10 埴原色粘砂質土 (5~10cmの石混入)
- 11 埴原色粘砂質土 (13~17、19、20ある一時期に造成された盛土層 土質が名取)
- 12 埴原色粘砂質土 (5~10cmの石混入)
- 13 埴原色粘砂質土 (埴原色粘質土プロコック混入)
- 14 埴原色粘砂質土と埴原色粘質土の混合土
- 15 埴原色粘砂質土 (埴原色粘質土プロコック混入)
- 16 埴原色粘砂質土 (埴原色粘質土プロコック混入)
- 17 埴原色粘砂質土 (埴原色粘質土プロコック混入)
- 18 埴原色粘砂質土 (埴原色粘質土プロコック混入)
- 19 埴原色粘砂質土 (埴原色粘質土プロコック混入)
- 20 埴原色粘砂質土 (埴原色粘質土プロコック混入)
- 21 埴原色粘砂質土 (埴原色粘質土プロコック混入)
- 22 埴原色粘砂質土 (埴原色粘質土プロコック混入)

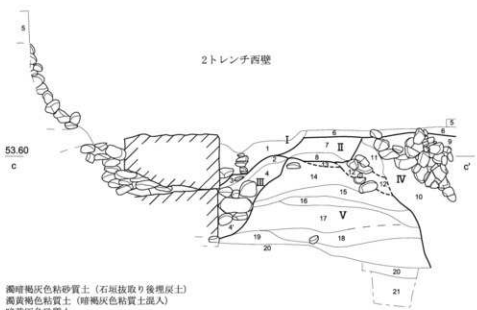
- 23 埴原色粘砂質土 (層5-1地点トレンチ第16層)
- 24 埴原色粘砂質土 (層5-1地点トレンチ第17層)
- 25 埴原色粘砂質土 (層5-1地点トレンチ第18層)
- 26 埴原色粘砂質土 (1cm程度の小石や2~10cm次の石非常に多く含む)
- 27 埴原色粘砂質土 (石混入の下部段の下部段のみ)
- 28 埴原色粘砂質土 (層5-1地点トレンチ第19層)
- 29 埴原色粘砂質土 (層5-1地点トレンチ第20層)
- 30 埴原色粘砂質土 (層5-1地点トレンチ第21層)
- 31 埴原色粘砂質土 (灰肥、赤土と少量混入、いぼし瓦片、1cm程度の小石あり)
- 32 埴原色粘砂質土 (層5-1地点トレンチ第22層)
- 33 埴原色粘砂質土 (層5-1地点トレンチ第23層)
- 34 埴原色粘砂質土 (層5-1地点トレンチ第24層)
- 35 埴原色粘砂質土 (層5-1地点トレンチ第25層)
- 36 埴原色粘砂質土 (層5-1地点トレンチ第26層)
- 37 埴原色粘砂質土 (層5-1地点トレンチ第27層)
- 38 埴原色粘砂質土 (層5-1地点トレンチ第28層)
- 39 埴原色粘砂質土 (層5-1地点トレンチ第29層)
- 40 埴原色粘砂質土 (層5-1地点トレンチ第30層)
- 41 埴原色粘砂質土 (層5-1地点トレンチ第31層)
- 42 埴原色粘砂質土 (層5-1地点トレンチ第32層)
- 43 埴原色粘砂質土 (層5-1地点トレンチ第33層)
- 44 埴原色粘砂質土 (層5-1地点トレンチ第34層)

第100図 2003-5-1地点 断面図 1 (1/50)





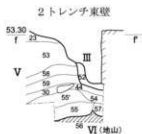
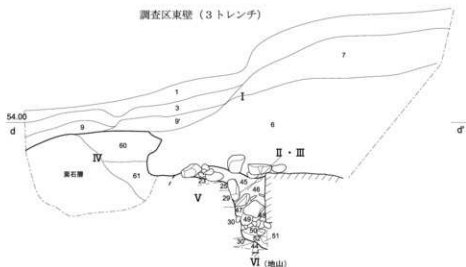
- 1 濃褐色粘質土 (①' 濃黒灰色粘質土→西壁39層と対応?)
- 2 褐色粘質土 (比較的固くしまる 本丸附段北面石垣裏込め栗石層)
- 3 濃灰褐色粘質土
- 4 灰黄褐色粘粗砂 (西壁23層 4~11石垣構築以前の盛土層)
- 5 濃灰褐色粘砂質土
- 6 濃暗灰色粘質土 (西壁24層)
- 7 4より灰色強い
- 8 暗灰色粘粗砂 (西壁25層)
- 9 灰黄褐色粗砂 (西壁26層)
- 10 濃暗灰色粘粗砂 (西壁29層)
- 11 黒褐色粘質土 (西壁30層)



- 1 濃暗褐色粘砂質土 (石垣取り後埋戻土)
- 2 濃黄褐色粘質土 (暗褐色粘質土混入)
- 3 暗黄褐色粘質土
- 4 濃暗灰色粘質土 (黄褐色粘質土、炭粒混入 セクションでは未確認だが他の部分の④では戸室チップ多く含む)
- 4' 暗灰色粘質土
- 5 暗灰色粘砂質土 (現表土層)
- 6 灰褐色粘砂質土
- 7 濃暗褐色粘質土 (黒灰色粘土ブロック、焼土粒混入)
- 8 濃暗褐色粘質土 (黄褐色粘砂質土ブロック混入)
- 9 明暗褐色粘砂質土
- 10 灰褐色粘砂粘砂質土 (粒子粗いが固くしまる 10~13本丸附段北面石垣裏込め栗石 場方埋土)
- 11 灰黄褐色粘質土
- 12 黒褐色粘質土 (黄褐色粘質土粒 黄褐色粘質土粒混入 固くしまる)
- 13 濃暗褐色粘質土 (粗砂質である)
- 14 灰黄褐色粘粗砂 (固くしまる)
- 15 濃暗褐色粘質土 (灰黄褐色粘砂混入)
- 16 灰黄褐色粘粗砂 (⑤と同色だが粘性あり)
- 17 濃暗褐色粘質土 (灰黄褐色粘砂混入するが⑤より割合低い)
- 18 黄褐色粘質土 (粗砂 5~15cm大の礫多く混入)
- 19 濃暗褐色粘粗砂 (1トレで珠洲焼変片出土)
- 20 黒褐色粘質土 (粒子非常に細かくしっとりしている 黒ボク層に類似)
- 21 暗褐色粘質土

第101図 2004-5-1地点 断面図2 (1/40)



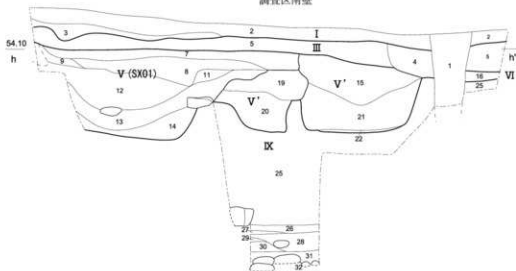


- 1 暗灰色粘質土（表土層）
- 3 暗灰色砂質土（もろく崩れやすい）
- 6 灰褐色粘砂質土（栗石と土に分布の偏りあり）
- 7 濁灰褐色粘質土
- 9 暗灰褐色粘質土（炭粒、焼土粒混入）
- 9' (9より粗砂含みもろい)
- 23 灰黄褐色粘粗砂
- 25 暗灰色粘粗砂
- 29 濁暗灰色粘粗砂（珠洲焼燐片出土層）
- 30 黒褐色粘質土（粒子非常に細かくしっとりしている）
- 30' 黒褐色粘質土（30よりもろく崩れやすく、黄褐色粗砂混入）
- 44 暗褐色粘質土（固くしまり異物混せず）
- 45 灰褐色粘粗砂（固くしまる 炭粒 焼土塊混入）
- 46 暗灰褐色粘粗砂（もろく崩れやすい 戸室石チップ含む）
- 47 濁黒灰色粘質土（全体に黒いが灰黄褐色粗砂混入）
- 48 暗灰色粘質土（もろく崩れやすい 粗砂混入）
- 49 濁黄褐色粘粗砂（23が汚れた土）
- 50 濁黒灰色粘質土（しまる 30層に黄褐色粗砂混入）
- 51 暗灰色粘質土（比較的くずれやすい）
- 52 濁暗灰色粘質土（黄褐色土ブロック混入）
- 53 濁黒灰色粘質土（灰黄褐色粗砂混入する）
- 54 濁茶褐色粘質土
- 55 暗灰色粘質土
- 55' 55よりやや明るい
- 56 明褐色粘質土（混入物なく均質 地山層）
- 57 灰色粘質土（55と56の漸移層か？）
- 60 濁灰褐色粘砂質土（黄褐色粘土ブロック少量混入 しまる
60, 61 木丸附院北面石垣 栗石層造成後の整地土）
- 61 濁灰褐色砂質土

第102図 2004-5-1地点 断面図3 (1/40)

0 1m

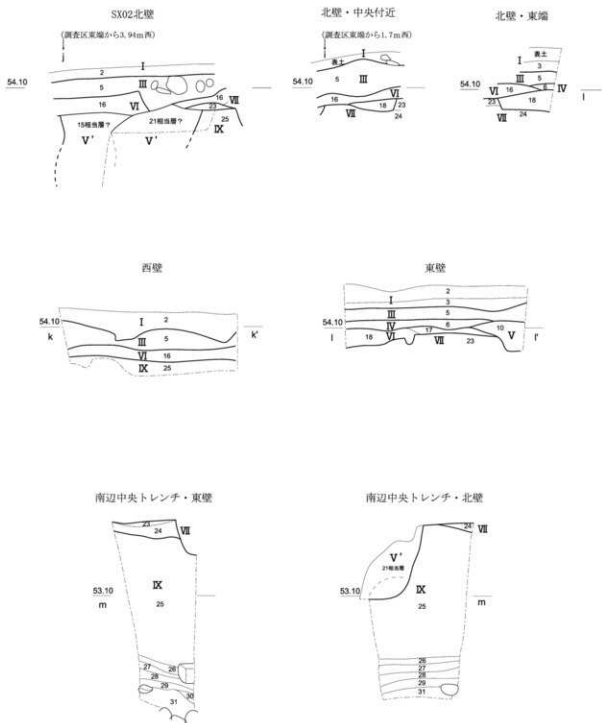
調査区南壁



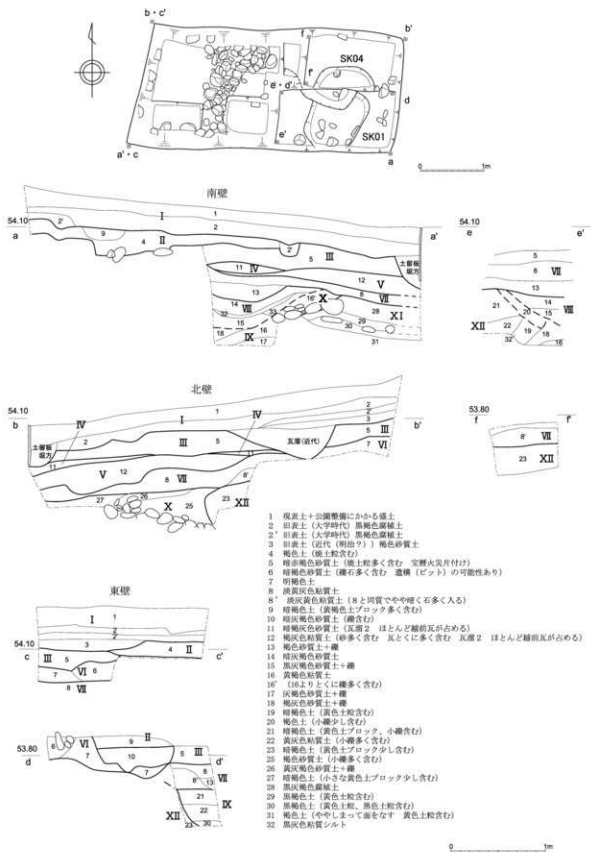
- 1 暗灰褐色砂質土（カクラン（木の根か？）4層に比べ小礫、焼土塊が大幅に少ない しまり悪くもろい）
- 2 暗灰色砂質土（表土）
- 3 淡黄灰色砂質土
- 4 暗灰褐色砂質土（径5mm～10mmの小礫きわめて多く混じる 焼土塊多く混じる 宝群大火片付直後の掘り込み？）
- 5 暗灰褐～暗赤灰褐色砂質土（焼土粒きわめて多く混じる 鈣溶着陶磁器片など混じる 宝群大火片付層）
- 6 灰褐色粘砂質土（1～3cmの礫多く混じる）
- 7 暗灰褐色粘砂質土（越前赤瓦含む 7～14SX01）
- 8 暗黄灰褐色粘砂質土（しまり悪い 3～4cm大の礫やや多く混じる）
- 9 暗黄灰褐色粘質土（8に比べ均質 しまり良い）
- 10 暗黄褐色粘質土（9に類似 同一層の可能性あるが木の根か不明 やや黄色味強い）
- 11 暗灰褐色粘質土（しまりとくに悪い）
- 12 暗褐色粘砂質土（3～4cm大の礫やや多く混じる 焼土粒（5mm以下）少し混じる）
- 13 暗灰褐色砂質土（30cm大の大型礫少し含む しまり悪い 越前赤瓦含む）
- 14 暗褐色粘砂質土
- 15 暗黄灰褐色粘砂質土（もろくしまり悪い（木の毛根が多く生える） 7層との切り合い（前後関係）は不明瞭 SX02上層）
- 16 暗黄灰褐色粘砂質土（15と色調は似るがしまりは比較的良好い
トレンチ北面に続く）
- 17 暗灰褐色粘砂質土（16に類似（やや暗く黄色味少ない））
- 18 暗黄褐色粘砂質土（直径3cm程度の黄褐色粘土塊少し混じる）
- 19 暗黄褐色粘質土（黄褐色土をベースとし黄褐色、暗褐色粘土塊マール状に混じる 3～5cm大の礫やや多く混じる）
- 20 黄褐色粘砂質土（黄黄褐色粘砂質土をベースとし長径10cm級の黄褐色粘土塊 暗褐色土塊モザイク状に混じる）
- 21 暗黄褐色粘砂質土（19に比べややしまり悪い 淡黄褐色粘砂質土塊全体的に混じる SX02下層）
- 22 淡黄褐色粘砂質土（1cm大の小礫混じる）
- 23 黄褐色粘砂質土（24に比べやや暗い 5～10cm大の礫多く混じる 戸室石細片多く混じる）
- 24 黄褐色粘質土（粘性強い 暗褐色粘土小塊やや混じる）
- 25 暗褐～暗灰褐色粘質土（粘性強い 径5cm～1cm程度の黄褐色粘土小塊がきわめて多くマール状に混じる
25～31直水以前の堆積土が 遺物なし）
- 26 暗褐色粘質土（粘性強い 径5mm程度の黄褐色粘土小塊が多く混じる）
- 27 褐黄色粘質土（粘性強い 黄褐色粘質土と暗褐色系統の粘質土がモザイク状に混じる）
- 28 明褐色粘砂質土（2～3cm大の礫多く混じる 上部は粘性強いが分層しがたい）
- 29 淡黄灰褐色砂質土（5mm～3cm大の礫多く混じる）
- 30 黒褐色粘質土（1cm大の礫やや混じるが概ね均質）
- 31 暗灰褐色粘砂質土（暗褐色系統の粘質土に29層に類似した淡黄灰褐色砂質土がマール状に混じる）
- 32 (円) 礫層（長径20cm以上の円礫が詰まる 但しすまには31層が入る、明らかに異なる土はみられない）

(大別層番号: 2003-6地点と共通)

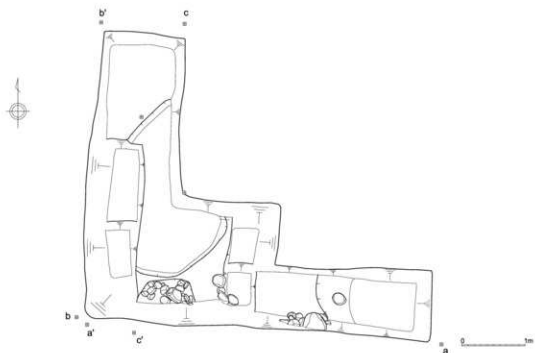
(土層注記: 第104図と共通)



第104図 2004-5-2地点 断面図2 (1/40)



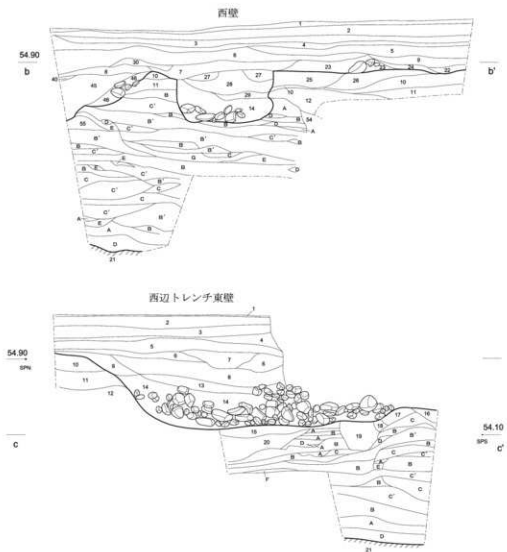
第105図 2004-6地点 遺構図(断面1/40、平面1/60)



南壁



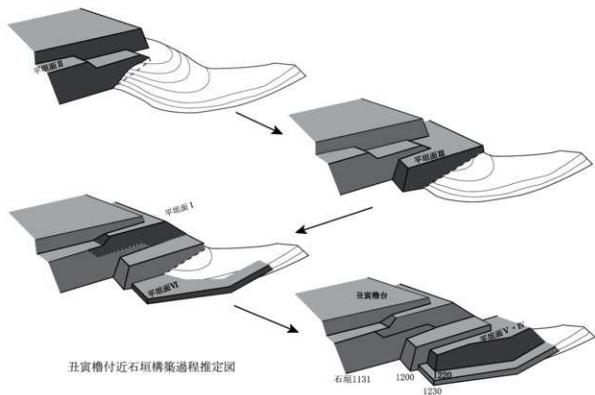
第106図 2003-7地点 遺構図 (断面1/40、平面1/60)



- | | |
|--|--|
| <p>1 細かい砂石層 (公園整備に伴う盛土層)</p> <p>2 黄褐色粗砂 (公園整備に伴う盛土層)</p> <p>3 青灰色砂石層 (公園整備に伴う盛土層)</p> <p>4 暗灰色砂質土 (層の上面に薄く茶褐色の層がある、公園整備前の旧地表面)</p> <p>5 暗灰色砂質土 (4よりも細かい)</p> <p>6 黄灰色粘性のある砂質土 (輪瓦出土)</p> <p>7 暗灰色粘性のある砂質土</p> <p>8 黄褐色粘性のある砂質土</p> <p>9 黄灰黄褐色粘性のある砂質土</p> <p>10 黄褐色粘性のある砂質土 (2~3cm程度の小石や粗砂混入)</p> <p>11 灰茶褐色細砂 (5cm程度の石混入)</p> <p>12 黄灰色粘質土 (黄褐色粘土ブロック混入)</p> <p>14 黄褐色粘質土 (栗石層2、下位の方は栗石が充填している、もうく崩れやすい)</p> <p>15 黄褐色粘質土</p> <p>16 暗灰色土 (栗石、覆土の一部)</p> <p>17 黄褐色粘質土</p> <p>18 黒灰色土 (黒ボクに近い)</p> <p>19 黄褐色粘土 (黄褐色土ブロック混入)</p> <p>20 黄褐色粗砂 (1~5cm程度の小石混入)</p> <p>21 黄褐色粘土 (地山層)</p> <p>22 黄褐色粘質土</p> <p>23 黄褐色粘性のある砂質土</p> <p>24 黄褐色粘性のある砂質土</p> | <p>25 黄褐色粘質土 (暗灰色砂質土ブロックや粗砂混入)</p> <p>26 黄褐色粘性のある砂質土 (粗砂混入、10と異なり小石入りず)</p> <p>27 黄褐色粘質土 (粘土粒混入)</p> <p>28 黄褐色粘質土</p> <p>29 黄褐色粘質土 (灰褐色砂質土混入)</p> <p>30 黄褐色粘質土</p> <p>40 暗灰色砂質土 (灰石層が薄い、輪瓦出土)</p> <p>45 栗石層埋込み (栗石層1、栗石2・3と比べて小ぶりの石が多い、栗石の間隙には暗灰色粘性のある砂質土)</p> <p>46 黄褐色粘質土</p> <p>54 灰黄褐色粗砂</p> <p>55 灰褐色粘性のある砂質土 (栗石1とは栗層が別の層)</p> <p>A 黒灰色土 (黒ボクに近い)</p> <p>B 黄褐色粘土 (全体に細かい黄褐色土混入)</p> <p>B' Bより黄褐色土の割合が大きい</p> <p>C 黄褐色粘土 (全体に黄褐色を呈している、黒灰色土混入)</p> <p>C' Cより黒灰色土の割合が大きい</p> <p>D 暗灰色土</p> <p>E 黄褐色土</p> <p>F 黄褐色粗砂</p> <p>G 黄褐色粘質土+黄褐色土 (2~10cmの大石混入)</p> |
|--|--|

第107図 2003-7地点断面図 (1/40)

0 1m



丑寅櫓付近石垣構築過程推定図

第Ⅰ段階

文禄・慶長期

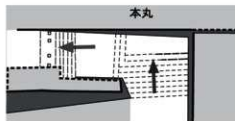
本丸へ直進するルート。



第Ⅱ段階

元和～寛永期

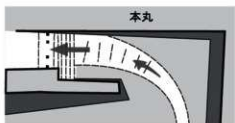
直進ルートが石垣で塞がれ、左に折れるルートに付け替えられた。幅の広い石段（雁木）が設けられた。



第Ⅲ段階

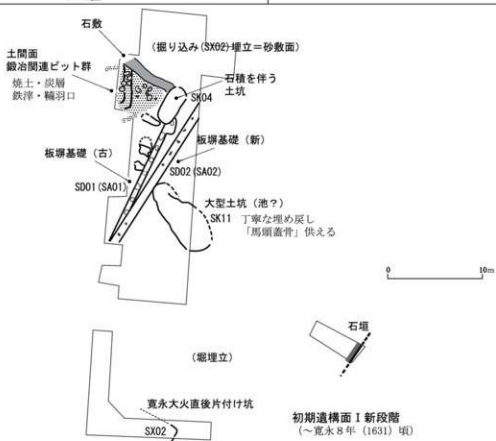
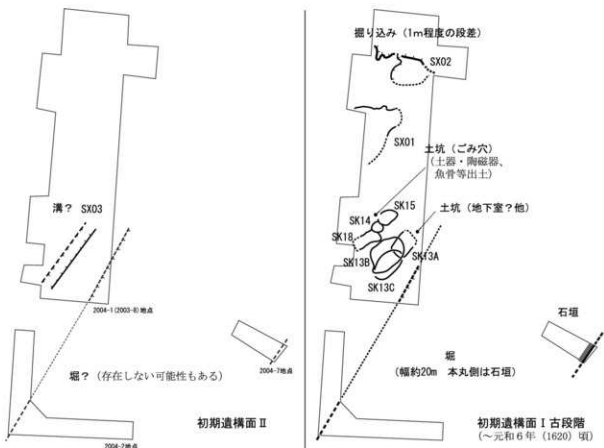
寛永期以降

右側（西側）の石垣が拡張されたが、通路本体は狭くなり、雁木は門付近のみとなった。



東之丸唐門前通路変遷推定図

第108図 丑寅櫓付近石垣構築過程・東ノ丸唐門前通路変遷推定図



第109図 本丸附段 (東) 遺構変遷略図 (1/400)